

Fate/GrandOrder ～憎  
悪と慈愛と復讐の救済  
を～

三枝 月季

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

始まりも終わりもそれはいつだつて唐突でどこまでも残酷で——そしてほんの少しの幸福に満ちている。

「サーヴァント アヴェンジャー 母を呼んだ我が子はだあれ？」

これは人類最後の希望とその母になろうと足掻いた女怪の純粋に歪んだ親子の絆で彩る聖杯探索の記録である。

※序盤の主人公はある種、読者に嫌われる事を目指して書いている部分があります。

# 目次

## プロローグ

始まりの悪夢	1
波乱に塗れた説明会	21
崩壊は突然に	41
彼女達の週末	65
カウントダウン	75
序章 「特異点F 炎上汚染都市 冬木」	
寝覚めは最悪	92
衣替え	111
強襲と郷愁	138
切れない糸	167
狂い始めた歯車	193

揃い始めたパズルのピース	216
運命の夜表	240
Blood will have	b
lood	258
疑心	280
暗鬼	305
嵐の対決	327
天地昏冥	344
運命の夜裏	369
幕間	
眠り姫	384
天才と魔性	402
微睡みの中で……	417

ポストアポカリプスにて…… | 432

目覚めのキスは切れ味がいい | 451

百獣母胎 | 471

Beware of the dog | 485

## プロローグ

## 始まりの悪夢

視界を埋め尽くす強烈な過去を前に、私の心は可笑しいくらいに凜いでいた。

——また、この夢か。

もう飽きるほどに繰り返し見てきたその光景は、年々、酷さに拍車がかかっているよ  
うな気がする。

それは、まるで“忘れる事を許さない”と言われているかのようだ。

……はっ、一体、誰に？

導き出された答えに、自覚感情が冷めていく。そのまま、深淵へと引き摺られそうになっ  
た私の意識を押しとどめたのは、足元へと転がって来た過去惨状だった。

“それ”を拾い上げれば……悲しいかな、自然と口角が上がってしまう。

死なない限り、私は何度もこの光景を見せられ、同時に、この光景に生かされるんだ  
ろう。

ああ——、なんて優しい呪いだろうか。

私はどこまでも“それ”を恐れ、“それ”を望むだろうに——  
ふっ、と自嘲的な笑みが浮かぶと同時に、身体感覚が緩む。

すると、それが合図となったのか、自然と腕から過去が零れ落ちていった——

「フオウ……？ キュウ……キュウ？」

（……何かが近くに居る……？）

「フオウ!! フー、フオーウ!!」

（……いま、頬を舐められたような……）

夢からは醒めたというのに、未だに私の目は覚めず、暗闇の中を彷徨っていた。傍らで蠢く生き物が、いったい何なのかは分からないが、寝ている婦女子の顔を舐めるような、気違いな人間ではない事を願いたい。

「……あの。朝でも夜でもありませんから、起きてください、先輩」

ふと、言葉にならない声しか聞こえなかった私の耳に、突如としてハッキリと聞こえたのは、可憐な少女の声だった。

その声に、どこか背中を押されるように重い瞼を押し上げれば、人工的な光が容赦なく瞳を焼き、呻きながら上体を起こした私は、瞬きを繰り返しながら辺りを見回した。次第に、ゆつくりと視力が戻つて来る。そして、息を吹き返した私の視界に映つた光景は、先程の夢とは、どこまでも対照的なものだった。

目の前に広がる回廊は、一目で見てわかるほどに衛生的で美しく、明かりに満ちている。先進的な病院のような印象と、まだ真新しい匂い。それは、夢の余韻を振り切るには丁度いいくらいに皮肉の効いた光景で、私は思わず苦笑をこぼした。

「はいは……？」

「はい。それは簡単な質問です。たいへん助かります。ここは正面ゲートから中央管制室に向かう通路です。より大雑把に言うと、カルデア正面ゲート前、です」

無意識に口に出した疑問に、予想をはるかに上回る丁寧さで説明責任を果たしてくれたのは、私を目覚めさせた声——

まるで、導かれるように声のした方へと目を動かせば、どこか緊張した面持ちの美少女と視線が交錯する。やや紫がかったポブヘアに、視力が悪いのか眼鏡をかけているが、そのレンズ越しでも分かる。長い睫に彩られた瞳は紫水晶アメジストのように美しく、日に当

たったことがないのか?と思つてしまふくらいに白く美しい肌からは、どこか人間離れたものすら感じられる。服装は制服のようなものの上に、白いパーカーという簡素な出で立ちであるというのに、それが不思議と彼女にじっくりときていた。

すると、同性の私ですら見とれるレベルの美貌の持ち主は、やや、不自然さの残る視線の逸らし方をした。

「ああ、そつか。そう言えば、ここはそんなところだったね」

不躰に見つめすぎた事を、心の中で悔い謝りながら、少女の懇切丁寧な説明のおかげで、混乱することなく、自身の置かれている状況を理解した私は、とりあえず起き上がる事にする。

くああくと、無防備に過ぎるだろう大きな欠伸とともに身体を伸ばせば、身体の節々が小気味の良い音をたてた。

「……コホン。どうあれ、質問よろしいでしょうか、先輩」

(あつ、やばい)

美少女の前で醜態を晒してしまった事に気付くも、これでは後の祭りである。

「何かしら?」

努めて冷静を装い少女を促せば、心なしか逡巡するようなそぶりでも、形の良い唇が開かれた。



「お休みのようでしたが、通路で眠る理由が、ちよつと。硬い床でないと眠れない性質なのですか？」

（……真剣な表情をするものだから、何事かと思えば、そんなことか）

肩透かしを食らった気分です少女を見れば、至極真面目な顔で私の答えを待っているのが分かり、ほんの少しではあるが、意地悪をしたい気分になってしまう。

「実はそうなんだ。畳じゃないと、ちよつとね」

「ジャパニーズカーペットですね。噂には聞いていました。なるほど……なるほど」

「フオウ!! キュー、キヤウウ!!」

「……………」

冗談が通じていないのか、私が冗談を言っていると理解したうえで、の切り返しなのか、イマイチ判断のつかない子である。

どちらにせよ、誠実そうな印象の通り、品行方正な優等生タイプだろう。悪い子ではなさそうだが。だからといって、仲良く出来るという保証はないのが、人の世の常ではあるのだが。

「……あの、それはそうと、取り敢えず先程から忙しく鳴いておられる。そちらの小動物についてのご説明を願えますかね？」

加えて、今現在の私の興味関心は、彼女よりも、彼女の足元を動き回る、見たことの

ない白い小動物へと注がれてしまっているのである。大きさは小犬くらいだが、どこからどう見ても犬ではない。

そして、なぜだが、そんな不可解さがどうしても気になってしょうがないので、又しても彼女に説明を頼んだら、きよとんとした表情の後に、少女は、どこか恥じ入った様子で口を開いた。

「……失念してしまいました。あなたの紹介がまだでしたね、フオウさん」

「フオウさん？」

「こちらのリスっぽい方はフオウ。カルデアを自由に散歩する特権生物です」

「へっ、へえ。つて特権生物!？」

「わたしは、フオウさんに此処まで誘導され、お休み中の先輩を発見したんです」

「フオウ。ンキュ、フオーウ!!」

彼女の紹介に、フオウと呼ばれた小動物は、己を誇るかのように高らかに鳴いた。小生意気な態度だが、「可愛いは正義である。」

「ふうん?じゃあ、お礼を言っておかないと」

何より、可愛い小動物とは是非とも触れ合いたい。と思ってしまう心理は、ある種の女性特有の性ではなからうか?

「あつ……」

……が、彼？にそんな気はなかったようで、私の手からやすやすと逃れると、捨て台詞の様に一声鳴いて、走り去ってしまった。

「……またどこかに行つてしまいました。あのように、特に法則性もなく散歩しています」

「……不思議な生き物」

「はい。わたし以外にはあまり近寄らないのですが、先輩は気に入られたようです」

「あら？それは光栄ね？」

「おめでとうございます。カルデアで二人目のフォウさんのお世話係誕生です」

「……あー、それはちよつと、複雑な感じがする」

と言うか、触らせてくれないのに世話をしろ。というのは、労働基準法違反では……？

「……………」

「……………」

「!!そう言えば、自己紹介がまだでしたね。わたしは、マシユ・キリエライト。カルデアのマスター候補者の一人です」

「ん？ああ、確かに、身元を明かしていなかったね。私は——」

フォウがいなくなり、どことなく気まずい雰囲気になりかけた空気を裂いたのは、礼

儀正しい彼女の機転だった。

しかし――

「ああ、そこにいたのかマシユ。駄目だぞ、断りもなく移動するのはよくないと――おつと、先客がいたんだな。君は……そうか、今日から配属された新人さんだね」

「……………」

確かな悪寒と共に、私の名乗りは、突如として湧いて出た無粋な闖入者によつて、遮られたのだった。

「私はレフ・ライノール。ここで働かせてもらっている技師の一人だ。君の名前は……？」

「……………イモリ・セツナと申します。お見知りおきを」

マシユへと言うはずであった名乗りを、レフと名乗った男性へと返せば、彼は私を品定めでもするように、視線を彷徨させた。

「ふむ、セツナさんと。招集された48人の適性者、その最後の一人というワケか」

「……………」

「ようこそカルデアへ。歓迎するよ」

「……………」

「一般公募のようだけど、訓練期間はどれくらいだい？一年？半年？それとも最短の

三ヶ月？」

「……………想像にお任せします」

「おや、早くも競争意識に目覚めたのかな？他のライバルたちに向けて情報は隠匿するのかい？」

「まあ、そんな感じですよ」

「レフ教授。イモリさんの訓練期間は数時間レベルです。単に恥ずかしがっているだけかと」

ええと、マシユ？フォローありがとう。だけどやめて、ホントに恥ずかしいじゃないか。

「おや。それは……………そうか、数合わせのために緊急で採用した一般枠があったな」  
(……………数合わせ、ね)

それは分かっていたことであり、またその程度の事実を言われたからといって、簡単に傷心してしまえるような、脆弱な精神など持ち合わせてはいないが、本人を目の前にして普通、そんな事を平然と言うものだろうか？

「君はそのひとりだったのか。申し訳ない。配慮に欠けた質問だった」

(あつ、コイツ確信犯だわ。タチ悪いわ)

黙っている私の心境を汲んだのだとしても、勘に障る気遣いを見せる男である。

「いいえ、謝っていただくほどの事では——」

「けど、一般枠だからって悲観しないでほしい。今回のミッションには、君たち全員が必要なんだ」

（話は最後まで聞こうよう。イラつくなあ）

おかげで、私としては非常に珍しいことに、引き攣った笑顔を作ってしまった。

輝かしい栄光そのものであるような回廊に、三種類の足音が響いては消えていく様子を、私はどこか、他人事のように静聴していた。

右隣の悠然とした低音と、左隣の少し浮き足立った高音。そして、残った一つが、両音に挟まれる形で、時計の針のように規則正しく響く、酷くつまらない私の音である。ああ、本当に、どうしてこうなってしまったのか——

「……魔術の名門から38人、才能ある一般人から10人……適性者すべてを、カルデア

に集められたのだから」

「はあ」

予想外の人物を迎えての自己紹介が済んでからというもの、右隣レの件フの彼は、想定外な情報を私に教示し続けている。親切にして頂けることに悪い気はしないのだが、ぶつちやけ、ありがた迷惑感フは拭えない。

これは持論なのだが、人には一を聞いて一を返して欲しい人種と、一を聞いたら十にして返して欲しい人種がいると思う。因みに私は前者だ。聞いたことにも、聞かれたことにも、労力を割いて受け答えをするタイプではないし、知りたい事や、知るべき事も、シンプルであるほうが好ましい。まあ、恐らく、彼は後者なのだろうが。

「わからない事があつたら、私やマシユに遠慮なく声をかけて……おや？」

「今度はどうされました？」

やつと解放されるかと期待していた矢先、面倒なことに、レフ教授の知的好奇心に新たな獲物がかかってしまったようである。ため息を吐きたくなるが、左右両方から視線を感じるために、それもままならない。今更ながら、位置取りをしくじったことに気が付き、口調にもほんのりと毒気が混じってしまう。

「そういえば、彼女と何を話していたんだいマシユ？らしくないじゃないか。以前から面識があつたとか？」

そんな私の様子に気付いているのか、いないのか、どちらにせよ、気にした素振りを微塵も感じさせずに、レフ教授は私越しにマシユへと話かけた。

彼の言を受け、私も思わずマシユへと視線を向ける。この人間観察が趣味のような男が「らしくない」と評した。彼女の言動の背景に、興味を覚えたから——

「いえ、先輩とは初対面です。この区画で熟睡していらしたので、つい」

「熟睡していた……？彼女がどこで？」

「……………」

「ああ、さては入館時にシミュレートを受けたね？霊子ダイブは慣れていないと脳にくる」

脳にくる。とは、これまた物騒な話である。途端に、此処での新生活が不安になってくるぐらいには。と同時に、廊下に転がっていた得体の知れない女に、親切に出来る彼女の器量に舌を巻く。私だったら、確実に無視している案件である。

「シミュレート後、表層意識が覚醒しないままゲートから開放され——君が倒れたところで——医務室まで送ってあげたいところなんだが……すまないね、もう少し我慢してくれ。じき所長の説明会がはじまる。君も急いで出席しないと」

指摘されてしまったことで、頭痛と倦怠感を意識し始めた私の横では、相変わらずの教授の弁舌が光る。まあ、当たり前のように、その殆どを聞き流していた私ではあるが、取



り敢えず——

「説明会……?」

聞き捨てならない言葉があつたぞ?

「はい、先輩と同じく、本日付で配属されたマスター適性者の方達へのご挨拶です」

「ようは、組織のボスから浮ついた新人たちへの、はじめの挨拶しつけってヤツさ」

（あー、どこの世界でもそういうのつてあるんだなく面倒な事この上ないわく、サボりた  
い）

と、一瞬にしてスイッチが傾いた私の惰性を感じとつたのか、視界の端ではマシユが苦笑を浮かべ、教授の表情は怪訝なものへと変わった。

「……コホン、あの、それつて欠席は出来ないんでしようか?」

失態は早めに取り返すに越したことはない。特に、こういった手合いと組織の前ならば、尚更である。よつて、私は正直に、出席したくない。と、婉曲に意思表示する。

「それは、よつぽどの理由がない限り、認められないだろうな。所長は些細なミスも許容できないタイプだからね、ここで遅刻でもしたら、一年は睨まれるぞ」

（些細なミスなら許容していただきたくないなあ。と思う私は、もしかしくなくても、社会不適合者なんだろうな）

「五分後に中央管制室で説明会がはじまる。この通路を真つ直ぐ行けばいい。急ぎなさ

い」

「……分かりました」

自慢じゃないが、私は諦めが早く、聞き分けの良い子なのである。それに、望んだ結果が得られなかったからといって、駄々を捏ねるほどに子供でもない。加えて、シミュレートを終えた今、たかが説明会に、万全な状態で出席する必要性は、高くないようにも思えた。

「レフ教授。わたしも説明会への参加が許されるでしょうか？」

すると、静かに私と教授の動向を伺っていたマシユが、控えめに進言した。

「うん？まあ、隅っこで立っているぐらいなら、大目に見てもらえるだろうけど………なんですか？」

「先輩を管制室まで案内するべきだと思います。途中でまた熟睡される可能性があります」

てつきり私は、説明会にはマスター候補者全員の出席が義務付けられているのだ。と、思っていたのだが、レフ教授の言を聞く限り、そうでもないらしい。レフ教授ほど専門的ではないにしろ、カルデアについて、私に語れるだけの知識を得ていることを鑑みるに、マシユが此処に来たのは最近のことではないのだろう。であれば、彼女が説明会に出席したところで、得るものはそう多くはない。と、言われても頷ける。今回の打

診は単に、彼女の優しさがなせる業わざなのだから、まあ、前半部分は素直にありがたいのだけれど、後半部分に関しては、私って、そんなに信用がないのか？と暗くなってしまう内容ではある。

「……君をひとりにするのと所長に叱られるからなあ……結果的に私も同席する、という事か」

ん？その理屈はよく分からないし、ぶつちやけ、貴方には同行されたくないよ。レフ教授。

「まあ、マシユがそうしたいなら、好きにきなさい。君もそれでいいかい？」

あく、なんかこれあれだ。拒否出来ない流れだ。うん。つてことで領いておこう。

「他に質問があれば管制室に向かうけど。今のうちに訊いておく事はある？」

これから説明会があるのというのに、ここで質問をしては、説明会に出席する意味が、根底から揺らぎかねないと思うのだが……かと言って、マシユの手前。レフ教授が慮ってくれたというのに、何も聞かないのは、印象が悪いだろう。

この男にどう思われようと、個人的にはどうでもいいのだが、折角、知り合えた同世代の女の子と、この場限りの関係で終わってしまうのは惜しい。

「ところで、貴女は何故、私を先輩と呼ぶんですか？」

「……………」

しかしながら、私と言う女は口下手のコミュ障なもんだから、言葉選びも上手く出来ないのである。おかげで、思った以上にぶっきらぼうな聞き方になってしまった。

驚いた表情のマシユの無言に、心が痛む。

「ああ、気にしないで。彼女にとって、君ぐらいの年頃の子は、みんな先輩なんだ」「はあ」

マシユへの問いかけに、どうしてか、レフ教授から答えが返る。疑問点は減らない。私と彼女では明らかな人種の差もあり、実年齢はどうあれ、見た目では、彼女のほうが幾らか大人びて見えるような気もするのだが――

「でも、はつきりと口にするのは珍しいな。いや、もしかして初めてかな。私も不思議になつてきたな。ねえマシユ、なんだって彼女が先輩なんだい？」

まあ、考えても、それは第三者の主観でしかない為、やはり、本当のところは本人の言を仰ぐ他ないと言える。

そして、肝心の本人は、私とレフ教授の追及にたじろぎながらも、口を開いたのだつた。

「理由……ですか？彼女は今まで出会ってきた人間の中で、一番、人間らしいです」

………は？いや、ちよつと待つてよ。私が人間らしい？

なんだ、それ。それじゃあ、つまり………今まで、マシユの周りには

人間がいなかったのか？

「予想だにしていなかったマシユの発言に、私はただ、ただ瞬きを繰り返し——  
「ふむ。それは、つまり？」

声の出ない私の意を汲んだかのように、レフ教授がマシユへとその真意を問うのを、どこか他人事の様に見つめる事しか出来ない。

それぐらい、マシユの言葉は、私にとつて衝撃的だった。

「まったく脅威を感じません。ですので、敵対する理由が皆無です」

確かに、マシユと比べてしまうと、貧弱な胸ではあるけどもね……つて、そういう事ではないか、ないよな？

「なるほど、それは重要だ!!カルデアにいる人間は一癖も二癖もあるからね!!」

いや、貴方がそれを言いますか、レフ教授。

「私もマシユの意見には賛成だな。彼女とはいい関係が築けそうだ!!」

ごめんなさい。こういうとき、どんな顔をすればいいか、わからないの……

「……レフ教授が気に入るといふ事は、所長が一番嫌うタイプの人間という事ですね」

そしてナチュラルに爆弾を投下してくれるね、マシユちゃん。これ以上、私のライフを削るのはやめようか？ね？

「……………あの、このままトイレにこもつて説明会をボイコットする。というのはどう

でしようか？」

恐らく、この時の私は相当酷い顔をしていたのだろう。私の無言の圧力に、マシユが焦ったように打開策を提案するくらいには。

「ナイスアイデア——」

「それじゃあ、ますます所長に目を付けられる。ここは運を天に任せて、出たとこ勝負だ」

「……………」

「虎口に飛び込むとしようか。なに、慣れてしまえば愛嬌のある人だよ」

この瞬間に確信した、だから断言できる。

私はこのレフ教授の男が嫌いだ。

「間に合いました。ここが中央管制室です。先輩の番号は一桁台、最前列ですね」

マシユとレフ教授に案内されて、私は組織カルテの中枢へと足を踏み入れた。そして、改めて気付くことになる。一見した限りでは医療機関のように洗練されたこの施設が、どれだけデタラメな所なのかを――

「こんな時に、変な運が働くのはなんでなんだろう」

まあ、私の運の悪さは今に始まったことじゃないんだけど。

「一番前の列の空いているところはどうぞ。……先輩？顔の色が優れないようですが？」

「あ、いや何でもないよ？ただ……眠い……すごく眠い」

「シミュレーターの後遺症ですね。すぐに医務室にお連れしたいのですが……」

申し訳なさに尻すぼみになったマシユの声と共に、会場のざわめきが次第に落ち着いていく。身体を襲う倦怠感に顔を上げられずにいる私でも、この場にいる人間の関心が、一点に集約されていく気配を察する事は可能だった。

「……………」

「無駄口は避けた方がよさそうだ。これ、もう始まっているようだからね」

いつの間にか、傍らに立っていたレフ教授の声に、重い顔を上げれば、参加者よりも一段高い場に立つ、気の強そうな、ともすれば、気を張ったような顔付きの、マシユとは異なった系統の造形美を持つ若い女性と視線ががち合う。

彼女はそのまま、私の全身を頭の方からつま先へとねめつけてから視線を外すと――

「時間通りとはいきませんでした。が、全員そろったようですね」

良く通る声で、暗に私を責めながら、説明会を開会させたのだった。



## 波乱に塗れた説明会

「特務機関カルデアにようこそ。所長のオルガマリー・アニムスファイアです」

玲瓏な声に、傲慢さすら匂わせて、確かな自信とともに女性がその名を告げると、会場に緊張が走った。若くして主要ポストについているくらいだ。相応の女傑か、相当な血筋を持った人物なのだろう。何となく、後者のような気がしてならないが。加えて、開会の時点で、既に私は目をつけられたような気がする。前途は多難だな。

「あなたたちは各国から選抜、あるいは発見された稀有な才能を持つ人間です」  
簡潔にして、威力絶大な自己紹介を終えると、オルガマリー・アニムスファイア……長いな。マリーさんで良いかな？ いや、この場合は、マリー所長のほうが的確？

……まあ、兎も角、彼女は集まったマスター候補者？ 一人一人を観察するように、私達の前を往復しながら語り始めた。

「才能とは霊子ダイブを可能とする適性のこと。魔術回路を持ち、マスターになる資格を持つ者。想像すらできないでしょうが、これからはその事実を胸に刻むように」

ここでチラリと私に視線を送るマリー所長。美人の目力凄い。うん、どうしよう。帰れるはずもないのに、帰りたくなってきたぞ。

「いいですか。あなたたちは今まで前例のない、魔術と科学を融合させた最新の魔術師に生まれ変わるので。とはいえ、それはあくまで特別な才能であって、あなたたち自身が特別な人間という事ではありません。あなたたちは、全員が同じスタートに立つ、未熟な新人だと理解なさい」

「厳然とした言葉の並び。すると、ここに至って、初めて会場から幾つかの反応が起こった。魔術師の世界の事はよくは分からないが、余り肯定的な反応ではない事は確かだ。勿論、所長もそんな空気には気付いているだろう。だが、彼女はそれくらいの事で挫けるタマではなかったようである。」

「特に、協会から派遣されてきた魔術師は学生意識が抜けきっていないようですが、すぐに改めるように。ここカルデアはわたしの管轄です。外界での家柄、功績は重要視しません。まず覚える事は、わたしの指示は絶対という事。わたしとあなたたちでは立場も視座も違います。意見、反論は認めません。あなたたちは人類史を守るためだけの、道具にすぎない事を自覚するように」

「あー、高飛車な雰囲気ではあったけど、ここまで露骨だと、いつそ清々しいな。まあ、上に立つ者としては、それでもいいんだらうけど、言い方が下手不満を煽っただけという印象は否めない。「……騒がしいですね。意見は認めない。と言ったばかりですが？」

そしてまあ、予想通りというかなんというか。先程から、会場には妙な熱気が漂って

いる。これは所長にご立腹つてところだろう。

「その君。さつき遅れてきた君よ。いま話した心構えについて、何か不満があるのかしら？」

（つて、おいおい、私に白羽の矢を立てるなよ）

やはり、私の勘は間違いなかったようで、そんな自分の悪運に辟易する。ともあれ、生贄に選ばれたからには、責任は果たしましょうかね。

「……………いいえ、とつてもシンプル且つ分かりやすい指示系統と思いま——」

「なによそれ、話が違うわ!! 私たちは才能を評価されて集められたエキスパートです!! どうしてもと言うから、こんな山奥までやってきたのに、絶対服従とかバカじゃないんですか!?!」

「その通りだ、愚弄するにも限度がある!! 魔術師にとって血筋は最重要視されるものだ、それをないがしろにするなんて!!」

私がいよいよ終わらないうちに、甲高い女の怒号を皮切りに、魔術師のエリートボンボンどもが、口々に不平不満を爆発させていく、最前列で説明会に参加している私は、奇しくも、それらの罵詈雑言を特等席で聞く羽目になってしまった。多くの負の感情にあてられ、身体中の倦怠感が加速していくようで、私は自身を落ち着かせるために左腕を掴むと、長く深い息を吐いた。

「……っ 静粛に、私語は控えなさい!! それだから、学生気分が抜けていない。なんて言われるのよ!! わたしは現状を打破する最適解を口にしていただけ、納得がいかないのなら、今すぐカルデアを去りなさい!!」

少しだけ、怯んだように表情を崩しながらも、鞭のように鮮烈な所長の激が飛ぶ。声音は若い女のそれなのに、確かな重さをもつて放たれた言の葉は、正確無比に彼らの浅慮さを打ち砕いていく。

「……もつとも、あなたたちを送り返す便はないけどね。標高6000メートルの冬山を裸で下りる気概があるのなら、それはそれで評価しましょう」

静まり返った聴衆の前に、勝ち誇ったように頬を緩めた所長だが、次の瞬間には、その表情を厳しいものへと変え、職務に準ずる。説明を再開させた

「結構、脱落者はいないようね。まったく、くだらない事に時間を使わせないで、わたしたちの、いえ、人類の置かれた状況が、それぐらい切迫しているものだ。と、理解して欲しいものだわ」

そこで何を思ったのか、彼女は私に視線を寄越すと、ニヤリとした笑みを浮かべ——「ほら。その彼女を見習いなさい。反論も意見もない。従順で結構です」

又しても私を槍玉に挙げたのだった。おかげで、行き場を失った不満の矛先は、全て私へと視線となつて突き刺さってきた。さつきまで怯えていたのが嘘のような所長の

女狐ぶりには感心するが、今のところ、私には何の旨みもない。

(そりゃあ、どーも)

なので、私は心の中で毒づく、睨まないように気を付けながら所長を見上げて、更に強く左腕を掴んだ。

体調不良に気分の悪さも加わり、もう一度息を吐く。止まらない冷や汗には、自嘲的な笑みすら浮かんだ。

「……では話を続けます。いいですか、我々カルデアは……」

——所長の声が遠くに感じる、意識も混濁してきた。このままでは不味い事になる。何が何でも、今ここで倒れるわけにはいかない。と、私は目を閉じて唇を強く噛んだ。

「……そんな数多くある『星の開拓』に引けを取らない、いえ、すべての偉業を上回る偉業。文明を発展させる一歩ではなく、文明そのものを守る神の一手——」

歯が唇を突き破る痛みと、口の中に広がる血の味。不快感に重なる不快感に、己の意識が嫌でも保たれていく、ついでに聞きたくもない説明に耳を傾ければ、持ち直せるものもあるだろうか？

「不安定な人類の歴史を安定させ、未来を確固たる決定事項に変革させる。霊長類である人の理——即ち、人理を継続させ、保障すること。それが、わたしたちカルデアの、そして、あなたたちの唯一にして、絶対の目的です」

そうして、半ば自棄になった精神で、所長の説明から聞き得た事はといえば、絶望にも似た諦観ぐらいたらう。簡潔にまとめるならば、人の身で霊長の守護者になれ。と言われたも同じだ。まったく、ヤバい機関だと思つてはいたが、どうにもトンデモない事を要求されている。何より、性急に過ぎる語り口なのがいただけでない。

「カルデアはこれまで多くの成果を出してきました。過去を観測する電脳魔ラプラスの開発。地球観測モデル カルデアスの投影。近未来観測レンズ シバの完成。英霊召喚システム フェイトの構築。そして霊子演算器 トリスメガストスの機動。これらの技術をもとに、カルデアでは百年先までの人類史を観測してきました」

そんな私の嫌な予感など知る由もなく、一息で言い切つた所長だが、その背景には、とてつもない叡智が集約されているはずである。プライドの塊のような魔術師達も、流石はエリートなだけあつてか、分の弁え方は分かる状況理解は早いようで、声高に不満を呈する者はいなくなつた。

「未来予測ではなく、未来観測です。天体を観るように、カルデアは未来を見守つてきました。その内容がどのようなものであれ、人類史は百年先まで続いている。という保証をし続けてきたのです」

知らず、所長の弁にも熱が籠つてきたように感じる。それは、より不遜さ高慢さを増していく事とも同義だ。

「頭上を見なさい。これがカルデアが誇る最大の功績——」

やおら、両手を広げた所長の頭上に視線を移す。そこには——

「高度な魔術理論によつて作られた地球観測モデル、わたしのカルデアです」

機関名の元となるにふさわしい最高傑作が、青く光り輝いていた。

「……このカルデアスは未来の地球と同義なのです。カルデアスに文明の光が灯つてい  
る限り、人類史は百年先の未来まで約束されています」

流石にこれは、所長が自慢げになるのも頷けるといふものだ。私を含め、この場に  
いる全ての人間が、そう理解したのだろう。いつの間にか、先程までの不平と不満に塗れ  
た空気が薄れ、そのかわりというように、不安げに表情を崩す者が出てきた。察しが良  
いのも考えものである。私としても、彼らのような同士の存在には、苦笑を溢さずには  
いられない。

無論、私も彼らも不安の正体を明確に悟っているわけではない。しかし、これが説明会である以上、それとは相對せずにはいられないだろう。そうなれば文字通り、もう後戻りは出来なくなるはずだ。故に、それは人として正しい恐怖のあり方だと思った。

「……だって光がある限り、都市には人間が暮らし、文明が継続している事を証明しているのですから」

そして、そんな心配を裏付けるように、所長の声音に微かな翳がさした。それは本当に些細な変化だったが、確かな感傷を含んだ声帯の震えだった。

「ですが——レフ、レンズの偏光角度を正常に戻して」

(強がりな人だな)

きつと、彼女自身、所長の仮面に綻びが出たことに気付いたのだろう。取り繕うように指示を飛ばすと、己の最高傑作を睨むように見つめた。

「現状は見ての通りです。半年前からカルデアスに変色し、未来の観測は困難になりました。今まで観測の寄る辺になっていた文明の明かり。その大部分が、不可視状態になってしまったのです」

カルデアスの生命的な青色の輝きが、虚無的な灰色に塗り替わると、どこからか悲鳴を飲み込むような声が上がった。

……まあ、私の心境も、概ね似たようなものはある。



「ふん、良い反応ね。少しは頭の回る子がいて助かるわ」

そんな私達の顔色を見渡して、所長は顔を歪ませて嗤う。皮肉げに自嘲的に、されど逃避は許さない。とでも言うように。

「そう、明かりがない。という事は文明が途絶えたという事よ」

淡々と告げられた事実には、会場は完全にお通夜モードに突入し、視界の右端では、恐らく先程の悲鳴の主だろうと思われる少女が、静かにその場に蹲るのが見えた。想定外にして未知の恐怖からか、満月のような金色の瞳は見開かれ、太陽のような色をした髪の毛は、毛先まで震えているかのようだった。何より、そんな有り様を本人も理解しているのだろうか。きつく身体を抱き小さくなることで、懸命に恐怖と戦おうとしている姿は、余計に氣の毒に見えた。

きつと、感受性の塊の如く、繊細な精神の持ち主なんだろう。恐らくは私と同じで一般枠魔術師ではないなのだろうが、私のほうはイマイチ人類滅亡のビジョンにピンときていないせいで、そこまで悲観的になりきれしていない。

「これは極秘事項として秘されていた事ですが、あなたたちには知る権利があります。観測の結果、地球に明かりが確認できるのは、2016年まで——」

静かにざわつく会場を前に、説明を続ける所長であったが、何を思ったか一旦言葉を切ると、視線で控えの職員を動かし、小さくなった少女を下がらせる。

「……つまり、人類は2016年をもって絶滅する事が観測、いえ、証明されてしまったのよ」

東の間の静観。少女の震える背が、扉の向こうに消えたのを見届けてから、所長は少しばかり疲労の滲む声で言いきった。

それはいわば、地球上の全生命体に下された死刑宣告のようなものである。

「……なぜ、そんな急に人類は滅亡したのです!?原因は一体なんなんですか!」

会場が静まり返る中、唐突に生真面目そうな声が上がった。とても正義感が強そうな

印象を与える声だった。例の如く、それだけで一般<sup>魔術師ではない</sup>人と分かる類のものである。興味

をそそられた私は、出来るだけ自然に見えるように気を付けながら、視線を彷徨させた。

そうして見つけた件の人物は、先程倒れた少女とは逆側に位置する場所で、その拳を固く握りながら、カルデアスを見上げていた。

髪色は私と同じ漆黒だが、瞳は深い海とも高い空ともつかない澄んだ青色をしている。きつと、正義の味方というのは、こういう目をするのだろうか。と、場違いな感情が湧いた。

無論、私でもそう思ったのだから、生粋の魔術師である所長が、その事実<sup>に</sup>気付かない道理があるはずがない。故に彼女は、どこか憐憫の籠った瞳で青年を見つめて、口を開いた。

「……言うまでもなく、こんな未来はあり得ません。ある日突然、人類史が途絶えるなんて説明が付きません。そこで、原因は過去にあると推測した我々は、ラプラスとトリスメギストスを用い、過去2000年まで情報を洗い出しました。その結果、ついに新たな異変を観測しました。レフ、お願い」

一度目よりも、より簡略化された所長の指示で、カルデアスが胎動するかのよう回転する。次第に青い輝きを取り戻したカルデアスではあったが、今度は赤く脈動するかのような点異変が浮かび上がっていた。しかも、それは私の故郷にに巢食う形で。

「空間特異点F。西暦2004年、日本のある地方都市です。ここに2015年までの歴史には存在しなかった、『観測出来ない領域』が発見されたのです。カルデアは、これを人類絶滅の原因と仮定し、霊子転移実験レインシュフトを国連に提案、承認されました」

（——は？）

人類滅亡の原因が、2004年の祖国日本にある。とは、いくらなんでも盲点すぎる。その頃の私はまだ、幸せに暮らしていたはずだからだ。少なくとも、私の知る2004年に、人類が危うくなるような危機などなかった。

だが、事態は混乱する私など、お構いなしに進んでいく、ふと感じた視線に顔を上げれば、疑念を剥き出しにした魔術師達の姿があった。確かに、この状況では日本人私にそういう目を向けてしまう気持ちは分からなくもないが、だからって、あんまりだ。

「<sup>レイシフト</sup>靈子転移とは、人間を靈子化させて過去に送り込み、事象に介入する行為です。端的に言えば、過去への時間旅行ですが、これは誰にでも可能な事ではありません。優れた魔術回路を持ち、マスター適性のある人間にしかできない旅路です」

と、私の心情など知る由もない所長の説明は、滞りなく進んでいく。もう十分に一杯な身としては、これ以上の荷は負いたくないのが正直なところである。

「さて——ここまで説明すれば分かるでしょう。あなたたちの役割は、この特異点Fの調査」

（えっ、それって、つまり——）

「あなたたちの課題は、今から12年前の過去の日本に転移し、未来消失の原因を究明、これを破壊する事……勿論、失敗は許されません」

（嘘でしょ!?!）

12年前の日本に転移する? そんな事が出来るといふ事にも驚くが、それなら、その時代の私はどうなるのだろうか? 同時代<sup>人</sup>に同位体<sup>私</sup>が存在する事で、何か不測な事態が起きてしまうんじゃないやあ——

「この作戦は、これまで例のないものです。なにが待っているかは予測できません。ですが、世界各国から選抜されたあなたたちなら充分に可能だろう。と、多大な期待が寄せられています」

私の内心の疑問も焦りも置き去りに、所長の説明は続く、本当に理解しがたい事ばかりだが、こればっかりは聞き流すわけにもいかない。もういつそのこと、いろいろと諦めて、組織の意向に甘んじてしまおうか。

「上層部は一刻も早い原因究明を求めています。無駄に使う時間はありません。故に、これより一時間後、初のレイシフト実験を行い、第一段階として、成績上位者8名をAチームとし、特異点Fに送り込みます」

（ごめん、前言撤回。一時間後とか心の準備が出来ない。てかまず私、自分のチームが何チームだか知らない）

「静粛につ!!まだ説明は終わっていません!!後発組には伝えてありませんが、彼等はカ ルデアから選抜されたマスター適性者です。Aチームは一ヶ月前からチームとして機能しています。一人前の兵士。と言ってもいいでしょう。彼等Aチームが先行し、特異点Fにてベースキャンプを築き、後に続くあなたたちの安全を保証する。Bチーム以下は彼等の状況をモニターし、第二実験以降の順番に備えなさい」

と、予想以上に早く下された指<sup>レイシフト予定</sup> 令に浮き足立った空気を窘めるように、所長が両手を叩く。すると、彼女の後方から国籍も年齢もバラバラな八人の男女が歩み出た。その中には紫水晶<sup>マッシュ・キリエライト</sup>の美少女の姿もある――

って、マッシュがAチームだなんて思いもしなかったぞ!?!というか、Aチームに在籍し

ているのなら、説明会前に教えてくれてもよくないですか!?

——つうか、この感じを見るに、元から最後に紹介する運びだったよね!? えっ、何!? もしかしなくても、マシユが自分の所属チームを明かさずにいたのも、レフ教授がマシユを説明会に参加をさせる事を渋っていたのも、全てはここでの見栄を張り通す為? 「……では、人間を靈子に変換し、過去に転写する量子の筐……クラインコフインの個人登録に移ります。あれは一人一基のものですから、換えはききません。各自、慎重に、丁寧に扱うように。BからDチームは登録が済み次第、コフィン内にて待機。Aチームに問題が発生した場合に備えます」

(……あー、うん、でも、まあ、安心はした。とりあえず、主力の準備は出来ているようだし。例えやる事は変わらずとも、責任の重さは大分軽減したぞ。だから主力は頑張れ!!)

過ぎた事は考えても野暮なので、水に流す事にする。ああ、けど、これで先輩呼びはふさわしくない事が確定したから、止めてもらわないと。マシユが私の何に感銘を受けて慕ってくれたのか? は謎だが、階級組織特有社会の関係は、明確にしておかなくては締まりがつかなくなるだろう。問題は、それをどうやって伝えるかだな、なんか先輩呼び自体を楽しんでたっばいからなあ、どうするかなく

「——何をしているの。やるべき事は説明したでしょう。マスター適任者として招集に

応じた以上、あなたたちはもう軍人のようなものなのよ。命令には従う。どんな時でも戦いに順応する。いちいち言わせないで、こんなこと。それとも、まだ質問があるの？ ほら、その君!! 君よ、遅刻した君!!」

(?!)

唐突に、両手の平を打ち付ける乾いた音が、思考を打ち消した。目を丸くする私の前には、白魚のような美しい掌が重なっている。数瞬遅れて、それを認識した私は、恐る恐る美しい手の持ち主へと、ピントを合わせた。

「特別に質問を許してあげます。首を傾げているけど、何が不満なの？」

「いつ、いえ……ただ、過去を変革して問題はないのでしょうか……なんて思ったり？」

しどろもどろに疑問を絞り出せば、つい、さつきまで、気の立った白猫のようだった所長の表情に、優しい気な微笑みが浮かぶ。でも、私には分かるぞ。所長が無理をしている事が、それはもう、分かりたくないほどに。

付け加えるならば、ここにきてまで、目を付けられている。とは思ってもいなかった。ので、無難な事しか言えなかったのだが、本音を言えば、特に聞きたい事などないのが、正直なところである。

「……………あなたね。特異点、と聞いて分からないの？ 今回発見された特異点は、これまでの観測記録にはなかったものなの。ようは、突然現れた穴と同じってコト。穴自体が

正常な時間軸から切り離されているのよ」

それに、この状況下でのこの質問は、火に油となる案件だったようである。

その証拠に、心底呆れた。と、言うように眉根を寄せる所長。多分だけでも、これもう所長の中での私の評価は、最悪の部類じゃないか？だとしたら、ある意味——

「いいこと？2004年の特異点は、過去と未来から独立している。前後の辻褄を合わせる必要はないの。通常の時間旅行より安定してシフト出来るし、どのように改変を行っても、時間の復元力で影響はないわ」

(……なあんだ、そうなのか、なら、私の心配は杞憂だった。って事か)

「この特異点Fは、人類史というドレスに染みついた、小さな汚れのようなものよ。あるだけで美しさを損なう毒。あなたたちはこの毒を摘出するだけでいいの。それで人類史は元の……以前から観測されていた、正しいカタチに戻るんだから」

「なるほど、なるほど。解説、ありがとうございました。おかげで、よく理解できました」  
「……まったく。こんな初歩の時空論も知らない人間を寄越すなんて、協会は何を考えているのかしら。この作戦は冠位指定、魔術世界において、最大級の義務と同じなんだ。って、進言したのに……」

結果としては、聞き辛い知りたかった事を知る事が出来たので、私としては、無駄な時間ではなかったのだが、所長にとつては、間違いなく時間の無駄だったのだろう。眉



間の皺をより深いものにする、ため息を一つ吐いた。

「まあいいわ。君は何処のチーム……………ちよつと。ID、見せて」

そうして、私の首から下がったIDカードを強引に引つ張ると――

「……………なにこれ、配属が違うじゃない!!一般協力者の、しかも実験経験も仮想訓練もなし!?!」

……………顔近いんだから、大声出さないで欲しいんだけどな、頭痛に響く。

「わたしのカルデアを馬鹿にしないで!!あなたみたいな素人を入れる枠なんて、どこにもないわ!!」

苛立たし気にIDカードごと私を突き放すと、もう話す事はない。と言わんばかりに、会場を後にしようとする所長。一方、その反応で、漠然と己の立ち位置を理解した私はといえば、いろいろと言いつ足りない事が満載なので、所長の後ろ姿に精一杯の思いを込めて、声をかける事にした。

ふと、これから場を支配するだろう。険悪なムードを想像したからか、いつの間にか、私の口元には笑みすら浮かんでいる。

「そうですか。それは僥倖です。私に人類史を守る気はないので」

ピタリ。と、所長の歩みが止まる。こういった挑発行為は、私の専売特許の一つである。非常に使いどころに困る特技の一つでもあるのだが。今この時ばかりは、出し惜し

みもしてられない。私には私の役目があるのだから、人類を救うなんて大役を担って暇などないのだ。

「……あなた、自分がいったい何を言っているのか、分かっているの?」

案の定、所長は私の挑発に乗ってきた。そりゃあ、そうだろう。人類滅亡の危機を救う。という大義に真っ向から対立したのだから、私が所長の立場でも、怒り心頭ものである。

そんな、所長の怒りに震える背中を見つめながらも、私は攻め手を緩めるつもりはなかった。

「勿論。ああ、動機ですか?それは単純にして、明快に説明できますよ?だって、絶滅しない種なんてないでしょう?だから、諦めて滅んだ方が気楽で——っ!」

私が言い切るよりも先に、振り向きざまの所長の平手がとんだ。それなりに覚悟はしていたので驚きは少ないが、やっぱり、痛いものは痛いな。

「レフ!!レフ・ライノール!!」

俯き、両手をきつく握りながら、所長がヒステリックにレフ教授を呼ぶ声が響く。呼ばれたレフ教授はいえ、会場の後方からゆったりと姿を現した。

「ここにいますよ所長。どうしました、そんな声高に。なにか問題でも?」

全部見ていただろうに、飄々と所長に尋ねるレフ教授。人の事は言えないが、やっぱり

り、この男は性格が悪いと思う。こちらに不都合が生じた時に、所長と同じ手では躲せないと思えるから、余計にそう感じるのだろうが。

「問題だらけよ、いつも!!いいから、この新人を一秒でも早く、わたしの前から叩き出して!!」

「あー……そういうコトですか。ですが所長、彼女も選ばれたマスター候補です。確かに、先の発言に問題はあるかとは思いますが、きつと大役を担う事への恐怖ゆえで……そこまで邪険に扱うのも……」

「なんの覚悟も経験もない素人を投入するコト自体が問題よ!!わたしのカルデアスに何かあったらどうするの?!いいからロマニにでも預けてきて!!せめて最低限の訓練を済ませて、心構えを叩き込んでおきなさい!!」

(……あー、この事態を引き起こした身で、こんな事を言うのもあれだが、まるで、駄々を捏ねる子供をあやすみたいいな光景だな)

今の所長に、先程までの毅然とした態度はなく、その様子はまさしく、聞き分けのない子供と酷似している。同情するつもりはなかったのだが、これは些か、レフ教授が可哀想に思えるレベルだ。

「……むう。随分と嫌われたものだね。仕方ない、取り敢えず命令には従うか。マシユ、イモリ・セツナさんを、個室に案内してあげてくれ」

そんな、哀れなレフ教授は、柔和な表情に少しだけ憎々し気な感情を匂わせて、私を処理しに動いた。

「了解です。お話は聞いていました。先輩を個室までご案内すればいいのですね？」

すると、チーム紹介を終えてからというもの、会場の端で待機していたマシユが、素早く私の横へと進み出る。

「すまないね。私はレイシフトの準備があつて、同行できないんだ。なに、今回の実験は二時間ほどで終わる。その後に部屋を訪ねさせてもらおうよ」

優し気に、されど私を見つめる瞳に静かな怒気を孕ませて、レフ教授は騒動を収めたのだった。

「それでは先輩、こちらへ。先輩用の先輩ルームにご案内しますので」

マシユに促されて歩き出す。会場を去る前に、一度だけ後ろを振り返れば、そこにいる全員が、私を見つめていた。

## 崩壊は突然に

「……その、大丈夫ですか先輩？」

「痛みがないと言ったら嘘になるけど。まあ、自分から仕掛けたことだからねえ。それにマシユ。主力としては、ここは叱るところなんじゃない？」

説明会場を退出して歩き出した途端、マシユが心配そうにこちらを窺ってきたので、私は苦笑を浮かべながら答えた。それは心配させてしまった事に対しての謝意と、良くも悪くも、己の立場を理解していないような少女の、無垢な優しさに対する呆れが混ざったものだった。

「……あの、先輩？」

「ん、何だい？」

「なぜ、あのような言動を？」

白々しく、ケロリと軽快なノリで聞き返せば、私の言に思うところがあつたのだろう。マシユが、訝し気にこちらを見つめてくる。

対する私も、自業自得とはいえ、彼女の表情には少しだけ苦いものを感じてしまう。それは、その素直さに懐かしいものを感じてしまったからであつたのだが、決して軽々

しく感傷に浸っていい類のものでもなかった。

「欲しい答えがあったからさ。そしてそれは、マシユ。君が私の代わりに受け取ってくれたはずだよ？」

自分でも自覚出来るほどに含んだ笑いを口元に浮かべて、それをマシユへと伝えれば、彼女の美しい紫水晶アメジストの瞳が、驚きに見開かれた。

「……もしかして、わざとファーストミッションから外されようかと？」

「……名答っ!!」

彼女の鼻先でパチンと指を鳴らして肯定すると、驚いたマシユがたたらを踏む。その可愛い反応を堪能しながらも、私は己の推測が外れていなかったことを確信した。

説明会場を退出した際に、彼女だけは一度、所長に呼び戻され会場に戻っていたのだが、恐らくはその時に、私の売った喧嘩に対する答えを、所長から言付かっていたのだろう。ひとまずは、望んだとおりに事が運んだようで、何よりである。

「……でも、それなら、なぜ先輩はここに来たのですか？」

「……………」

しかし、安心したのも束の間、今度は無垢で可愛い伏兵後輩による追撃正論が私を捉えた。ほんと、得意になって藪をつつくものじゃないな。

「先輩？どこか具合でも——」

ふと、俯き足を止めた私を慮るように、マシユが手を伸ばすのと、私が行動に移ったのは、ほぼ同時だった。彼女から伸ばされた右手を掴むや、私はただ、ただマシユに向かつて歩を進め――

「せん、ぱい?」

気付けば、距離を詰める私によつて、壁際へと追い込まれたマシユとは、息がかかるほどの距離にまで近づいていた。殆ど身長が同じな事も相まって、ここまで近いと、彼女の淡色の長い睫が震えるところまで、はつきりと知覚出来る。私が同性だという事を差し引いても、油断のし過ぎであるのは明白なので、手加減などしない。逃げられないように、逃がさないように身体を密着させると、流石のマシユも何かを感じたのか、微かに身じろぐ、けれど、そうすることでお互いの脚が触れ合う事にも気付いたのか、精一杯の抵抗として恥ずかしそうに顔を背けた。そんな可愛い反応をするものだから、私の嗜虐心がそそられてしまったのも無理はないと思う。

「……………打算と利害の一致だよ」

「ふえつ?」

顔を逸らしたことで、無防備に晒された耳へと囁くと、殆ど反射的にマシユが顔を戻す。

「ふふ、捕まえた」

「えっ、ええと……」

お互いの額が合わさった事で前髪が絡み、吐息が頬を撫ぜる。すると、私の言動に付いてこれていないのだろう。羞恥からか、マシユは白皙の美貌を朱に染める。その少しだけ潤み、震えるように揺らぐ紫水晶アメジストに反射した私は、何処相変わらずまでも感情を失無表情つた顔だっをしていた。

「次はないよ、マシユ」

「は、はあ」

冗談半分でマシユをからかい尽くして満足した私は、彼女から手を放し距離を取る。すると、私私という支えを失ったから開放されたことで、彼女は壁に沿って、ズルズルとへたり込んでしまった。

「あら？腰を抜かすにはまだ早くてよ？それに、君がいないと、私はベッドでおねんね出来ないんだからね？」

些かやり過ぎたか。と、心の中で反省しつつも、私は他人に心を配れる精神状態ではなく、身体は一刻も早い休息を求めている。故に、わざとらしい言い方で、彼女を促した。

「あつ、はい、すいませ——きやつ!？」

「マシユっ!？」



すると、真面目な彼女は私に抗議するでもなく立ち上がったのだが、そんな彼女に追いうちをかけるかの様に、私とマシユの間を白い物体が走り抜けた。驚く私とマシユを尻目に、彼はマシユの顔の上に器用に着地すると――

「フオウ!!」

と、やはり、どこか誇らしげに鳴き声をあげた。

「……美少女の顔は、もつと大事にしたまえよ。フオウ」

「い、いえ、いつもの事です。問題ありません」

「そうなの?」

起き上がろうとするマシユに手を貸しながら、フオウを窘める私に、意外な答えを返すマシユ。

「はい、フオウさんは、わたしの顔に奇襲をかけ、そのまま背中に回り込み、最終的に肩へ落ち着きたいらしいのです」

「……へえ、なんだかいろいろと突っ込みどころが満載な気もするけど、とりあえず、これだけは言わせて……フオウ、恐ろしい子!!」

「……先輩?」

「ああ、ごめんなさい。気にしないで、言いたかったただだから」

ちよつと、フオウくんの性癖?が斜め上だったただだから。

「先輩が、そう仰るなら」

「ええ、それに、その様子を見るに慣れているのね」

「はい。フォウさんがカルデアに住み着いてから、一年ほど経ちますから」

私の言葉に、マシユは自分の肩で寛ぐフォウの首元を撫でながら答え、撫でられたフォウは気持ち良さそうに目を細めた。こうして見ると、意外と猫っぽくも見えるから不思議である。

「二年、ねえ〜」

マシユの言い分を素直に受け止めるなら、彼女がここに来たのだって、最低でも一年以上は前という事になるだろう。

しかし、こんな辺境の山岳地に一年以上も詰めている割には、彼女は何の不満も抱えてないように見える。と言うよりも、そうなるように教育されているのかもしれない。彼女の純粋無垢さは最初から籠外の世界を知らないせいの中の鳥だったからなのではないか？という錯覚邪推を抱かせるほどのだから。

「フォウ。クー、フォォウ!!フォォウ!!」

すると、そんな私の思考を裂くように、フォウが高い声で鳴くので、私はそれ以上の考えを振り払うと、依然として、マシユの肩に乗ったままの小動物へと視線を移した。

「……ふむふむ。どうやらフォウさんは先輩を同類として迎え入れたようですね……」

「えっ?」

「しかし、人間をライバル視するリスのような生き物はアリなのでしょいか……」

「ええと、こつちに訊かれても困るかな……」

ん?というかマシユはフォウの言っている事が分かるの?まさかの不思議ちゃん属性も持っている系の美少女なの!?

「まあ、フォウさんのことですから、明日には忘れていくでしょう。それはそれとして、です」

「?」

「実はもう目的地に着いています。こちらが先輩用の個室となります」

「おっと、そうだったのか。案内ありがとう」

マシユの言に、私は通り過ぎてしまった分を後ろ歩きで戻ると、その銀色の扉の前で彼女へと向き直る。

「なんの。先輩の頼みごとなら、ランチ昼食をおごる程度までなら承りますとも」

「なにそれ、男前って、うわっ!!」

「キュー……キュー!!」

どこか楽し気なマシユの言葉に笑って返すと、彼女の肩から私の肩へとフォウが跳躍し、予想だにしていなかった彼の行動に、今度は私がたたらを踏むこととなった。

「フオウさんが先輩を見てくれるのですね。これなら安心です」

「それはいいとして、フオウ。驚かささないですよ」

「ンキュウ？」

マシユがそうしたように、フオウの首元を撫でながら抗議すると、彼は不思議そうに小首を傾げた。そのあざとい可愛さに怒る気力も削がれてしまう。

「それでは、わたしはこれで。運が良ければ、またお会いできると思います」

すると、そんな私と一匹を優しい表情で見つめていたマシユが、さらりと別れを切り出した。以外にもこういう事には淡泊らしい。まあでも、さっきの私の言動を考えれば、然もありなん。と言ったところか。今のところは、再会を望むかのような言葉を選んでくれた彼女をたてるべきであろう。

「あつ、うん、じゃあまた」

だからこそ、私は彼女の背が見えなくなるまで笑顔で手を振った。ファーストミツシヨンに外された身の私と、主力戦力である彼女が次に邂逅するときには、きつと、状況は最悪に近いのだろうか。などと思わしながら……つと、ここまでは良かったはずなんだけれど――

「うええええええええ!!? 誰だ君は!!?»

「えつーと……」

「ここは空き部屋だぞ、ボクのさぼり場だぞ!!? 誰のことわりがあつて入ってくるんだい!!?»

「いや、貴方こそ何者ですか!!?»

「何者つて、どこからどう見ても健全な、真面目に働くお医者さんじゃないかな!!?»

「……えつ?」

自室と言われ案内された部屋には、得体の知れない陽気な先客が居たのだった。

「いやあ、はじめまして!! 予期せぬ出会いだったけど、改めて自己紹介をしよう!!」  
「はあ……」

場合によっては、武力行使に出る事も考えた私だったが、問題の人物は話せばわかる類の人間であつたようで、私の名前とカルデアでの立場と、この空き部屋は今日から私が使う事になった旨を伝えると、すんなりと合点がいったらしく、何がそんなに楽しいのか、人好きのする柔和な笑みを浮かべ私の手を取ると、上下にブンブン振りながら、そう言い放つたのだつた。

「ボクは医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。なぜか皆からDr. ロマンと略されていてね。理由は分からないけど言いやすいし、君も遠慮なくロマンと呼んでくれていいとも」

「はあ……?」

「実際ロマンって響きはいいいね。格好いいし、どことなく甘くて、いい加減な感じがするし」

「……ああ、ゆるふわ系か……」

「ふわふわ? ああ、髪型のコト? 時間がなくてね、いつも適当にセットしてるんだ」

「……………」

ん、もう何も言うまい。私は疲れたのだ。あと、そろそろ手を放してくれないだろうか。

まあ、別段、私は潔癖なわけではないのだが、知り合つて間もない異性に、ずっと手を握られている状況というのも好ましいものではない。それに、潔癖という事柄に関しては、彼のほうが当てはまるだろう。

握手を求めておいて、手袋を外さないのは些か失礼だとは思うが、彼の立場で考えるのなら、医者 of 鑑とも取れなくもない。それに、この職員というから身構えはしたものの、彼からはレフ教授のような雰囲気は感じ取れなかつた。とはいえ、こんな施設の医療部門のトップを張れるだけの力量はあるわけなので？一概に善人とも言えないのかもしれないが。

「つて、あれ？君の肩にいるの、もしかして噂の怪生物？うわあ、はじめて見た!!」  
「へ？」

ふと、私の肩口へと視線を移したドクターが、先程から浮かべたままの人懐こそうな笑みに、少しばかりの驚愕のエッセンスを加えて瞠目した。と同時に、彼の手が私の手を解放する。

出会つてからずっと感心しているのだが、本当に彼は表情がコロコロと変わる。大人

の、それも男性にしては、珍しいのではないだろうか？ 少なくとも、私が今までに接してきた成人男性に、彼のような人はいなかったように思う。そのせいもあってか、彼女の子だったらモテるだろうな。などという下世話な想像が頭をよぎってしまった。

「マシユから聞いてはいたけど、ほんとにいたんだねえ……どれ、ちよつと手なずけてみるかな。はい、お手、うまくできたらお菓子をあげるぞ」

と、自分が貶められている事など知る由もないドクターはといえば、自己完結的な感想を述べながら、私の黒髪に隠れるフオウに掌を差し出している。

「……………フウ」

しかし、フオウはため息のような鳴き声を上げるだけで、彼の手に乗るつもりはないらしい。

「あ、あれ。いま、すごく哀れなものを見るような目で無視されたような……」  
「然もありなん」

フオウの反応で、自分がフラれた事に気付いたのか、ドクターは情けない表情で情けない声を出した。そして、そのまま力なく執務椅子に座り込んだ彼であったのだが、以外にも立ち直りは早いようで、少しばかり表情を引き締めると、私にもベッドへと座るように勧めてきた。

そんなドクターの変わりようを不審に思いながらもベッドに腰かけると、丁度、彼と



相対する形になる。

「とにかく話は見えてきたよ」

「はい?」

彼が医師として対話するつもりなのだと思つていた身としては、唐突に告げられたその言葉が、何を意図しているのか本気で分からず。ただ、ただ、呆けてしまう。

「君は今日来たばかりの新人で、所長のカミナリを受けた。つてどこだろう?」

「……あつ、えつと」

(うっわー、これまたレフ氏とは別ベクトルでやりづらい相手だな。この医者!)

多分、当人は無自覚なのだろうが、彼と相対してからというものの、場の空気は完全に彼が掌握している。要するに、こちらのペースを崩すのが上手いのだ。しかも、相手に殆ど不快感を与えずにそれらをやつてのける辺りは、玄人の手腕と言えるだろう。

そういえば、所長は私をロマニに預ける!!と叫んでいたような気がする。もしかすると、彼がここに居たのは偶然ではないのかもしれない。だとしたら――

「ならボクと同類だ。何を隠そう、ボクも所長に叱られて待機中だったんだ」

……と、私が彼を観察している間に、リスもどきの特権生物に加え、ゆるふわな医者野郎にも同類認定された模様。悲しいかな。

「もうすぐレイシフト実験が始まるのは知ってるね? スタッフは総出で現場に駆り出さ

れている」

「約一名が除かれている模様ですけれどね？」

そのレイシフト実験から逃げてきた身なので、自然とその手の話題には毒を吐いてしまおう。

「はは、手厳しいね。けどボクは皆の健康管理が仕事だから。正直、やるコトがなかった。霊子筐体コブレイに入った魔術師たちのバイタルチェックは機械のほうが確実だしね」

しかし、特に気分を害した様子も見せずに、彼は肩をすくめると、あつけらかんと問題発言紛いの事を言い放った。

「所長に『ロマーニが現場にいると空気が緩むのよ!!』って追い出されて、仕方なくここで拗ねていたんだ」

ピンタ所長だが、指示は的確な感じである。確かに、集中を要する場面に彼を置いておくのは得策ではないだろう。裏を返せば、意図的に集中を断ち切って、現場をスローペースにしたい際には、彼ほどの適任はいないと言える。まあ、そんな場面は少ないだろうけど。

何はともあれ、話を聞いた限りでは、彼が密偵である可能性は低そうだ。

「でも、そんな時にキミが来てくれた。地獄に仏、ぼつちにメル友とはこのコトさ」

おい待て、初めて聞いたぞ、その諺。

「所在ない同士、ここでのんびり世間話でもして、交友を深めようじゃないか!!」  
いや困る。それは非常に困る。私は私室で身体を休めたいんだ。医者なんだから察してくれよ。

「別に私、ぼつちじやありませんけど」

「な……来たばかりの新人なのにもう友人がいるなんて、なんてコミユ力なんだ……!!  
あやかりたい!!」

いや、アンタ充分コミユ力あると思うんだけど!?多分、友達がいらない理由は極端な緩さにあるんじゃないやあなかるうか? 友達がいらないかどうか知らないけど。

思わず憚りもなく、大きなため息を吐いてしまう。彼がレフ教授のような人間であれば、もつとヘイトを前面にしていけるのだが、ここまで会話した限りでは、人畜無害な感じしかないなので、扱いに困る。

しかし、捨てる神あれば拾う神あり。とはよく言うもので、まあ、その神様が善か悪かは、人それぞれなんだろうけれど。兎も角、この後、私達しかいないこの空間に、第三者の声が介入した事で、事態は動く事になるのである。

「ロマニ、あと少してレイシフト開始だ。万が一に備えて、こちらに来てくれないか?」  
と、ドクターの左手首に巻かれた銀色の腕輪から聞こえた声は、私もよく知る人物のものだった。

因みに、その腕輪は私の左手首にも巻かれている。機械にそこまで詳しくない私も、この腕輪が簡単な解析機能を含んだ認識票ドックタグのようなものである事は感じ取れた。

「Aチームの状態は万全だが、Bチーム以下、慣れていない者に若干の変調が見られる。これは不安からくるものだろうな。コフィンの中はコックピット同然だから」

「やアレフ。それは気の毒だ。ちよつと麻酔をかけに行こうか」

私なら、そんな軽いノリで麻酔をかけられたくはないな。

「ああ、急いでくれ。いま医務室だろう？そこならなら、2分で到着できる筈だ」

すると、ドクターの冗談を華麗にスルーしたうえで、締めくくるように、レフ教授からの通信は途絶えた。

「……、医務室じゃないですよね？」

と、思わず本音が漏れる。

「……あわわ、それは言わないでほしい……ここからじゃあ、どうあつても5分はかかるぞ……」

いや、そこは走るとかして頑張ろうよ？万が一にも命に関わるようなことが起きないとも限らないだし、仮にも医者なんだし。

「ま、少しぐらいの遅刻は許されるよね。Aチームは問題ないようだし」

あれ？私の記憶違いでなければ、ここの医療部門のトップは、このゆるふわだった気

がするんだけど……大事な場面でトップが不在の組織って……

各部署のトップが皆こんなノリだったらどうしよう。と、不安からか頭痛が増したのもあり、私はリアルに頭を抱えた。

「ああ、今の男はレフ・ライノールと言うんだ」

と、そんな私の様子を、知識不足と捉えたらしいドクターが、説明口調で語り出す。

「あの疑似天体を観るための望遠鏡——近未来観測レンズ・シバを作った魔術師ですよね？」

しかし、相手が悪かったなドクター。カルデアの主要な人物にはあらかた目を付けられている身なので、新参者でありながら、情報には事欠いていないのだよ。

「えっ、すごいね。もう知ってたんだ」

「ええ、まあ」

但し、レフ教授の話をするとなると、精神的によろしくない気がするので、詳細は省かせていただく。

「でも、付け加えるなら、シバはカルデアスの観測だけじゃなく、この施設内のほぼ全域を監視し、映し出すモニターでもあるんだよ」

「はあ、そうなんですか」

「ちなみにレイシフトの中核を担う召喚・喚起システムを構築したのは前所長」

「へえ」

「その理論を実現させるための疑似霊子演算器……ようはスパコンだね、これを提供してくれたのがアトラス院」

「ほう」

「このように実に多くの才能が集結して、このミッションは行われる」

「……………」

「ボクみたいな平凡な医者立ち会ってもしょうがないけど、お呼びとあらば行かないとね」

「そうですね」

「……………」

「……………」

「……ん？ああ、なるほど。今の説明は盛大な言い訳でもあったんですね？」

まあ、それでもいいか。この人の善意は押しつけがましくなく、自然で心地良いと思っただのは事実だし。

「……それじゃあ、ボクは、そろそろお暇するよ。お喋りに付き合ってくれて、ありがとう」

「いいえ、こちらこそ。いろいろとご教授いただき、ありがとうございました」

ふと、無音に耐えきれなくなつたのか、ドクターがはにかみ立ち上がった。私も日本人らしく立礼で返す。

「落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。今度は美味しいケーキぐらいはご馳走するよ」

「それは是非とも、ご相伴にあずからせて戴きませう」

……しっかし、マシユもだが、この人も大概チヨロくないか？それとも、カルデアでは食を奢ることが美德とされているのだろうか？

勿論、貰える善意は貰っておくに越したことはないのだけれど——

と、場の空気が最高潮に緩んだ瞬間に、それは起きた。

「なんだ？明かりが消えるなんて、何か——」

ドクターの困惑した声音を皮切りに、突如として暗転した空間に、けたたましい警告音と無機質なアナウンスがこだまする。それは確かな異常を知らせていた。

「緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください。繰り返します。中央発電所、及び中央——」

「うわっ!!」

「っ」

すると突然、大きな音がアウンスを掻き消し、地面が大地震さながらに震えた。私ですら驚くくらいなのだから、傍らで情けない反応を見せたドクターは、地震のない国の出身なのかもしれない。

「今のは爆発音か?! 一体なにが起こっている……?! モニター、管制室を映してくれ!! 皆は無事なのか?!」

しかし、流石はカルデアの職員といふべきか、焦りながらも、状況を正確に把握しようとして、ドクターは声をあげる。途端に液晶へと映し出された管制室は、辺り一面、真っ赤に染まっていた。

「……管制室って、あの娘は……?!」

「これは——」

困惑しながらも指示を仰ごうとドクターへと視線を移せば、真剣な表情をした彼に両肩を強く掴まれる。

「キミ、すぐに避難してくれ。ボクは管制室に行く、もうじき隔壁が閉鎖するからね。その前にキミだけでも外に出るんだ!!」

「っ、ですが!!」

あまりの剣幕に、そんなつもりはなかったというのに、思わず言い返していた。けれど、彼は私の同行は許さないから絶対に付いてこないように。と、釘を刺すなり、部



屋を飛び出して行ってしまう。

「どうしてこう、皆して私の話を最後まで聞かないんだ？」

彼の背が暗闇に溶け、完全に見えなくなる。置いてけぼりを食らった私は、ベッドに仰向けに沈み込みながら、愚痴をこぼした。

ふと、傍らを見やれば、無言で私を見つめるフォウが居る。その瞳には先程のドクタールと同じように、救済の手を差し伸べる者特有の光が宿っているように見えた。

「……わかつてる。マシユを助けに行くのでしよう？」

だから、こう言う他なかった。そうでないと、私は彼の視線に耐えきれなかっただろう。

「フォウ!!」

私の発言を受け、目に見えて喜ぶフォウを尻目に、私の口元には歪んだ笑みが浮かぶ。「私も大概、非情になり切れないものだな」

目を閉じて、これからの事に思いを馳せる。もしかしたら死んでしまうかもしれない。と、漠然と考えながらも、不思議と恐怖はなかった。

そのかわりに、彼女の笑顔あの子を思い浮かべて目を開ける。結末がどうであれ、それを思いつけるうちは、私はいつまでも生き続けられるのだから――

「いや、なにしてるんだキミ!?!方向が逆だ、第二ゲートは向こうだよ!?!」  
「知っていますよ」

ドクターの素っ頓狂な声に、肩を竦めながら答えるも、私の表情は真剣そのものだった。

「なっ、まさかボクに付いてくるつもりなのか!?!そりゃあ、人手があつた方が助かるけど——」

「と言うよりは、現状を鑑みるに、私が先行した方がいいと思いますよ」

そう。部屋を駆け出したドクターに、私とフオウがこんなにも早く追いつく事が出来たのには理由がある。

「そんな事、させるわけに——」

「ドクターは彼女を放つてはおけないでしょう?」

頭部と腹部から血を流す。褐色の肌をした女性を視界に入れつつ、有無を言わせないように、私は厳しい声を出した。これにはドクターとして、彼は黙らざるをえない。今、彼が向き合うべきは目の前の患者であつて、私ではない。そして、そういった優先順位を理解しない男であれば、彼は医者になどなれていない筈である。事実、彼は私を相手取りながらも、治療する手を止めるような真似はしていない。

「だからといって、幾らなんでも危険すぎる」

しかし、以外にも食い下がるので、卑怯な手しか知らない私は、淡々と告げる。

「それは、貴方とて同じことです。寧ろこの状況下では、ドクターである貴方に何か起るほうが、後の損害に影響を与えます」

「けどっ」

「それに、ドクターはお医者様でしょう？ 私に何かあつた時は、よろしくお願いしますね？」

挑発するように笑いながら言うのと、彼はギョツとした表情をした。恐らくは、私の覚悟のほどを理解したのだろう。

「ああもうっ!! 言い争っている時間も惜しい!! 隔壁が閉鎖する前に戻るんだぞ!!」

苦々し気に吐き捨てると、彼は目の前の患者だけに集中し始める。

「……善処します」

その背中に苦笑で返しながら、走り始めた私の視界の端で、女性の左手、薬指がキラリと光った。

## 彼女達の週末

「ハッ、ハア、ア」

管制室までは大した距離ではなかったはずなのに、私の心臓は早鐘を打ち、肺は空気を求めている。いくら走っているからといって、短時間でここまで息苦しくなるのは、おかしいことだった。

「フウ、フオウツ!!」

少し前を先行して走るフオウの足跡が赤い。恐らくは、気付かぬうちに血でも踏んだのだろう。それでなくとも、管制室へと近づくにつれて、景色は凄惨さを増しているようだった。廊下や壁のひび割れが数を増し、所々の壁には、先程の女性がつけたのだろうと思われる。赤茶色の手形が存在を主張している。奇しくも私は、自分でも気づかないうちに、フオウと共にその血痕を手掛かりに走っていたのだった。

ただ、救いと言えるかは分からないが、まだ死人を見たわけではない。けれど、生者も見てはいなかった。

「フウー、フオウツ!!」

ふと、私より先に廊下の角を曲がったフオウの甲高い鳴き声が鼓膜を揺らした。その

声が、人間でいうところの悲鳴に該当すると理解した私は、覚悟を決める。

「ツハア、こ、これって……」

フオウに遅れること数秒、角を曲がった私は足を止め、荒い息を繰り返しながら、ただただ驚嘆した。目の前に続いているはずの道は、積み上げられた瓦礫の山で塞がれ、床には夥しい量の血液が血溜まりを作っている。

瞬間、込み上げたものを押さえる為にも、私は口元を覆った。

それは、生理的な身体の反応だったのだと思う。私が視界に入れたものは、人の形を失った。かつては人だったものの肉塊だったのだから。

「……まで来てツ……!!」

思わず、悪態を吐いた私を嘲るように、はるか上空では蛍光灯の光が明滅を繰り返している。その弱々しい光を見上げ、天井に開いた大きな穴の存在を認知し、上階の床が抜けたのだと理解した。

「フオウ」

すると、そんな私を慮るように、フオウが足元にすり寄って来る。

「……私は大丈夫よ、もう少しだから頑張らしましょう」

事実、その頭を安心させるように撫でると、不思議と気持ちが悪く落ち着くようだった。

その証拠に、再度遺体を見ても吐き気を催す事はなく、私は遺体に近づくと、しゃが

みこんで手を合わせた。

時間に余裕があるのなら、身元が確認できるような物を回収できるのだが、そんな余裕があるのか分からない以上は、出来るだけ記憶に留めるように努める事しか出来ない。現場は維持するに越したことはないのだが、そうは言ってもいられないだろう。

と、そう結論付けてからの私の行動は早い。細切れになった遺体から、指の出来るだけ長いものを選んで手に取る。その形状的に親指ではなく、長さ的に小指ではなさそう。私はその指を自分の中指と重ねるも、関節の位置が僅かばかり高い。太さもなかなかある事を見るに、遺体の性別は恐らく男性だろう。また、肌は白いので白化<sup>アルビノ</sup>ではない限り、有色人種ではないのは確かである。

「うーん、あとは瞳の色くらいは確認したいんだけど、潰れちゃってるし無理か。あつ、でも髪の毛が少し見える。どれどれ、おお、根元まで綺麗な金髪!!」

瓦礫で潰れた頭蓋から、一本だけ髪の毛を採取して蛍光灯の光に翳す。その弱々しい光に照らされた、根元まで曇りのない金髪は、生まれついてのものであろうと思われた。

「フー!!フオーウ!!」

「おっと、そうだね。こんな事している場合じゃなかった」

「ごめん、ごめん。と服の裾を口で引っ張るフオーウに苦笑を返して、私は指を元の位置

に戻すと、遺体に再度手を合わせ、立ち上がる。

「ねえ、フオウ」

「フオウ？」

「これから私がする事は秘密よ」

それだけを告げて、元より返事は聞かないつもりでいた私の身体は、丸腰のまま体型を作る。

「……フーツ!!」

すると、最低限の事を伝えただけなのに、フオウは耳を伏せ毛を逆立たせると、私を威嚇するように低く唸りながら距離を取った。やはり、動物の本能や嗅覚は、人間とは比べ物にならないほどに鋭敏なようである。

「……まあ、そういう反応されると思っていた分、出来れば使いたくはなかったんだけどね」

けど、仕方がない。迂回路を探している暇などないのだから、例えば、それが死者に対する冒涇になろうとも、生者を救い出す為に必要なのだと確信したなら、迷ったりはしない。私は始めからそういう女だ。

「どうか、死後のあなたが安らかでありますように」

その言葉だけを手向けに、私はまた走り出す。血煙の先、穿たれた瓦礫の山を越えた



先に、一縷の希望を見出し出すように――

\*

恐ろしい夢でも見たのだと思っていた――

(……………あ、れ、私)

どこか、二日酔いの朝に似た倦怠感を感じながら、ゆっくりと目を開けると、なぜか視界の半分が赤く塗りつぶされていた。加えて、どれだけ意識しても、なぜか脚を動かす事が出来ず、気になった私は、正常な視界を保った方の眼球を彷徨わせる。すると、私の脇腹に奔った裂傷を縫い合わせる青年の姿が映った。

(何、コレ?)

寝起きで目にする光景としては、あまりにショッキングな現状だったが、不思議と私  
が取り乱す事はなかった。無論、恐怖を感じていたし、パニック状態でもあったが、そ

れと同じくらいに泣き叫ぶ気力もなかった。だから、自分はまだ夢の中にでもいるのだろうか？と、ボーっとその光景を眺めてから、次第に現実を悟った私は重い口を開いた。

「か、んせい、室」

「！」

無意識に口に出した言葉は、自分でも分かるほどに酷く掠れてはいたが、傷口を縫合していた青年には、ちゃんと聞こえていたようで、彼は弾かれたように顔を上げた。年齢は私と大差ないか、少し若いくらいに見える。すると、よく言えば優し気な、悪く言えば頼りなげな印象を受ける青年は、安堵するように短い息を吐いた。

「良かった、気が付いたんだね」

「貴方は……」

同じ組織に属していても、部署が違えば交流も少ない。現段階で私が理解できた事は、彼に助けられた。という事実以外に何もなかった。

「ボクは医療部門トップのロマーニ・アーキマン。状況は分かるかい？」

「……ええ、私は、技術班の人間です。あの、私以外に助けられた人は——」

と、そこまで聞いておいて、私は閉口する。何処かの国の諺に、目は口程に物を言う。というものがあつたように記憶しているが、彼の瞳はまさしく、雄弁に悲劇を物語っているようだった。

「……現状は、キミだけだ」

「そう、ですか」

彼の苦しそうな声に、なんだか無用な責任を押し付けてしまったような気分になった私は、力なく笑い返す。医者として、命を尊ぶのは当然だろう。けれど、彼は些か優しすぎるようにも思えた。だから、彼の不安の矛先が誰に向かっているのかを理解した瞬間に、私は全てを思い出したのである。

「……だけど今、マスター候補者の女の子が管制室に向かっている。ボクもこれから後を——」

「駄目ですッ!!」

彼が口にした言葉の意味を理解するなり、私は彼の腕を力の限り握りしめて、悲鳴に近い声で叫んでいた。

「おいおい、キミこそ、そんな状態で動いては駄目だ!!」

「かつ、管制室に生存者は居ません。居たとしても、もう手遅れでッ!!」

「わかった。わかったから落ち着くんだけ。何があつたのか思い出せる限りでいい。ボクに教えてはくれないか」

錯乱状態の私を落ち着けるような優しい声音と、真剣な眼差しを受け、我に返った私は、一つ深呼吸をする。

「そう、ですね。私も混乱していて何が何だか……けれど、きつと、これだけは事実です」  
口が乾く、それを言葉にする事で、何か取り返しのつかない事が起こるのではないか？という漠然とした不安に駆られる。けれど、私がここで彼に助けられたことに意味があるとするなら、無惨にも殺されていった仲間たちの為にも、私には、それを告げる責任があるだろう。

「今回の事は、不慮の事故などではありません」

「何だつてッ!?!」

彼の驚嘆に呼応するかの如く、声を出すほどに、喉の奥が引き攣れていくような苦しさがあつた。

「カルデアには、裏切り者がいます」

私の結論に、彼は言葉もなく瞠目し、私の頬には涙が伝つた。

\*

「やつと、着いた」

力を使い瓦礫の山を吹き飛ばしたことで、遠回りをせずに済んだ私は、内側から圧をかけられたかのように変形した扉の前で、額の汗を拭いた。その歪んで緩んだ両開きの扉の合わせ目からは、轟々と唸るかのように燃える炎が見え隠れしている。

「流石に連続で力を使うのは、鈍りきつたこの身体じゃあ、まだ無理ね」

余力がないわけではないのだが、ここで全てを出し切るのは早い。と、本能が語りかけていた。

故に、私は歪んだ扉の隙間に指をかけて、力いっぱいそれを押し開く。次の瞬間、開かれた地獄の門から、太陽が墜ちてきた。

「えっ、ちよっ、貴女大丈夫!? 一体何が起こっ——」

恐らくは扉に寄りかかっていたのだろう。慌てて彼女の身体を受け止めて尋ねるも、私に背中を預けるように倒れ込んできた彼女は、ピクリとも動かない。気絶でもしているのか? と、その肩を揺すった反動で上がった彼女の顔を見て、私は状況が思った以上に酷い可能性を察知した。

彼女の恐怖に見開かれた瞳は、説明会場で見た時よりも絶望感を増し、同時に、どこまでも光を宿すことはないのだった。

「フオウ……」

相変わず、私を警戒するように距離を取ったままのフオウが静かに鳴き、私はただ、ただ首を振った。

まだ息があつたのであれば、出来る事はあつたのかもしれない。けれど、それは幾ら悔やんでも今更な事である。彼女にはもう、してあげられる事はない。せめて、きちんと弔う事はしてあげたいが、それもやはり、この騒動が収まらない限りは難しいだろう。

「——ごめんなさい」

彼女の臉をおろしながら許しを乞う。けれど、思わずと口をついたその感情が、何に對する謝罪だったのか、私自身、よくは分からなかつた。

# カウンントダウン

私の記憶に残っている管制室は、数多の視線に晒される居心地の悪い場所だったけれど、それは私自身が招いたものだったから、許容出来ていた。けれど――

「はは、こりゃあ酷い」

思わず乾いた笑いが浮かび、煙で染みる視界が滲む。

炎にのまれた管制室に漂う瘴気からは、噎せ返りそうなほどの、肉の焼ける匂いがした。

「フォツ、ケフォツ」

「貴方はそこで待っていなさいフォウ。二人して焼け死ぬ事はないわ」

「フォウ？」

煙を吸ったのか、咳き込むフォウへと視線を移せば、彼は胡乱げに首をひねる。

「ドクターが追いついた時に、中継役が居たほうが良いでしょう？」

「……フォウ」

そのまま暫く睨みあって、最後に折れたのはフォウのほうだった。

「この娘をお願いね」

彼女の遺骸に上着を被せて、口元をハンカチで覆った私は、管制室へと足を踏み入れる。最早、私を突き動かす感情に、生存者の有る無しは大した問題ではなくなっていた。ただ、ここで引き返す理由が見つからなかったのもまた事実である。

（悲劇という表現で片付けるには、演出が過激に過ぎるわね）

乱立する霊子筐体コブレイシは棺桶か墓標か。この場合はどちらも言い得て妙かもしれない。ここは敢えて人柱と表現するのもいいだろう。惨さで言えば、その表現が一番合っている。そうである。けれど、その犠牲の意味するところは、理解の範疇を超えている。

辺りに散乱する硝子片が、私の歩調に合わせて碎ける度に、私の人間性も失われていくようだった。とは言え、普通の人間にとって、この光景が耐え難いものであるのは、想像に難くない。

「ッ!!」

と、煉獄の只中で、物思いに耽ってしまったのが良くなかった。眼前にあがった火柱に飛びのいた私の脚が、何か柔らかい物体に蹴躓く。

「~~~~~!!」

その為、強かに腰を打ち付けた私は、静かに悶絶する事となった。

痛みで涙目になった視界が揺らぎ、身体を支える為についた右手は、妙に生温い液体



に浸かっている。たったそれだけの事が、この状況では最悪そのものだった。  
「……………貴方もなのか」

転んだ瞬間、とつさに銜えこんでいたハンカチが落ち、唇の傷口が痛む。発した言葉からは、鉄錆の味がした。それはつまり、私がまだ生きているという証明に他ならない。人間の身体は、痛みに敏感に出来ているのだから、けれど、それは生者だけが持ちうる特権である。

視線の先の遺体は、先程の少女より、凄惨なものだった。身体の右半分をことごとく損傷した有り様からは、爆発の衝撃が如何程のものだったのかを窺い知れる。辛うじて残った左目は、相も変わらず、正義を宿した澄んだ青色だった。

その気高い死を前に、恐らく彼は即死だったろう。と、結論付ける事で、なけなしの良心を慰める己には、嫌悪を覚えずにはいられない。

「あの娘もだけど、君みたいなイイ男にも死んで欲しくはなかったな」

その台詞を私が口にするのは、反吐を吐くようなものだと思いながらも、口にせずにはいられなかった。一度として語らう事はなかったが、彼らが善人なのは確かなのだ。断じて、こんな殺され方をしていい人間ではない。だから――

「もう、誰もいないの?」

私は立ち上がる。

「生きたいと願う者はいないの？」

去来した感情が、怒りなのか、悲しみなのか、判別すら出来ないままに。

「……………だれか」

まるで懇願のようだな。と、冷静な私が嗤う。

「だ、れか」

足取りは重い。けれど私は進んだ。そうして――

「……………ああ」

ここにきて知ってしまった。一番気付きたくなかった事実には膝を折る。犠牲者達の血に染まったままの右手が、行き場を失くしたように、小さく震えた。

\*

信じられない、目の前の女性は、今なんと言った？

「……ター、ミスター」

「ツ、ごめん。その、少し驚いてしまつてね」

内心の焦りを取り繕うように笑い返す。医者として、患者を不安にさせるなんて、あつてはならない事だ。

「いえ、私の方こそ、先程は怒鳴つてしまい、申し訳ありませんでした」

「謝る事はないよ。不測の事態に陥れば、誰だつて、平静ではいられないものだからね」と、苦笑するボクに対して、彼女の表情は硬いままだ。

「……………これから、どうなさるおつもりですか？」

「………そうだね。君は、ああ言つていたけど、医者として、患者を助けられないわけにはいかないよ」

ボクの言を受け、彼女の深緑の瞳が揺らぐ。

「そう、ですか。そうですよね。お医者様なんですもの」

それから、己を納得させるように、小さく呟く声が続いた。

その姿に思うところがないわけではないし、本音を言えば、手負いの彼女を独りにさせる事には反対だった。けれど、ボクを信じて管制室へと先行した少女も、同じくらい捨て置けない存在である。

「とりあえず、どこか近くの空き部屋にでも移動しよう。局所麻酔で動きづらいとは思

うけど、ボクに捕まりながらでいい。立てるかいい？」

けれど、流石に通路に置き去りと言うわけにはいかないのです、ボクは移動を提案する。すると、それにしつかりと頷いた女性は、おぼつかない足取りながらも立ち上がった。

「大丈夫かい？なんなら、抱えて行くけど？」

「いえ、お構いなく、壁を伝えれば自力で歩く事は出来ます。ただ……」

まだ不安定な彼女の様子に心配が募るが、ボクの憂慮は、他ならぬ彼女自身によつて否定されてしまった。その思つたよりも力強い拒絶には凹みそうになるけれど、何かを言い淀む彼女からは、切実さが感じられる。

「ただ？」

「……………一つ、お願いがあります」

先を促すボクに、痛みを堪えるような表情で紡がれた彼女の言葉には、目を伏せるしかない。

「……………約束は、出来ないかもしれないけど——」

「構いませんッ!!」

酷く後ろ向きなボクに対して、悲鳴にも似た彼女の心の叫びが染みる。思わず顔を上げたボクの視界には、悲痛なまでに誰かを思う、一人の強い女性が映った。

「……………分かった」

「……ここに来る途中で、私は天井の崩落に巻き込まれました。その時、同僚が私を庇っていなければ、今、私は生きていなかったでしょう」

「うん」

ボクは頷いた。彼女の声の震えに、気付いていないかの様に。

「……もし、もしも、彼がまだ生きていたなら……」

そこから先に続くであつたらう言葉は、嗚咽へと変わる。そして、まるで計つたかのように彼が現れたのも、その時だった。

「フー!!フオウ!!」

「キミはっ!!セツナさんと一緒に居たんじゃ!？」

「フオーウ!!フオウ!!フオウ!!」

すると、驚くボクらの周りを、忙しなく鳴きながら一周した小動物は、次の瞬間には、来た道を引き返し始める。恐らくは、ついて来い。という事なのだろう。

「つて、ちよつと、待つ——」

「行つて、くだ、さい」

「ツ、でも!!」

「私なら、大丈夫です」

困惑するボクの行動を決定づけたのは、傷付いてポロポロになった女性の一言だつ

た。だから――

「……医師として、最善を尽くすと誓うよ」

「……お願いします」

この時のボクは、精一杯の気持ちで、彼女の想いに応えた。けれど、現実つてヤツは、いつだって、そう甘くは出来ていない。

「……これ、は」

フオウの後を追う形で、管制室へと急ぐボクの目に飛び込んできた光景からは、異質な力の残滓を感じた。

(まさか、これを彼女が?)

進行方向に向かって吹き飛ばされたかのような瓦礫と、辺り一面に飛び散った鮮血に足が竦む。

この光景を作りだしたのが彼女だとするならば、イモリ・セツナ。という人物は一体、何者なのか。能力的にも心理的にも、彼女の底が知れない事に、恐怖すら覚える。

何より、涙をぬぐう褐色の指に光る指輪が脳裏をよぎる。彼女をまた泣かせる結果になる事を思うと、正直、堪えた。

「フオーウ!!フオーウ!!」

歯を食いしばり、拳を握る。ほの暗い通路を駆ける白い目印を追いかけながら、不安は募る一方だった。

\*

「……ナさん、セツナさんッ!!」

一体、どれぐらいの時間、俯き放心していたのか（火災現場で意識を失うまでに至っていない事を考えるに、それほど経ってはいないのだろう）私は自分を呼ぶ声と、肩に

置かれた手の平の温かさに、緩慢な動きで応じた。

「ドク、ター」

「……良かった無事だね」

たった数分離れていただけなのに、随分と彼が老けたように見える。恐らくは、私も似たようなものだろう。

「ドクター、患者さんは」

「彼女も無事だよ」

「そう、ですか」

それは良かった。と、笑おうとしたけれど、上手く表情が動かせない。

「生存者は？」

と、そうこうしているうちに、今度は彼が私へと問うた。知らず心臓が跳ねる。

「……駄目、です。確認は出来ません」

面と向かって口に出す事が出来ずに、再び俯き首を振る。この時の私は間違いなく、酷い顔をしていただろう。

「……そうか」

「……ドクター、この死者は兎も角として、入り口の彼女は、明らかに殺害されています。これはいつたい、何が起きているのです？」



そう、只の不慮の重大事故ならば、私もここまで心を乱す事はなかったのだ。しかしながら、扉に寄りかかるように死亡していた彼女の顔は、苦悶の表情で、首には鬱血痕が見られた。何より、極め付きなのは、両手の爪に残った皮膚片、それらの物的証拠が、彼女の死因が絞殺である。という事実を、明白に物語っていた。

「……それは、ボクにも分からない」

「……………そうですね。お互いにアリバイは立証しているようなものですし、でも意外ですね。普通、こんな事を言われたら驚きませんか？」

「さっき助けた職員が言っていたんだよ。カルデアには裏切り者がいる。と」

「……………なるほど」

絞り出したかのようなドクターの言に、薄く笑う。裏切り者は何処の世界でも最悪である。

すると、そんな私の反応が、逆鱗にでも触れたのか、私を掴む彼の手に力が籠った。

「いいかい!? 状況を確認するよ? 生存者はいない。無事なのは、カルデアスだけだ」

「……………ええ」

らしくなく、語気を少し荒げたドクターの問いに、淡々と答えれば、彼の怒りの感情に、憐憫が混じる。大方、私が死に引きずられているようにでも映ったのだろう。

「……………これは憶測ではあるけど、おそらくは、あそこが爆発の基点だろう。つまり、これ

は事故じゃない。人為的な破壊工作だ」

「人、為的……」

ふと、管制室の中でも一際損壊の激しい場所を指差して告げられたドクターの推理に、灼熱の最中に居るというのに、身体が泡立つ。首謀者は一体、何の為に――

「動力部の停止を確認。発電量が不足しています。予備電源への切り替えに異常があります。職員は 手動 で切り替えてください」

と、熟考しそうになる思考を断つたのは、無機質なアナウンスと――

「セツナさん」

平時よりも幾分か低い、力のある声だった。

「隔壁閉鎖まで あと 40 秒 中央区画に残っている職員は速やかに――」

「……ボクは地下の発電所に行く。カルデアの火を止める訳にはいかない」

「……………」

その言葉に、なんて返せばよかったのか。私に出来たのは、ただ、ああ、この人は正しく善人であろうとする人なのだ。と、目を細める事くらいだった。

「キミは急いで来た道に戻るんだ。まだギリギリで間に合う。いいな!! 寄り道はするんじゃないぞ!! 外に出て、外部からの救助を待つんだ!!」

そう捲し立てると、彼は部屋を出た時と同じように、走り去る。

「システム レイシフト最終段階に移行します。座標 西暦2004年 1月 30日

日本 冬木」

そして、彼の背中が見えなくなつて、再び饒舌となるアナウンスに――

「ラプラスによる転移保護 成立。特異点への因子追加枠 確保」

「……………ねえ」

「アンサモンプログラム セット。マスターは、最終調整に入ってください」

「……………ねえ、マシユ。貴女は私を恨んでくれる?」

私は、後方に位置する瓦礫の下に倒れている少女に向けて、重たい口を開いた。

「……………いい、いえ」

けれど、そんな私の残酷な問いに返る答えは、酷く弱々しく儂く。そして、どこまでも無垢に人を憎む事を知らない。それが、私には羨ましくて、忌々しかった。

「……………どうして? 貴女は私に殺されるようなものなのよ?」

「……………どの、みち、この傷では、だから、ご理解が早くて、助かります」

「……………そう」

確かに、彼女が言った事は正しいだろう。仮に、私がドクターに真実を告げたところで、彼女が助かる確率は、低かつたであろう事は明白だ。けれど、その確率は、必ずしも0では無かつたかもしれない。それに、辿る結果が同じでも、過程が違えば、死の間

際の彼女の心は、軽くする事が出来たのではなからうか？だと言うのに、私は凡そ考えうる限りで、最も残酷な死を彼女に宣告したのだ。本心では、生きたい。と、願っているであろう。彼女の気持ちを踏みにじり、裏切つてまで。

「……んぱい、も、早く、にげ、ないと」

「……………私に指図しないで、マシユ」

「せ、んぱい」

「生き方がままならない分、死に方は自分で決める事になっているの」

「……………」

生死の淵に立たされている身で、元凶たる私を氣遣う言葉を並べる彼女に、憤りを覚えながら、出来るだけそつげなく聞こえるように、言葉を選ぶものの、最早、彼女には何を言つても、逆効果になる気がしていた。

「……ねえ、マシユ、辛いのなら、私が楽にさせてあげるけど、どうする？——」

とりあえず、今の私が出来る事だけは告げておこう。と、彼女へと問いかける。異変が起こつたのも、その時だった——

「!？」

「あ……………」

第六感と言えば的確か、私は勿論の事、虫の息のマシユも、驚きを露わにする。それ

は、本能に語りかける恐怖だった。後方から迸った赤い閃光に、振り返りたくないのに、振り返らずにはいられない強制力が働く、思えば、この瞬間に、私の運命は定められたのかもしれない。兎も角、私たちの目の前で、カルデアの象徴とも言えるカルデアスが、滅びへと向かう侵蝕の焔に焼かれ、煉獄に堕ちたのだった。

「観測スタツフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において、人類の痕跡は 発見 できません」

相も変わらず、無機質に、無感動に、真実を淡々と告げるアナウンスには、訳もなく、口角が上がる。

「……そう。なら、それでいいわ。それで私の——」

「人類の生存は 確認 できません」

「人類の未来は 保証 できません」

「カルデアスが……真つ赤に、なっちゃいました……いえ、そんな、コト、より——」

「中央隔壁 封鎖します。館内洗浄開始まで あと 180秒です」

「……隔壁、閉まっちゃい、ました。……もう、外に、は」

「……うん、そうね。一緒よ」

マシユを押し潰している瓦礫を背に腰を下ろし、膝裏に腕を通して、膝頭に顎を置く。

うつぶせに倒れているマシユには、丁度、私の足先が見えているだろう。

私の視線の先では、鮮やかな赤い河が、流域を広げ続けている。

「ゴフイ霊子筐体内、マスターのバイタル基準値に 達していません。レイシフト 定員に達していません。該当マスターを検索中……発見しました。適応番号48 イモリ・セツナを マスターとして 再設定 します。アンサモンプログラム スタート。霊子変換を開始 します」

「……………あの……………せん、ぱい」

崩壊の轟音に包まれる只中で、不思議と彼女の儂い声が、掻き消されることはなかった。

「……………なにかしら?」

顔をあげないまま、私は返答する。

「……………手を、握ってもらって、いい、ですか?」

刹那、私は崩れ墜ちる天を睨んだ。そればかりか、叫んだはずの悲鳴は音にはならず。私はただ、酸素を求める金魚の如く、無様に口を開閉しただけだった。

口内に広がる鉄錆は、きつと私の罪の味だ。

「レイシフト霊子変換実験開始まで あと3 2——」

ああ、困ったな——

「……断る理由が見つからないわ」

「1」

そう言つて、マシユの震える手を握る。ただし、最期まで、彼女を視界に入れる事だけはしない。と、決めて――

「全行程 完了。<sup>クリア</sup> ファーストオーダー 実証を 開始 します」

序章 「特異点F 炎上汚染都市 冬木」  
寝覚めは最悪

苦しいのか、それとも、愛おしいのか。分からない微睡みの中にいた。

「先輩。起きてください、先輩」

(……マシユ?)

これは夢なのだろうか、それにしても、頬に感じる息吹や声までもが、あまりにリアルだ。

「……起きません。ここは正式な敬称で呼びかけるべきでしょうか……」



(正式な敬称?)

「——マスター。マスター、起きてください。起きないと殺しますよ」

「……………死体蹴りは良くないと思うよ。マシユ」

(まあ、私も人の事は言えないんだけどね)

「良かった。目が覚めましたね先輩。無事で何よりです」

「……………なんだが物騒な事を言われた気がするのだけれど?」

どこか既視感のあるやりとりだな?と思いつながらも、身体を起こした私の視界を埋め尽くした情報は、暴力性に富んでいる。どうにも現実には私に優しくはないようだ。

人の気配を感じられない街を炎が総べている。その町並みの造りを見るに、ここは恐らく日本だろう。先程までいた管制室も煉獄の様相だったが、目の前に広がる災厄の規模はその比ではない。経験などないはずなのに、空襲という単語が頭に浮ぶ。

「——アア、ソウダ。間違イナクコレハ戦火ダ」

ゾワリと悪寒が蠢いた気がした。

「……………すみません。言い間違えました。正しくは殺されますよ、でした」

「えつと……………何に?」

お互いの吐いた息が白くけむり、私は学校半袖のセーラーの夏服から露わになった両腕を擦る。カルデアがあった場所ほどではないが、この街からは確かに冬特有の乾いた冷気を感じる。

けれど、ここを日本と仮定するなら、それは可笑しな事だった。だって、私が日本を発つ前に水をやった家の庭の夏椿では、蝸が忙しなく愛を乞うていたのだから。

「……その、想定外のことばかりで混乱しています。落ち着きたいところですが、今は周りをご覧下さい」

「GI——GAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

「おk、嫌でも把握できた」

マシユの言に目線を動かすと、奇声を発して、こちらへと駆けてくる群体が目映る。ぼろ布を纏い、手には武器のようなものを持ったそれらは、明らかに生体ではなかった。(何あれ、がしやどくろ? ってこつち来たああああ!!)

次第に、はつきりと浮かび上がる。その輪郭が作る衝撃には声も出ない。

「——言語による意志の疎通は不可能。——敵性生物と判断します!!」

「マシユ!!」

十字型の大きな盾?で、一体目の骸骨を吹き飛ばした後に、武器を振り上げて私へと肉薄した骸骨の攻撃を防ぐマシユからは、管制室で瀕死になっていた少女の面影は感じられない。

まるで、あの時と立場が反転したようだった。黒紫の鎧マシユに身を固めた女騎士キリが、その背に私を庇っている。

「マスター、指示を。わたしと先輩の二人で、この事態を切り抜けます!!」

二体目を叩き伏せると、私の手を取り駆け出すマシユ。その俊足に必死に食らいつきながらも、存外冷静な脳裏が疑問を呈した。

「指示って言われても何を、ってどうかマスターって?」

「その反応はごもつともなので、今はこれだけを理解して下さい。現状、戦う術を持ちうるのは、わたしだけであり、その担い手は先輩、貴女です!!」

「なっ——」

繋いだ手から感じる温もりに、これは確かな現実なのだ。という理解が深まる。けれど、納得は出来なかった。加害者と被害者が手を取り合っているなんて、そんなことがあつてたまるか。

【オゾマシイ】

ふと、マシユの左手に重なった、血塗れの右手の甲が痛んだ。焼き鏝を押し付けられる感覚とは、こんな痛みだろうか。幻痛にしては生々しいそれは、奇しくも、三重に八角形の痣キズを形作った。

(……………耐えられない)

何故だか、そう思った。

【振り払エ、切り落トセ】

……耳鳴りがする。本能が囁いているのだ。断ち切れと、お前の縁は決まっているじゃないかと。

【何ヲ躊躇ッテイル？】

(うるさい)

【楽ニナレ】

(黙れ)

【サモナクバ】

「やめっ——」

マシユの為にも、手を放さなきゃ!!と、行動を移そうとしたその瞬間に感じたのは、鋭い殺意だった。

「先輩ツ!!」

強い力で彼女の守備範囲へと引っ張り込まれるのと、さっきまで私が居た場所が抉られるのは、ほぼ同時だった。

コンクリートの地面が穿たれ、欠片が宙を舞う。その的確に狙い定められた攻撃には目を剥いた。マシユがいなければ、今頃、私の脳漿が辺りに花を咲かせていた事だろう。

しかし、安心するにはまだ早い。私の頭に鳴り響く警鐘は、かえって激しさを増している。

「マシユ!!直ぐにここから離れ——」

けれど、そんな私の声は無情にも掻き消され、マシユの盾は火花を上げた。

「ツ!!今度は何が起きたのっ!?!」

遅かったか!!と、内心で毒づきながらも、私は敵襲に負けないように、大声で尋ねた。  
「くっ、分かりませんツ!!恐らくは狙撃されているのかとツ!!」

「はあっ!?!」

懸命に盾を支えながらマシユが叫び、私はその内容に眉を顰める。この猛攻が狙撃?だとしたら、随分と派手だ。忍耐を要する狙撃手には向かない戦術とも言える。一撃必殺を完遂出来なかった以上は、仕切り直したほうが良いはずである。現状のこちらの防御態勢にヒビはないのだから、尚更だ。

(……いや?何か引つかかる)

「ツ!!先輩は絶対に私から離れないで下さい」

「けどっ!!」

こうしている間にも、後方からは骸骨兵達が迫ってきている。このままではジリ貧になるのは明白だった。と同時に——

(ツ!!そうか!!そういう事か!!)

鋭敏な直感が敵の狙いに勘付き。

(……卑劣だが賢い手だ)

口角を歪める男の姿を幻視する。

「……私をデコイに使ったな」

その優秀さが気に入らないし、鼻につく。相手相を斃殺せればそれ方でいい拘らない。敵ほどに、厄介なものはない。そういう輩は大抵、己の武功を誇らない仕事人だからだ。感情に干渉されない分、容赦なく確実性を取る連中の手強さは、嫌と言うほど知っている。だからこそ、敵の考えは容易に読めた。

「先輩?!」

けれど、それは私を戦力のうちに数えないからこそ、成立する話である。

「……はあく、全く。私はとことん運がないのね」

そんな推測を裏付けるかのように、敵の攻撃はマシユの盾を中心に展開されており、骸骨集団には流れ弾一つとして当たらない。その性格は勿論の事、つくづく良い腕をした狙撃手だ。この調子なら、一体目の接敵まで一分もかからないだろう。

「つたく、死に場所くらい、好きに選ばせなさいっての」

悪態を吐きながらも、現状を打破する為に考えを巡らす。最高なのは狙撃手を下す事だが、見たところ飛び道具を待たないマシユは勿論のこと、今の私の腕では、流石に目視の出来ない相手は撃ち抜けない。それに得物を同じくする分、嫌でも敵との力量の差

は分かる。その直感を信じるならば、全力の一矢で、やつとどうにか隙が作れるか？というところだろう。それで確実にマシユが助かるのなら、己の命を惜しむ道理はないのだが。状況を鑑みるに、敵は端から二人とも狩る心積もりらしい。

まんまと罠に嵌められてしまった事は悔しいが、どうしようもない。こうなった以上は、骸骨兵の相手は私が務めなくては――

「……まあ、いいわ。マシユ!!その背を私に預けなさい。貴女には私の命を預けます」

1、2、3……6体か、まあ、頑張ればどうにかなりそうだ。

「先輩っ!？」

「振り返らないで!!押し負ければ死ぬわよ!!」

「ですがっ!!」

「先輩を信じなさいマシユ。私はただ殺されるのだけは、我慢ならないタチだから」

我ながら酷い台詞だと思う。管制室でマシユを見捨てておいて、言える事ではない。でも、まあ嘘をつくよりは、幾分かマシユだろう。

後ろ手に、肩甲骨の下まで伸びた髪の毛を数本引き抜き、切れた唇に軽く挟む。そのまま傷口に沿わせて引き抜けば、私の黒髪が鮮血を纏った。

準備は完了した。あとはアレを喚び出すだけでいい。けど――

「コワイ?」

(ええ)

ゆつくりと目を閉じる。久しく感じていなかった種類の恐怖を、確かに愛しいと感じた。

(……けど、私らしくもないでしょう?)

目を開ける。その瞬間、クツリ。と、闇が嗤った気がした。なのに――

「先輩ツ!! 攻撃が止みました。今のうちに此方へ」

「――え?」

マシユの言葉に、思わずと思考が停止する。盾越しに敵がいるだろう方向に目を凝らすも、人間の視力で捉えられる情報など、たかが知れている。ここまで私達を追い詰めておいて、手を緩めた敵の行動には疑問が残るが、折角のチャンスを無駄にする道理はない。ただ――

【#####】

「先輩ツ!!」

「ツ、ええ、分かったわ」

マシユに手を引かれ駆ける私の中では、行き場を失くした闇が騒ぎ出していた。



「——ふう。不安でしたが、なんとかなりました」

幸いにして、骸骨兵たちは頭脳戦に弱く、また一体一体は大した戦力を持ち得なかった為、住宅街を縫って駆けるうちに、何体かは振り切る事が出来た。それでも撒けないうつこい個体とだけ戦闘を展開したが、勘を取り戻しつつある私と、姿を変えたマシユの敵ではなかった。

「お疲れさま、マシユ」

とはいえ、私は始終囹役に徹していたので、敵と矛を交えてはいないのだが。

兎も角、最後の敵の消滅を確認した私達は、狙撃を警戒して、近くの民家の中に入る。格下相手とはいえ、命のやり取りで疲弊した身体が悲鳴を上げているが、それが何よりも、生きている事を証明していた。

「ありがとうございます。先輩も、お怪我はありませんか？お腹が痛かったり、腹部が重かったりしませんか？」

玄関先に腰かけた私に、一切の疲労を感じさせないマシユの気遣いが沁みる。そんな

彼女は、盾が邪魔なのか、それとも先の狙撃手を意識してか、座らずに辺りを警戒している。

「……心配ありがとう、主に腹部の。けれど今のところ、どこにも異常はないわ」「そうですか。何よりです」

マシユの言葉に思わずと下腹部を擦るが、危惧するほどの問題は起こっていない。

「それはそうと、今のはなんだったのかしら？」

「……わかりません。この時代はおろか、わたしたちの時代にも存在しないものでした」「確かに、見たことのない……生き、物？ だったわね」

「あれが特異点の原因……のようなもの、と言っても差し違えはないような、あるような……」

特異点……。と、マシユの言葉を声に出さずに反芻する。それは冷静になれば思い当たる事だった。私達が生きている事にも、ここが管制室ではない事にも、その全てに説明のつく事象。

どうやら私は、あれだけ嫌がっていたレイシフトに助けられたらしい。その代わりに、もっと悲惨な目に遭っている気がしないでもないが。

「……そう。とにかく、この後の行動をどうするか決める必要があるわね」

「はい、ですが、それにしても……」

ため息と共に吐き出した私の打診に、マシユが齒切れの悪い返事を返してくる。

「何かしら？」

そんな彼女の反応に、一抹の不安を覚えて、顔を上げる。すると、彼女もこちらを窺っていたのか、すぐに私とマシユの視線が交錯した。

「いえ、その、先輩の冷静さが、不思議で」

痛いくらいに真つ直ぐ私を見つめるマシユに、頬杖を突いた私は、少しだけ思案する。

「……………ああ、なるほど。それは簡単なことよ。マシユ」

「そう、なんですか？」

「ええ、言うなれば経験の違いね。それに、私は冷静なわけではないわ。これは単なる慣れという名の感覚の麻痺よ」

間違つても憧憬や羨望の眼差しで見ているものではないし、何よりもマシユにはこうなつては欲しくない。

「……………それは、どういう意味ですか？」

「……………つ、それは」

（はは、こりゃあ、私も焼きが回つたかな？）

知らないうちに心まで弱つたのだらうか？ 少なくとも、昔の私なら、どんな目に遭おうと、こんな風にペラペラと自分の事を喋るような愚拳には出なかつたはずである。

（でも、まあ、このままの状態ですら死地を脱するのは難しそうだしなあ？ いったその事、この身体については話してしまおうか？）

なあんて事は勿論、許されはしない。正直に話すには取引材料が必要不可欠だ。馬鹿正直に真実を告げて生きて帰れたとしても、私に待っているのは実験体モルセットとしての未来だろう事は明白である。正直者が馬鹿を見る。とは私の為にあるような言葉だ。それに

『よいか、要らぬ犠牲を出したくないのなら孤独を甘んじる事だ。愛しきものを手にかけるのは、もう懲り懲りであろう？』

私はマシユを殺したくはない。死にかけの命を楽にするためのそれとは違う意味で。

「……先輩？」

痛みを堪えるように、ゆっくりと目を閉じる。

「ごめんなさい。なんでもないので、少し頭痛を感じただけ、それだけよ」

唇が震える。私はうまく笑えているだろうか？ いい加減、普通でいる演技にも嫌気が差してきたところである。いやはや、大和撫子を気取るのは難しいな。

と、いろいろと我慢の限界に近い私を現実へと引き戻したのは、甲高い女性の叫び声だった。

「今の声は!!」

「……イヤな予感がする」

マシユが盾を握り直し、私は立ち上がる。

「どう聞いても女性の悲鳴です。急ぎましょう、先輩!!」

「ええ」

(……借りていくわね)

マシユへと肯定を返しながら、軒先に立てかけられた金属製のバットを一度だけ振り下ろして、私は彼女の後に続いた。

「何なの、何なのよコイツら!!なんだってわたしばかり、こんな目に遭わなくちゃいけないの!?!」

「あれは——」

「もうイヤ、来て、助けてよレフ!!いっただって貴方だけが助けてくれたじゃない!!」

「オルガマリー所長……!!」

悲鳴の聞こえた方向に急ぐと、そこには骸骨兵の集団に追い立てられた、白猫のような美女が居た。

「マシユ!! 所長を軸に8時と10時の方角にそれぞれ1体!! その後は2時の方角の3体!!」

「了解です、先輩は所長をお願いします」

「ええ、武運を」

私の了承と励ましの言葉に、しっかりと頷いたマシユは、恐怖と戦いながらも敵と相対し、私は狂乱の最中にある所長へと駆け寄った。

「あ、貴女たち!?! ああもう、いったい何がどうなっているのよ——っ!!」

「何はともあれ、ご無事なようで何よりです所長。さ、立てますか?」

「なっ、貴女この状況で、よくそんなを事言えるわねえっ!! カルデアはどうなっているの? どうして私が特異点にいるわ——っ!!」

あからさまにパニックる所長の様子に、このままでは落ち着いて話も出来ない。と思つた私は、管制室でのお返しとばかりに、思い切り所長の頬をひっぱたいた。こういった唐突な痛みは、思考を強制的に遮断するのに特化しているから便利ではあるが、おかげで別の嫌な記憶を思い出してしまい、私の感情の波は、収まるどころか増してしまう。

「……失礼を。ですが死にたくなければ落ち着いてください所長。そのお気持ちは察して余りありますが、貴女がそんな有り様では立ち行かなくなりませう」

けれど、感傷に浸っている暇などない。故に私は簡潔に謝罪を述べた。

「戦闘、終了しました。お怪我はありませんか、所長」

すると、タイミング良くマシユが戻ってくる。どうやら、彼女にはもう、骸骨兵は敵じゃないようだ。それは恐らく、マシユの姿形が変わった事とも関連があるのだろう。Aチームの平均的な練度が、どれほどのものなのかは知らないが、きつと、その頃のマシユと今のマシユとは、別人と言えるレベルで、戦闘力に開きがあるはずだ。

私が勘を取り戻すのとは似て非なる要因で、彼女は戦いの腕を上げている。そこまでは、観察から推測可能だった。ただ、魔術師ではない私では、真の意味で、彼女の身に起きた事を理解するのは難しいだろう。

それに、何も変わったのは彼女だけではない。私は金属バットを握っている、自身の右手の甲を擦る。既に痛みはないが、相変わらず、三重の八角形は、赤く存在を主張していた。

「……………どういう事？」

ふと、そんな私とマシユとを交互に見ながら、所長が驚きを露わにする。

「所長？……………ああ、わたしの状況ですね。信じがたい事だとは思いますが、実は——」

「サーヴァントとの融合、デミ・サーヴァントでしょ。そんなの見ればわかるわよ」  
(デミ・サーヴァント?)

マシユの発言に、所長は喰い気味に声を荒らげ、私は首を傾げる。

「わたしが訊きたいのは、どうして今になって成功したかって話よ!! いえ、それ以上に貴女!! 貴女よ、わたしの演説に遅刻した一般人!!」

「はい!?!」

すると、さつきまで腰を抜かしていた所長は、私へと詰め寄ってきた。

「なんでマスターになつていろの!?! サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ!! アンタなんか、マスターになれるはずないじゃない!! その子にどんな乱暴を働いて言いなりにしたの!?!」

「そんなこと言われましても……」

人差し指で私を押しながら、所長が喚き散らす、私には彼女が何を言っているのか、全くと言っていいほどに分からないのだ。それよりも――

「それは誤解です所長。強引に契約を結んだのは、むしろわたしの方です」

「なんですすつて?」

「……………ご歓談中、申し訳ありませんが、お二人とも、直ちに此処から離脱する事を推奨します」



いつの間にか、辺りは静寂に包まれている。思い返してみれば、マシユと交戦していた骸骨兵の何体かは、不自然な撤退をしていたように思う。私は、その撤退理由を、マシユに勝てない。と、察知したからだと結論付けたのだが、どうやらそれは、致命的な誤りだったようである。

「先輩？」

私から見れば正面、所長とマシユの後方、数十メートル先へと視線が固定される。

「いい？落ち着いて、あれを見て」

そのまま、私がそれらを指し示すと、盾を片手に、私達を守護するように動いたマシユの顔色が変わる。

「……まさか」

「ヴェスヴィオ火山の犠牲者に近いのかしらね。どっちにしる悪趣味だわ」

それらを見つめたまま吐き捨てる。そして、そんな自分が意外でもあった。

「……何よ？ここからじゃあ、きちんと見れな——って、あなた勝手な行動はっ!!」

「先輩ッ!!」

けれど、所長は夜目が効かないのか、状況を理解し切れていないようなので、確認の意味も込めて私は動いた。

「……恐らく、私の勘が正しいのならばッ!!」

管制室でのコフィンさながら、乱立する数十体の対象に向かって駆け、一番近い位置にあったそれに狙いを定めて、金属バットを力一杯振り被る。刹那、石像の頭が粉々に砕け散るや否や、その首からは、鮮血が噴水の如く迸った。

「ひっ……」

「……そ、んな」

所長が引き攣った悲鳴をあげ、マシユが驚愕に口元を覆う。私はと言えば、可哀しいくらいに惨たらしさに、ヒユウと口笛を吹いていた。

白かった夏服が、鮮血で深紅に染まっっていく――

「……もう一度、言いますね。早く此処から離れましょう?」

その懐かしい不快感に、私は口元を歪ませて嗤った。

## 衣替え

初めてその女ひとにあつた時の事を思い出していた。

「もういいでしょう?どこまで歩くのよ」

廊下ひとに横たわるその女の青白い顔には生気を感じられず、呼吸を確認するまでは死体だとすら思った。美しい死体だと――

「さあ、それは私にも分かりかねます。そもそも、この街に安全な場所はもうないと思います」

ふと、切れ長の流し目に射抜かれる。胸の下あたりで切り揃えられた漆黒と同色の虚ろな瞳が、わたしへと向けられていた。さながら深い闇かの如く、静謐な狂気を孕んでいるようにさえ感じられるそれは、諦めに似ている。そして、とても悲しいと思った。

『ああ、そつか。そう言えば、ここはそんなところだったね』

あの時、堪らず目を逸らしたわたしに、落ち着いた声とも、落ち込んだ声とも言えそうな声で、眩き返したその女ひとの瞳を、今度こそ、わたしはしっかりと見つめ返す。

「……ねえマシユ、あなたからも言つてやつて、あの娘、このままじゃ倒れかねないわよ」

「……………そうですね。所長の仰る通り、ここは休憩の提案をします」

只でさえ薄着の先輩は、今や血塗れだった。白かった上着は紅色に染まり、濃紺のスカート裾からは赤い水滴が滴っている。加えて、色白な頬に張り付く鮮血に濡れた漆黒の髪が、なかなかにもスプラッターだった。

その姿もさることながら、濡れた身体に冬の冷気は良くない。

「……………分かったわ。じゃあそうね。そこのお家にお邪魔させていただきましよう」

わたしと所長の視線を受けて、少し考え込むように視線を彷徨させた先輩は、すぐ近くにあった民家を指し示す。

「ですが、鍵がかかっているようで——」

対するわたしの疑問の声は、硝子が砕ける音に掻き消されてしまった。

「……………」

「……………」

「……………って、あれ？どうしたんです二人とも？入らないんですか？」

中央が歪に凹んだ金属バットを肩に担いで、先輩が首を傾げる。その姿に直接的な非はないとはいえ、血塗れの女子高生が無表情に金属バットを振り回す光景は、ハッキリ言って、とても怖い。

「……………いけしやあしやあと。大人しそうに見えて結構図太いのね、あなた」

そんな所長の文句に、どこか楽し気に口元を緩めた先輩は――

「そうかもしれない。よく言われるので」

ゾツとするほど美しかった。

民家の中に入るや、先輩は着替えられる衣服を探してくると言つて家の奥へと消え、わたしと所長は応接間であろう部屋で、これからの事について話し合う。

「では他に転移が成功している適性者は……」

「いないでしょうね」

部屋の中に置いてある石油ストーブに火を付けながら、わたしたち以外のレイシフト成功者の有無について尋ねたわたしに、所長は厳しい声でそう告げた。

「そんな」

暗い部屋の中で、わたしたちに暖と明かりを与えてくれる炎を眺めながらも、脳裏に

管制室の煉獄が思い起こされる。あそこから確実に助かるための蜘蛛の糸は、実質レイシフトしかない。

「……………認めたくはないけど、どうしてわたしたちが冬木にシフトしたのかは予想がついたわ」

前傾気味にソファに座り、顔の前で手を組んだ所長が、何処か遠くを見つめながら疲勞の滲む息を吐く。

「生き残った理由に説明がつくのですか？」

「……………消去法……………いえ、共通項ね。わたしもあなたたちも、コフィンに入っていないなかった。生身のままのレイシフトは成功率は激減するけど、ゼロにはならない。一方、コフィンにはブレーカーがあるの。シフトの成功率が95%を下回ると電源が落ちるのよ。だから、わたしたち以外のコフィンに入っていた適性者たちは、レイシフトそのものを行っていない。よって冬木ふゆぎにいるのは、わたしたちだけよ」

それだけの情報を一息で言い切って、所長はまた一つため息を吐いた。

「なるほど……………さすがです所長」

「……………褒めても何も出やしないわよ」  
薄く笑う所長は、相変わらず酷くやつれて見えたけれど、不思議とその雰囲気は柔らかに感じられた。

結局のところ、事態は好転してはいないのかもしれない。でも、少なくともわたしたちは生きています。なら、最善を尽くすしかない。それが今のわたしたちに一番必要な事だ。

だからきつと、それは福音だった。

「ああ、やつと繋がった！もしもし、こちらカルデア管制室だ、聞こえるかい!？」

聞こえたのは場違いとも取れる機械音と、焦燥を感じさせる声——

「つ!!こちらAチームメンバー、マシユ・キリエライトです。現在、特異点Fにシフト完了しました。同伴者はイモリ・セツナとオルガマリー・アナムスフィアの二名。心身ともに問題ありません」

その音の意味を悟るや否や、わたしは所長との間に浮かび上がった人物へと、継るように現状を伝えていた。

「そうかそれは良かった——つて、しよ、所長、生きていらしたんですか!?!あの爆発の中で!?!しかも無傷!?!どんだけ!?!」

すると、彼はわたしの無事を喜んだ後に、所長を見て大声をあげた。

「どういう意味ですかつ!!いいからレフはどこ!?!医療セクションのトップが、なぜその席にいるの!?!」

その余りに正直で、ともすれば失礼にも当たるだろう発言に、所長の文句と共に疑問

が返されると、彼の顔に微かに翳が射す。

「……なぜ、と言われるとボクも困る。自分でもこんな役目は向いていないと自覚してるし」

「ならっ——」

「でも他に人材がいらないですよ、オルガマリー」

「どういう意味？」

「……現在、生き残ったカルデアの正規スタッフは、ボクを入れて20人に満たない」

息を呑む。という事は、こんな状況でのそれを言うんだらう。たった今、彼が告げた情報に詰められた死の臭いは、とてつもなく濃い。

わたしの少ない思い出に刻まれた、そう多くはない人々の顔が浮かんでは消えてゆく。彼や彼女との記録がもう増える事がない事と、いずれ摩耗するのだらう記憶を思うと、やっぱり悲しかった。

「ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存者がいないためです。レフ教授は管制室でレイシフトの指揮をとっていました。あの爆発の中心にいた以上、生存は絶望的です」

いっそ、薄情なほどに淡々と、事実だけを告げていくドクターの声が、鼓膜を揺らす。その内容に、思わずわたしは横目で所長の様子を窺った。



「そんな——レフ、が……？いえ、それより待つて、待ちなさい、待つてよね」

ドクターを投影しているホログラムの光に照らし出された所長の表情は硬い。心なしか、その細い肩も震えているようだった。

「生き残ったのが20人に満たない？じゃあマスター適性者は？コフィンはどうなったの!？」

「……生き残ったマスター候補者は全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何名かは助かる事ができて、全員は——」

「ふざけないで、すぐに凍結保存に移行しなさい!!蘇生方法は後回し、死なせないのが最優先よ!!」

けれど、悲しんでばかりではいられない。と言うかの様に、所長はヒステリックに指しを飛ばした。

「ああ!!そうか、コフィンにはその機能がありました!!至急手配します!!」

ドクターのホログラム※が揺れて見えなくなる。彼は今、医者としての責務を果たす為に、席を立ったのだ。それにしても——

「……驚きました。凍結保存を本人の許諾なく行う事は犯罪行為です」

ふと、どこか苦い表情の所長と、わたしの視線が交錯する。

「なのに即座に英断するとは。所長として責任を負う事より、人命を優先したのですね」

「バカ言わないで!!死んでさえないなければ、後でいくらでも弁明できるからに決まっているでしょう!」

そんなわたしの賛辞に対し、なぜか所長は鼻白んだ。

「だいたい47人分の命なんて、わたしに背負えるはずがないじゃない!!死なないですよ、たのむから!!……ああもう、こんな時レフがいてくれたら!!」

そして、そのまま所長は自分の世界に入ってしまう。さつきまでは気丈に振る舞っていたけれど、やはり所長にとって、レフ教授の存在は大きいようだった。

「それとマシユ、セツナさんの姿が見当たらないのだけど、彼女は今どこに?」

役目を終えて戻ってきた彼も同じ感想だったのか、ドクターは所長の様子に苦笑を浮かべながら、わたしに先輩の所在を尋ねてきた。無事を伝え聞いてはいても、やはり心配なのだろう。

「先輩なら、着ていた衣服が血液を吸って重たいのが嫌だと言って、着替えを——」

「なにっ!!彼女は怪我をしているのか!?!なら、どうしてそれを最初に言わないんだっ!?!」  
「え?あっ!!あのドクター別に先輩は——」

事実をありのままに伝え過ぎたせいで、盛大な勘違いをしたらしいドクターの誤解を解こうと慌てて釈明するも、今一つ、わたしの行動は遅かったらしい。制止するより早く消えたドクターの姿に、思わず立ち上がる。

「なに？どうかしたのマシユ」

わたしの様子に、所長が怪訝そうに声をかけてくるが、説明をしている暇などなかった。

「先輩が危ない」

そう無意識に口にした次の瞬間、二階から男性の悲鳴が聞こえてきた。

\*

「ああああああああああつ！」

「……………それが人の裸を見た感想ですかドクター？だとしたら、かえって失礼ですよ」

突然、部屋を中心に浮かび上がったその人物は、私と目が合った瞬間に悲鳴をあげた。でもこの場合は普通、悲鳴をあげる側は私だと思う。それに敵襲かと思わず身構えた私の身にもなつて欲しい。こちとらパン一のまま死を覚悟したのよ？

「いや、その、ごめんっ!!ノックもなしに入ってごめん!!」

「そもそも前提として、ノック出来ないでしょうが」

映像が消え、代わりにSOUND ONLYという文字が照らし出される。けれど私には見えるぞ、両手で顔を覆うショート寸前のゆるふわ野郎の姿が。生娘かお前はっ!!(いい年して、女の裸くらいで動揺するなんて、まさか経験ないのかしら?。だとしても、医者つて人の身体には慣れてるはずじゃない?)

なんだか羞恥よりも呆れが勝り、馬鹿馬鹿しくなった私は、身体に着いた血液を拭く行為を再開させる。とはいえ、あらかた拭き終わってはいるのだが……

因みに、水はベットに腰かけた際に見つけた布団の中にあつた湯たんぽの水を、タオルはタンスから勝手に引っ張りだして使わせてもらっている。女の子らしい部屋を血で汚すのは部屋の主に申し訳ないが、窓ガラスを叩き割った前科を考えると、もう開き直るしかない。

そんな中、慌ただしく階段を駆け上がる足音が聞こえてきた。

「大丈夫ですか、先輩っ!!」

「あら? マシユ、どうしたのそんなに慌てて」

非常事態でもあつたのだろうか? 髪に付着したしつこい血液を拭いながらも、私は真剣な表情で問いかけた。

「え？あの、その、さつき」

「ん？さつきの悲鳴なら私じゃなくてドクターだけど——」

何故かきよとんとした表情のマシユに言い返せば、彼女の顔が真っ赤に染まる。

「つて、先輩っ!!服っ!!来てください!!」

余程慌てていたのか、部屋の窓のカーテンを閉めつつ、そのままそれを私へと投げて寄越すマシユ。女性的な身体という意味で言うなら、十中八九マシユに軍配が上がるし、そんなに神経質にならなくてもいいと思うんだけど……にしても、凄い力だな。

「気遣ってくれてありがとう。でも、もう手遅れと言うかなんというか」

「なっ……ドクター!!」

「不可抗力だよっ!!」

要するに、裸を見られた程度の事を気にする必要はない。と言ったつもりだったのだが……

「でも先輩の裸見たんですよね!？」

「まあ、見てしまった事は確かだけでも、わざとではないからね!!」

私が口下手なせい

「わざとでなくても、許されない事はあります!!」

「そんなあ〜」

議論が紛糾していつているような？

「責任とつてくださいつ!!」

「ええっ!？」

(あー、こりや、駄目だ。このままだとおかしなことになる気がする)

はあく、と何度目になるのかも分からないため息を吐いてから、私は可愛い後輩と声だけの医者に向き直る。

「別に私は怒っていませんよ。マシユ、ドクターを余り責めないであげて、私は対して気にしてないから、こう見えて、男性に裸体を見られる事には慣れているの」

「あー、えっーと?？」

「先輩っ!？」

(あれ?どさくさに紛れて何言ってるんだ私?)

静まり返る部屋の中に、殆ど裸の私と強くて可愛い後輩と声だけのゆるふわな医者。

「……まあ、その、なんて言うか。実はこれでもそれなりにお嬢様でして、昔からいろいろと世話を焼かれてきたのよ」

苦し紛れに続けた言葉は嘘でもないが真実でもない。

「そうなのかい!？」

「感動です。まさか現実で深窓の令嬢にお目に掛かれる日が来るとは!」

「え？所長だつてそうでしょう？多分」

「所長はどちらかと言うと悪役令嬢ですから」

「さいですか」

ひつでえ言われようだな所長。

「ああ、それと許婚もいる身なので、責任は取つて頂かなくて結構ですよ」

「えっ!!」

「それは、初耳です!!」

「そりゃあ、まあ。今はじめて言ったからね」

「ついだからと思つたので言つておいたが、この感じじゃあ必要なかったかな。余計な見識を与えただけだわ。」

「で？そんな事よりも、この状況についての説明はきちんとして頂けるんでしょうね？」

「ラッキームツツリスケベさん」

「お話しますから、その呼び名だけはやめてくれないかな」

「冗談ですよ」

「大人をからかわないでくれ」

嘆息交じりのドクターの情けない声に、マシユも私も、お互いに顔を見合わせて、声を出さずに笑つたのだった。

「でもまさか、君を巻き込む事になろうとはね」

着替えを終えた私と、マシユの前に再び姿を現したドクターは、まず始めにそう前置きを述べた。マシユだけは私の恰好に思うところがあつたのか、何かを言いかけたけれど、今は状況確認を優先する事にしたらしく、すぐに口を噤んだ。

「まずかったですか？」

「いや、コフィンなしでよく意味消失に耐えてくれた。それは素直に嬉しい」

（意味消失って……）

レフ教授もだけど、カルデアの人間はサラッと怖い事を言うよな。って、そういえばレフ教授の安否はどうなっているんだろう？ 所長が生きていたワケだし？ 彼も無事だったりするのだろうか？ まあ、好意的な感情を抱けない野郎の安否を気にする趣味は



ないので、今のところは後で確認できればいいかなく程度の関心だけだ。

「それとマシユの変わりよいうのことだけど、身体能力、魔力回路、すべてが向上している。これじゃ人間というより——」

「はい。サーヴァントそのものです」

と、私が他の事を考えている間に、ドクターとマシユの間では会話が進んでいる。ただし……

（私だけ置いてけぼり感スゴくない？）

所長もデミ・サーヴァントがどうか言っていた気がするし、今のマシユについて語るには、それは外せない要因なんだろうけど……

「経緯は覚えていませんが、わたしはサーヴァントと融合した事で一命を取り留めたようです」

「融合……」

「今回、特異点Fの調査・解決のため、カルデアでは事前にサーヴァントが用意されました」

「事前に用意……」

「そのサーヴァントも先ほどの爆破でマスターを失い、消滅する運命にあった」

「マスターを失い消滅……」

「ですがその直前、彼はわたしに契約をもちかけてきました」

「契約？」

「英霊としての能力と宝具を譲り渡す代わりに、この特異点の原因を排除してほしい、と」

「ん？」

「英霊と人間の融合……デミ・サーヴァント。カルデアの六つ目の実験だ」

「……………」

（いや、ドクター。まずはサーヴァントが何なのかを教えてください）

「そうか、ようやく成功したのか。では、キミの中に英霊の意識があるのか？」

「……いえ、彼はわたしに戦闘能力を託して消滅しました」

（うん、教えてくれないね）

「最後まで真名を告げずに。ですので、わたしは自分がどの英霊なのか、自分が手にしたこの武器が、どのような宝具なのか、現時点ではまるで判りません」

「……そうなのか。だがまあ、不幸中の幸いだな。召喚したサーヴァントが協力的とはかぎらないからね」

（だから、サーヴァントってなんだよ……）

「けど、マシユがサーヴァントになったのなら話は早い。なにしろ全面的に信頼できる。」

それと、セツナさん。そちらに無事レイシフトできたのは、キミだけのようだ」  
「……………なるほど」

(誰が首謀者にせよ。ソイツはクソ野郎に違いない)

視界の端でマシユが首を傾げたのに気付くが、彼女は会話の裏を読むような経験が浅いのだろう。マシユにしてみれば言葉足らずに感じただろうドクターの言葉は、私にとっては十分すぎる情報を含んでいた。

要するに、言うまでもなくあの惨状は正しく悲劇であり、そんな悲劇には魅力的なヒロインが付き物と言う訳である。

「そしてすまない。何も事情を説明しないままこんな事になってしまった」

「出来れば説明してから会話して頂きたかったですね」

「それなら聞いてくれれば良かったのに」

「あー、まあ確かにそう言われてしまうと、反論の余地がなくなるんですけど」  
変なところで気の回る人だなほんと。

「……………わからない事だらけだと思うが、どうか安心してほしい」

ドクターの私を思っただろうその発言に、少しだけ顔を顰める。というのも、私は知らない”事で安心できる類のものなら”知る”事で、ちゃんと恐怖したい派の人間なのである。例えばそれが、どれだけ残酷な事実であつても。

「キミには既に強力な武器がある。マシユという、人類最強の武器がね」

「……マシユが最強の武器、ですか」

戦いの道具を語るには似合わない医者言葉に、その意味するものに、知らず感情が冷えるのが分かる。抱くだけ無駄な感傷だというのに――

「……最強というのは、どうかと。たぶん言い過ぎです。後で責められるのはわたしです」

自覚出来るくらい硬質な声を出した私に、マシユが抗議の声を上げるが、生憎と私が問題視したのは、そういう事柄ではないのだ。

「まあまあ。サーヴァントはそういうものなんだってセツナさんに理解してもらえればいいんだ」

「そうですね。最強かどうかの真偽は兎も角、的確な例えだと思えます。彼女の能力なだけでは、ここまで来れなかっただろう事は明白ですから」

今の私では、最初の狙撃の時点で死んでいるだろう。仮に初撃をやり過ぎたとしても死ぬのが少し遅くなっただけ。という結果になっただろう事は、あの猛攻を経験した以上、断言せざるを得ない。

「ただしセツナさん、サーヴァントは頼もしい味方であると同時に、弱点もある」

そう言った彼の声が、珍しくも聞きなれた真面目なトーンだったせいもあり、私はマ

シユを一瞥してから、彼へと視線を戻した。これから “知る” 恐怖に立ち向かう事になるのだ。という確かな予感と共に。

「それは魔力の供給源となる人間……マスターがいなければ消えてしまう、という点だ」  
「——え？」

「現在データを解析中だが、これによるとマシユはキミの使い魔として成立している」

「……ちよつと、ちよつと、待つて下さい。それじゃあ——」

「つまり、キミがマシユの主なんだ。キミが初めて契約した英霊が彼女、という事だね」  
「私が……マシユの、マスター……？」

ドクターの言った言葉の示す意味を反芻する。つまり私の命は——

「うん、当惑するのも無理はない。キミにはマスターとサーヴァントの説明さえしていないかったし」

「……………なら、ちゃんとした説明をお願いします。ザツクリとした例え話ではなく」

巻き込んでしまったと悔いているのなら、せめてもの誠意を見せて欲しい。と、私は視線だけで抗議する。

「そうだね。いい機会だ、詳しく説明しよう。今回のミッションには二つの新たな試みがあつて……」

すると、そんな私の思いを汲んだのか、申し訳なさそうに淡く微笑んで、説明を始め

るドクター。しかし――

「ドクター、通信が乱れています。通信途絶まで、あと10秒」

「むっ、予備電源に替えたばかりで、シバの出力が安定していないのか。仕方ない、説明は後ほど」

「え、ちよっ……」

堅実的なマシユの指摘に、その姿が揺らぐ。非常事態とはいっだって、間の悪い事を言うのだ。

「2人とも、そこから2キロほど移動した先に霊脈の強いポイントがある。何とかそこまで辿り着いてくれ。そうすれば、こちらからの通信も安定する」

「2キロ先の霊脈の強いポイントですね」

「ああ、くれぐれも無茶な行動は控えるように。こっちもでき……か……り……く電……を――」

「ドクター!」

途切れる通信。次いで聞こえたのはザーっという雑音だった。ただ運の良い事に、重要な部分はきちんと聞き取れていたの、問題にはなっていない。

「……………」

「……仕方ないわね。ひとまずは所長と合流してこれからの方針を定めましょう」

ドクターがいた場所を見つめたまま、硬い表情を崩さないマシユの肩に手を置けば、彼女がぎこちなく破顔した。

「はい。頼もしいです、先輩。実はものすごく怖かったので、助かります」

「……………怖い、か」

マシユの素直な感情の吐露に思わず呟いていた。そう言えばいつから私は――

「先輩？」

不安げに紫水晶が揺れる。その視線に私の中で何かが弛緩した。

「いえ、なんでもないわ、行きましよう」

殺しいっか合かいに彼女も私の様になるの恐怖を覚えなくなっただろうか？のだらうか？

\*

「2キロ先に霊脈のポイントがある。ロマニはそう言っていたのね」

悲鳴が聞こえた時は何事かと思つたけれど、戻つてきた二人の様子に異常は見られなかった。そればかりか、わたし抜きめの会話の中で、ロマニは重要な事を言つて消えたらしく、マシユから内容を伝え聞きながらも、わたしの心中は穏やかじゃなかった。

「はい。そこであれば、カルデアからの通信が安定すると」

「……そう、ならそこに向かうのが良いでしょう。お互いに状況を共有できないのは不便ですし……あなたもそれでいいかしら？」

その原因とも言える少女はといえば、着替えを終えて戻つて来てからというもの、我関せずとも言うかのように、ストープの前で暖を取っている。初めて見た時から感じていた事ではあつたが、わたしはどうにも彼女を好きになれなかつた。

「ええ、現状それしか選択の余地はないようですし、異論はありません」

わたしの問いかけに、イモリ・セツナは振り返る事なく淡々とした口調で応じた。そんなところもいちいち勤に障るのだから、最早、彼女に対する嫌悪は生理的なレベルに達していると言つても過言ではないだろう。

「ええと、所長。私に何か？」

彼女の返答に無言でいたせいか、イモリ・セツナが不敵にも取れる笑みを浮かべてこちらを振り返つた。この悪く言えば地味で、良く言えばおとなしそうな見た目をしていゝる少女は、ふとした瞬間に違つた貌を見せる。それも、わたしにだけ分かるように。



(勘が鋭いのもここまで拗らせると病的だね)

自分に向けられている感情が、良いものではないと分かっているだろうに、イモリ・セツナの表情は、当てつけなのかと勘ぐってしまいたくなるほどに晴れやかだ。本当に歪んでいる。

「……都市探索を始める前に、わたしに言うべき事があるでしょう、イモリ・セツナ」

「……………先程の平手打ちの事でしたら、謝るべき事柄ではないと思いますよ？ 実際あれでいくらか正気を取り戻せたんですから、寧ろ感謝して頂きたいものです」

丁寧な口調を崩さずに、神経を逆なでするような事を平然と言つてのけるその態度に、思わず片眉が上がる。

「……本気で物覚えが悪いようね。思い出しなさい。管制室での事よ!!」

「ああ、あの時の発言の事でしたら、弁明も謝罪も致しませんよ」

闇色の瞳が冷たく光る。どうやらお互いに譲れない局面のようだ。

「……………はあく、まあいいでしょう。言つて聞かせるだけ無駄なようですし」

正直、悔しいが、マシユがデミサーヴァントで彼女が令呪を宿している以上、変に仲違いするのも後に響いたら事だ。

「イモリ・セツナ。緊急事態という事で、あなたとキリエライトの契約を認めます。そして――」

腕を組み彼女の前に立つ。気に入らない事に、説明会の時、最も従順で一番無礼だったのが彼女である。

「ここからは、わたしの指示に従ってもらいます」

「……………」

「いいわね？」

「……………ええ、戦場では臆病者ほど生き残ると言いますし、所長に従うという事に異論はありません」

（この女っ!!いちいち一言多いのよっ!!）

流石に頭に血が上がるが、相手はまだ成人してもいない小娘だ。大人として、ここは余裕と威厳を見せておくことにする。

「……………では、イモリ・セツナ。改めてわたしの護衛を任せます。全力で役目を果たすように」

ビシリと彼女を指差し宣言する。指揮官がわたしなら、最重要警護対象もわたしだ。そこだけは譲るつもりはない。だから流石の彼女も、これには素直に頷くだろう。と、思ったのだが――

「ん？何言っちゃってますか？嫌ですよ、そんなこと」

憐憫とも軽蔑ともつかない、何とも言えない表情でわたしを見上げる彼女の口から酷

薄な台詞が紡がれる。これはいい加減に矯正が必要なレベルだろう。

「なっ、あなたね、さつきから——」

「だって本来、自分の身は自分で守るべきものでしょう?」

が、その後が続いた言葉に、彼女の甘さを見た気がして、少しだけ冷静になった。

「……はっ、何を言うかと思えば、よくある詭弁ね。あなただって、マシユがいなければ、とつくに死んでゐるわよ」

「それは、確かにそうでしょうね。でもそれは、マシユが自分の身を護る為にもそうしてゐるんですから、仕方がないんじゃないですか?」

「なんですって?」

「だって私はマスターで、マシユは私のサーヴァント。まあ正確には頭にデミが付きますけど……つまり、マシユは私がいなければ自分を保てないから私を守っている。とも言えるという事ですよ。だから、私を守る事はマシユにとつては自分を守る事に等しいわけですよ」

確かに、彼女の言っている事は間違つてはいない。が、だから何だと言うのか。それがマスターとサーヴァントの関係というものだ。理解したのなら、承知して行動すればいいものを。

「それに私は、信用したわけではないのに、力を持っている。という根拠だけで、他人に

背中を任せようとする浅慮な人間は理解できませんね。これがアニメとかだったら、所長は完全に後ろから刺されて退場してますよ?」

「言わせておけばっ——」

思わず彼女の胸倉を掴みあげていた。これでハッキリした。わたしたちはどうあっても相容れない。

「所長もっ!!先輩も!!喧嘩は止めてください!!今は仲間内で争っていられる状況ではありませんせん!!」

無言で睨み合うわたしたちの間に割って入ったのは、デミ・サーヴァントと化したもう一人の少女だった。

「……………マシユの言う通りね。以後気を付けるわ。所長、私が言い過ぎたところがあつたのは認めますが、今のあなたは安全が確立された場所に座す指揮官ではない事をご理解ください」

逸らされた漆黒はマシユを一瞥してから閉じられる。頭痛を堪えるような表情の後に続いたのは、相変わらず丁寧で癩に障る謝罪だった。

「……………貴女に言われなくとも分かっています」

釈然としないが、謝罪をされてしまった以上、こちらも矛を収めなくては示しがつかない。歯痒い事この上ないが、仕方がないだろう。

「そうですか。では、新手が来る前に移動しましょう」

そんなわたしの寛大さに、無感動に無表情に漆黒の少女が答えれば――

「はい、まずはドクタールの言っていた座標ポイントを目指しましょう。そこまで行けば、ベースキャンプも作れるはずです。そうと決まれば善は急げです」

彼女のサーヴァントが主を庇うように早口で続けたのだった。しかし――

「ところで、なんでわざわざ着替えた服がそれなのよ。馬鹿なの？」

悔し紛れに放ったわたしの発言が、新たな議論を招くことになるのだった。

## 強襲と郷愁

目的が明白で且つそれに繼るしかない状況ほど人の本性を暴くものもないと思う。

「所長、先を急ぎたいお気持ちは分からないでもないですけど、足並みは揃えたほうが身の為ですよー!!」

数メートル先を肩を怒らせて歩く白髪に声を掛けるものの、彼女は無言の抵抗を貫いている。人に護衛を命じておいて、協力的な姿勢を見せないスタンスには感心すら覚えるが（拒否ったの私だけど）いくら私達の折り合いが致命的に悪いとはいえ、ほとほと扱い辛い上司である。

「ご機嫌斜めどころか、断崖絶壁って感じね」

まあ、去る者は追わない主義だから、彼女が私をどう思っているかと、対して気にはしていないのだけれど――

「いえ、所長の癩癩にも同情の余地あります」

私の可愛い後輩ちゃんは、思うところがあつたらしい。

「失礼ながら、イモリ・セツナ先輩はカルデアについて無知すぎます」

「……確かに、何も知らずにやって来たわね」

咎めるような彼女の言葉に、薄く笑って両手を挙げる。真実ほどに斬れ味の鋭い言葉もないのであるからして。

「まったくもって困りものです。うっかり迷い込んだレベルです。ほぼネコと同義です」

「独特な例えね」

「……まあ、わたしも同じようなものですが」

私のツツコミに少しだけ言葉を濁すマシユ。その様子に、これは長い話になるかな？と、私は先を行く白髪の様子を窺った。

「勤めて2年ほど経過しますが、よく分かりません。のんびり忍び込んだレベルです。ほぼワニと同義です」

ワニと同義。という表現がイマイチしっくりこないが、2年もの間カルデアに居た彼女を以てしても、あの施設の全容は掴めない。という事に、魔術師という生き物の業を垣間見た気がした。まあ、私がそれを糾弾できるわけでもないのだが。

「……そう」

「はい。私の知識もカタログにある程度です。でも、先輩のために復唱しますね」

「あら、有難う？」

本音を言うなら、魔術師の世界には深入りしたくないのだが、それと後輩の親切を下にする事は別だろう。

「人理保障機関カルデア。正しくは、人理継続保障機関フィニス・カルデア。人類史を長く、何より強く存続させるため、魔術・科学の区別なく、研究者が集まった研究所にして観測所。魔術だけでは見えない世界、科学だけでは測れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防ぐために、各国共同で設立された特務機関なのです」

「ええ、そこはなんとなくわかったわ」

「はい。まあ、そんなところですよ」

「……簡潔で分かりやすい説明ね。好みよ、そういうシンプルさ」

「あ、ありがとうございます」

私が微笑み返すと、マシユの頬に、ほんのりと朱が射す。



「更に補足するなら、カルデア設立の出資金は各国合同となっておりますが、その七割はロンドンの魔術協会——」

ふと、彼女の紫水晶が少し先を見据える。その先に誰が居るのかなんて、わざわざ確認するまでもないので、私はマシユに視線を固定したまま、続く言葉を待った。

「アニメスファイア家が出資しています。オルガマリー所長のご実家ですね」

「そつちの世界の事は詳しくないのだけれど、とにかく、凄いい家柄なんでしょう?」

無難な反応を返せば、マシユも頷きながら視線を戻す。

「カルデアは研究施設となっておりますが、その重要性から内部規律レベルは軍隊のそれです。たいへん厳しい規律と罰則が敷かれていますから、所長の横暴さは寧ろ控えめと言えます」

「控えめねえ〜」

素直に頷くには、ちよつとピンとこず、私は腕を組んで苦笑した。

「所長は悪党ではありませんが、悪人です。気に入らないスタッフは、平気でクビを切ります」

(……いや、それはホントにどうなんだろう?)

所長の精神衛生上はそれでいいのかもしれないが、そんな事で有用な手足を失っては、結局、自分の首を絞めるようなものだろうに。

「あ、いえ、どうでしょう。性格が悪い人を悪人と言っているのでしょうか……すみません。先輩を励ましたいのですが、おシャレな台詞回しとか、ちよつと慣れていないので」  
そんな、私の無言を拡大解釈したのか、マシユが慌てた様子で所長を擁護するような発言を始めたので、私は気にする事ではない。と、浅いため息と共に首を振った。純粹無垢を地でいくようなマシユに、性格が悪い。と、言われる所長、可哀想。とか思っていないよ？

「きやあああああ!? って、ちよつと!!何してるのよアナタたち!!」

すると、私の考えなど知る由もないだろう所長が、私達へ振り返るなり悲鳴と叱咤の声をあげた。戦場での大声とか、良くないものを招きかねない行為は、やめていただきたいのだけれど。

「目え節穴ですか? 所長。お話してるんですよ」

「その言葉そっくりそのまま返すわよ!! うしろ、うしろ!! 敵、敵に見つかっているじゃない!! 戦闘準備、急いで!!」

「Guooooooooooooooooo!!!」

「あらまあ」

鶏が先か卵が先か。的な懸念でしたか。

「こんな近くに……!!先輩、指示をお願いします……!!」

「そうね。私が餌になるから、マシユは敵が油断したところを各個撃破。それと所長」  
早速、私へと向かってきた個体の攻撃を、後方に飛び退き避けてから振り返る。敵にしてみれば、己に背を向けた私は、さぞや格好の獲物と映るだろう。

「なっ、何よ?!」

「支援魔術ぐらいは覚えがありますよね?」

骨の砕け散る音をBGMに、後ずさる指揮官に笑いかければ、彼女の表情が思い切り引き攣った。

\*

血肉の生々しい感触とは違う。硬く柔らかく誕生した生命の逝きつく、堅く脆い最期の形――

「敵性生物、排除しました。先に進みましょう」

盾に付いた白い粉末を振り払えば、風に乗って流れたそれは、目の前で消滅した本体と同じように、すぐに見えなくなつた。

「少数精鋭つて言うのかしら？ 数が少ない群れなだけあつてか、前の群団よりは手強かつたわね。ああ、それと所長、援護有難うございます」

形容しづらい感情を持って余すわたしの視界の端では、音もなく忍び寄つた長く濃い漆黒が風にそよぐ、すると、いつの間にか、わたしの視線は誘導でもされたかのように、先輩へと注がれていた。

と同時に、宵闇の中にありながら、鮮烈な存在感を放つ二つの深淵に、引き摺り込まれそうな錯覚に陥る。まるで、わたしの心の中を暴こうとするかのように、昏く光るその双眸には、言いしれない畏怖を覚える。だと言うのに、わたしは彼女に魅入られたかのように、目を逸らす事ができないでいた。

「さすがはサーヴァント体、スペックでは圧勝ね」

そんな中、意識の外から響いた声に、わたしは我に返る。

「……姿が怖いのは変わりませんが……ところで所長。質問があるのですが。資料にあつた冬木の街と、この冬木の街はあまりにも違います。いったいこの街に何が起きたのか、所長はどうお考えですか？」

感傷を断ち切るように先輩から視線を外し、彼女とは対照的な色彩を風に乗せた指揮

官に問い掛ければ、所長は風に遊ばれる自身の白髪を苛立たしげに撫でつけながら口を開いた。

「……そうね。きつと歴史がわずかに狂ったのよ。そうとしか思えない」

それは当然とも言える答えだった。元より、そういった事象に対応する為にカルデアが作られ、わたしや先輩などのマスター候補者が集められたのだから。

「マシユ。それにイモリ・セツナ。一度しか言わないからよく聞きなさい」

生温い風が止むと、痛いくらいの静寂が場を支配する。

「カルデアはカルデアスという地球モデルで未来を観る。同時にラプラスという使い魔で過去の記録を集計する。公にならなかつた表の歴史、人知れず闇に葬られた情報を拾ってくるのが、ラプラスの仕事と思えばいいわ。そのラプラスによる観測で、2004年のこの街で、特殊な聖杯戦争が確認されているのよ」

「聖杯戦争……？ 聖杯というのは、その、伝説にいう聖杯ですか？ 所有者の願いを叶える万能の力。あらゆる魔術の根底にあるとされる魔法の釜？」

重たい口調で述べられた所長の言葉に、浮かんだ疑問を口にすれば、視界の端で二つの深淵が凄味を増した。一般人である先輩は、この手の話題になると、蚊帳の外に置かれるも同然となるのだから、不安で仕方がないのだろう。

「ええ、その聖杯です。冬木の街にいた魔術師たちが聖杯を完成させ、その起動のために

七騎の英霊を召喚した——それが聖杯戦争の始まり。この街では人知れず、サーヴァントが喚ばれていた」

語りながらも歩き始めた所長を追いながら、彼女の話の耳を傾ける。無論、辺りを警戒する事も怠りはしない。先程の様に敵の接近を許すつもりはなかった。と言うよりも、同じ轍を踏み、先輩に危険を負わず事になるのが許せないのだ。

「冬木の聖杯戦争のシステムは単純よ。七人のマスターがそれぞれ競い合い、最後に残った者が聖杯を手にする。というシステム。カルデアがこの事実を知ったのは2010年。お父さ……いえ、前所長は、このデータを元に召喚式を作った。それがカルデアの英霊召喚システム・フェイト。ラプラス、カルデアスに続く第三の発明ね」

「第三？ 近未来レンズ・シバは違うのですか？」

ここに至って初めて、先輩から疑問の声が上がる。その内容に、彼女の記憶力の優秀さを垣間見た気がした。

「あれはレフ教授の発明だから。まあ、わたしとの共同開発ではあるけど」

対する所長は、細かい事など、どうでもいいだらう。と、言いたげに端的に答え——  
「ともかく、ここがサーヴァント発祥の地なのよ」

「ここが、サーヴァントの……」

「はあ、そうですか」

思いもよらなかつた事実という言葉を失うわたしとは対照的に、先輩は感情の読めない感想を述べた。

「……………ところで、あなたはいつ英霊についての知識を得たわけ?」

そんな先輩の様子に思うところがあつたのか、所長が先輩に鋭い視線を送る。

「つい先程、ドクターとマシユに概要だけを。何か私の認識に齟齬がありますか?」

やおら、ドクターとの会話内容を要約して説明した先輩を見つめる所長の表情には、明確な呆れの感情が見て取れた。

「…………何よそれ、初歩的な説明をしなくて助かつた。という程度じゃない」

「ええと、他にも何かあるんですか?正直、この状況で発狂せずに務めを果たしている事を評価して頂きたいものなんですけれど、これ以上情報を加算されたら、キャパオーバーは必至っていうか」

「つくづく良い性格をしているわね。あなた」

「やだなくそんなに褒めないでくださいよ。所長の掌クルーなんて、気味が悪いだけですから」

ヒラヒラと手を振り、先輩が笑い返せば、所長が拳を強く握る。

「あつたまきた!!アンタ、帰ったらホント覚えておきなさいよ!!」

「分かりましたから、私が冷静なうちに早く英霊についての補足をお願いしますよ。所

長」

「ああ、もう、いい事。まず過去の英霊を使い魔にしたものがサーヴァント。これと契約し、使役するものがマスター。ここまではいいわね？」

「復習とかタルインで、要点を分かりやすく簡潔にどうぞ」

暗がりの中で、不気味なほど青白い掌を、所長へと向ける先輩と、笑顔の仮面が剥がれかけている所長。

説明会の時から変わらず、先輩は所長を煽る事をやめる気はないようで、それは最早、仲裁に入るだけ無駄に思えてくるレベルだった。けれど、彼女のおしとやかな外見に似合わない辛辣さには、まだ慣れそうにない。

「……次に、サーヴァントのクラスについてだけど」

「クラス？」

「英霊を丸ごと霊体として再現するのは難しいのよ。人間の魔術師ではリソース、要するにメモリが足りないの。だから、その英霊を持つ一部の側面だけを固定化する。それが七つのクラス。剣騎セイバー、槍兵ランサー、弓兵アーチャー、騎兵ライダー、魔術師キャスター、狂戦士バースーガー、暗殺者アサシン。英霊たちの逸話・能力によって変化するけど、どんな英霊であれ、必ずいずれかのクラスになって顕現するわ」

「つまりは、英霊と言う絵を飾るために相応しい額がクラス。と言った感じでしょうか」



「？」

「比喩はどうあれ、認識的にはそれでいいでしょう。でもクラスの役割はそれだけではないわ。それはサーヴァントの正体……英雄としての名前、真名を隠すためのプロテクトでもある」

（真名……）

所長の語りがその話題に入った事で、わたしの意識が自身と融合した人物へと傾く。（あなたは、誰ですか？）

自問しながら傍らの先輩を見れば、彼女は神妙な面持ちで所長の説明を聞いていた。「どうして真名を隠すかというと、英雄たちは強力であるが故に有名だから。例えば、ギリシャ神話のアキレウスね。アキレウスは無敵の肉体を持っている英霊だけど、その弱点は余りにも有名でしょう？」

「そこに彼の名が付いているくらいですもんね」

所長の問いかけに、先輩が淀みなく答え。それに所長が頷き返す。

「英霊の再現である以上、弱点も引き継いでしまう。だからサーヴァントはクラス名で真名を隠すの。正体さえ知らなければ、経歴や弱点を知られる可能性が激減するでしょ。」

「なるほど、理に適っていますね」

先輩の口元に弧が描かれる。但し、不明点を理解した事で安堵する表情にしては、どこか好戦的にも見える笑みだと思った。

（真名を知るという事は、弱点を知る事にも繋がる……だったら、わたしは命の恩人について知らないほうが……でも、それだと——）

「それだけじゃないわ。真名を隠すのにはもう一つの理由がある。サーヴァントの切り札にして真骨頂。その英霊が持つ奇跡、存在が結晶化したもの。それが——」

「その英霊が持つ切り札——『宝具』と呼ばれるスペシャルアーツです。ですが——あつ」

考えていた事と話題がリンクしたせいか、気付けば無意識に声に出してしまっていた。途中で所長の話を横取りする形になった事に気付いたが、もう遅い。恐る恐る所長を窺うわたしを応援するように、視界の端で先輩が微笑む。

「……………ねえ、マシユ。あなた、もしかして宝具を使えない？」

「……………えっ、あの、はい。そのようです。わたしは、わたしに融合してくれた英霊が誰なのかもわかりませんし……………」

けれど、意外なことに、所長がわたしに腹を立てる事はなかった。その事にホッと胸を撫で下ろしながら、わたしはマスターへと向き直る。

「イモリ先輩。説明が後になってしまい、申し訳ありません。サーヴァントには宝具と

いう固有の特殊技能が備わっています。英霊たちそれぞれの伝承、偉業にちなんだ、かつこよかったり微妙だったりする切り札です。ですが、わたしはその宝具をうまく扱えません。……宝具そのものは何とか使えるのですが、出力は低下していますし、真名開放による真価も発揮できません」

(それだけじゃない)

「そもそも、わたしのこの武器が、何に由来するものなのか、さえ分からないのです」  
言いながら、自分の不甲斐なさに、もどかしくて堪らない気持ちになる。幻滅されても致し方ないような内容だとも。だというのに――

「……………そう、それで？」

私の先輩は<sup>マスター</sup>「そんな事がどうした？」とでも言いたげに、ただ、美しい微笑みで答えたのだった。

加えて「あなたのせいではないのだ」と、許されたような気がして、目頭が熱くなる。「ちよつと、イモリ。ちゃんと話を聞いていたの？今の話はそんな簡単に――」

「ですので!!わたしの事は欠陥サーヴァント、あるいは、成長性と可能性に満ちたできる後輩。と、ご期待ください。わたしが融合した英霊の情報をリードできずとも、先輩がマスターとして成長すれば、おのずと分かります」

先輩の反応に、小言を言い始めた所長を止める代わりに、わたしは自分の思いを伝え

る。そして、何があってもマスターを守り抜く事を誓った。

「……………まあ、そうね。マスターは契約したサーヴァントのパラメーターやスキル、情報マトリクスを解析できる。契約者が一人前になれば、マシユのサーヴァント情報も解析できるでしょう。この先、他のサーヴァントと契約した時も同じよ。まずはサーヴァントの宝具と真名を知ること。信頼が増せば増すほど、そのサーヴァントの能力は上がっていくわ」

「はあ」

そんなわたしの勢いに、所長が嘆息と共に補足を加えるが、やはり先輩はそれを無感動に聞き流した。ただ、反応が返ってきている事を鑑みるに、少なくとも無関心ではない事は確かだろう。

「まあ、アンタなんか、そんなに才能はないでしょうけど。マシユをうまく扱えないのもその証拠よ」

「お言葉ですが。素人の指揮が気に入らないのなら、所長が指揮官らしく振る舞ってははどうですか？ どうせ私にはサーヴァントを繋ぎ留めておくぐらいしか能はないでしょうから」

「ふん、カルデアのレイシフト機能が回復すれば、外部から一流のマスターをシフト招でき聘るわ。そうなれば、アンタはお払い箱よ。実戦経験もない素人は、カルデアの隅で震え

ていなさい」

すると、その反応が引き金となったのか、再び白熱する両者の会話――

「震えていたのはマリー所長の方では……」

「震えてない!!ちつとも!!アナタね、年上を敬いなさいよね?」

結果、所長が抗議の大声を上げ

「シュー!!です。所長!!」

「どうどう、じゃじゃ馬も大概にして下さい」

わたしたちが、それを必死で宥める事になった。

「コホン。兎も角、かつてここで七騎のサーヴァントが競い合った。結果はセイバーの勝利で終わった。街は破壊される事なく、サーヴァントの活動も、人々に知られる事な

く終わったはずなの。それなのに、今はこんな事になっている。特異点が生じた事で、結果が変わったと考えるべきね」

わたしと先輩の両名に注意されてから、むくれていた所長が復活するのには、そう時間がかからなかった。と同時に、赤色の大橋の真下に差し掛かり、わたしの関心が、思わずと、その巨大な建築物へと逸れる。

この気の緩みが、後に惨事を招く事になるのだが、結局、わたしはその事に、その時まで気付くことが出来なかった。

「2004年のこの異変が人類史に影響を及ぼして、その結果として百年先の未来が見えなくなった。だから、わたしたちの使命はこの異変の修復よ。この領域のどこかに歴史を狂わせた原因がある。それを解析、ないし排除すればミッション終了。わたしもアナタたちも現代に戻るわ」

「ところで所長。カルデアでは英霊を召喚したんですか？」

「もちろんしました。でもうまくいかなくて、成功例は数えるほどです。資料では三体だけ呼び出せたらしいけど、わたしは二体しか知りません。前所長の頃に第一号。わたしが所長になってから第二号、第三号」

先頭を歩く所長が、橋の下から抜けようとしたその瞬間――

「……その第二号がマッシュと融合した英霊よ。第三号はもう知っていますでしょ。カルデア

アに住み着いたあの変人。レオナルド・ダ・ヴィー——」  
「先輩!？」

背後から伸ばされた先輩の手が、前触れもなく所長を抱きとめ、その口を強引に塞ぎ、突然の事に虚を衝かれた私の頭蓋には、警鐘が鳴り響いた。

\*

全身の皮膚がヒリつく、うっかりと熱いものに触れてしまった時ような衝撃と反射が身体に走る。それが何を意図したものなのか、ハッキリとは分からずとも、得体の知れない不吉さに、ちゃんと防衛本能は働くのだから、危機察知能力も馬鹿にならない。

「お静かに」

所長の口を手で塞いだまま、私は低く小さい声を発した。目を白黒させていた所長は、以外にも怒鳴り散らす事なく、それこそ、借りてきた猫の如くに、行儀よくしてい

た。

☒マシユ☒

その様子に、少し安堵した私は、所長の口を塞いでいた手の人差し指を口元へと運び、空気をよんだ様子で、こちらを静観したままのマシユを、口パクで呼び寄せる。

途端、一体、何が起きているのか？と目で訴えてきたマシユに、耳を貸すようにジェスチャーを返し、深呼吸した私は口を開いた。

「二度しか言わないから落ち着いて聞いて、何か、ヤバいのが此処に近づいてきてる」  
二人に聞き取れるだろう最低限の音量で、簡潔に要点を述べる。

「えっ——」

「絶対に、動くんじゃ——」

その内容に、反射的にか驚きの声を上げた所長が、慌てて自身の口を両手で塞ぐのを横目に入れつつ指示を飛ばす。けれど、私の悪運は、こんなところでも折り紙つきだったのである。

「シーキュー、シーキュー、よし、通信が戻ったぞ!!」

場違いと言わざるを得ない軽快な機械音と、緊張感のない間延びした声音が辺りに響き渡る。

「つて、あれ？皆どうした——」



三対の瞳に迎えられたその人物は、目をパチクリと瞬かせ――

「生きて帰れたら、一発殴らせてくださいね、ドクター!!」

「ええっ!?!」

私の文句に目を剥いた。

「走るわよ、マシユ!!所長!!」

「はいっ!!」

「つて、どういう事?説明しなさいっ――」

けれど、彼に謝るつもりもなければ、猶予もないので、私は状況を理解しきれていない所長の手を掴んで走り出す。つい数時間前のマシユが、私にそうしてくれたように。

「ご覧の通りですよ、所長」

「な――まさか、あれっつて!?!」

走りながら、さっきまで所長が居た場所を視界に入れる。次の瞬間には、お約束の様に突き刺さる数本の短刀。形は違うが、既視感を感じずにはいられない、的確な殺意である。

「そこにいるのはサーヴァントだ!!三人とも戦うな!!君たちにサーヴァント戦はまだ早い!!」

「言われなくとも分かっています!!ドクター!!レイシフトはまだ行えないのですかっ

!!

「急ピッチで修復作業中だよっ!!」

「このままでは我々が死ぬ方が先ですよ!!」

遅かれ早かれ、見つかったかもしれない可能性と、その際に動かない事が致命的なミスに繋がったかもしれない事を考えると、ドクターの通信のタイミングについて、殊更に文句を垂れる気はないのだが、そうはいつでも、死地に晒されている身である事に変わりはないので、自然と語気は荒くなってしまふ。デミ・サーヴァントのマシユは兎も角。所長と私は、気を抜けば一瞬で狩られる!!と、本能が告げているのだから。

「そんなこと言っても逃げられないわよ!!マシユ、戦いなさい!!同じサーヴァントよ、なんとかなるでしょう!?!」

「……………はい。最善を尽くします……………!!」

「いいえ、それは許せないわ。マシユ」

「先輩っ!?!」

所長の鼓舞に、盾を構えて臨戦態勢を取ろうと動いたマシユの腕を、強引に引つ張り走らせる。今の彼女に、私達二人を庇いながら敵を斃すだけの力は期待できない。いくら主武装が護りに特化していたとしても、それを扱うだけの技量が伴っていないのだから、当然だろう。加えて、敵は勢い勇んでどうにかなる手合いにも見えない。それに――

「何を馬鹿な事を言っているの!?! 戦わなければ此処で死ぬわよ!!」

「……いや、彼女の言う通りかもしれない」

興奮気味に喚き散らす所長に、ドクターの重い声が返される。その声音に、最悪な予想が的中した事を悟った私は、ただ、ただ、無言で嗤う事しか出来なかつた。人間、恐怖に摩耗すると、いろいろと振り切れるらしい。

「ちよつと!! あなたまで何を言っているの!?!」

「……目の前の反応と同じものが二つ、そちらに向かっているっ!! ここまで言えば、セツナさんを責められないだろう!?!」

「っ!! 撤退よ、急ぎなさい!! とにかく此処から離れるの!!」

状況理解が早いのは所長の美点だと思う。少なくとも、私はその点に関してだけは、彼女の臆病さを相応に評価していた。けれど、必ずしもそれが、現実で通用するわけではない。という事も理解できていた。

「——残念、モウ手遅レデス」

突如として、私の鼓膜を震え上がらせたのは、底冷えしそうな女の声、そして——

「な——」

「所長っ!!」

所長の驚く声と、マシユの叫び声が重なる。私はといえ、それを理解するなり、身体が勝手に動いていた。駆ける勢いのまま、並走する所長を肩で押し退ける。瞬間、私の脚に激痛が走った。

「——!!」

そのまま、何故か引つ張られるように空中へと投げ出された後に、数メートル道路を転がって、果てには縁石に背中を打ち付け、一瞬息が詰まる。身体中を駆ける今までに感じたことのない類の痛みには、視界を保つのもやつとだ。そんな私の瞳には、半ば放心している様子の所長と、今にも泣き出しそうな表情で、悲鳴にも近い声で私を呼ぶマシユが映っている。

「ホウ、悲鳴ヒトツアゲナイトハ、感心デスネ」

耳障りな鎖の音と共に、上空から落とされるのは冷淡な女の声。

「先輩っ!!」

……ああ、耳鳴りがする。

「ハハハ、敵前デ脇見トハ!!」

「自ラ首ヲ差シ出シタモ同ジ!!」

「なっ……くっ!!」

影法師の様に真っ黒い、長物を操る男と戦いつつ、投擲される短刀を弾きながら、私

に駆け寄ろうと、マシユが必死になっているのが分かる。

「つ、るな」

痛みを堪えながらも、私は手をつき上半身を起こす。情けは人の為ならず。とはよく言ったものだ。こういう終わりであるならば、いつそ清々しい。

「先輩っ!!」

やめろ、私はお前に助けられる価値などない。

「止まるなっ!!行けっ!!」

だから、私は叫んだ。血を吐きながらも、声の限り精一杯に。

「出来ませんっ!!」

そして、最期には嗤うのだ。

「……前にも言ったでしょう。マシユ」

まるで、蛇に巻き付かれたかのように、螺旋状にズタズタに切り裂かれた自分の脚を視界に入れる。その出血量を見るに時間の問題だろう。呼吸音にも雑音が混じっている事を鑑みるに、折れた肋骨あたりが、体内で変な所に刺さっているのかもしれない。

「いやっ、先輩っ!!」

そして、これは自業自得。あの時、マシユを見捨てた私が迎える当然の末路。

「マシユ・キリエライト、所長を連れて生きなさい」

罰を請う私の声に応えるは、右手の甲に刻まれし八角。それは赤く発光し――

「……………そう、良い子ね。マシユ」

私は自分の死に場所を定める。

「……………どう、して」

絶望に目を見開く彼女のその言葉は、意志に反して動く己の身体に対してだったのか、それとも、それを命じた私に対してだったのか、どちらにせよ、その答えを知る術は、もう私には残されていない。

（……………ああ、ごめんなさい。結局、私はまた――）

上体を保つていられなくなり再び倒れ込む。だんだんと霞んでいく視界には、マシユ達の姿も私達を襲った黒い影の姿も既がない。

……………耳鳴りがする。

身体中の感覚が遠のいて行くのを感じながらも、頬を濡らす熱だけが、やけに明瞭だった。

\*\*\*

「フオツ、フオーウ!!」

炎にのまれた冬木の街で、動くものはそう多くない。裏を返せば、動くものはそれだけで、見る者からすれば目立つのだ。

「フオウ、フオツ!!」

例えば、暗がりを駆ける白い小動物などは最たるに――

「ん?なんだありゃあ」

そう声を発した男は、白い小動物に負けず劣らず、派手な色彩を纏っていた。青を基調とした全身の装束は、赤く染まった街では、場違いなくらいに浮いて見える。状況が状況な事もあり、男が只者でない事は明白であった。

「犬猫の類じゃあなさそうだが……」

危なげなく電柱の上に直立する男は、不可解そうに首を傾げ、何かを思案しているようである。

「あー、もう面倒だ」

暫く考え込んだ様子男は、最後には考える事を放棄したようだった。次の瞬間に

は、その身体が細かな粒子となり消失する。

「フオウツ!!」

対して、小動物は驚きの声を上げた。だが、それもそのはずだろう。さつきまでコンクリートを捉えていた己の脚が、今や空を切っているのだから。

「それで?どっから来たのかは知らねえが、お前さん、そんなに急いでどうしたんだ?」  
「フアツ!!」

驚く獣の視界の先で、男が犬歯を覗かせ嗤う。獣はまだ、己が目の前の男に片手でつまみあげられている。という状況を、理解できていないようだった。

「いやあ、オレもいろんな魔物と殺り合ってはきたが、ほんと、お前さんみたいのは初めてだわ」

「!?!」

固まる獣とニヤつく男。そのままお互いに無言で見つめあう。その早くも膠着しそうな気配に先手を打ったのは、獣のほうだった。

ガブリツ!!

と、表記して間違いないだろう勢いで、獣が男の手に噛みつくくと、男は苦笑を浮かべて獣を地へと置いた。

怖がらせる気はなかったんだが、と嘯く男からは本当に悪気は感じられず、獣はほん



の少しだけ、ぼつが悪そうに男を見上げる。

「なあんか、邪魔したようで悪かったな？んじゃあ、オレは行くからよ。まあ、死なない程度に気張れや」

乱雑に獣の頭を撫でて笑った男は、じゃあな。と、後ろ手に手を振ると、獣の進路とは逆の方向へと歩いていく。

「……フオウ」

暫くその背を見つめていた獣は、先を急ごうと歩を進めて、今一度男を振り返る。そして——

「フオウツ!!」

助走をつけ、大きく跳躍すると、男の背を蹴りあげた。

「あ？何だよお前、悪いがオレはお前と遊んでる暇は——」

対する男は、己が背へと感じた小さな衝撃に、ぶつきらばうに振り返り——

「フオウ、フオウツ!!」

そのまま、否定の言葉を続けようとしながらも、自分を何処かへと導かんとする獣の様子に、眉根を寄せた。

さあて、どうしたもんか。

そう言いたげに、男の視線が遠く、獣が目指している方角へと向く。その方角からは、

武器が重なる際に出る、独特の金属音が響いてきていた。

目深に被ったフードの下からは、理知的ながらも好戦的な瞳が覗く。

「ケルトドトルの魔術師イドを導コウこうとはな……いいぜ、案内シしな!!」

「フオウツ!!」

この出会いが、人類史の存続に関わる重大な分岐点の一つになるのだが、あらゆる先人達の例に漏れず、当事者達はいっただって、その事を知る由もないのであった。

## 切れない糸

『私に指図しないで、マシユ』

そう言ったあの女は——

『生き方がままならない分、死に方は自分で決める事になっているの』  
いったい、どんな表情かおをしていたのだろう。

\*

(おいおい、これ、もう詰んでねえか?)

そう思って、傍らの小動物を見れば、オレと目が合ったソイツは、不思議そうに首を傾げた。

(あー、まあ、期待すんのは勝手だけだよ)

小さくため息を吐いたオレの視線は、瀕死の少女の右手の甲に刻まれた紋様に固定される。

(二画か)

眼下に倒れるは聖杯戦争の参加者。つまりマスター<sup>命</sup>の証を宿した少女。だが彼女を守護するはずのサーヴァントの気配はない。討たれたのか、それとも――

(……どうすつかなあ)

令呪のサポートは望むところだが、少女の存在は、この狂った聖杯戦争においては、正直、足枷になる。何より――

「フッフ、マサカ 私ノコレクシヨンヲ破壊シタノガ コンナ可愛ラシイ方ダツタトハ  
思イモヨリマセンデシタ」

うつ伏せに倒れたままの少女の長い黒髪を、黒化したライダーが掴んで引き起こす。  
(アレをどうにかするのが前提なんだよなあ)

無論、そうなったとしても負ける気はしないが……

「……………あぐ」

(お嬢ちゃんが、もたねえだろうな)

脚が使い物にならないせい、上体を大きく後ろに反らす形になった少女が、浅く荒

い呼吸を繰り返す。痛みに見開かれた瞳には涙が浮かび、震える唇の端からは血が伝った。

「サテ、ドウ殺シテアゲマシヨウカ」

そんな少女の反応に、喉を鳴らして嗤ったライダーが、少女の青白い頬に舌を這わせ、少女は視点が定まっているのか判然としない、虚ろな瞳をライダーへと向けた。

(……だが、まあ。気に入らねえのも確かだわな)

聖杯戦争のマスターである以上、死は覚悟の上だろうし、覚悟するもんだろうが、だからといって、その死を冒瀆するような行為は度し難い。

楽にしてやる気がないのなら、手心は加えるべきじゃない。既に少女の死は決定事項なのだから、尚更だ。

「悪いな、白いの」

「フオウ……」

「アンタの飼い主を助ける事は出来そうにねえ」

「……………キュウ」

「けど、ま、苦しませもしねえよ」

正直、気分は最悪だったが、正常なサーヴァントがオレしかいない以上、マスターには礼を尽くす責務があるだろう。まあ、それは結局のところ、死に体の少女の最期くら

いは守ってやりたいと思った、オレのエゴに過ぎないのだが。

だから、きつとソレは、そんなオレの心情が見せた幻想だったのだろう。駆け出したオレの目の前で、血塗れの少女が、微かに歪んだ笑みを浮かべたような気がした。

\*

所長を傍らに庇いながらひた走る。時折投擲される短剣を弾きながらも、足を止める事はなかった。いや、正しくは、足を止める事が出来なかった。

「ハア——なんで、こんなことにッ!!」

胸が張り裂けそうな気持ちだった。感情とは裏腹に動く身体が恐ろしくて、それ以上に悲しかった。

「——話ニナラン。コレデハ 私人デ 十分ダツタカ」

「……マシユ、下がって!!」

殆ど悲鳴と言つてもいい指示に、反射的に盾を構える。瞬間、腕に感じる重い衝撃。  
「ッ!!」

薙刀と思われる得物による鋭い突きに、身体が後退する。その膂力に、受け続ける事は得策ではない。と、悟つた時には、既に退路は断たれた後だった。

「決メルゾ ランサー。ドコノ英靈力知ラヌガ、御首ニハ違イナイ」

進行方向に現れた髑髏面の影が、左右非対称の腕に短剣を構える。姿の見えなかつた難敵が、その身を晒した。という事の意味に、知らず冷や汗が伝う。

「……………一人とも、どうにかして戦線離脱、または勝利してくれ」

「無理よ、どうあつても勝ち目がないじゃない、アレ!？」

「ああ、無茶を言っている事は分かつてる!!だけど、このままじゃ3対1の戦闘になる。それだけは何としても避けてほしい」

「え——」

じりじりと距離を詰める敵影を牽制しながら、ドクターの報告に耳を傾ける。驚嘆の声を出したのは、果たしてわたしと所長のどちらのどちらだっただろう。

「……………サーヴァントとみられる反応が一騎、君たちを目掛けて移動している」

「そんなつ——」

「——ハ。ハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

「所長、マシユ、しつかりするんだ……!!足を止めちやいけない!!」

「——ハ。ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

「あ——」

絶望を煽るかのような哄笑がこだまする。内側からじわじわと蹴られるような不快感に、身体が震えた。

「くそ、二人とも飲まれるなッ!!」

すぐ近くにあつたはずのドクターの声が遠い。

「ハ、未熟未熟。戦ウモ死ニ筋、逃ゲルモ無理筋。未熟者ノ末路トハドウアレ無様ヨナ」

「ソレデヨイ。藻掻クガヨイ。無様ナ者ホド面白イ！」

「ああ、あああああ——!!!」

それは、盾を掲げる者としては、最もしてはいけない選択だったと、後にわたしは知る事になる。ただ、この瞬間だけは、この選択が吉と出たのであった。

\*



その感覚を再び味わう事になろうとは、思いもしなかった。

「フオウ、キューウツ!!」

頬に感じる湿った温かさは慰めだろうか。だとしたなら、こんなにも惨めなことはい。  
い。

「おい、アンタ。生きる気はあるか？」

ふと、聞こえてきた声は、ドクターのものとは違う低音――

「ない。ってんなら、それはそれで、別に構いやしないぜ？まあ、出会っちまったてまえ、見送りぐらいはしてやるよ」

惰性で動かした眼球が捉えた男は、衣装から髪の毛に至るまで、冴えるように青いのに、フードから覗く瞳だけは、燃えるように赤かった。死神にしては極彩色だと思っただけれど、残念な事に、その手が握るのは、命を刈り取る大鎌ではなく、杖のようだ。でも、今の私には、そんな事は些末な事に過ぎなかった。

「あ？なんか言ったか」

「\*、\*」

「……アンタの大事な人の名前……つて、ところか？」

答えの代わりに私は笑った。目の前の男が誰かは知らないが、誰にも、何も知られずに、理解されないままに死んでいくよりも、自己満足だと言われようとも、私という女の心残りくらい、口に出したって許されるはずだ。

そうか。と静かに呟いた男は、丁度いいくらいに慈悲深く、軽薄だった。全く以て、私の想像通りの神様の姿が其処にあった。

………耳鳴りは止まない。

霞んでいく視界に、その時がもうすぐなのだと悟る。身体の末端から順に、感覚が失われていくのを知覚しながらも、せめて瞼は閉じたほうが良いかしら？なんて思考が働く。

どうせ見えなくなるんだから。と、自発的に暗転させた視界からは、死を身近に感じられた。

ああ、これでやっと終わる。終われる。

ハズだったのに――

\*

「ハ——死ンダゾ、娘……!!」

無我夢中での特攻、背後に迫る魔の手、断末魔の如き所長の悲鳴。そして——  
「小娘かと思えば、それなりに兵つわものじゃねえか。なら、放つておけねえな」

視界の端を疾走する青い騎影と、後方で炸裂する焰。

「又ウ……!!何者ダ……!?!」

「何者つて、見れば分かんだろご同輩。なんだ、泥に飲まれちまって、目ん玉まで腐ったか?」

「貴様、キャスター!!ナゼ 漂流者ノ 肩ヲ持ツ……!?!」

「あん? テメエらよりマシだからに決まってんだろ。それとまあ、見所のあるガキは嫌いじゃない」

驚嘆する黒影に、振り向きざまに交錯する視線。

「そら、構えな。お嬢ちゃん。腕前じゃアンタはヤツに負けてねえ。気を張れば番狂わせもあるかもだ。それと——」

背中合わせの鼓舞と、進み出る美しい漆黒。

「生きていきたいのなら、戦いなさいマシユ。貴女がそうある以上、私は貴女を裏切れないみたいだから」

「フオウツ!!」

その瞬間の衝撃と、去来した感情を。的確に表現する術を持たないわたしだったけれど――

「せん、ばい」

そんなわたしに、彼女が微笑みを向けてくれる。それが全てだった。

「無事、だったんですね。それに、フオウさんも……………」

視界が滲む、けれど、再会を喜んでいる暇はなかった。

「アンサズ!!」

立ち上る火柱に、此処がまだ戦場の只中である事を思い出す。

「…………悪いけど、今はそういうのは後回しよ。マシユ」

腰の抜けた所長に肩を貸しながら、先輩が鋭い視線を向ける。

「…………はい!!」

それに力強く頷き返せば、わたしの隣で青い装束の長身の男性がフードを外した。

「そんで? アンタの指示は」

「ご助力を願えるとみて宜しいですか？キヤスター」

何処か硬い声音で男性を睨む先輩に、魔術師キヤスターのクラスの英霊らしい彼は、不敵に笑って応えた。

「おうよ。ひとりで健気に戦った。あのお嬢ちゃんに免じて、仮契約だが、アンタのサーヴァントになってやるよ!!」

「……そうですか。感謝します」

そうして伏せられる黒曜の双眸。

「早急に片づけましょう」

それは、次の瞬間に、鋭利な光を宿らせた。

\*

久方ぶりの戦場殺し合いの空気に、身体が疼く、因習に染まり切ったこの身には、今更珍しく

もない体の震えだが、感情まで揺さぶられるとは思ってもよらなかった。

「……………これが、サーヴァント同士の戦い」

傍らで感嘆の声を上げた所長に、心の中で同意を返しておく。

「所長、大丈夫そうでしたら、簡易的なもので構わないので、私達の周りに何か魔術を行  
使しては頂けませんか。今、雑兵に見つかる面倒は避けたいので」

「必要ないわよ。この戦場に、のこのこやって来るヤツなんていないだろうし、何より――  
」

琥珀色の瞳が、すばしこい青の魔術師を捉えようと細められる。

「何より、なんですか？」

「彼が先手を打ってる」

「なるほど」

（だから、落ち着きがないのか）

戦場を見据えたまま、私はそっと、自分の下腹部に手を当てた。

\*\*\*

「逃がすかよッ!!」

後退したアサシンに、火球をお見舞いするキャスター。が、それなりに敏捷なのか、難なく躲したアサシンは、短刀を投擲し返してくる。

「しやらくせえッ!!」

それでも、キャスターは臆する事なくアサシンへと向かう。矢避けクイの加護フリ持ちンに、飛び道具は意味を成さない。それに――

「オレも脚には自信があんだよッ!!」

「キサマ――」

アサシンが驚きの声を上げる。あと一歩踏み込めば接敵するだろう、その瞬間。

『キャスター、右腕だ』

キャスターの頭の中に、怜悯な女の声が響き、ほんの一瞬だけ、関心がその声の主へと移る。

敵キャスターから目を逸見返すらす事をせずに、指示を飛ばす少女の胆力に、キャスターの顔に牙を剥

くような笑みが広がった。

「クッ——」

と同時に、顔のない暗殺者までもが嗤い、不気味な右腕が伸ばされる。アサシンにとって、今のキヤスターは隙だらけに見えた。だからアサシンは気付けなかった。罠に嵌められたのが、自分のほうであった事に。

「なーんてな」

瞬間、軽薄な声を発したキヤスターに、アサシンが己の失態を悟るも、時すでに遅し。理性を失った愚かな暗殺者の右腕は、地面から生えるかの様に出現した、炎熱を纏った巨人の手によって、赤子の手をひねるかの如く相殺される。

「グアッ——!!」

右腕を封じられた時点で、最早アサシンの敗北は決まったも同然である。一介の暗殺者が、それも狂気に呑まれたアサシンが相手取るには、マスターを得たキヤスターは格上に過ぎた。

「コンナトコロデッ!!」

だが、冷静ではなかったからこそ、アサシンには諦めるという選択肢も存在していなかった。自ら右肩から先の腕を切り捨てると、残った左腕に凶器を握り、巨人の頭部で高みの見物を決め込むキヤスターへと迫る。

「へえ、案外ガッツあんだなお前さん。でもま」



自身へと迫るアサシンに対し、キャスターは何処か憐憫の混じる称賛を投げかける  
と、杖を回し、危なげなくその凶刃を弾き返す。

「!!」

「黒く塗りつぶされた執念で勝てるほど、オレは甘かねえよ」

空中で打ち負け、体制を崩し、驚愕に目を見開いたまま落ちていくアサシンを、炎の  
巨人が抱きとめるようにして、胸に開いた檻へと迎え入れる。

「グ——オノレ、聖杯ヲ、目ノ前ニ、シテ——」

ここに至ってやつと、囚われの暗殺者は、己の敗北を悟つたのだった。

「<sup>ウイツ</sup>焼き<sup>カー</sup>尽くす<sup>マ</sup>炎の檻!!」

生贄を得た巨人が、一際大きな火柱を上げて燃え尽きると、そこにはもう、何も残つ  
てはいなかった。

「……………さつてと、お嬢ちゃん達の加勢に行くとするかねえ」

アサシンの最期を見届けたキャスターは、勝利の余韻に浸る事すらせずに、その瞳に  
次の戦場を映していた。

\*

「ハアアアーツ!!」

「フンツ!!」

ランサーの打ち込みをマシユが耐え凌ぎ、マシユの踏み込みをランサーが受け流す。目の前の戦闘を表すなら、それで事足りた。

「どんな状況だ?」

アサシンを倒したらしいキャスターが、傍らに降り立ち尋ねてくる。自身も戦闘の後だというのに、その姿には外傷一つ見当たらなかった。

「見ての通りね。負けてもないけど、勝ってもいない」

「宝具を使わねえのか?」

「使わせるような隙を敵が与えてくれないし、そもそも、マシユは宝具の使い方を知らないのよ」

「あ?そんなのすぐに使えるに決まってんじゃねえか。英霊と宝具は同じもんなんだから」

「そうなの?」

解説せねえな。と、眉を顰めたキャスターの視線を受け、マシユについて、解説していなかった事に気付く。

「ああ、なのに使えないってコトあ、単に魔力が詰まっているだけだ。なんつーの、やる気? いや弾け具合? とにかく、大声をあげる練習をしてねえただぞ?」

が、続くキャスターの説明に、思考が逸れた。

「そうか、ちよつと似てるな」

「あ?」

「いえ、こちらの話です。兎も角、キャスター。彼女に助力を」

『話はそれからです』

「……あいよ」

成り行きで繋いだパスを使って、キャスターの不信感に誠意を示せば、取り敢えずの納得をしてくれたのか、了承の返事が返って来る。

彼の参戦で、マシユとランサーの意地の張り合いのような戦闘に変革が起こるのに、そう時間はかからなかった。

「あ、あの……ありがとうございます。危ないところを助けていただいて……」

無事にランサーを斃したマシユが、キャスターへとお礼を述べるのを横目に、私は溜め息とは似て非なる深い息を吐いた。

そんな私に、何か言いたげな視線を送る所長には気付かないフリをして、マシユとキャスターの会話に意識を傾ける。

「おう、お疲れさん。この程度、貸しにもならねえ。気にすんな」

人好きのする笑顔を浮かべて、キャスターがマシユの肩を軽く叩くと、彼女の表情から緊張が和らぐ、流石にサーヴァント戦ともなれば、マシユにも堪えるものがあつたのだろう。

やっと見る事が出来たマシユの柔らかい笑顔に、知らず、私の頬も緩む。が、それは次の瞬間に、凍り付く事となった。

「ひゃん……!!」

マシユの肩へと置かれていたキャスターの手が、彼女の臀部を撫で付けた事で、羞恥に塗れた悲鳴が辺りに響く。その余りにも自然でいて、手慣れている様子のキャスターの行動に、私の不快感が振り切れた。

「おう、なよつとしていているようで、いい体してるじゃねえか!! 役得役得——つて、おいおい、こりやあなんの真似だ? マスター」

自身へと振り下ろされた金属バットを危なげなく躲したキャスターは、飄々とした態度で私に尋ねてくる。

「ご自分でお分かりでは? 助けて貰った手前、今回は目を瞑りますが、次マシユに手を出したら、こちらにも考えがあります。大義がこちらにあるのなら、貴方を捨て駒と扱う事も吝かではありません」

マシユを背に庇いながら、金属バットを掲げて宣言する。相手が高位な存在サーヴァントなどでなければ、確実に縊り殺していたところだ。

「綺麗な無表情で怒るとか器用な事するな、アンタ。……全く、どつちが主なんだか」

対して、静かにいきり立つ私の殺意を真正面から受け止めたキャスターは、何処か感心したように、私とマシユを交互に見つめるばかりで、なんともやり辛い事この上ない。

「ちよつと、あなた、サーヴァント相手に何してんのよ!!」

そんな混沌とした状況に一石を投じたのは、青い顔をした頼りない指揮官の一言だつ

た。

「何って、セクハラ抗議ですが？」

「あなたねえ!!下手したら死んでいたかもしれないのよっ!」

言外に、見て分らないのか?という嘲笑を込めつつも、キャスターから目を逸らす事はせずに、所長の疑問に答えれば、無駄に甲高い怒声が返って来る。

その内容に、眉を顰める私に対して、キャスターは片方の紅玉を瞼で隠す事で返答してきた。

「……………それはないでしょう。所長と違って、気に入らない人間のクビをすぐ切るよ  
うな人ではなさそうですし」

キャスターのおちやらかな態度に興を削がれた私は、彼へと向けていた凶器(まあ、尤も彼には大した脅威にならないであろうが)を下ろす。

「なっ——どれだけ私を小馬鹿にすればっ——」

「ハハッ、おもしれえじゃねえの。んで、そっちのお嬢ちゃんだがよ」

そんな私に、今度は顔を赤く染めあげた所長が抗議の声を上げるが、言い切るより早く、キャスターの言葉が重なった。

「何のクラスだかまったくわからねえが、その頑丈さはセイバーか?いや、剣は持つてねえけどよ」

私越しにマシユを注視したキャスターは、独り言じみた感想を述べながら、何処か楽しそうに口角を歪めた。

「……ちよつと、アレ、どう思う?」

「まごう事なきセクハラオヤジですね」

その様子に、いつの間にか側へと移動してきていた所長が意見を求めてきたので、ありのままの心象を正直に言っておく。

「まあ、取り敢えずは事情を聞こう。どうやら彼は、まともな英霊のようだ」

一向に進む気配のない現状にメスを入れたのは、空気と化し、存在すら忘れていた医者者の一言だった。

「おつ、話の早いヤツがいるじゃねえか。なんだオタク? そいつは魔術による連絡手段か?」

キャスターの関心が完全にドクターへと移った事で、マシユと所長が露骨に安堵する。それを見て、私も少し己の言動を反省した。

「はじめましてキャスターのサーヴァント。御身がどこの英霊かは存じませんが、我々は尊敬と畏怖をもって——」

「ああ、そういう前口上は結構だ。聞き飽きた。てつとり早く、用件だけ話せよ軟弱男。そういうの得意だろ?」

「うっ……そ、そうですか、では早速。……軟弱……軟弱男とか、また初対面で言われちゃったぞ……」

対して、キャスターにバツサリと切り捨てられたドクターはというと、やはりと言うか、情けない声をあげ、項垂れていた。

「……以上が我々、カルデアの事情です。現在は現地調査を行っています。確認しますが、貴方はこの街で起きた聖杯戦争のサーヴァントであり、唯一の生存者なのですね？」  
「負けてない、という意味ならな。オレたちの聖杯戦争は、いつの間にか違うモノにすり替わっていた。経緯はオレにも分からねえ。街は一夜で炎に覆われ、人間はいなくなり、残ったのはサーヴァントだけだった。真っ先に聖杯戦争を再開したのはセイバーのヤツだ。奴さん、水を得た魚みてえに暴れ出してよ。セイバーの手で、アーチャー、ラ



ンサー、ライダー、バーサーカー、アサシンが倒された」

私達の身元や、目的を一通り説明してから、ドクターの話が状況確認へと移行する。それに端的な答えをキャスターが返した事で、私達の間には知的活動的な沈黙が落ちた。

「七騎のサーヴァントによるサバイバル……それがこの街で起きた聖杯戦争のルールだったわね」

「キャスターさんはその中で勝ち残った……いえ、生き残ったサーヴァントというワケですね」

「ああ、そしてセイバーに倒されたサーヴァントは、さっきの二人よろしく、真っ黒い泥に汚染された」

所長とマシユの問い掛けに、肯定と補足を返したキャスターの口調には、仄かに義憤が混ぜられているようだった。

「連中はボウフラみてえに湧いてきやがった怪物どもと一緒に、何かを探しだし始めやがった。んで、面倒な事に探したものにはオレも含まれている。オレを仕留めないかぎり、聖杯戦争は終わらないからな」

「残ったサーヴァントはセイバーと貴方だけ……では、貴方がセイバーを倒せば」

「おう、この街の聖杯戦争は終わるだろうよ。この状況が元に戻るかどうかまでは、わからねえがな」

「なんだ。わたしたちを助けてくれたけど、結局は自分のためだったのね。貴方はセイバーを倒したい。けれど、一人では勝ち目がないから、わたしたちに目を付けた……違つて？」

私には血相変えて注意してきたくせに、自分は強気なんですな所長。

「その通りだ。だが悪い話じゃあねえだろ？ アンタらは、カルデアつて組織のマスターだつて言つたが……まあ、そのあたりはいいか。サーヴァントの鉄則でな、自分の時代以外の事情には深く関わらない。あくまで兵器として協力するだけだ。アンタらの目的はこの異常の調査。オレの目的は聖杯戦争の幕引き。利害は一致しているんだ。お互い、陽気に手を組まないか？ 味方は大いに越したことはねえしよ」

「……それが合理的な判断だけど。その場合、貴方のマスターは誰になるの？」

「そりゃあ、その黒髪のお嬢ちゃんだろ。アンタにマスター適性はないしな」

「え——？」

「なつ……」

私の驚嘆と、所長の恥辱的な声が重なる。

「いや、ホントに珍しいな。魔術回路の量も質も一流なのに、マスター適性だけ無いなんて。何かの呪いか？」

「うっ、うるさいわね。どうでもいいでしょう。そんなコト!!」

キャスターからの追及を、語気を荒らげて撥ね付けた所長は、キツと私を睨むと――  
「そいつはキミに任せるわ。せいぜい、うまく使いなさい」

面倒は押し付けるに限る。と、ばかりに言い捨てた。

「決まりだな。この街限定の契約だが、よろしく頼むぜ。となれば、あとは目的の確認だな。アンタらが探しているのは、間違いなく大聖杯だ」

対して、狙い通りに事が進んだとばかりに上機嫌なキャスターは、スラスラと話を進めていく。

「大聖杯……?」

「この土地の本当の“心臓”だ。特異点とやらがあるとしたら、そこ以外ありえない。だがまあ、大聖杯にはセイバーのヤロウが居座っている。ヤツに汚染されたサーヴァント達もな」

「残っているのは、バーサーカーとライダーとアーチャー? どうなの、その三体は。強いのか?」

「ライダーとはさつき殺り合って、アーチャーのヤロウはまあ、オレがいればなんとかかなる。問題はバーサーカーだな。アレはセイバーでも手を焼く怪物だ。近寄らなけりゃ襲ってこねえから、無視するのも手だな」

触らぬ神に祟りなし。つて、ことか……

「状況は分かりました。我々はミスター・キャスターと共に大聖杯を目指します。ミスター・キャスター、案内は頼めますか？」

「ミスターはいらねえよ。道筋は教える、いつ突入するかは、お嬢ちゃん達次第だ」

「助かります。では探索を再開しましょうか」

キャスターと所長の会話が帰結し、ドクターが暗に私を動機づける。次の瞬間、視界の先で、こちらを振り返ったマシユの、強くも儂い印象を感じさせる瞳に、私の中で一つの答えが導き出された。

「……………ちよつと待って下さい。もう一体味方を喚びましょう」

「はあ？あなた何言つて……………つて、まさか——」

私の突飛な発言に、お約束のように柳眉を逆立てた所長ではあったが、すぐにその事に思い当たったのか、表情が困惑の色に染まる。

キャスターとマシユも、所長の様子に只ならぬものを感じたのか、怪訝な表情で私を見返した。

そんな彼らは、これから更に百面相を晒す事になるのだろう。

「ええ、英霊召喚システム・フェイトを起動させます——」

案の定。私が紡いだ言葉は、団結しつつあった雰囲気混乱を呼び込むには、十分な威力を有していた。

## 狂い始めた齒車

「サレヴァント  
英靈を召喚するだあ!？」

「フアツ!!」

キャスターの大声に、フォウが毛を逆立てて私の肩に飛びついてきたので、私は彼を安心させようと、その首元を撫で付けた。暫くすると、落ち着きを取り戻したのか、視覚的に大きくなっていたその身体が、元の大きさへと戻る。

「ええ、何か問題でも?」

「いや、問題も何も。アンタには既にサーヴァントがいるだろ!？」

「ドクターのお話を聞きましたよね? マシユは正当な英靈ではありませんよ」

それを見届けてから、キャスターの質問に答えれば、至極真つ当な意見が返つて来たので、訂正がてら、マシユについて言及しておく。

「……まあ、この際それはいいわ。とにかく、サーヴァントの二体持ちなんてやめとけよ。喚び出した英靈が、必ずしもマスターに従順とは限らねえんだ」

「ご自身を数の内から抜いてしまってますよ? 厳密には、三体目を喚ぼうとしているところですよ」

「……………喚んだのが、バーサーカーみたいな手に負えないヤロウだったらどうする？」  
 見るからに揚げ足を取るような私の語りにも、鷹揚な態度を崩さないキャスターの様子が、私の中に深く根付いた警戒心を煽る。

「その時は貴方とマシユで叩き伏せるか、最悪、令呪こじを使用して凌ぎます」

顔の高さに右手の甲を挙げる。刻まれし赤い八角は二つに数を減らしてはいたが、減らしたが為に、私はそれを理解できていた。

「……………喚んで、順当に契約もこなせたとする。だがそのあと泥に汚染されそうになったら？」

「その時もやる事は一緒でしょう。当人には悪いですが、速やかにご退場頂くつもりです」

私の話を吟味しつつ、右手を睨みながら唸ったキャスターは、最終的には私のやり方に従う事にしたようだった。

「……………はあく、なら最後に、これだけは聞いておこう。アンタがこのタイミングで新たな英霊を欲しがった。その本当の目的理由は何だ？」

嘘や偽りの回答は許さない。とばかりに、キャスターの双眸に凄味が増した。明らかに変貌したその雰囲気、殺意は感じられないまでも、限りなく殺気に近い空気にあてられたのだろう。私の肩に乗ったフオウが、セーラーの襟に隠れるように、頭を潜り

込ませた。

「……………私、貴方みたいに勘の働く人は嫌いじゃないです。けれど、使い魔<sup>サーヴァント</sup>としては、欲しくはないです」

決して、彼に落ち度があるわけではなかったけれど、相性の問題なんて、大概そんなもんだらうとも思う。好き嫌いの感情はいつだって、一方的で曖昧なものなんだし。

「ふん、そうかよ。そいつあ、残念だ」

「白々しいですね。まあいいでしょう。お答え致します」

交錯していた私とキャスターの視線が、同時に特定の方角へと逸れる。

「三体目を無事に迎えられれば、ですけどね…………」

私の瞳には、百鬼夜行の如くに此方へと迫る。死屍累々の姿が映っていた。





「お嬢ちゃんは宝具が使えないんだろ？」

「つ、それは……」

急に話を振られる形になったマシユの肩が跳ねる。

「マスターは気にしていないみてえだが、サーヴァントなら宝具は使えるに越したことはねえ、オレでよけりゃあ、特訓に付き合うぜ？」

「本当ですか!?!是非!!お願いしますっ!!」

「ちよつと待って、私はマシユに——」

「マスター。お嬢ちゃんがこう言ってるんだ。少しばかり、寄り道しても構わねえな？」  
堪らず、両者の会話に割り込んだ私へと、キャスターの意識が向く。何てことはない口調だが、その声音には有無を言わせぬ強さがあつた。

(この男……)

「……純真なマシユをからかわないでくれる？」

固く握り込んだ拳が震える。どうにも感情が上手く纏まらなかつた。

「なに、ただの特訓だ。すぐに終わる。それにオレはキャスターだけ？治療なら任せておけ」

そんな私に気付いていたのだろう。すれ違いざまに私の肩に手を置いたキャスターは、そう囁いた。

\*

妙な小娘だと思った。第一印象見た目だけなら、地味でおとなしい美少女然としているが、その雰囲気は、オレが盾のお嬢ちゃんちゃんのケツを触ったあたりから、如実に刺々しいものへと変貌した。

いや、変貌っていうよりは寧ろ、こっちが素なんだろう。そんな最初の違和感には、裏の顔二重人格を邪推したが、どうにも腑に落ちない。そこまで考えて、オレはマスターとなつた少女を観察する。身体まだまだは貧相ガキだが、その姿形は確かに女だ。けれど、この仮初のマスターには、女のくせに女ではないような錯覚を覚えるのも、確かな事だった。それも、碌でもない類の男の影を――

『珍獣を見るような目で、私を見るんじゃないキャスター。あまりいい気はしない』  
(珍獣、ね)

突然念話で話かけてきた件の少女は、やはりと言うか、此方を視界に入れてはいない。無論、悟られるようなあからさまな動きをした覚えもない。それだけでも、少女を異質と断言するには、充分と言えた。

『存外、鋭いなマスター』

「おらっ!! 氣い抜くなよ、お嬢ちゃん!!」

「っ——!!」

『その言葉、そっくりそのままお返し致しましょう。キャスター』

「マシユ!! 見た目に惑わされてはダメよ。燃えていない個体のほうが、動きに隙がない」  
「はいっ!!」

そうして、指示を止めないマスターと、雑兵を誘導する手を緩めないオレの会話は、人知れず進んでいく。

『……………なあ、アンタ、人の上に立った経験は、今回が初めてじゃないだろう?』

『……………何故、そう思ったのですか?』

『いや、別に。理由なんて大それたもんはねえよ。ただ、アンタを見てたらなんとなく、そう思えただけだ』

的確な指示。というには、まだ粗削りだが、正確に状況を判断し、立ち回るマスターの姿には、荒事に慣れた空気を感じずにはいられない。それが仮に、危機的状況に陥つ

た事で開花した才能だとしても、板につくのが早すぎる。

『つまりは勘だと?』

『まあ、そういうことだ』

『キャスターの英霊なだけがありますね。流石の観察眼です』

『褒めんよ、照れんだろ?』

そこで念話のパスが途切れた。まるで、もう話す事はない。とでも言わんばかりに、だからこそオレは気付かなかつた。念話を切るその一瞬、マスターの仮面が剥がれていった事に。

「なんとなく……か」

「先輩ツ!？」

「いや、何でもないよマシユ。所長は援護を、左の個体は私が引き付けます」

「なっ……なんでこんな事になって——ヒイツ!!」

「所長っ!!」

(あつ、やつべ!!)

お嬢ちゃんの悲鳴に意識を戻される。オレとしたことが、マスターに集中しすぎて、不味い状況を作ってしまった。ただまあ、キャスタークラスはこういう時便利だからな。

「アンサー——」

「嘆く暇がおりなら、知恵を絞って下さりませんか所長!!」

が、俺が行動するより先に、白髪の女に迫った骸骨の腕が砕け散り、数瞬遅れてオレの業火がその個体を捉えた時には、マスターは女と共に既に退避を完了していた。

「あなたは順応しすぎなのよっ!!」

「バツカ、おまつ……ギリギリだったぞ今の、肝が冷えたわ!!」

瞬間、爆炎から庇われるように押し倒された女の叫びと、オレの怒号が重なる。

「……ッ、ハア。それは、こちらの、台詞、です。今のはどう見ても、貴方の監督不行き届きです。戦場を修練の場に設定する事が、どれだけ危険だか分からない貴方ではないでしょう!?!それとも何です? 貴方の目的は別にあるのでしょうか!?!」

対して、息を切らせたマスターは、手を貸そうとしたオレの手を払うと、金属バットを支えに立ち上がり、そのままオレを親の仇が如くに睨みつけた。

「……ああ、悪かった。確かにさっきのはオレの落ち度だ。言い訳はしねえよ。が、誓つて他意はねえ」

マスターの言い分は分かる。だから素直に否は認めるが——

「けどよ。正直なところ、お前さんが動かなくても間に合ってたぞ?」

続く、オレの発言に、何故かマスターは蠱惑的な微笑みを浮かべた。

「あら？それは心外ですね。貴方が私に見とれたせいで、人が死にかけたのですよ？自らの不始末を贖って、何がいけないのですか？あまり私を逆撫でしないで下さいませ？」

「……ハッ、なるほど。気付いちやいたが、アンタ相当屈折してんな」

「別に嫌なら嫌で結構ですし、その時はその時です。けれど、撒いた種はきちんと刈り取ってからにしてくださいね」

「まさか、寧ろ、その容赦女の強さのなさは買うぜ？」

「だがまあ、このマスター女の強さの場合、それは性格的な要因というよりも、環境的な要因からくるものだろうが。」

「今の会話のどこに喜ぶツボがあったのか、全く分からないんだけど!!」

「ご安心ください、所長。わたしにも何がなんだか……」

「……女を見る目がないのか、単に趣味が悪いのかは知りませんが。貴方、碌な死に方してないでしょう？」

三者三様に、繊細な容姿を持つ女達<sup>が</sup>感想を述べていく姿は、此処が戦場である事を忘れさせる引力を有している。

「さあ？どうだったけかな？」

そうして、図らずも戦場の乙女たちの興味関心の的となったオレではあったが……

「……にしても、これはちと集め過ぎたかねえ」

その事で悦ぶには、現場はあまりにもむき苦しかった。

\*

「限界、です——これ以上の連続戦闘、は——すみません、キャスター、さん——」

盾を支えに、マシユが荒い息を吐き、時折苦し気に咳き込んだ。だがそれもそのはずだろう。私と所長を庇いながら、文字通りにキャスターが焚き付けた骸骨兵の大群の殆どを、一人で相手取っていたのだから。

「こういった、根性論では——なく、きちんと理屈にそつた教授、を——」

「——分かつてねえなあ。コイツは見込み違いかねえ。まあいいか、そんな時はそんな時だ。んじゃあ、次の相手はオレだ」

「え——？」

「味方だからって、遠慮しなくていいぞ。オレも遠慮なしでマスターを……殺すからよ」  
そう低い声で宣言したキャスターの瞳に曇りはない。この男は自身の発言を曲げるような事はしないだろう。つまりは私と一緒に、非情になる時はいつそ清々しいほどに、徹底できるという事だ。

「っ……………!?!」

「なに言ってるのアナタ、正気!?!この訓練に彼女は関係ないでしょう!?!」

マシユの声にならない悲鳴と、震えの混じった所長の問いかけが響く中、私は何処か懐古的な安堵を覚え始めていた。

「サーヴァントの問題はマスターの問題だ。運命共同体だって言わなかったか、オレ?」  
研ぎ澄まされた鋭利な眼光で所長を黙らせたキャスターは、最後に私を視界に捉えた。

「おまえもそうだろ、マスター?お嬢ちゃんが立てなくなつた時が手前の死だ」

「いいえ、それは語弊があるわキャスター。私が倒れた時が全ての終わりよ」

「……………ああ、そうかよ。不器用な女だなアンタ」

「……………そういう貴方は酔狂な伊達男ですね」

合わせ鏡の様に、私とキャスターの口元が弧を描く。

「……………!!マスター……………下がって、ください……………!!」



「……マシユ」

「わたしは——先輩の足手まといには、なりませんから……!!」

そう宣言して、矢面に立ち盾を掲げる健気な少女の闘志が、私にはとても眩しく見えた。

「そうこなくつちやな。んじやあまあ、マトモなサーヴァント戦といきますかッ!!」

マシユの盾にぶつかり爆ぜた火球の火花を目くらましに、此方へと迫るキャスターは、どこか猟犬じみていた。

\*\*\*

冬木の心臓部、汚染された聖杯を守るかの様に一人の人物が居た。全身を隈なく漆黒の甲冑で身を固めたその者は、鎧と同色の剣を地に刺し、自身もまた、剣と一体となつたかの様に動かない。

ただし、夜の帳に溶け込む色彩を纏いながらも、兜を被らない事で晒された、色の白  
い中性的に整った面立ちと、時折吹く風に乱される金の頭髮が一際目を引く。年の頃は  
十代半ばと言ったところか。身体つきを見ても、まだ成長しきっていないように思われ  
た。が、そんな容貌に反し、威風堂々とした雰囲気醸し出すその姿からは、支配階級  
としての風格が滲み出ており、かの者が只者ではない事を知らしめている。

「寝首でも掻きに来たか？アーチャー」

瞬間、瞑想するように閉じられていた臉に彩られた金が微かに震えた。見開かれた瞳  
もまた、映える様な金である。物騒な内容を誰にともなく投げかけた声は、硬く尖つて  
はいるものの、重低音というには軽やかに辺りに響き渡った。

「……まさか。既に私はセイバー、君に敗退した身だ」

一抹の静けさの後、姿を現したアーチャーと呼ばれた白髪の男は、わざとらしく肩を  
竦めて自嘲気味に笑う。対して、セイバーと呼ばれた性別不詳の黒騎士は、相変わらず  
直立したまま、無粋な来客を咎めるように目を細めた。

「まあ、別に大した用ではないのだが、一応、耳に入れておくべきかと思つてね」

そんなセイバーの無言の圧力に、アーチャーは上官へと戦況報告をしに来た兵士のよ  
うに切り出した。

一見した限りでは、両者の力関係は体格差で勝るアーチャーに分があるように思える

のだが、事実とは時に想像を凌駕するものである。

少なくとも、元々は敵対関係にあったかのような彼らが、どのように今の形に落ち着いたのか、第三者が簡単に推し量れる類の代物ではなさそうであった。

「あの男の事か？」

「いや、新手だ」

「フツ、抑止力でも働いたか？」

「どうだかな。ただこの状況でハンデを背負って現れる抑止力など、物好きも面白いところだ」

どことなく、挑発するような口ぶりでセイバーが鼻を鳴らし、アーチャーはニヒルな笑みを浮かべると、皮肉るようにそう続けた。それはまるで、気心の知れた悪友同士が悪戯の計画を練るような会話であり、現に「ほう」と、感嘆の声を挙げたセイバーは、新しいおもちゃを見つけ喜ぶ幼子のように、伶俐な美貌を愉しげに緩ませている。

「……残念ながら仕留め損なつたよ。今頃、あの男が唾を付けているだろうさ」

しかし、セイバーとは対照的に、アーチャーは「あの男」の部分で、あからさまに眉を顰めた。心なしか、その口調もどこか刺々しい。

「雑魚が束になつたところで何になる？ 私は私のすべき事をするだけだ」

対して、アーチャーの様子に気付いているのかいないのか、セイバーは何処までも冷

ややかに嗤う。暴君のような宣言は、驕りよりも彼女彼女の自信の高さを感じさせた。

「負けず嫌いは結構だが、油断はするなよ。セイバー」

「他人の心配を出来るような立場か？アーチャー」

刹那、金の瞳と鷹の目が交錯し――

「それもそうだな。まあ、せいぜいオレはオレの出来る事をするさ」

そのまま、両者はすれ違う。そして、恐らくその道は二度と交わる事はない。そう予感させるには充分だった。

「……………アーチャー」

ふと、永別の空気にあてられたのか。振り返る事なく、セイバーがアーチャーを呼び止めた。

「なんだね」

アーチャーも微かに首を動かしただけで、振り返る事はしない。

「……………キヤスターによくと伝えておけ」

少しだけ間をおいて語られたのは、別れを惜しむにはあまりに簡潔な言伝。

「……………ああ、分かったよ。君も武運を、アルトリア」

だと言うのに、アーチャーの返答にはどこか、親愛を感じさせる響きがあった。

「……………因果なものだ」

来訪者の気配が完全に失せた折、彼の口から憂うように落とされたその言葉に、どんな意味が込められていたのか、誰にも知られる事はない。

\*

力量の差、決まり手の有無、加えて、攻守までもが判然としている戦いが、一方的な展開となるのは決まり切っていたようなものだし、連戦続きのマシユの体力の消耗が激しいのも明白だった。

「ハア——ハア——ハッ——!!」

「おう、そろそろ仕上げだ!!主もろとも燃え尽きな!!」

何より、悠長に獲物が弱るのを待ってくれるほど、キャスターは甘い男でもなかった。

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社——」

「あ——あ」

「倒壊するのはウィツカー・マン!! オラ、善悪問わず土に還りな——!!」

キヤスターが宝具を開帳する。焔にまかれた巨人が道連れを求めて迫りくるのを、私は他人事の様に眺めていた。去来した感情の中に恐怖は微塵もなく、ただ、美しいものを見たのだ。という実感だけが、意識の深いところを切り裂いた。

「ああ、ああああああ——!!!」

その瞬間、目も開けていられないほどの光が満ち、どこか遠く深い場所から、産声が聞こえたような気がした。それは生を叫ぶ魂の声であり、同時に死を獲得した確信を謳っていた。まるで、人間の不完全性から生じる無限の可能性を謳っているかのような悲鳴だった。

だと言うのに、だからこそ、私は思わずにはいられなかった。

間に合わなかったのだと——

光が収束し視界が戻ると、そこは変わらず焼け爛れた戦場でしかなく、唯一の違いと  
言えば——

「あ……わたし……宝具を、展開できた……んですか……?」

「——ヒュウ。なんとか一命だけはとりとめると思ったが、まさかマスターともども無傷とはね」

死体誰も死んでいないが増えていない事。ただ、それだけの奇跡だった。

「喜べ……いや、違うか。褒めてやれよマスター。アンタのサーヴアントになったお嬢ちゃん、間違いないく一等級の英霊だ」

「先輩……わたし、いま……!!」

キャスターの賛辞に、興奮気味に此方を振り返ったマシユは、何故か私と目が合った瞬間に、その表情を一変させた。

「……ええ、頑張ったわね。つて、マシユ?」

慌てて近づいてきたマシユの掌が、私の頬を拭うように包んだので、私は呆気にとられながら彼女を見返した。しかし、私の顔を不安そうに覗き込む彼女は何も言わない。ただ、その瞳の中に映る少女わたしの頬が濡れているのに気付いて、知らず閉口した。

そのままどれくらいそうして見つめ合っていただろうか、きつと、大した時間ではなかったとは思うのだけれど、私が何も言わないせいで、マシユが辛そうな表情を見せるのに耐えきれなくて、でも、何を話すべきか迷った私は結局、何も言わずにただマシユを抱きしめる事しか出来なかった。

鎧の下の彼女の細い身体は微かに震えていて、私は寝付けない幼子をあやすように、彼女の頭を撫で付ける。

「大丈夫、大丈夫よ、マシユ」

何が、とは口にしなかった。元々安全とは保障が効かないものだから。私の慰めはい

つだつて虚言そらごとに過ぎない。でも、残酷な真実よりは人様に好まれる代物である事は、うんざりするくらい知っていた。

「フオウ、フオー……フウ!!」

私の肩からマシユの肩へと移動したフオウも、私に加勢するように元気に鳴き、その声に背中を押されるようにマシユが顔を上げる。

「……その、すみません、有難うございます。お二人とも」

少しだけ恥ずかしそうに頬を上気させたマシユに、謝る必要はないのに。と、笑えば彼女の表情も幾分か軟化した。

それに伴い、静かに成り行きを窺っていた様子の外野からも、ちらほらと感嘆する声があがり始めた。

「……驚いたな、こんなに早く宝具を解放できるなんて。マシユのメンタルは、ここまで強くなかったのに……」

「そりゃあ、アンタのとらえ方が間違つてたんだよ。お嬢ちゃんはアレだ。守る側の人間だ。鳥に泳ぎ方を教えても仕方がねえだろ？鳥には高く飛ぶ方法を教えないとな」

得意げに、此方に同意を求めするように笑うキャスターには、文句を返したいのが本音だが、それは同時に、マシユの頑張りを否定する事にも等しい為に自重する。

「だがまあ……それでも真名をものにするには至らなかつたか」



ただ、彼にとってはイマイチ物足りない結果でもあったのか、その口調には歯痒さが滲んでいるようにも見える。

アレでまだ足りないとか、どんだけ脳筋なんだこの男は。素人目から見ても、現状の彼女では、アレで精一杯なのは明白である。

「あ……はい。宝具は使えるようになりましたが、まだ宝具の真名も、英霊の真名も分かりません……」

折角の感動的な出来事に、水を差すかのようなキャスターの一言で、マシユが申し訳なさそうに表情を崩した。

私も私で、こういう時に気の利いた言葉を思いつかないところ、大分コミュニケーション障を拗らせてるのを実感するなあ、挑発行為は得意なだけけど。

「……そう。未熟でもいい……仮のサーヴァントでもいい……そう願って宝具を開いたのね、マシユ」

すると、どこかしみじみとした口調で、独り言のように紡ぐ声が耳に届いた。

「あなたは真名を得て、自分が選ばれたものに——英霊そのものになる欲が微塵もなかった。だから宝具もあなたに応えた。あーあ、とんだ美談ね。御伽噺もいいところだわ」

「あの、所長……」

「その美談で私たち命拾いましたんですよ、所長」

良い事を言っている風だが、素直じゃないせいかな、今一つ場が締まらない。

「ただの嫌味よ、気にしないで。宝具が使えるようになったのは喜ばしいわ」

「そうですか」

「でも真名なしで宝具を使うのは不便でしょ。いい呪文スベルを考えてあげる」

そう言つて、しばし考え込んだ所長の表情は、どことなく複雑な感情を抱えているようにも見えた。

「宝具の疑似展開なんだから……そうね、ロード・カルデアスと名付けなさい。カルデアは、あなたにも意味のある名前よ。霊基を起動させるには通りのいい呪文でしょう？」

「は、はい……!!ありがとうございます、所長!!」

「ロード・カルデアス……うん、それはいい。マシユにぴったりだ!!」

「え——?」

組織の名をそのまま宝具に冠する事を許した所長にも驚いたが、何よりも、その事に疑問を抱かないばかりか、相応しい事だと推挙するドクターの言動も、私には衝撃的だった。

いくらマシユが古参のマスター候補者で、Aチームに籍を置く優秀な人材で、デミ・サーヴァントの成功例である事を鑑みても「花を持たせすぎでは?」という印象が否

めない。無論、彼女の働きには評価すべき点が多い事は理解しているが、これじゃ、まるで……

「そうなる、すぐに試したくなるのが人情だよね。キャスター、マシユの相手を頼めるかい？」

「ああ。もちろんだ。手加減していたとはいえ、さつきは完全に防がれたからな。先輩として、宝具のイロハを叩きこんでやるよ。準備はいいか、マスター、お嬢ちゃん？」

しかし、考えが形になるより先に、思考に割り込むように展開された会話に、意識を戻される。

「え——？ああ、うん。ほどほどにね」

「はい、先輩。では、キャスターさんお願いします!!」

喜々とした表情で修行を請う、可愛い後輩の姿を視界に収めながらも、私の心には言えない不安が渦巻いていた。

## 揃い始めたパズルのピース

「ほら、キリエライト。こっち、怪我をしているんでしよう。それぐらいなら治療できるわ」

「あ……はい、ありがとうございます。オルガマリー所長」

「やれやれ。所長も落ち着いていると頼りになるんだけどなあ……」

宝具の特訓を終えたマシユのケアを始めた所長を眺めながら、ドクターが嘆息する。私も概ね同じ感想ではあるが、マシユを癒す術を持たない私は、所長の治療行為には感謝しかない。

「ああ、そうだ、セツナさん」

「なんですか」

ドクターが所長から私に視線を動かし、私もマシユからドクターへと視線を移した。

「あの時、なぜ所長を？」

「……………」

「ボクなりに配慮して、マスターである君には、理解してもらったつもりだったんだけど」

その配慮はマシユへのものだろう。私は兎も角、心優しいマシユは、事実を知って平静ではいられなかつただろうから。

「……それは」

「いや、ごめん。君を責めるのはお門違いだね。まあ、マシユの事情を考えたら、責めるべきなのかもしれないけれど」

その口ぶりから察するに、やはりサーヴァントはマスターありきの存在らしい。それは即ち、私がマシユの命を握っているようなものである。マスターになったおかげで、私の命は私だけのものではなくなってしまった。

「他のマスター適性者は？」

「所長の指示で、生存者は凍結保存状態だ。つまり現状、代わりはきかない」

それは、なんて運の悪い事だろうか。氷漬けにされた彼らは勿論の事、よりにもよって、残されたのが私だとは。

「……そうでしたか」

「知らなかつたのか」

「ええ、情報の共有不足です。こちらの不備です。すみません」

ドクターに頭を下げると、彼は居心地が悪そうに後頭部を掻いた。

「しかし、マシユには私よりも優秀なマスターがふさわしいと思ったのは事実です」

「なっ——それじゃあ君は」

「ええ、浅慮でした」

「ツ!!そういう問題じゃないだろう?」

すつと、ドクターの視線が冷えた。お優しいお医者様の言いたいことは分かるが、今はまだ、その事で咎められる事に対する精神的な余裕を有していない。

「そんな事よりもドクター、所長の死は確定されているんですか?」

あからさまに話題を転換した私に、彼は渋面を作るも、現状を優先したらしく、追及してはこなかった。

「……残念なことだね。爆発の基点は彼女が立っていた場所なんだ」

「……そうですか。でも、ならばなぜ、彼女は私達と一緒に居るのですか?」

私の当然の疑問に対して、ドクターは視線を彷徨させた。それは何を話すべきか思案している風でもあったし、何から話すべきかを推し量っているようにも見えた。

「……………もともとマリーはキミたち同様、マスター候補の一人だったんだよ」

短くも長くもない逡巡の後、口を開いたドクターの語り口は、独白のようでもあり、回想のようでもあった。

「でね。三年前に前所長……彼女のお父さんが亡くなって、まだ学生だったのにカルデアを引き継ぐ事になった。そこからは毎日が緊張の連続だったんだろう。アニメス

フィアの家を背負う事になったんだから」

一応は私も、名家である。と、言う家の娘なので、家を背負う。という事には、それなりの理解はしているつもりだが、所詮は一族の道具でしかない私では、真の意味では所長の置かれた状況への理解は出来ていなかったのかもしれない。

「マリーはカルデアの維持だけで精一杯だった。そんな時、カルデア스에異常が発見された。今まで保証されていた百年先の未来が視えなくなつた。協会やスポンサーからの非難の声は山のように届いた『一刻も早い事態の収束を』それが彼女に課せられたオーダーになつたんだ」

そんな中、明かされていく所長の置かれていた状況と、課せられていた責務の内容は、呆れるほどによくある理不尽に満ちていた。

「加えて、ついていない事に、彼女にはマスター適性がない事も判明した。名門中の名門、十二のロードの一家、魔術協会の天体学科を司るアニムスフィア家。その当家がマスターになれないなんて、スキヤンダルもいとこだろう？どれだけ陰口を囁かれた事か想像に難くない。その声はマリー本人の耳にも聞こえていただろうね」

(……持つ者が、持たざる者を厭う事が多いのは、何処でも一緒か)

それでも、過ぎたる力を持つくらいならば、そんなものは持たぬ方がいい。とは思うのだが、そこは所長と私とでは背景が違うのだろう。

「そんな状況でも彼女は所長として最善を尽くしていた。この半年間、ギリギリで踏みとどまっていた。実際、キャパオーバーしているんで、メンタルケアに来てほしかったんだけど、中々都合がつかなくてね」

けれど、同情する気は微塵も起きなかった。

「……なるほど。気に入らないですが、彼女が一人でも、独りではなかったことが分かったので、良かったです。良い主治医と部下を持ったものですね。あとはそれを自覚しさえすれば良かったものを……」

まあ、自覚したところで、結果は変わらなかつたかもしれないが。

「……そう言つて貰えるとボクも嬉しいよ。現状、彼女について僕が話せる事なんて、こんな事しかないから」

「では、所長の身に起きた事を断じるには、判断材料が足りていないのですね？」

「……うん、まあ、そういう事になるのかな。なんて言うか、うまい言葉は見つからないんだけど、今の所長は剥き出しの状態なんだと思う。だから、えつーと、キミに辛く当たっているのも、別にキミを嫌っているからではなくて——」

「ドクター、それ以上は要らぬ世話です」

他人が私を嫌うのは、正しい節理なのだから。

「そう？あ、でも所長は悪人だよ？ただ外道とか残忍とか、クズとかゲスじゃないのは保



証できる。根は何処までも真面目だから」

「そういう人ほど病むんですよね」

「……違いだね。まあ、ともかく、今頼れるのはキミたちだけなんだ。喧嘩せず、仲良く調査を続けてくれ」

「善処します」

「キミの『善処します』ほど、信用ならないものはないかもね」

「よく、人を見ている人ですね。セクハラで訴えようかな」

「また、そうやってキミは」

「冗談ですよ」

溜め息をつくドクターに笑い返しながらも、思わずにはいらなかった。この状況もそうやって、冗談で済めば気が楽なのに。と――

「傷の具合はどう?」

「あ、先輩」

「大したことじゃないわよ。マシユの身体はもう普通の人間とは違うんだから」

「私はマシユに尋ねたのですが……」

「わりいなあ。オレがランサーとして召喚されていれば、こんな特訓なんてしなくてもセイバーなんざ一刺しで仕留めていたんだがね。いやあ、やつぱりキャスターは合わないわ。冬木の聖杯戦争でキャスターなんてやってらんねえつての」

ドクターとの話を終え、マシユの元へと戻った私を迎えたのは、キャスターの思いがけない一言だった。

「ランサーだったら……?」

「そういうコトもあるんですよ、先輩。英霊の中には複数のクラス特性を持つ者がいます。この人は槍の使い手でありながら、魔術師の側面も持つ、高レベルの英霊と思われるます」

「そうなの?」

「……憶測にすぎませんが、きつとトップサーヴァントの一人です。妖精情報誌にも載っているような」

ワイガイアン

「そういうこつた」

「それはまた大層な自信がおありのようで……」

「まあな。んで？それでもアンタは、新たな英霊を必要とするのか？」

そう私へと問いかけたキャスターの口調には、まだどこか不満そうな響きがあった。

「……そうね。考えは変わらない。寧ろ必要性が増したわ」

「……そーかい」

強情なことと、と、小さく呟いたキャスターは、それきり傍観を決め込む事にしたらしく、フードを被り直すと辺りの警戒へと戻る。その後ろ姿からは、彼なりの氣遣いと線引きの姿勢を感じられた。

「という事で所長。後は貴女の許可を頂きたいのですが」

「あなたね、何考えてんだが知らないけど、触媒もなしに英霊を召喚しようだなんて、無謀にもほどがあるわよ」

マシユの傷の具合を確かめながらそう言えば、治療の手を止めないままに、所長の文句が返される。

「そうなんですか？私は今、サーヴァント発祥の地で英霊を召喚しようとしているんですよ。もしかしたら、もしかするんじゃないですかね？」

ダメ元でも試す価値は大いにあると思う。

「……ああ、もう分かったわよ。失敗して恥かけばいいんだわ。マシユ。貴方の盾を地面に置きなさい。宝具を触媒にして召喚サークルを設置するから」

私の意志の固さに、議論するだけ無駄と思ったのか。溜め息を一つついて、所長はマシユへと指示を出した。

「……了解しました。それでは始めます」

治療を終えたばかりのマシユが、十字の盾を平たい地面へと横たえる。するとその盾の中央に光り輝く魔法陣が出現した。

これには、私は勿論の事、戦場で武器を手放すのは感心しない。と、愚痴を溢したキャスターですら閉口する。

「マシユの盾を媒介に、カルデアの召喚実験場と同じ機能を構築してある。それと、魔法陣の中央にあるそれは、聖生石と言って、英霊の召喚を補助する……まあ、いわば対価のようなものかな」

「対価？」

ドクターの言をうけ、魔法陣の中央に目を凝らせば、眩い光に照らされた、林檎くらいの大きさの、金平糖のような形をした虹色の結晶が目に入る。

「ロマニ!? あなた希少な聖生石を——」

「まあまあ、所長。落ち着いて下さい。いつ襲われるかも分からない状況で、セツナさん

に「から詠唱を覚えてもらおう手間を考えれば、聖生石の一つや二つ安いものでは？」

「そうだとしても、原石を使う必要はないでしょう!?!しかも、あれ40個分の価値はあるわよ!!」

ドクターを睨んだまま、魔法陣を指差した所長の身体は、怒りによつてか、細かく震えている。

「いやだつて、この状況ですし……ぶつちやけ、加工が追いついてないです」

「なあにが『追いついてない』ですかッ!?!どうして前もつて準備を——」

青筋を立てた所長が、怒りを爆発させようとしたその瞬間、ドクターと所長の眼前に小さな火花が散り——

「なっ——」

そのまま、驚きに仰け反つた所長の腕を取つたのは、大きく無骨な男の手だった。

「喧嘩する元気があんのはいいけどよ。英霊を喚ぶなら万全を期すに越したことはねえだろ」

それに……と、キャストの視線がマシユを捉える。

「いつまでお嬢ちゃんから商売道具を取り上げているつもりだ?」

ん?と首を傾げたキャストに、全員の視線がマシユへと移る。

「アンタらの事情は知らねえがよ、それは戦場で兵士から武器を取り上げていい正當な

理由となり得るものか？」

それは、下手な脅しよりも残酷な問いかけだったろう。マシユが丸腰の状況で襲撃に遭う事が、どれほどリスキーな事か分からないほど、お気楽な人間はここにはいない。

それに、誰だって、他人の生き死にに責任を負いたくはないものだ。

「そうだね。詳しい説明は省こうか。兎に角、あとはセツナさんのラック値が全てだ」

「……………そうですか」

キヤスターの脅迫に、素直な反応で私を促したドクターを、ヘタレと言うのは酷だろう。

「キヤスター」

「あ？」

「ナイフか何か持っていたりしませんか？」

敵方にアーチャー襲われるか分からないが残っている以上、この状況を長引かせることに利点などない。だから私も、払える代償は今ここで払う事に決めた。

「……………ある事にはあるが」

「貸してください」

「ほらよ」

「どうも」

どこに隠し持っていたのかは知らないが、キャスターは刃渡り20センチほどの短剣を取り出すと、私へと差し出してくる。

「好きに使い」

「……理解が早いようで助かります」

それだけに、敵に回したくない。と、思うには十分な男でもあった。

「なるほど、その手があったか」

「えっ?」

「あー、そういう事」

「どういう事です?」

私とキャスターのやり取りを、自分達なりに解釈したのか、所長とドクターの納得したような呟きと、一人、置いてけぼりをくらう事となったマシユの、困惑した声が耳に入る。

「ん?つまりセツナさんは、キャスターの備品を触媒にして、彼に縁のある英霊を召喚しようと考えているんだよ。味方を喚ぶわけだし、知り合いを喚んだほうが、チームワークも見込めるしね」

「見かけによらず強かよね。全く」

「流石、先輩ですね」

「流石、軟弱男が考える事だけあるぜ」

が、両者の推測は、キャスターの一言によって一蹴された。

「へっ？」

「ちよつと、それどういう意味よ」

呆けるドクターに対し、自分の意見でもある為か、所長が抗議の声をあげる。

「はあく、あのなあ、オレの知り合いが味方だって、どうして決めつけられる？ それに——」

キャスターたちの会話に耳を傾けながらも、魔法陣の中央、聖生石を見下ろすように立った私は、目を瞑ると深く息を吸い——

「触媒に、わざわざナイフを指定する必要性は、なんだ？」

「あつ……」

「まさか……」

「せんば——」

「なあに、マスターなら大丈夫だ」

右手に握った剣の柄を、強く握り直す。

「アレはアンタらが思っている以上に、強かな女だからな」

言ってくれる。と思いがながらも、不思議とそこまで悪い気はしなかった。



「無覚悟な小娘なわけじゃねえ」

その瞬間、私は左手に包んだ抜身の剣を、躊躇うことなく引き抜いた。

※

満足に生きて満足に死ぬる人間ばかりじゃない事は、生前から散々、思い知つてはいたが——

「フオウ、フオーウ」

今際の際に、嬉しそうに笑つた少女の姿は、遠く懐かしい記憶の中に残る。一人の孤高なる女王の姿と、どことなく重なつて見えた。

(……全く、簡単な女なんていないとは思うが。どうしてこうも、オレが出会う女は、その中でも複雑怪奇なのばかりなのかね)

最も、諦観の中に幸福を見いだす事でしか、己の生死に活力を抱けない奴なんて、オ

レが知らないだけで、案外、何処にでも居るのかもしれないが。

「フオウ……」

「もう、寝かせてやんな」

少女の頭部から離れようとしないう小動物を摘み上げる。異変を感じたのも、その時だった。

「……げ、て」

「あ？」

聞き間違いかと思ったのは、ほんの一瞬――

「離れてッ!!」

「なっ――!!」

次の瞬間、死んだはずの少女が、瞠目と共に声を張り上げた事で、反射的に距離をとった俺は、目の前の光景に、ただ、ただ、息を呑んだ。

「おいおい、こりゃあ一体、何がどうなってるんだ？」

少女の脚から流れ出た血が蠢いている。それも恐らく、少女自身の意志に反して。

「ど、おして――」

それを裏付けるかのように、驚愕と形容するには、少女の陶器のような顔は苦痛に歪み

「な、んで——」

漆黒の瞳には絶望が色濃く広がっている。

「あ——」

と同時に、失血死が確実視されていたはずの、少女の青白い顔には、少しずつだが確実に、生気が戻り始めている。

「やめ、や、やめて……」

だと言うのに、その表情には相変わらず恐怖しもなく、それはこちらが近付くのを躊躇ってしまうほどの壮絶さを孕んでいた。

「いや……おねが……やめっ……やっ——」

唐突に、嫌だ、嫌だと首を振り、うわごとのように懇願を始めた少女のか細い身体は、不気味なほどに痙攣している。

その只ならない必死さに、介入しようと思つた矢先

「アあ、アアあ、アアアあ、アアアアあ、ア——！！」

断末魔よりも酷い、怨嗟にも似た絶叫が辺りに響き渡つた。

白目を剥き、のたうちながら仰向けになつた少女の身体は、手足だけが地に磔られたかのように動かない。それでも懸命に、何かから逃れようとしているのか、弓なりに身体が浮く。

そんな少女の切り裂かれた脚の傷口へと、逆再生される映像の如くの勢いで、血液が吸い寄せられていく光景からは、拷問じみた醜悪さすら感じられた。

「……マジかよ」

魔術刻印が少女を生かそうとしている。と、言ってしまうえば、それまでなのだが——  
「……ふっ、ふふ、あはっ、あははは、ははははっ——や……や……や……」

傷が癒えると同時に、目元を両手で覆い壊れたように嗤った少女からは——

「……おい、アンタ」

「……あら？ 貴方は……サーヴァント？」

冷たい狂気しか感じられなかった。

「……そういうアンタは、マスターだな？」

「ふふ、ええ。なんの因果か、そういう立場よ」

何が可笑しいのか、少女は楽しそうに口角を歪めるも、漆黒の瞳は凍てつくほどに冷めている。

「それで？」

「あ？」

「この状況は、どう解釈するのが的確かしら？」

依然として仰向けに倒れたままの少女が、こちらを試すかのような問いを寄越してく

る。それは答えようによつては、面倒な事になる気配を纏っていた。

「……取り引きしねえか？」

「取り引き？」

「ああ、アンタのその力」

瞬間、少女の顔から表情が抜け落ちる。

「オレに貸して——」

「お断りよ」

素早く立ち上がった少女は、俺の発言を撥ね付けると、その瞳に明確な殺意を宿して、此方を見据えた。

「おいおい、勘違いすんなよ。オレが借りたいのはそつちの力の事だ」

「……どういう意味？」

少女の地雷がイマイチ分からず、扱いづらいつらいつらと感じてしまったが、そんな理由で引くには惜しい。と、思ったのもまた事実で、俺は彼女を逆撫でしないように、その右手の甲を指差した。

「端的に言えば、マスターが欲しい」

「……………へえ、そう。それで？その対価として、貴方は私に何をしてくれるのかしら？言っておくけど、私は自分を安く売るつもりはないわ。例えそれで、自分が死ぬ事に

なったとしてもね」

その言葉に嘘はないだろう。下手に刺激したら舌を嚙んで死なれそうな雰囲気すらある。確かな事は何も分からないが、多分さっきのアレは、少女にとつての知られたくないもの、もつと言えば、他人に知られてはならない類の何か。だったのかもしれない。「……そうだな。オレがアンタに提示出来るのは三つ。一つアンタの身の保証。二つアンタに対する不可侵。三つアンタへの恭順」

「フオウツ!!」

親指、人指し指、中指と広げながら提案を投げれば、フードに隠れた小動物が、オレに味方するように鳴き声をあげた。

「……………一つ目と三つ目の変更を認めるのなら、その取り引きに応じます」

そうして、しばし考えこんだ少女からの返答は、まさかの提案の変更願いだった。

(ガードの堅い事で)

まあ、そんな事を言ったところで、どうなるものでもないので、俺は肩を竦めながらも首肯する。

「聞こう」

「私には既に盾があるの、だから貴方には、その盾に対する盾となつて欲しい」

「アンタのサーヴァントの守護をしると?」

「そうよ」

「そりやまたなんで？」

白兵戦に向いていない英霊

三騎士のクラスではない。という事だろうか？まあ、オレみたいな例外もいるが

「貴方なら、彼女に会えば、すぐに分かるわ」

「ふうん、で、もう一つは？」

「私は忠誠というものが好きではないの。そういったものに応えるように出来てないのよ」

「ごめんなさいね。と薄く笑った少女の顔は、酷くやつれて見えた。

「だから、そうね。三つ目の条件は………仲間に合流した時の口裏合わせを求めるわ」

「具体的には？」

「私が生き長らえてしまったのは、自力ではなく、貴方のおかげ。って事にして欲しいのよ」

(なるほど)

「出来そうかしら？」

「つまり、他言無用って事か」

「そうよ、もしうっかり漏らしたりしたら、その時は心中しなきゃならないから。よろしくね」

「アンタ程の美人となら、心中すんのも悪かねえだろうが、ま、そういう訳にもいかないわな」

「フオウ」

女の秘密を知ったからには、腹を括るかね。

「いいぜ、条件はアンタの言う通りにしてやる」

「決まりね。そうとなれば早速、一つ目の約束を果たして貰おうかしら」  
差し出した右手に重ねられた少女の手は、氷の様に冷たかった。

\*

「つ——」

「先輩っ!!」

「駄目よ、マシユ。召喚式の邪魔になるわ」



私の凶行に、此方へと駆けようとしたマシユを、所長が押しとどめる。

(……失敗したわ。掌じゃなくて、手首にするんだった)

それを横目に、私はその場にしゃがみ込むと、血だらけの手を聖生石に翳す。

「なんとというか……黒魔術じみてるなあ。まあ、尤も、一般人の彼女から見た魔術のイメージって、ああいう感じなのかもしれないけど」

虹色の結晶が鮮血で染め上げられていくのを見てドクターの顔が引き攣る。その隣では、キャスターがフードの下から鋭い眼光を覗かせた。

(……さて、鬼が出るか蛇が出るか)

真つ赤に染まった石を見つめながら、ふと思う。

(そう言えば、ここは冬木と言う名の都市だったっけ?)

それもまた、一つの因果かもしれないな。と思いながら、私は口を開いた。

\*

「……盲……鬼……血……香………終………刃………穢………角………百………贄………八………」

マスターなりに詠唱でもしているのか、ブツブツと呟く声が風に乗って流れてくる。魔術師とは似て非なるロジックで紡がれる文言には、知的好奇心をくすぐられるが――

「忘………じ………此方………忘………ら………其方………時は彼は誰、誰そ彼」

何よりも驚いたのは、マスターの詠唱に呼応するように、魔法陣が光を発し始めた事だった。

「っ、先輩!!」

「……嘘、で、しよ」

「………こんなことが」

（まったくだ。まさか、有言実行とはな）

「恐ろしい女だぜ」

身体に走る震えは歓喜か怖気か、どちらにせよ、この少女と居ることで退屈する事はなさそうだった。

「即ち、逢魔が丑三つ」

凡そ、少女のものとは思えない。低く、厳然な声が、その時を告げる――

「サーヴァント アヴェンジャー 母を呼んだ我が子はだあれ？」  
膨大な光の奔流。その中で、一人の美しい女が、微笑んだように感じた。

## 運命の夜 表

「サーヴァント アヴェンジャー 母を呼んだ我が子はだあれ？」

発せられた言葉は可憐というには壮美であり、尊大というにはあまりに柔和な響きを有していた。

「<sup>ひい</sup>、<sup>ふう</sup>、<sup>みい</sup>……まあ!!愛らしいお嬢さんが三人も!!」

女性としては長身と言えるだろう体躯と、露出はないものの、豊満な身体のラインに沿った淡い灰色のロングドレスは、貞淑さや淫靡さといった相反するものを兼ね備えているようでもあり、花嫁でありながら、未亡人であるかのような矛盾をも感じさせる。「けれど、この場所はよくないわね。死の臭いに満ちているわ」

ドレスと同色の被り布で覆われた頭部が揺れるのに合わせて、多頭竜を思わせる小さな銀のティアアラが煌めく。それは辺りを一通り眺め回した後で、特定の方向を向き止まった。

「貴女が母の我が子ね<sup>マスター</sup>」

文字通りに神秘のヴェールに包まれた女性は、私の正面へと流れるように進み出ると、陶器の様に滑らかな手を、慈しむようにこちらへと伸ばした。

「ええ、私はセツナ。よろしく、アヴェンジャー」

染み一つない手を取り握手を交わせば、林檎カモに似た爽ミやかな甘酸ルっぱい香のりが鼻腔をくすぐった。

「……セツナ。不思議な響きのする名前ね。とても素敵だわ」

噛み締めるように私の名を反芻したアヴェンジャーの顔は、被り布と宵闇のせいで、はつきりとは見えなかったが、ほころぶように目を細める気配を確かに感じた。

「で、早速で悪いんだけど、事態の收拾に力を貸して貰えないかしら」

「……ええと、貴女は？」

焦れたようにあがった所長の声に、アヴェンジャーの意識が逸れる。

「私は、オルガマリー・アニメスフィア。貴女のマスターの上司にあたるわ」

「まあ!!そうでしたか、それは失礼を。ええと、オルガマリーとお呼びしても？」

「何だっといういわよ、好きに呼びなさい」

「ではそのように」

初対面にしては、かなり失礼な態度と言えるだろう所長に対して、アヴェンジャーは始終寛大な対応である。位の高さを感じさせる女性であるのに、そこに傲慢さは欠片もなく、その姿はまさに淑女のそれだった。

「あの、ミセス?アヴェンジャー、質問をしてもよろしいでしょうか?」

「ええ、可愛らしい盾のお嬢さん」

「かわつ……あ、いえ、その、アヴェンジャーというクラスは、どのようなクラスなのでしょうか？」

そんな中あがったマシユの問いを聞き、私も我に返る。思い返せば、所長からうけた英霊の説明には確かに、アヴェンジャーというクラスは存在しなかった。

「そうねえ、実のところ、母もよくは分かっていないの」

「はあ？何よそれ!?そんなんで、この特異点を勝ち残れるの!?!」

「……恥ずかしながら、聖杯戦争に呼ばれたのは、これが初めてなものですから」

所長の癩癩に「申し訳ないわ」と、身を縮こまらせたアヴェンジャーは、とても戦いに向いている英霊には見えなかった。しかし――

「なら、アンタは聖杯に何を願う?」

鋭く響いた男の声に、場の空気が一変した。

瞬間、私を守護するように身を翻したアヴェンジャーは、ドレスの裾を捌き、踵を力ツン!!と打ち鳴らした。すると、それが合図となったのか、彼女の足元から一陣の突風が吹く。それは、ヴェールを被って尚、隠し切れないでいた彼女の美貌を、白日の下に晒すのに一翼を担った。

「盗み聞きとは無粋な。どこの手の者です?」

宝石のような灰紫の瞳を<sup>すが</sup>眇め、静かに辺りを索敵したアヴェンジャーの視線が、彼の輪郭を捉えるのに、そう時間は要さなかった。

「挨拶もなしに問いを投げかけるのが、貴方のお国の流儀なのかしら?」

アメジストグレーの剣呑な輝きはそのままに、アヴェンジャーは只の暗がりに向けて、剣を振るうように言葉を並べ、盾を掲げるように微笑みを浮かべる。美しさこそが最大の武器だと言わんばかりに。

「……ほう、俺の気配遮断を看破するたあ、見かけによらずやるな、アンタ」

やおら、姿を現したキャスターは、値踏みするような視線をアヴェンジャーの肢体に這わせ――

「ふふ、お気に召して頂けまして?」

煽るようなアヴェンジャーの台詞に眉を顰めた。

「……………アンタ、いったい何者なんだ」

対峙しているだけなのに、キャスターとアヴェンジャーの纏う空気には、余人が入り込めるような余地などなく、それは息をする事さえ憚られるほどの気迫だった。現に所長は場の雰囲気にあてられてか腰砕け状態で、厳密にはこの場にはいないドクターでさえ生唾を飲み込んでいる。仲裁のタイミングを逃したマシユはと言えば、引き攣った表情で、私に助けを求める様な視線を寄越してきた。

「……………その質問に答える前に一つ、確認をさせて下さらない?」

そんな、気が狂いそうな時間を終わらせたのは、アヴェンジャーの涼やかな美声だった。

「あん?何を——」

「我が子」

眉間の皺を深くしたキャスターが言い終わらぬうちに、アヴェンジャーはキャスターから視線を逸らすと、身体ごと私へと向き直る。そして——

「何?」

「彼は、我が子の駒のうちの一人なのでしょう?」

嘆くでもなく、怒るでもなく、彼女は私にそう問いかけた。

(あー、これは敵わないわ)

聖母のような眼差しを前に、感情より先に本能が白旗を挙げた。

「……………あく、うん。捨て駒第一候補、かな?」

「なるほど、駄犬ね」

「おい!!マスター!!オレは至って真面目にソイツを警戒してんだけど!」

「しかもよく吠えるのね」

「それ以上言ったら流石にキレルぞ?」



私とキャスターのやり取りに茶々を入れながら、くすくすと少女のように笑ったアヴェンジャーは、元の穏やかな雰囲気へと戻ると――

「母を騙試したのですから、これくらいの意趣返しは甘んじて下さいな。キャスター」

その一言で殺気だったキャスターを黙らせた。

『マスター?』

『私は話してないわ』

途端に、警戒を強めたキャスターからの念話が響く、私の返答を聞いたキャスターは、それこそ苦虫を噛み潰したように顔を歪ませた。

「何故、オレがキャスターだと?」

そうして素直に敗北を認めながらも、敗因を明らかにしようとする辺り、キャスターはそれなりに負けず嫌いである。

「本物の暗殺者であれば、母には感知できないでしょう。ですが、貴方の視線は確かに感じ取れた。そこから、アサシンではないのに気配遮断じみた真似が出来そうなクラスは何であるか? を考えた結果」

「一番可能性が高いと思つたのが、キャスター魔術師だつたと」

「ご明察の通りです」

良く出来ました。と言うように、目を細めて微笑んだアヴェンジャーの様子は、さな

がら、息子を褒める母親のようである。が——  
「端っから、アンタの掌の上だったつうわけか」

「いいえ、それは語弊がありますわ。貴方が声を発さなければ、その分気付くのの時間に有したでしょう。ですから、そう嘆く事はありませんよ。今回はたまたま、相手が悪かつただけです」

「そりやあどうも。お互いに、今回は味方同士で助かつたなあ？」

キャスターの方は絶賛反抗期もかくや、といった様相だった。実際の力量差は不明ではあるものの、見た限りでは精神的にはアヴェンジャーのほうが上手なようである。

「にしたって、あの状況で敵に背を向けるのは、豪胆と褒めれるもんじゃあねえな」

「ええ、確かに、貴方の殺気は本物でした。けれどそれは、母個人に向けられたものであつて、決して、我が子に向けられたそれではありませんでした」

「その推測が外れる可能性は考慮しなかつたのか？」

「その時は潔く、されど執念深く。子を守る為の盾となり矛となる覚悟でおりました」

「賛同はしかねる理論だな。命を賭して主を守ろうとする気概は認めるが、それは尽くせる手段を尽くしてから選択するもんだらう？ 手前が死んだら、その後の主の面倒は誰が見るつてんだ？」

「それは、貴方のように生まれながらにして英雄とされる存在にのみ通用する理論です。

手段を巡らす暇も与えられずに、暴虐の憂き目に遭うしかなかった者にとつては、始めから差し違える覚悟でおらねば、守りたいものを守り通す事など到底できません」

そう語る二人の英霊の価値観や立場、置かれていた状況はきつと、真逆と言つてもいほどに違うのだろう。けれど、どちらの意見も、私には酷く重く響いた。

「それと我が子」

「なっ、何？」

心の底から湧き上がった陰鬱な感情に気を取られ、完全に虚を突かれた私は、アヴェエンジャーの優しくも厳しい視線に閉口する。

「背に隠した左手を見せなさい」

そうして鼓膜を震わせた窘めるような声音は、泣きたいくらいの寂寥感と共に、私を咎めて離さなかった。

\*

「戦場において鮮血とは蜜のようなもの、戦うモノに否が応にも興奮をもたらします。特に此度の様に狂った戦場では尚の事、魔の物は血の香に敏感に反応するように出来ているのですから。無用な争いを招かぬ為には傷付かぬ事が肝要です」

マスターの左手に巻かれた赤いスカーフを丁寧な手つきでほどきながら、滔々と語ったアヴェンジャーの言う事は、正しいだけに不気味だった。

(その血に喚ばれたアンタは何者だっただ)

今のところ、敵対の意志は見せていないが、女って生き物は大なり小なり狡猾に出来ている。それがいけないとは言わないが、用心するに越したことはないだろう。

「キヤスター」

「なんだ」

「我が子の傷を癒して下さいませんか」

「……なんでオレが？」

その問いに、アヴェンジャーは傷口を眺めたまま口を開いた。

「口惜しい事に、母はこの傷を癒す事が出来ません」

マスターの手から溢れた血が、アヴェンジャーの手の甲を伝い滴り落ちる。

「……分かった」

「感謝いたします」

アヴェンジャーと場所を変わり、マスターの左手に回復のルーンを刻みながら、分かった事を整理する。少なくとも、アヴェンジャーには他者の傷を癒す術はなく、マスターの能力は致命傷にしか反応しないようだった。

「こんなところか」

「ええ、支障はないわ。魔術ってほんと不思議ね」

完治した左手を何度か開閉したマスターは、その表情を少しだけ愉しげに緩めた。

「コホン。話が済んだのなら、どこか安全なところに移動しましょう。ここじゃあ落ち着かないわ」

「そうですね。ドクター、わたしたちの居る今の位置から、一番近くにある。頑丈そうな建物は何処になりますか？」

「頑丈そうな建物って言われてもなあ……あつ、学校」

「あゝ、そういうや近くだな」

わざとらしく咳き込んだ白髪の女の提案に、堅実的な意見を述べた盾のお嬢ちゃん、軟弱男の会話に、学び舎の存在が浮き彫りになる。

「キヤスター、知ってるの？」

すると、そんなオレの発言が意外だったのか、傍らでこちらを見上げる黒曜の瞳が、微

かに見開かれた。

「まあな。安全かどうかはさておき、オレのクラスには、お誂え向きだろうよ。尤も、オレのやり方には向かねえんだが……どうするかはアンタが決めな」

「決まってるでしょそんなの、場所が分かるのなら案内を任せます」

「オレはマスターに聞いたんだけどな」

「なっ、わたしは貴方のマスターの上司よ、上司!!」

いや、それお前さん向いてねえぞ。いろいろと

「こりゃあ、また難儀なのを上司に持ちこたな。マスター?」

押し黙ったままのマスターに同意を求めるも、彼女は心ここにあらずという感じで、整った顔を曇らせている。

「先輩、大丈夫ですか?」

「ちよつとロマニ、きちんとバイタルチェックはしているの?彼女の顔色、通常より良くないわよ」

「えっ?!あ……うん、これはちよつとまずいね。突然のサーヴァント契約だったからなあ……恐らく、使われていなかった魔術回路しゅじゅくがフル稼働して、脳に負担をかけているんだらう」

「ならば、休息が必要ではなくて?」

再び被り布で顔を隠したアヴェンジャーが、その薄布越しにこちらを見やる。

「はいはい、わあつたよ。案内すりゃあいんだろ?」

その視線を振り切るように、オレは杖を消すと同時に漆黒の少女を抱き上げる。そしてお互いに眉を顰める事となった。

「何してるのかしら? キャスター」

「何って途中で倒れられたら面倒だからよ、にしても予想以上に軽いな」

「見た目ほどヤワじゃないわよ。私」

その表情を忌々し気に歪めてマスターは文句を言うが、今の彼女が放つには余りに説得力に欠ける言葉である。

「キャスター、貴方に悪気はない事は分かりますが、女性に対して断りもなくそういう事をするのは、褒められるような事で——!!」

そんなオレに対するアヴェンジャーの非難の言葉は、形になるより先に驚愕の表情へと塗り替わった。

「どうかしたの?」

怪訝そうなマスターの問いには答えずに、アヴェンジャーは一度だけ後方の空を仰ぎ見ると——

「……………この気配。つくづく、この身に流れるは、不幸の因子とみえる」

感傷的に激した。

「アヴェンジャー？」

「いえ、なんでもないわ。母は我が子を守るだけよ」

少しだけ不安そうに己を呼ぶマスターへと振り返ったアヴェンジャーは、何かを決意するように、オレの腕の中で浅い呼吸を繰り返す少女の頬を撫でる。

「……………例え、己が血筋に仇なす事になろうとも」

地を這うような声音で告げられたその言葉に、腕の中の黒曜が静かに揺らいだ。

\*

「どう、いう意味？」

私にしては酷く震えた声だった。それがどんな感情から生じた震えかなんて、分からなかったけれど、何かとても恐ろしい事が起きようとしているのだ。という予感があっ



た。

「——!!悪いけど、話はそこまで!!みんな直ぐに移動するんだ!!」

しかし、焦燥した様子のドクターの叫びに、私の質問は上書きされる。

「ええ、話は移動しながらにしましょう。失礼を、オルガマリー」

「えっ?ちよつと、なんで私まで抱きかかえられているの!?!」

「暫し、口を閉じていなさい。舌を噛んでも知りませんよ」

急展開に狼狽える所長を、厳しい声音で叱咤したアヴェンジャーは、キャスターと目配せを交わすと同時に走り出し——

「お嬢ちゃんも、はぐれねえように、しっかり付いて来い!!」

「分かりましたっ!!」

キャスターの掛け声に、一瞬遅れながらも、マシユが並走する。

ここまで緊迫した状況となれば、熱に浮かされたように働かない頭でも予測は立てられた。

『敵はライダー?』

『流石に、聡いな。話す手間が省けて助かる』

『そんな事は今どうでもいいでしょう。で、どうするの?』

本音を言うなら、何故仕留めていないのか?を問いたいところだが、そうして彼を責

められる状況でも立場でもない事は分かっている。私はそれ以上の言葉を嚙む。

『取り敢えずは見つからねえ事が一番なんだが、場所が悪かったな』

『……そのようね』

苦々し気なキャスターの口調に、私は後方で進む、とてつもなく大きな光源を視認する。瞬きのうちに、翼の生えた巨大馬のような形となったそれは、まだこちらには気付いていないようだが、条件の悪い事に、今の私達が駆ける道に、これと言った遮蔽物はなく、見つかるのが時間の問題であるのは明白だった。

「キャスターさん!!敵サーヴァントの真名は、ご存知ですか!？」

並走するマシユが、表情を硬くしながらも、闘志を絶やさぬ瞳で、キャスターへと問う。

「ありや、ギリシヤ神話に名高い女怪メドューサだ。クラスは見ての通りの騎兵で、騎獣は奴の子である有翼の早馬。神獣クラスのバケモンだ」

「……なるほど。女性のようだから、ペルセウスにしては可笑しい。とは思ったけれど、まさか母親のほうだったなんて……厄介そうね」

メドューサとはまた、なかなかのビッグネームである。神話において、彼女を討ち倒したのは半神の英雄だが、その彼をしても、神々の助力なしでは危うかった。というように描かれ方をしているというのに、コレ勝てるの?詰んでない?というか、そんなメ

ドューサを負かしたという、まだ見ぬセイバーは何者なわけ？

「安心なさい、我が子。力量はどうあれ、母親としてならば、母のほうが強いわ」

「まあ、アレだ。槍兵クラスじゃあねえのが惜しいが、魔物殺しなら得意分野だからよ」  
そんな私の心中を知ってか知らずか、アヴェンジャーは気高さの滲む微笑みを浮かべ、キヤスターに至っては、あのメドューサを蜥蜴か蛇ぐらいの脅威にしか見ていないかのようだった。なんなのこの人達、英霊ガチ勢かよ。

「あつ、あなたたちねえっ!! そんな余裕たっぷり話してないで、早くアイツをどうにかする算段を——ヒイツ!!」

どうやら所長も同じ感想を抱いたようであつたが、彼女は涙目で喚きながら後方を振り返ると、引き攣つた悲鳴をあげて、そのまま気を失ってしまった。

と同時に、後方から微かではあるが、確かな重圧を感じる。まさか、所長——

「チツ、気付かれたか、奴の目には石化の効力がある。オレたちだってアレは、それなりにヤバいんだ。マスターは絶対に振り返るんじゃないやあねえぞっ!!」

メドューサが何故恐ろしい怪物と名高いのか、その最たる理由に挙げられるのが、見たものを石に変えてしまうとされる、その瞳であろう。

並走するマシユも、その事に思い当たつたのか、白皙の顔が青くなっている。

「……キヤスター、母に考えがあります。ただし、それは命がけです」

そんな絶望的な空気を裂くように、アヴェンジャーが覚悟を感じさせる声で、ある提案を投げた。

「……ハッ、いいんじゃないの？ 賭け事は賭け金が多いほうが燃えるつてもんだ」

「……貴方なら、そう言つて下さると思いました」

吐き捨てるように返したキヤスターに、アヴェンジャーは感謝するように目を伏せる。

「ですがっ!! それじゃあ!!」

「盾のお嬢さん、貴女には我が子の盾になつて貰わねばならないの……ごめんなさいね」  
対してマシユは、今にも泣き出しそうに顔を歪め、アヴェンジャーは諭すような優しい口調で彼女を宥めた。

「だからと言つて、独りでアレを相手取るとはどういうつもり？」

「身を呈して子を守るのは母の責務よ」

何を<sup>それ</sup>が<sup>答</sup>え<sup>だ</sup>。と言つかのようなアヴェンジャーの真剣な表情に、思わず私も言葉を失う。

「あく、さつきから聞いてりゃ、今生の別れみたいな雰囲気出しやがつて」

「キヤスター」

「悪いなマスター、オレがランサーならもつと楽に済んだし、アンタの事も不安にさせな

かったんだがよ……つくづく、槍が欲しいぜ、まったく」

キヤスターの私を抱く手に力がこもる。それは腕が鬱血しそうなくらいだった。

「まあ、なんだ。アンタの母ちゃんは、オレが責任を持って、アンタのところに返してやるからよ。だから泣くなや、な？」

「……いつ、私が泣いたんです？心配してくれた事については素直に感謝をしますが、あまり私を失望させないで下さいね？キヤスター」

「うっわ、絶妙に可愛くねえ」

「そんな事はありません!!キヤスター!!我が子はとっても可愛い娘です!!前言は撤回して下さい!!」

「ああもう!!私の顔面偏差値とか性格云々については、この際どうでもいいから!!」

私は笑う。不器用ながらも精一杯に

「\*\*\*\*\*」

その言葉を合図に、キヤスターは十字路の手前で火球の弾幕を張る。そうして私達は左へと進み、アヴェンジャーだけが直進した。

## Blood will have blood

走れども、奔れども、振り切る事が叶わぬものを、なんと名付けたらよいのだろう。

「取り敢えずは、危機を脱した。つてところか」

辛うじて、原形を留めている。といった様相の民家の物陰で息を吐く。偽装工作が功を奏したのか、ライダーはオレ達には目もくれず、アヴェンジャーの後を追った。ひとまずは、その事に安堵しながらも、囨となったアヴェンジャーを思えば、どうしたつて後味は悪い。

「安全そうなら、一度降ろしてくれないかしら？」

「そうしたいところだが、まだ心許ない事には変わりないから却下だ。出来るだけ、距離は稼いでおきたいしな」

「……それもそうね」

依然として片腕の中に収まったままの華奢な主に言い返せば、彼女はその空虚な瞳を、逆サイドで同じようにオレに抱かれている気絶したままの白髪。少し離れた場所で見守る警戒しながらも肩で息をする盾の少女。という順で移動させた。

「大丈夫、マシユ？」

尋ねる声音は驚くほどに平静で、そこに不調は微塵も感じられない。但し、立ち振る舞いでは偽りきれない蒼白の顔色や呼吸の早さが、如実に真実を物語っている。

(こりゃあ、嵐が過ぎるのを待つしかないかね)

本気ではなかったとはいえ、オレとお嬢ちゃんの交戦では、マスターがここまでの消耗を見せる事はなかった。ある程度の心理的な負荷を鑑みるとしても、アヴェンジャーがライダー相手に苦戦を強いられているだろうことは明らかだ。加えて――

「はい、大、丈夫です。なので、早く、アヴェンジャーさんの救援に……」

(お嬢ちゃんまで、この有り様じゃあなあ……)

盾の少女のほうは、アヴェンジャーを囷にした事で心理的に参っているようだった。まあ尤も、オレと出会ったばかりのマスターの状況が、アレだったのを思えば、何かし

らのトラウマを刺激されたのだろう事は分かる。分かるが、だからこそ、優先順位を履き違える事は許されない。アヴェンジャーの献身を、尊いものに昇華出来るか否かは、今のオレ達の行動に掛かっているのだから。そして――

「……気持ちは分かるけど、彼女は覚悟の上でしょう」

少なくともマスターは、それを弁えた上で甘んじてはいない。盾の少女を見据える整った横顔は、冷徹に状況を理解していた。

「それはッ、そう、かもしれないませんが、でもッ!!」

「正直、こうしている時間も惜しいわ。真に彼女を思うなら、私達は打倒セイバーに向けての行動を起こすべきよ」

表情一つ動かさず、アヴェンジャーを切り捨てる事を宣言した漆黒の少女は、生殺与奪権マスターを握る者としては厳しすぎ、そんなマスターを茫然とした顔で見つめる盾の少女は、戦う者サイヴァントとしては優しすぎる。ただ一つ、両者に共通しているのは、その在り方が、己の手で奪った命に対して、心を寄せてしまう類のものである事だろう。

(ほとほと、難儀な主従だ)

でもだからこそ、オレは口を挟まずに、少女達の心の赴くままに、事態を任せる事にする。

「……良いんですか、それで」



「そもそも、サーヴァントは死者なのでしょう？あるべき形に戻るだけの話よ」  
「先輩はツ!!それで、納得できるんですか!？」

しかし、どうにもこのマスターは、己の盾には弱いところがあつた。

「……はあ、分かつたわ、マシユ。そんなに言うのなら、貴女に選択を委ねます。これから私が言う事をよく聞いて、5秒以内に結論を出しなさい」

目頭を押さえて溜め息を吐いたマスターは、伶俐な面立ちを引き締めると、一拍の間の後に口を開いた。

「まず救援に向かうのはキャスターだけよ。つまり、貴女はその間たった一人で、私と所長をその他の脅威から守り通さねばならない」

静かだが気迫に満ちた声音は、鼓膜を突き刺すように震わせる。

「加えて、彼等が無事に戻ってくる保証だつてない。最悪、私達だけでセイバーとアーチャーの二騎を、ともすればライダーもかしら。相手取らねばならなくなるわ」

そうして、張りつめる空気の中、黒曜と紫水晶が睨み合い――

「貴女に、その覚悟はある?」

懐剣を撫でるかのような問いが投げられた。

\*\*\*

「ハハハハハハッ!!ドウシタノデス?私ヲ欺イテクレタノデスカラ、モウ少シ、楽シマセテ頂キマセントツ!!」

(くっ……我が子の手前、ああは言いましたが、可能な限り、あの子達には頼らず宝具は使わずに、やり過ごしたいものです)

最愛ママスターの娘をキャスターへ託し、ライダーの脅威を一身に受けて駆けながらも、アヴェエンジャーの胸中は驚くほど凧ひらいでいた。なぜなら、今のアヴェエンジャーは生前に出来なかつた、悔やんでも悔やみきれなかつた事を、実行に移せているのだから。

(例え、殺されようとも、殺させてなるものですかッ!!)

生前、アヴェエンジャーの愛する子供達は、そのほとんどが、英雄を作る材料として利用された。敬愛せし夫の面影を色濃く受け継いだ、強く逞しい子供達が、他人の下らぬ見栄の為に殺されていったのだ。各々がただ、ただ、懸命に生きていただけだというのか。何故、我が子らは殺されなければならなかつたのか――

『アンタは聖杯に何を願う?』

嘶きと共に、天馬がその蹄を振り下ろす。もう何度目になるか分からぬその猛攻を、辛うじて避けながらも、アヴェエンジャーのドレスには赤い染みが増えていく。

「フフ、イツマデ、ソウシテイラレルカ、見物デスネ」

完全に遊ばれている上に、余波だけで傷つく己の身体の脆弱さには、呆れ果てるしかない。

(きつと、あの子達も。こんな思いをしたのでしようね)

今更、そんな答えを知りたいなどとは思わない。傲慢にも、幸せな頃に戻りたいなどと、世迷言を吐くつもりもない。けれど――

「遅イデスネ」

失望にも似たライダーの嘲笑に、アヴェエンジャーは齒噛みし、ドレスの背面、大胆に大きく施されたひし形のカット。そこから、一対の黄金に輝く翼を現した。

「……母を、侮らないで下さいッ!!」

次があるなら、もう二度とあんな思思いはしたくない。それがアヴェエンジャーの、ただ一つの願願いだった。

\*

「先輩は一つ見落としています」

私がマシユへと与えるハズだった5秒は、彼女の即答という形で突き返された。

「見落とし？私がいっただい何を見落としたと言うの？」

私の詰問に、マシユは穏やかに表情を緩め、何故かキャスターは喉の奥で笑う。

「先輩だって、本当は分かっているハズですよ？分かっている、分からないフリをしている」

「な、にを言って……」

和やかなマシユの言葉に、私は困惑するしかなかった。だってそうじゃないか、そんな奇跡が簡単に起こるわけがない。だって私は――

「キャスターさんとアヴェンジャーさんが、ライダーを斃して戻ってくる可能性だって、きつとあるはずですよ」

「……それは」



ワイ コワ——…ア、レ？ワタ⑤ニ コンナ感じよウ ユ☒サ☒テゐタツ⑥？)

「ドウセ、ミンナ、殺<sup>死</sup>シチヤウ<sup>ジャ</sup>クセ<sup>ウ</sup>ニ、何ガソ<sup>ノ</sup>ンナニ怖イノ？」

ああ——、そうだね。死なない命はないものね。

「……スター、おい、マスター。大丈夫か？」

「……………え？何が??？」

唐突に呼ばれた事で、私はマシユからキャスターへと眼球を回す。

「……………いや、大丈夫なら、いいんだけどよ」

そう言いつつも、私と視線のかちあつたキャスターは、釈然としない表情を晒したまままだ。

「変なの」

「……………わりいな。きつとオレの気のせいだ。それより、結局どうすんだ？」

その余りに間拔けな表情に、私が笑い返すと、彼も元の快活な笑顔で返した。それを確認して、私も元通りに表情を引き締める。

「私は、口にした事には責任を持つタイプ人間よ。というわけで、キャスター。後は頼めるかしら?」

「……それが、アンタの命ならば」

ぞんざいな問いかけに、以外にも丁寧な手つきで私を腕から降ろした男の顔付きは、既に血の気の多い猟犬のそれへと切り替わっている。

「結構」

ならば往け、そして存分に暴れて来るがいい。

無言のまままで交わした視線が「是」と、赤い軌跡を残して走り去った。

\*\*\*

「チツ、流石ニ飽キテキマシタ。ソロソロ、死ンデクダサイ」

キャスターに踊らされた事が腹立たしかつたライダーは、眼前のサーヴァントを擦り



切れるまで攻め抜いて、絶望しきった表情をした瞬間を、コレクションに加えてやるつもりでいた。だのに、敵はボロボロになりながらも、未だに戦意を失う気配を見せない。それがライダーを酷く苛立たせる。

「フツ、お恥ずかしくはないのかしら？」

「何ガデス？」

加えて、丁寧なくせにどこか侮蔑的な口調と、無邪気で無慈悲な声音が、ライダーに姉達の記憶を思い起こさせた。

「あら、まさかお気づきでないの？ 自らの技量の無さが為に、母を屠れずにいるという事実に」

「ッ!!」

瞬間、激昂したライダーが馬上から投擲した鎖付きの短剣は、アヴェンジャーの背から生えた一对の翼に打ち払われる。そして――

「残念です」

淡々と落とされた吐きが、何よりも鋭くライダーの胸を抉った。

私が、なんだと？

その余りの屈辱に、ライダーの長髪は蛇の様になり、石化の魔眼は凍る。

だが、依然として己が優勢であるのは変わらない。加えて、次の瞬間には地の利まで

もが、ライダーに味方した。

「……オヤ？逃ゲルノハ ヤメタノデスカ？」

どこか、懐かしい。鉄筋とコンクリートで造られた建築物。日中は多くの生贄で溢れるその学び舎の屋上へと舞い降りたアヴェンジャーは、観念したのか背筋を伸ばすと、被り布越しに上空のライダーを見据えた。

「……ええ、わたくしは、貴女からは逃げられませんか」

「フン、始メカラソウシテイレバ、ソノヨウナ醜態ヲ晒ス事モ、ナカツタデシヨウニ、愚カナ」

今のアヴェンジャーの姿はまるで、お色直しをした花嫁のような変わりようだった。灰のドレスは、所々が破れ裂かれ焼け焦げ。布地は殆どが鮮血で深紅に染まっている。極めつけに、その足元に散った金の羽が無様で滑稽だった。よくもまあ、こんな姿になるまで、生き足掻けるものだ。と感心すら覚える。その生き汚さを捨てる事なく、校内まで逃げ隠れていれば、更なる蹂躪のし甲斐があつたものを。と、冷たく仄暗い怒気が、手綱を震わせた。しかし――

「……ただ、勘違いはなさらないで下さいまし、母は怨敵を逃がしませんツ!!」

刹那、アヴェンジャーの宣言に呼応するように吹き荒れた暴風に、ライダーは水晶の瞳を見開く、そして――

「ツ!! イイデショウ。ナラバ、コチラモ遠慮ハシマセンツ!!」

竜巻の盾の中、こちらを嘲るように破顔した女の姿を捉えた。

「無様ニ碎ケ散リナサイツ!!」

瞬間、ライダーは宝具を開帳せんと声を挙げ、それに同調するように、天馬が一際大きく嘶く。

「騎英ペルレの——」

「寵愛レイズベル宣誓——」

互いの詠唱が綺麗に重なり、魔力が高まっていく、全てが終わった時、転がる死体は己か敵か諸共か。全てが今、決まろうとしていた。

「手綱フオーンツ!!」

「怪王ティボエウス睥睨ツ!!」

流星の如き突貫、ライダーは声に出さずに絶叫した。

—— 生贄は貴様だ。

\*\*\*

マスターの命を請け疾駆しながら、群青の魔術師は、灰紫の淑女との会話を思い返していた。

※※※

「……キャスター、母に考えがあります。ただし、それは命がけです」

「既に危機的状況なんだが？」

「そんな事は分かっています。言ったでしょう。これは賭けだと」

騎兵に追い立てられながらも、アヴェンジャーの瞳は死んでいない。その姿勢は敵の正体が神話に名高き女怪だと知れて尚、揺らぐことはなく、正しく彼女を英霊足らしめ

ている。

「どうするつもりだ」

「……母の目にも魔力が備わっています」

キャスターの応答に、アヴェンジャーは明言を避けつつ、己が能力の一端を提示した。「それが仮に、ライダーの魔眼に対抗できる代物だとしても、宝具をどうにかしない限り、話になんねえだろ」

対して、キャスターは何処までも懐疑的に唸る。神話的に考えるなら、敵の魔眼は知名度も威力も最高峰に位置すると言っても過言ではない。アヴェンジャーを貶めるつもりはないが、相手が別格過ぎるだろう。加えて、騎獣まで召喚されてしまっているとなれば、拮抗出来るとは到底思えなかった。

「ええ、ですから、母は時間稼ぎに徹する事になるでしょう。ライダーを斃せるか否かは、貴方の協力と判断に委ねる形になりますが、この賭けに負けたところでどう事態が転ぶにせよ、目下のところ、失われるのは母の命一つで済みます。勿論、タダでやられる気もありませんが」

しかし、キャスターの懸念した事をアヴェンジャーが織り込まない筈もなく、その覚悟を知った今、キャスターに言える事など、何も無いに等しかった。

「……ハッ、いいんじゃないの？賭け事は掛け金リスクが多いほうが、燃えるつてもんだ」

「……貴方なら、そう言ってくれればいいました」

気に入らなくとも、そうする事が、アヴェンジャーの誇りを守る戦いだと言うのなら、キヤスターにはそれを否定できるはずもなかった。ただ――

「ですがっ!!それじゃあ」

「盾のお嬢さん、貴女には我が子の盾になって貰わねばならないの……ごめんなさいね」  
「だからと言って、独りでアレを相手取るとはどういうつもり？」

「身を挺して子を守るのは母の責務よ」

淡色と漆黒の色彩の少女達は、口々にアヴェンジャーに向けて難色を示す。そんな二人へとアヴェンジャーは穏やかに応対した。黒紫の鎧と十字の大盾。という仰々しい見た目に反して、繊細な少女には、美しい微笑みで答え。華奢な身体に、張りつめた糸のような精神性を垣間見せる、頑なな少女には、固い決意を説く。その思いは、見開かれた紫水晶と伏せられた黒曜を前にして尚、変わる事はなかった。無論、それがどれほどの残酷さをもって彼女達を傷付ける事となるのか、分からないアヴェンジャーではないだろう。ただ――

「母は怨敵を逃がしませんッ!!」

鼓膜を破らんばかりの、激情のままに叫ばれたと分かる悲鳴が、アヴェンジャーにとつての恐怖がなんであるかを物語っていた。

\*\*\*

翼の生えた白馬、ペガサス。ゴルゴーンの怪物の亡骸から生れ出た美しい天馬。しかして彼は、その出自に能わず。背に英雄を乗せ、彼らの側に立ち戦ったとされている。尤も、それが彼自身の意志によるものだったのか否かは、当事者達以外の知るところではない。ただ、英雄たちの補助役としての武功を重ね、名を残しながらも、彼がその身体に流れる怪物の血に苦しまなかったか？と聞かれれば、それは嘘になるだろう。

「——ソノ、眼ハツ!!」

何故なら、今の彼が背に乗せているのは、己の母親へと至る女。そして——  
「言つたはずですツ!!逃がさぬとツ!!」

相対する女は、かつて己が殺めた怪物の母であるのだから。

「——ツ!!今ですキヤスター!!」

「任せなア!!」

彼女達が己を駆り立て、狩り殺そうとするのは道理だろう。

「ナツ——」

瞬間、不自然に途切れた声と、背中を濡らす生温い液体に、天馬は敗北を悟る。召喚者が消えた事により、徐々に保てなくなる身体を知覚しながらも、最期まで彼はアヴェエンジャーを見つめていた。

\*\*\*

「ま、こんなもんかね。にしても……」

奇襲を成功させたキャスターは、ライダーの心臓を貫いた血まみれの杖を回すと、なんとも言えない表情で、重たい息を吐いた。

「これも、槍兵の性かね。まったく、難儀なのはオレも同じじゃねえか」

やんなるねえ、とぼやきながら屋上へと上ったキャスターは、フェンスに捕まる事で、



どうにか立っている様子のアヴェンジャーの姿に苦笑する。

「大丈夫か？」

「……ええ」

そんな、キャスターの問いかけに、俯いていた顔を上げると同時、アヴェンジャーの頬を赤い雫が伝う。

「……本当だろうか？」

これには流石のキャスターも面食らったようで、訝しむように眉を顰め、アヴェンジャーは、己の頬を濡らす血涙に、たった今気づいたかの様に目を見開いた。

「……そう、ですね」

頬を拭うのに合わせて、フェンスを握っていないほうの手に巻いた赤いスカーフが風になびく。魔物を釣るのに、少女の血の香は有用だった。

「本音を言えば少し、堪えました。親類に弓を引くのも、我が子の仇を討つのも……守り通した事も、全てはじめての経験だったもので……混乱しているようです」

気持ちの整理がつかないのだ。と吐露したアヴェンジャーは、疲れたように笑ったが、次の瞬間にはその表情を元の穏やかな美貌へと塗り替えた。

「ただ、今は早く我が子の顔を見たいです。なのでキャスター、恥を承知で、貴方にお願いがありません」

「へいへい、治療魔術かければいいんだ——」

「母に血を分けて下さい」

「はあ!？」

「その方が効率が良いです」

「いや、効率って、アンタな」

確かに、魔力の塊であるサーヴアントの一部を取り込めば回復は容易だろう。キャスターがアヴェンジャーの傷を癒すのに必要とする魔力も、自身の傷を癒すのに必要なだけに抑える事も出来る。ただ、それはあまりに邪道なやり方ではないだろうか?とキャスターはアヴェンジャーを睨む。

「母が守りたいのは我が子であつて、貴方の主義ではありません。ご理解を」

対してアヴェンジャーは、詫びるように目を伏せた。

「……………ケツ、やつぱり魔性の類かよ。どうりで妙に感じたワケだ」

「……………ええ、女ですもの。それに母も貴方の事は好きになれそうにありません。その身に染みついた血の臭いには憎からず、同胞のものが混じっているようですから」

「そんな男の血を欲してまで、アンタが生にしがみつくのは何でだ?」

咎める風ではなく、純粋な興味だと分かるキャスターの声音に、アヴェンジャーは泣き笑いの様に表情を崩す。

「何、簡単な事です。母は子の全てを守りたいのです」

命を守るだけでは飽き足らないのだ。とアヴェンジャーは言う。それは余りに傲慢で、真摯な望みだろう。

「……救いよしのねえ女」

血の香と共に、しみじみと返された言葉に、アヴェンジャーはやはり、穏やかに笑ったのだ。

## 疑心

「死なないで生き抜いて」と願うばかりの生だった。だから、自分がそれを言われた時は嬉しさよりも衰しさ愛しさが募った。

\*

「……………んう、あれ？わたし……………」

「気が付かれましたか、所長。であれば早急にどいて頂けると嬉しいです。流石に脚が痺れてきま——っ!!勢いよく起き上がれ、とは言っていないのですが!？」

「こっちの台詞よっ!!目の前に幽霊みたいな顔があったら、誰だって驚くでしょうがっ!!」

こちらを覗き込む存在に驚き上体を起こしたため、お互いの頭が鈍い音を立ててぶつかった。額を抑えて悶絶しながら、強烈な目覚めに対する抗議を叫ぶ。どうやらわたしは彼女の膝を枕に横になっていたようで、同じように痛みに柳眉を顰めたイモリは、溜め息を吐くと疲労の滲む表情でこちらを見返した。

「ともあれ、元氣そうで何よりです。気分はどうですか？ 状況は分かりますか？」  
「全くもって最悪の気分よ、わたしが気絶している間に何が起こったの？」

ふらつきながらも立ち上がったわたしは、そのまま辺りをぐるりと見回す。段々と覚醒していく五感が、充満する焦げくさい臭いと、肌を震わす淀んだ冷気を伝えてくる。ここは半壊、或は半焼した建物の内部のようであり、キャスターとアヴェンジャーは霊体化でもしているのか姿が見えない。確認できるのは背後から近づく小さな足音と前方で盾を掲げる華奢な後ろ姿だけである。

「アヴェンジャーを餌にライダーを撒いて、その後にキャスターをアヴェンジャーの救援に向かわせました。なので、今の私達の手元に残った戦力はマッシュのみです」  
「戦力を二分にしたって事？ 振り出しに戻ってない？」

耳元でささやかれた吐息に身震いする。この瞬間を、残りのサーヴァントに襲われでもしたらと思うと、いい加減、平静でいられなくなりそうだった。

「最悪は、その可能性もありますね」

「つ、分かっているなら、どうしてそんな暴挙に出たのよ!?信じられない!!」

「賭けはスリルを楽しむものですから」

「はあ!?!」

私の驚嘆に、何故かマシユへと黒曜を逸らす少女、その漆黒に宿る感情は、相変わらず読めそうにない。

「人間は死ぬ時は簡単に死ぬものですが、生き長らえる時は無駄にしぶといものです。まあ要するに、なるようにしかありません。大袈裟に怯えるのは、無為に精神を削るだけなので、お勧めしませんね」

「なっ……………」

まるで、そうする事が当たり前であるかのような口ぶりで、彼女は薄く笑う。命がかかっていると言うのに、どこまでも淡々としているその態度は、言い様のない不気味さを醸し出していた。

(本当に、なんなの、この子)

「……………怖いわ」

「所長?」

「……………なっ、何でもないわよ。それよりこれからどうするつもり?」

「そうですね。とりあえずは移動しましょう。マシユ」

イモリに呼ばれたマシユが振り返る。不安げな瞳が継るように、こちらを見据えた。「キヤスターさんとアヴェンジャーさんは？」

「彼らを待つ必要はないわ」

そう言つて民家を出て行く背中に、わたしは困惑し、マシユは唇を噛みながら従う。空気が震えたのもその時だった。

「喜びなさい、マシユ。貴女はこの賭けに勝つたのだから」

それは、わたし達に驚く間も、歓喜する暇も与えずに——  
「よお、お嬢ちゃん。一人でよく頑張つたな」

「ああ、良かった。皆、無事ですすね？」

最後に見た時と寸分たがわぬ姿のまま、そこに居た。

\*

「……満足です。所長がドライフルーツを隠し持つているなんて、改めてその周到さに舌を巻きました」

「たまたま所持していただけよ。頭痛には柑橘系が効くのよ」

淹れたての紅茶の香りが湯気と共に辺りに漂う。カルデアからの補給物資は休憩を兼ねた作戦会議を誘発させた。

「それで、キャスター。大丈夫なんでしょうね?」

二騎の帰還とライダーの撃破に、ささやかな祝杯としてあげられたダージリンの香りに息をつきつつも、微かに混じる鉄錆の臭いに意識を逸らされる。

「ああ、さっきのドンパチにも反応しないところをみるに、バーサーカーのヤロウは最早いねえのと同じだ。問題は、オレがヤツを仕留める早さとお嬢ちゃんの根性、あとはアヴェンジャーがセイバー相手にどこまでやれるかに全てが掛かっているだろうな」

各々が確認し得た情報を精査した結果、バーサーカーは当初の予定通りに無視し、アーチャーにはキャスターを、セイバーにはマッシュとアヴェンジャーをぶつける方向で話が固まりつつあった。ゆえに――

「つくづく、おとなしい狂戦士なようね。最早、本当に居るのかも怪しいレベルだわ」

仕掛けるタイミングは、今しかなかった。

「……何が言いたい」



カチャリと茶器が音を立てると同時、困惑と苛立ちの混ざったような視線が、私へと刺さる。

「いい機会だから、貴方の問いに答えておきましょうか。キャスター」

「問い？」

掌のソーサーへと置かれたティーカップ、その水面に映る自分の表情に感情はない。

「アヴェンジャーを召喚した理由についてです」

「……………我が子？」

私の言葉に、視界の端でマシユ達と談笑していたアヴェンジャーが、不安そうに振り返った。

\*

「ああ、そーいや聞けていなかったな？」

一瞬にして白けた空間に、オレの声は不気味なほどによく浸透した。と同時に、獲物に照準を合わせるかのような闇色の視線と、音もなく少女の背にすり寄った魔性の無言のプレッシャーに、とてつもなく嫌な予感を覚える。

「いや、だとしても、今更だろ？ 決戦前にほじくり返す必要があるとは思えねえんだが？」

一体何を考えてやがる。と存外に問い掛けてみるものの、彼女達のスタンスは変わる様子はない。一つ救いをあげるとするなら、オレと同じように、残りの三人も状況に付いていけていない様子である事だろうか。

「端的に言わば、私は貴方を警戒しているのです。キャスター」

そんな状況を愉しむかのように少女は笑う。威嚇と言うには限りなく戯れに近い表情と声音だったが、だからこそ、それが彼女の本気なのだ。と、オレは分かってしまった。(意味も分からなければ、避けても通れないときたか)

どんな腹芸をするつもりかは知らないが、その動機はなんとなくだが予想はつく。オレを見据える少女の瞳には、戦場のアヴェンジャーと同じ、自己を顧みない闘志が溢れている。ほとほとマスターには向かない気質だ。最早、惜しいとも言える。

(まあ、仕方ねえか。元来、女にもマスター運にも、余り恵まれた試しはねえしな)

裏切りも回りくどいやり方も好かないが、そうしなければならぬワケがあるのなら

理解はしよう。許容するかは別として。

「理由を訊いても？」

「……まずドクターとの最初の会話で貴方が言った。前口上は聞き飽きたから結構。という台詞に引つかかりを覚ええました」

「どうしてですか？」

意外なきっかけに、オレが疑問を言うより先に、盾の少女が反応する。

「……生前にそういう立場にあつたのか、それとも英霊となつてから積んだ経験からなのか、で解釈が違ってくる気がしたの」

そんな彼女へ向けて、補足の言葉が続けたマスターは、一瞬だが苦い表情を浮かべたように見えた。しかし、それは顔をこちらに戻すと同時に消えてなくなる。

「次に、冬木の聖杯戦争でキャスターなんてやってられない。とも言つた。それはまるで、冬木の聖杯戦争を一度経験したうえでの……だから、最初の疑問は英霊になつた後で聞き飽きたのだと受け取れる。加えてランサーのクラスに覚えがあるような発言。ここまで言えば、私の醜く飛躍した猜疑心でも少しは真実味を帯びるでしょう？」

マスターが順を追って淡々と状況証拠を挙げ連ねるに従い。周りのオレを見る目が変わり始めた。その視線に浮かぶのは畏怖や警戒、困惑と落胆の色である。

「……ちよつと待ってくれ、つまり……セツナさんは、彼がキャスターを騙つて……」

？」

「ええ、カルデアの技術は彼をサーヴァントであると断定はしても、クラスを特定するに及んではないわけですし、可能性としてはゼロではないかと」

「そんなツ、訳が分からないわ!!何の為に、そんな事をする必要があるのよ!」

「……アサシンだと思っていた存在、ランサーに見えていた存在、ライダーと決めつけていた存在、姿を見せないバーサーカー及びセイバー、不自然に手を緩めたアーチャーと推測される者からの射撃……唯一、正しいままに生き残っていると主張し、キャスターを名乗る。やけに甲斐甲斐しい貴方。どうにもこの戦場は、きな臭い事がいっぱいであるわ」

驚愕に声を震わせた男女を、狂乱の奈落へ突き落とすように肅々と述べながら、マスターは流麗な所作で紅茶を口に含むと「すっかり冷めてしまったわ」と愚痴を溢した。

(……コイツ)

悠然とした少女の態度に、そうと分かっているても苛立ちを覚えてしまう。ここは素直に彼女の挑発に乗った方が楽そうだった。

「……そこまで頭が回るんなら、疑いをかけている相手に赤裸々過ぎねえか?」

冗談半分で返した言葉に、マスターの背後から怒気を孕んだ明確な殺意が膨れ上がり、茶器の碎ける音が辺りに響き渡った。

\*

「動くなッ!!」

背に感じた殺気に、私は右手の茶器を地面へと叩きつけながら叫んだ。と同時に、水平に挙げた左腕からは、悔しそうなアヴェンジャーの体温が伝わってくる。

「……あくまでも、私は話し合いをしたかったのであって、殺し合いをしたいわけじゃない。履き違えてくれるなよ」

キヤスターを睨んだまま、私は猛り狂うアヴェンジャーを宥める。思わず表に出た私の素に、驚きからかキヤスターが目を見張った。

「弁明を、キヤスター」

しかし、怒りに震えるアヴェンジャーの感情は収まる気配をみせない。どうやらキヤスターは、アヴェンジャーの禁忌に触れたらしかった。

「やはり、貴方も英雄らしく、我が子を手にかけるのかッ!!」

「落ち着いて、アヴェンジャー」

激情に身を焦がしたままのアヴェンジャーは、蛇の威嚇音にも似た鋭い吐息を繰り返している。正直、この状況は誤算だった。但し——

「……貴方の疑問は尤もです。キャスター、ですが、後顧の憂いを断つには、今ほどに絶好のタイミングはないのではないかと？とも思いましたので、それに——」

最悪の予想が的被がわざと私達に近づいた敵だとすれば中していたとすれば、アヴェンジャーの憤怒は誤算無駄にはならない。

「羊の皮を被った狼ならば、疑われた時点で終わっています」

「疑われる事も計算づくだとしたら？」

瞬間、空気が凍り、ギリリ。と、アヴェンジャーが奥歯を噛みしめた。

「……ああ、ごめんなさい。言い方が悪かったわ」

心が冷えていくのを感じながら、私はアヴェンジャーを制止していた左腕を下ろす。

「考えてもみて下さい。あんな出会い方で、私が貴方を疑わなかったとお思いですか？」

私の微笑に「確かに」と肩を竦めたキャスターは、合点がいったと言うように、私からアヴェンジャーへと視線を移した。

「要するに、お前さんはセイバーと戦う為ではなく、オレに対する抑止力として、アヴェンジャーを召喚したわけか」

「……ええ、少なくとも自分で召喚したという点に関しては、貴方よりは信用出来ますから」

「……なるほど、やはり簡単な女はいないか」

それきり、誰もが無言になる中、アヴェンジャーの衣擦れの音だけが雄弁だった。

「アイルランドの光の御子よ。それは、細作を認めたと受け取って宜しいか？」

私を背に庇う形になったアヴェンジャーの鋭い問い掛けに、所長達が啞然とした表情でキャスターを注視する。瞬間、放たれた濃度の高い殺気を受けたアヴェンジャーは、駆け引きの勝利を確信してか、艶やかに口角を釣り上げた。

「……………小賢しい真似してくれるじゃねえか」

幾ばくかの間の後、冷静さを取り戻した様子のキャスターは、苦々し気に文句を返した。その一連の反応から察するに、アヴェンジャーは彼の真名を正確に導き出したようである。

「魔性ですのぞ」

余裕を滲ませた自虐的な皮肉を口にするアヴェンジャーは、慈母というより毒婦のそれだった。

「……チツ、あの時か。全く、マスターもマスターなら、そのサーヴァントもサーヴァントだな」

そう言つて深い息を吐いたキャスターは、これ以上付き合い切れない。と言うように両手を挙げた。

「まだるっこしい事はやめにしようぜ？ マスター」

「つまり？」

「これからも持ちつ持たれつの関係でいたいって事だ」

その言葉通り、力強くこちらを見据える紅玉の光に嘘はないようだった。その上で無駄な事は何一つ漏らさないという姿勢に、私は一つ、己の認識を改める。

「……………曲がりなりにもケルトの大英雄ならば、小娘相手に回りくどい手を使うはずもないか」

「いちいち、嫌味な女だな。お前さん」

謂れない疑いをかけられた時、何かしらの隠し事をしている人間は、その疑いの内容に関わらず、疑われた。という事に反応してしまう事が多い。単純な手だが、この方法を利用して敵を釣つて来た身としては、些か不満を覚えなくもない。

「……………疑つた事は詫びません。ただ、覚悟はしておいて下さい」

これ以上は、得るものもなければ、お互いの心象を悪くするだけだろう。元より忠誠はいらないと告げているのだ。疑わしきは罰せず。とも言う訳だし、これまで通り、お互いに利用し合う事で win-win の関係を保てるのならばそれでいい。どう



事態が動こうが、どうせ――

『……絡新婦』

私を選んだ男は、碌な死に方をしないだろうけれど。

\*

「ともかく、私からは以上です。他に何かご意見は？」

冷然とした問いかけに、わたしと所長は詰めていた息を吐く。先の剣呑な腹の探り合  
いには大分、精神を削られた気がした。

「オレは別に」

先輩に見つめられたキャスターさんは気だるげに答え、その反応を見た先輩の視線は  
アヴェンジャーさんへと移る。

「……では、母からは一つ。お願いが……」

黒曜の視線を受けたアヴェンジャーさんは、少しだけ逡巡するように灰紫の瞳を彷徨わせ——

「えっ? なっ、何よ!？」

わたしの背に隠れる所長へと、妖艶な微笑みを向けた。

\*

「最優と名高いセイバー相手となれば、母もあの子達に頼らず宝具を使わずにはいられないでしょう。ですから、どうかご協力を」

流れるような動きで、マシユと所長の間に割り込んだアヴェンジャーは、驚く二人を尻目に、右腕で所長を抱き寄せると左手でその顎を取り——

「へっ? えっ、ちよっ——んんっ!!」

「あっ……」

「なっ!!」

「えっ?」

「おっ」

その瞬間。私の間の抜けた声とマシユの驚嘆、状況に付いてこれていない様子のドクタ一の困惑と、キャスターの愉快そうな声音までもが綺麗に重なった。

「んっ~~~~んっ~~~~!!」

「んんっ…………ふっ……………ん」

目の前では美女同士のキスシーンが展開中である。しかも、濃厚なヤツやこれ。

「おいおい、いいのかマスター?俺以上のセクハラサーヴァントだぜアレ」

ニヤニヤとした笑いを張り付けながら、キャスターが意趣返しのように私へと問い掛けてくる。

「まあ、必要な事ならいいんじゃないかしら?」

「対処の差がひでえな、おい」

それに冷やややかに対応すれば、キャスターの溜め息が返された。

「だっ、誰か状況を説明してくれないかな?」

「説明も何もないと思うんですか」

「いや、そうなんだけど、そうじゃなくてっ!!」

加えて、ドクターは私の裸を見た時と同じくらいにテンパってるし、マシユは——  
「マシユ？」

「あー、お嬢ちゃんには刺激が強すぎたか」

言いながら、キャスターがマシユの目の前で手を振るも、彼女がそれに反応するそぶりはない。

「完全にフリーズしてるわね」

「だな」

「キミたちは冷静過ぎだよ!!」

「いや、魔術師なら、魔力供給くらいで驚くなよ」

「魔力供給って？」

「ウソだろ、知らないのかよ」

「当然でしょう？ 魔術師じゃないんだから」

「ああ、もう。本当に、こんな有り様で大丈夫なんだろうか？」

私とキャスターの会話に、なぜか頭を抱え始めたドクターをよそに、視界の端では、くたびれた様子 of 所長を抱えたアヴェンジャーが、満足そうに舌なめずりをしていたのだった。

\*

結局、そこに至るまでに私達が戦闘を展開するような事はなかった。それは単に、キャスターがそういうルートを選んでいただけなのかもしれないが、嵐の前の静けさと形容するに値する不気味さを感じるには、余りある道程だった。

「大聖杯はこの奥だ、セイバーのヤロウもそこに陣取ってやがる。踏み込めば後戻りは許されないだろう。やり残しはないだろうな？」

「元よりこうする他ないので、今更、確認も遠慮も無用です。キャスター」

天然の岩肌と人工の手心が混じった洞窟を見据えながら言い返せば、飢えた獣のような好戦的な笑みが向けられる。

「そりゃ頼もしい。ここ一番で胆はぢを決めるマスターは嫌いじゃない。まだまだ新米だが、アンタには航海者に一番必要なものが備わっている」

「……いきなり、何を言い出すかと思えば——」

軽い口調から一転した、突然の賛辞に対する反応に困りながらも、一笑に切り捨てようとした私は、こちらを見つめるキヤスターの眼光に、思わず閉口する。

「運命を掴む天運と、それを前にしたときの決断力だ」

わざとらしくアヴェンジャーを一瞥してから返されたそれは、至って真面目な代物で

「その向こう見ずさを忘れるなよ？　そういうヤツにこそ、星の加護つてヤツが与えられる」

的確なアドバイス忠告だった。

「そう、参考までに覚えておくわ」

但し、この決戦を生き抜く事が出来たら。という条件付きで。

「……それより、キヤスターのサーヴァント。大事なことを確認していなかったのだけ」

そうして悠長に話していたせいとか、どこか浮き足立った様子の所長から声がかかった。因みに、あれからというものの、所長はアヴェンジャーから一定の距離を置いており、今も私の傍に控える彼女を警戒してか、マシユの背に隠れての対話となっている。更に補足すると、避けられているアヴェンジャーの方は、最初こそ気にしていたものの、今では開き直ったらしく、あまり動じていない。

「セイバーのサーヴァントの真名は知っているの？ 何度か戦っているような口ぶりだったけど」

「……ああ、知っている。ヤツの宝具を食らえば誰だつて真名……その正体に突き当たるからな」

兎も角、所長の問いかけた内容は、私も失念していた事だった。自らを除いた六騎のサーヴァントの内の五騎を仕留めたセイバーは、相当の手練れであり実力者だ。少なくとも、こちらのキャスターでさえサシでの戦闘を避けているのだから、真名から弱点を炙り出しておくに越したことはないだろう。まあ、彼の表情を見る限り、弱点らしい弱点があるのか、怪しいところではありそうだが……

「他のサーヴァントが倒されたのも、ヤツの宝具があまりにも強力だったからだ」

「強力な宝具……ですか。それはどういう？」

普段よりも幾分か低く、重たい声音で語り始めたキャスターに、マシユの表情が不安に強張る。しかし、その瞳は確かな覚悟を宿して、キャスターの語りに応えていた。

「王を選定する岩の剣のふた振り目。お前さんたちの時代において、最も有名な聖剣。

その名は——」

「約束された勝利の剣。騎士の王と誉の高い、アーサー王の持つ剣だ」

瞬間、キャスターの台詞を先回りする形で放たれた宣戦布告に、辺りの緊張が最高潮

に達した。

\*

高台からこちらを見下ろすのは、浅黒い肌に白髪が目を引く長身の男。その手にはごく丁寧な事に黒塗りの武器クラスの出自が握られている。

「アーチャーのサーヴァント……い！」

そう口にしたのは果たして誰だったか、何はともあれ、この男は――

「おう、言ってるそばから信奉者の登場だ。相変わらず聖剣使いを護ってるのか、テメエは」

「……ふん。信奉者になつた覚えはないがね。つまらん来客を追い返す程度の仕事はするヤ」

「ようは門番じゃねえか。何からセイバーを守っているかは知らねえが、ここらで決着



をつけようやツ!!」

「ハツ、悪いがそこまで暇では、ないツ!!」

(私<sup>「私」</sup>を狙<sup>「獲物」</sup>うはずだ<sup>「だ」</sup>)

キャスターの啖呵に返されたのは、予備動作を察した頃にはもう手遅れだろう。と思わせるに値する技巧で放たれた鋭い殺意。その勢いに、マシユの盾は間に合わないだろう。と気付いた私へと、男は勝利を確信したように、ほくそ笑えんだ。ただ、それは同じように口角を釣り上げた私を目にした瞬間に、驚愕の表情へと塗り替えられる。

刹那、空中で打ち払われた矢は、その場で爆散し、衝撃波が私の髪を弄んだ。

「……防げぬのならば、届かせなければいいだけの事」

「……チツ、どうやら、そのマスターは堕ちた女神の中でも醜悪な者を引き当てたとみえる」

風を操る術を持つアヴェンジャーに、飛び道具は相性が悪いのだろう。忌々し気な鷹の目が、私とアヴェンジャーをねめつけた。

「あら？汚れた弓兵の分際で言うではありませんか。母を愚弄し、我が子を手にかけてようとした罪は、その生命で贖ってくださいましね？」

対するアヴェンジャーは涼しい表情のまま、男の視界から私を隠すように金の翼を広げた。その執念じみた守護態勢の根源が何か？は分からないままだが、おかげで、マ

シユよりも盾らしく機能しているので、文句はない。

「今ので確信したわ。寝起きの私を襲ったのは貴方ね、アーチャー？」

「寝込みを襲わなかっただけ、紳士的ではないかね？」

私の詰問に皮肉で応対する辺り、どうにもこの男からは同族の臭いがする。  
アーチャー

「ふふふ、ええ、確かに!!おかげでここまで来れたのだから、貴方には感謝しないと、ねえ？」

それが開戦の合図だった。踵を返して走り出した私の後方で、鋭い金属音が響く。その音に、此処が正念場だ!!と鼓舞されながら、私達はほっかりと口を開けた暗闇へと足を踏み入れた。

\*\*\*

牽制し合いながら、戦場を寺院へと移したアーチャーとキャスターの二騎は、一定の

距離を保ち睨み合っていた。

「行かせてしまつて良かったのかね？」

黒塗りの弓から双剣へと得物を替えたアーチャーの意味深な問いかけに、杖を低く構えたキャスターの片眉が跳ね上がる。

「そりゃあ、また、どういう意味だ？」

「そのままの意味さ、クー・フリーン。キャスタークラスともなれば、幾らか小賢しくなったかと期待していたのだが、どうやら私の思い過ぎだったらしい」

瞬間、とある方角から鳴り響いた轟音と立ち上る土煙に、キャスターの目の色が変わった。

「デメエ……」

「よもや卑怯とは言うまい？サーヴァントである以上、弱点を狙うのは戦法としては定石——」

言い終わらぬうちに、キャスターの横風ぎの一閃がアーチャーの片刃を薙ぎ払う。次いで上段から繰り出された猛攻を、残された片刃で受けとめながらも、アーチャーの顔には嘲笑が浮かんでいた。

「そんなにイイ女だったのかね。彼女は」

「ほざけ、どのみちデメエはオレが斃す」

見え見えの挑発に、絞り出したような声音が返される。それは、猛犬と猛禽の殺し合  
いの幕が上がった瞬間だった。

## 暗鬼

いつだって、気付いたころには手遅れだった。

\*

私が言いしれない違和感を察知したのは、洞窟を三分の一ほど進んだ辺りだったと思う。

「どうしたのです？愛くるしい顔かんほせをそのように歪めて」

歩みを止めた私を訝しむアヴェンジャーの声音が反響する。どうやらこの暗がりの中であって、彼女には私の表情がはつきりと見えるらしかった。

「……ごめん、行かないきゃ」

問いに対する返答に困った私は、見えなくせに洞窟の岩肌を見上げて、それだけを絞り出した。

「何を——」

「どうやら、私は自分で思っている以上にギャンブラーみたい」

胡乱気な彼女の声のする方へと顔を戻す。やはり、私の瞳ではアヴェンジャーの臍げな輪郭しか捉える事が出来なかつた。

「マシユと所長を頼むわ」

右手の熱が一瞬、辺りを照らし出し、怯えたようにこちらへと手を伸ばす、アヴェンジャーの姿がサブリミナルの如く瞳へと焼きつく、しかし、その腕が私を捉える事はなく、発せられた甲高い悲鳴は直ぐに瓦礫の山で塞がれた。

\*\*\*

アーチャーと打ち合いながらも、キヤスターはパスの先に居る筈の少女に意識を傾けていた。パスが残っていないのならば

「戦闘中に考え事か？」

が、そんな僅かばかりの隙を見逃さなかったアーチャーは、キヤスターの薙いだ杖を後方へ大きく飛び退き避けると、空中で身を翻した態勢のまま弓を大きく引き絞った。

（チツ、相変わらずコロコロと得物を替えやがる）

対して、嫌悪感を露わに唸ったキヤスターは杖を回すと地面へと術式を叩きこむ。それは瞬時に太くしなやかな木の幹へと成長しキヤスターを取り囲んだ。と同時に辺り一帯に爆音が轟き衝撃波が土煙を巻き起こす。

そうしてお互いの姿が掻き消えたのは一瞬の出来事だったが、アーチャーがそれらしく戦うための布石には充分だったらしい。

「貰ったッ!!」

いつの間にか寺院の屋根の上へと距離を取ったアーチャーが二の矢をつがえていた。不自然に螺旋をえがいたそれにキヤスターは目を見開き、アーチャーは口の端を歪める。

刹那、放たれた矢は先ほどの急ごしらえと分かる反撃とは異なり、明確にキヤスターを屠る意志を宿しており、勢いを増しながら標的へと迫るそれに、キヤスターの敗北は

濃厚かと思われた。が——

「そオらよ、大仕掛けだツ!!」

不敵な笑みを浮かべて屈んだキャスターの触れた地面から、次々と青白く発光した魔法陣が連なつて浮かび上がる。それは鼻先へと迫つた矢を打ち消したばかりか、異変に跳躍したアーチャーを跳ね返し撃ち落とした。

「空中にルーン文字を固定したのかツ」

空の上で強かに背を打ち付け、落下する形となつたアーチャーが吐き捨てる。

「おう、オレの師匠には冥界の門を喚ぶ術があつてな。ソイツの応用、パクリつてヤツさ」

余裕を垣間見せるキャスターの種明かしに、苛立ちからかアーチャーの眉がピクリと反応した。

「遠距離で打ち合つてもラチが明かねえ。ここからはいつもの喧嘩と洒落込もうぜツ!!」

「ハッ、キャスタークラスでランサーの真似事とは恐れ入るよ」

双剣を逆手に構え直したアーチャーの挑発に、槍術の構えで杖を握り直したキャスターが低い体勢から牙を剥く。

「その言葉そつくりそのまま……」



瞬間、一足でアーチャーの懐へと飛び込んだキャスターは——  
「デメエに返すツ!!」

焔の槍と化した杖を勢いよく振り被った。

\*\*\*

一方、大聖杯へと続く洞窟、今や内部の崩壊により粉塵の舞うその入り口からは、黒猫のような人影が転がり出てくる。

「つう、全く、相変わらず、碌な男に、好かれないわね。私はツ」

粗い息と共に悪態を吐いたカルデアのマスターことイモリ・セツナは無傷というわけでもなければ、土埃まみれである。しかし、退避は成功したらしい。数度咳き込みながらも、立ち上がると身体の汚れを払い落しながら状況を整理するために辺りを見回した。

(思わず衝動的に行動してしまつたけれど、これっていけない兆候よね。毒されたもんだわ)

不安を煽る暗闇の中、肌を切り裂くような冷気を含んだ風が割れた唇にしみる。それがなんとも惨めに思えて、早くも己の選択に後悔を覚え始めたセツナは、頭痛に額を抑えた手の生温さに苦笑を浮かべた。

「ああ、どうりで」

拡げた掌に散る色は宵闇にのまれて判然としない。しかし、この鉄錆の臭いは嗅ぎ慣れたものだ。それにしても、怪我というのは不思議なもので自覚した途端に痛み出すから始末に負えない。ただ、こめかみから溢れ出る生の証は寒空の下ではとても暖かく感じられた。

「……全く、難儀な事だな。勝手に私をキズモノにされたのがそんなに癪に障つたか？」  
ふと、独り言にしては妙に対話的な台詞がセツナの唇から紡がれた。しかし、彼女に応えるものなど居るはずもなく、辺りは相も変わらず不気味なほどに静まり返つていった。

『……スター、おい、マスター！』

そんな中、脳内に直接響くように届いた焦燥した声音にセツナの意識が逸れ——  
『マス——』

『騒々しいぞ、キャスター。一度で分かる』

キャスターの声を引き締めたセツナはつい、いつもの調子で応答してしまう。

『……そ〜かい。ま、お前さんが無事なのは何よりだ』

そのせいかキャスターの返答からは少し面食らったような空気を感じた。

『あの男は?』

『悪いが、もうちよいかかりそうだ』

『そうか、それは僥倖。今からそちらに合流する』

『は?』

今更、態度を訂正する気にもなれなかったセツナは、こちらの意識顔のままに押し通すことにした。所詮、コレはいつかはボロがでる類の代物なのだからと。

ただ、バラす相手は自分で選ぶ。今回の場合で言えば、後腐れがない分キャスターが適任だったというだけの話だ。

『悪いが、詳しい話をしている暇はない』

『一つだけ、聞いていいか?』

『なんだ?』

『お嬢ちゃん達は』

(なるほど、尤もな確認だな)

キャスターにとつても盾は騎士王という壁の攻略に欠かせないのだから。

『彼女達なら予定通り己の職務を全うしている』

恐らく、という注釈がつくが。ただ、ある種の狂気を滲ませるアヴェンジャーには令呪と言わらしい命令権は使用済みだし、マシユも残して来たのでなんとかなっているだろう。今現在の彼女の保護対象は半ば強制的にマシユ達へとすり替えられている筈だ。『ところで、キャスター。ランサークラスの適性もあるという事は白兵戦にも覚えがあると考えていいな?』

『ん?そりゃあな』

当たり前だろ?という不敵な声音がこの時ばかりは妙に耳心地が良い。

『率直に聞く。アレの弓をどれだけの間封じていられる?』

『……5分は確実だろうが、マスター。アンタ何を考えてる?』

『知れた事を探ねるのは野暮だとは思わないのか?』

『ハッ、了解』

それを最後にキャスターからの念話が途切れる。やけに愉しそうな余韻を残して。

(……話が早いのは助かるが、調子が狂うな)

物分かりが良すぎるところは引つかかる部分ではあったが、キャスターの場合は余りにあつけらかんとしているので恐らくは素なのだろう。いずれにしてもやるべき事は

山積みだつた。

「恤」ジユツ

瞬間、玲瓏な声と共にセツナの周りに白骨が散る。ある者は首を落とされ、ある者は胴を両断され、また、ある者は串刺しにされ、いずれも粉々に碎かれる。彼女を取り囲んだ骸骨兵達は恐ろしく簡単に無力化されたのだつた。

「感情を持たぬ骸の分際で私の邪魔をするな」

宵闇の中、冷徹に吐き捨てた漆黒の少女は、闇よりも禍々しい何かを伴つて、爆音の響く方角へと進路をとつた。

\*\*\*

首筋を狙い投擲された飛去来器ひきよらいぎの如き剣を弾き、追撃を許す前に接敵するが否や残りの刃をも砕く、しかし、その間にアーチャーの空いた手には次の刃が握り直されており、

また、既視感を覚える攻防が展開される。幾度となく繰り返されたそれに焦れた声を挙げたのはキャスターのほうだった。

「二十七。それだけ弾き飛ばしてもまだあるとはな」

距離を取り、辟易とキャスターが吐き捨てる。だらりと下げた腕の先から滴り落ちた赤が地面に染みを作るが、彼の紅玉は己の怪我の具合を確かめるでも、ましてや目の前の弓兵を捉えるでもなく、その後方で迸る黒い極光へと向けられていた。

「……ほう、ここにきて他人の心配をする余裕だけはあるのか」

そんなキャスターの内心の焦りを理解しているのかのように、口元の血を拭ったアーチャーは黒くひび割れた頬を緩める。

「抜かせ。それじゃあ聞くがよ。あの盾は剣を通さないのか？あの剣は盾を通すのか？」

が、キャスターは驚くほど淡々とアーチャーの嘲笑に応えた。

「………大昔、それに似た事を教わったよ」

一瞬、視線を伏せたアーチャーは握った剣を弓と矢へと変換する。

「へえ、それで答えは？」

対して、キャスターは何の防御策も講じることなく、直立不動のままアーチャーの返答を待った。

「答えは台無しさ、矛盾が生まれるだけだ」

弓を引きアーチャーが告げる。己が勝利を確信しながら。

「ハッ、ソイツはどうかね。その話いつも思うんだよな、モノが同じなら、あとは使うやつの技量次第じゃねえかって、ていうかアレだ。武器の性能で負けてるんなら知恵で補うのが人間じゃねえの。なあ？お前さんはどう思うよ。マスター」

それは、矢が放たれる数瞬、前の事だった。

「何だ?!」

己が背に感じたむき出しの殺気に、見開かれた鷹の瞳が思わずと振り返る。背後の暗

闇――

「蝕」  
シヨク

そこに浮かび上がった。熟れた果実のように赤く濡れた唇が、深淵へと命を下賜する為の言霊を紡いだ。

※※※

時は僅かばかり巻き戻る。

『キヤスター、そのまま三十手ほどアーチャーをあしらってくれないか』

ふと、決定打に欠けた攻防を繰り返していたキヤスターの頭蓋に冷水のような声音が響いた。

『構わねえが、お前さん今どこに居る』

『寺の裏手だ。それと、これは出来るならで構わないんだが、アーチャーに私の存在を隠し通せるか』

冷静を通り越して冷酷さすら滲んでいるかのような少女の淡々とした口調と、そこに潜む狂気にも似た静謐な闘気を受けてキヤスターの頬が自然と緩む。それを見咎めた対峙する弓兵は不可解さと不快感に眉間の皺を深くした。

『森の賢者を舐めて貰っちゃあ困るぜ？マスター』

キヤスターにとって無茶な願いほど高揚するものはない。それが戦場で、且つ女の頼みと来れば尚更である。

『そうか、では後は手筈通りに頼む』

『おうよ』



念話が途絶えると同時、キヤスターは上段から振り下ろされた二振りの刃を杖で受け止めながら苦笑を溢した。

(にしても、ほんつと、キヤスタークラスは向かねえわ)

キヤスターの足場が沈む、筋力差を埋めていたものがなくなつた今、力と力の拮抗が分かりやすく揺らいだのだつた。

押し切られるのも時間の問題だと歴戦の直感が告げる。ゆえにキヤスターは早々に見切りをつけた。今一度、杖が激しい炎熱に揺らめき、条件反射にアーチャーの攻め手が緩まる。時を同じくして、視界の片隅では長い濡れ羽色の髪が風に乗って羽搏いた。

しかし、その漆黒に見惚れていられるほどの余裕はない。

アーチャーの隙を突いたのを良い事にキヤスターは杖の持ち方を変えた。剣戟を受け流そうと考えた結果のその構えは槍術よりかは剣術に近いだろう。ともかく持ち手を片側一点へと集中させた事により均等に反発し合っていた力に逃げ道ができた。

杖の表面を白黒の夫婦剣が火花を散らしながらも片側へと滑ると同時、キヤスターの蹴りがアーチャーの横っ腹へと入る。常人ならばそれだけで致命傷となりかねない重い一撃に、弓兵は痛みに顔をしかめ血を吐きながらもやりと笑つた。刹那、キヤスターが咆哮する。すんでのところ流しきれなかつた剣の切っ先がキヤスターの肩を抉つたのだ。しかし、それでいて彼もまた瞳の奥底で笑っていた。一瞬の隙が出来れば

己の首が飛ぶと理解していながら。

「石は流れて、木の葉は沈む。牛は嘶き、馬は吼ゆる。正義は滅し、悪逆は繁栄す。無理も通せば道理となろう」

そして、そんな戦場の空気と音に両手を広げ詩を綴る少女が一人。しかし、この場にてそのか細い囁きを捉える事が出来たのは彼女の周りに結界を張った男だけだった。

「然して我は汝の存在を嘆く、故に、今ここに、我が血脈に懸けて命ず。汝が滅びの運命さだめを変えたくば応えよ——」

群青の魔術師の目元が厳しくなる。しかし、彼が呪文の意味をなぞるより先にそれは少女の手の内へと形になった。

「蜘蛛丸ツ!!」

虫の脚に似た上長下短の怪しい大弓が、呼び声に応えるように少女の左手に大顎を突き立てその血を吸い上げる。そうして張られた深紅の弦へと番えられた漆黒の矢もまた彼女の一部分だったもの。

「蝕」シヨク

闇色の和弓の表面が隆起する。そこに等間隔に並んだ八つ目の視線が射抜くように標的を見据え——

「フルンデイング  
赤原獵犬」

刹那、辺りに爆風が吹き荒れた。

\*\*\*

「……共喰いか、全く、宿業とは難儀なものだな」

言葉に滲む恨めし気な響きに反して、少女の顔に浮かぶのは堪らないと言いたげな嗜虐的な笑み。疲労からか充血したその瞳は今なお狂熱の殺意に潤んでいる。

結論を言えば、少女の美しい構えから放たれた悍ましい漆黒は弓兵の放った猟犬と相克し果て、互いに決定打とはなり得なかった。しかし――

「勝負あつたな、鈍つたんじゃねえかテメエ」

そのかわりというかのように、キャスターの懐剣が深紅に濡れていた。

「……主を、囹に？」

途端に黒い血を吐いたアーチャーは、己の胸から生えた刀身を信じられないものを見

るように見つめるとその首をゆっくりと後方へと回した。

「卑怯とは言わせねえぜ？ テメエの女を見る目がなかっただけの話だ」

その耳元へ囁き一つ残して、キャスターはトドメとばかりに手首のスナップを効かせながら刀身を引き抜く。心臓<sup>霊核</sup>を破壊されたアーチャーの身体が傾いだ。

「……なるほど。呪詛……いや、呪詛返し、とは……君に似合いの、マスター、かも、しれ、ないな」

瞬間、明らかに少女の雰囲気が変わった。視線だけで相手を呪い殺せそうな黒曜はキャスターに邪眼という単語を想起させるに十分だった。

「……目敏いな。貴様」

「フツ、弓兵なものでね」

そんな少女へと意味深な笑みを残してアーチャーは消滅する。途端に重たい静けさが辺りに漂った。

「……なあ、マスター。アンター一体——」

何者だ。と続けようとしたキャスターだったが、それは突如として、目の前でえずくように咳き込み膝を折った少女の只ならない様子に掻き消される。

「つて、おいマスター!?!」

「……がなるな、キャスター。それと、その場から、動くな。コレの制御には集中力

「がいる」

そうして、少女を案じて駆け寄ろうとしたキャスターの行動を押しとどめたのは、心配されている当の本人の低い怒号と――

（この形は……）

瞬く間に大地に走った裂傷巨のような線大と数多細の歪なんだ多角形巣。吐血する少女を起点に広がったその黒い紋には、捕食者の美学とやらが滲んでいるかのようだった。

「……マスター、その力は」

「――……ハッ、流石にバレたか。けど、要らぬ世話を焼かれる気はないし、感傷に浸るだけ無駄よ。憂心なんてもんは犬にでも喰わせるがいいわ」

「なっ……」

しやがみ込み口元を拭う少女の顔は、夜の帳と長い黒髪によって判別が出来ない。しかし、その小さな肩は小刻みに震えていた。

「……くっ、ふふふふ、はは、あはははははッ」

段々と膨らんだそれは、いつの間にか慟哭のような哄笑へと変わる。

「……正気か？」

その余りに不自然な様子に眉を顰めたキャスターの問いに、何が可笑しいのか白晳の顔を歪ませ、腹を抱えて啜う少女。

(オレが見えていないのか?)

虚ろな瞳で狂ったように嗤い続けた少女ではあったが、その哄笑は始まりと同じく唐突に止んだ。口の端から伝う鮮血を舌で掬い取る仕草は、扇情的であると同時に苦痛に快楽を上塗りする儀式のようでもあった。

「……………ええ、残念ながら正気よ。キヤスター」

一度だけゆつくりと目を閉じて少女が呟く。その頬に伝ったのは瞳から溢れる涙ではなく、額の傷口から流れ出た血液だった。――

「……………貴方の仰る通り、モノが同じなら使い手の技量によつて結果が違うという事は真理なのでしょう。ですが、大きすぎる力はそれだけで人のあり方を簡単に歪めてしまう。例えばそれが純正なものであろうと行き過ぎれば取り返しがつかなくなるものです」

キヤスターには確かに彼女が泣いているように見えた。

「……………なるほど、お前さんは取り返しがつかなくなつたクチか」

「……………まあ、そんなところでしようね」

「それじゃあ、アヴェンジャーを喚んだのはオレに対する抑止力としてだけじゃなかったわけだ」

「……………はい?」

「お嬢ちゃんの特訓に対してお前さんが荒れたのは同じ轍を踏まれるのを恐れたからだ

ろう？」

辛うじて問いの形を取った確信だった。契約の通りに少女が提示した条件を鑑みても齟齬は生じない。

ただ、問われた少女は否定も肯定もせず無言を貫いた。

「……気が強いのは結構だがよ、それは虚勢を張る事と同義じゃねえぞ」

「そうね。でも、たった今、貴方が切って捨てた虚勢が私に残された、ただ一つの宝物だと知っても貴方は同じ事を言ってくれるのかしら？」

その頑なさに折れた男の文句に少女は投げやりに応じた。

「どういう意味だ？」

「それ以外のものは全て売り払ってしまったという意味よ」

それは遠まわしながらあらゆる不幸な想像を掻き立てるに容易い物言いだった。そうしてかける言葉を失ったように押し黙るキヤスターに少女は柔く微笑む。

「……そんな事より、前々から気になってはいたのだけれど」

「あ？」

立ち上がり、男へと近づく少女。その身体に付いた大小様々な傷が彼女の歩みに呼応するかのよう完治していく。人間離れたその治癒力にキヤスターはやはり鋭い視線を向けた。

「聖杯と言うからには万能の願望機とやらは杯を模しているのでしょうか？」

「……一概にそうとは断言は出来ないが、まあ、恐らくはそうなんじゃねえか」

キャスターの返答に、少女は元通りの綺麗な無表情のまま瞳にだけ卑しい笑みを浮かべる。

「その杯に注がれるのは一体何かしら？」

「……あー」

(改めて言われるとゾツとしねえ話ではあるな)

「私が思うにそれは碌でもない代物よ。殺し合いの果てに授かる奇跡が純正な手順を踏んだ結果のはずがないもの」

「……………」

「その表情を見るに貴方は勘付いていたわね？その上で聖杯戦争を愉しんでいたのならとんだ好き者だわ。理解に苦しむレベルのね」

辛辣な拒絶の言葉を吐きながら少女はどこか自嘲的に笑う。

「皮肉なものね、願うそのものに善悪がないとしても手段に問題が大ありよ。まあ、尤も、上手い話には裏があると相場は決まっているものだけだ」

「…………あの時の顔はそういう事か」

「あの時？」



「アンタがオレに対して不審を抱いた時に一瞬、顔が引き攣っただろう？」  
「……………」

「ありや、嫌悪だ」

男の断言を受けた少女は興が冷めたとしても言いたげに顔を顰めた。

「…………ええ、そうよ。私はこの儀式（からくり）が気に入らない。賭けなんてものが結局は胴元が儲かるように出来ているのと同じくね。貴方はそうは思わないの？」

「あ？何が」

「マスターとサーヴァントそのシステム（システム）についてです」

「…………別に。英霊なんて連中は、もともと二度目の生なんざに興味はねえし、英雄つてのはいつだって理不尽な命令で死ぬもんだ」

あつけらかんとしたその答えは、少女の虚をつくのには充分だったのだろう。

「…………そう。やはり貴方は正しく、戦士と言う名の人殺しなのですな」

静かに瞠目した後で、光源などない筈なのに眩しいものを見るように少女は目を細めた。嫉妬とも憧憬ともつかぬ黒曜に射抜かれたキャスターは肩を竦める。

「理不尽に憤る割にはお前さんも潔い女に見えるぜ？」

「…………割り切るしかない事のほうが世の中には多いでしょう？」

一画に数を減らした八角をなぞり少女は嘆くように深い息を吐く。

「私は間違った事を言っていますか？」

「合理主義を正しいと仮定するなら間違っちゃいねえよ」

許しを請うようできて糾弾を欲するようでもある声音に返された答えに少女は笑う。

「……やっぱ、私は貴方のような駒は嫌いよ」

しみじみと吐露されたそれは何よりも激情的だった。

## 嵐の対決

「……なんてこと……あれが、アーサー王なのですか……？」

アヴェンジャー  
灰色の淑女の驚嘆は悲鳴に近く、震えは怒りのようだった。

「間違いない。何か変質しているようだけど、彼女はブリテンの王、聖剣の担い手アーサーだ」

「え……？あ、ホントです。女性なんです、あの方。男性かと思いました」

対して、マッシュ・クリエイト  
十字の盾を携えた少女は素直な驚きを示す。

「伝説とは性別が違うけど、何か事情があつてキヤメロットでは男装をしていたんだろう。ほら、男子じゃないと玉座にはつけないだろ？お家事情で男のフリをさせられていたんだよ、きつと。宮廷魔術師の悪知恵だろうね。伝承にもよるけど、マーリンはほんと趣味が悪い」

その注釈を鑑みても、確かに、かの剣士は禍々しい見た目に反し、小さいと断言できる肩幅と、鎧を纏つて尚、華奢と分かる身体つきをしている。それらの特徴は一瞥しただけでは気付かないレベルのものではあったが、意識してみれば彼女が女性である事を伝えていた。しかし――

「……いいえ、驚くべきは性別などではありません。彼女からは——」

マシユの傍らに立つアヴェンジャーは、信じられないものと相對したとばかりに、セイバーを見据えたまま硬質の声を出す。

「——ほう。面白いサーヴァントがいるな」

「……竜の気配がします」

重なつた発言と同時に、黒き騎士王の視線照準が彼女達へと定まつた。

\*\*\*

「英霊同士の相性？」

「ああ、単純に能力スベツや性質ベツクとしての相性もあるが、尤も厄介なのは生前の因果だろうな。多かれ少なかれオレ達はそれに縛られている。にしても、これは迂回した方が早そうだな」

疑問符を浮かべた少女へと言葉を並べつつ、群青の魔術師は目の前の瓦礫の山へとぼやく。対して、闇に溶け込むように彼の傍らに立つ少女は、伏し目がちな瞳で虚空を睨んでいた。

「……………生前の宿敵と邂逅する事もあり得るわけね」

小さく白い吐息に混じって、わずかに掠れた声があった。それは、気配を消す事に長けている少女に生じた隙のようでもあった。

「その場合、殺された方は不利だろうな。最悪、敵は己を殺した逸話を宝具に昇華している可能性があるんだからよ」

「つくづく、嫌な戦場ね」

端的な言い様に顔色を変えない空虚な面立ちは、かえって芝居がかって見えた。

「そうか？オレはなかなか面白いと思うがね」

「……………それは、貴方が戦場に生きる者だからでしょう。マシユはそうではないし、アヴェエンジャーもそうだった手合いには見えなかったわ」

好戦的に笑んだ男へ少女は呆れた視線を送る。その眼差しの冷たさと声色の静けさを、悪くないとばかりに男は揶揄するように続けた。

「心配か？」

「まさか」

他人に心を配るような余裕と優しさはとうに失くした筈だと少女は逡巡し――

「不安なだけよ」

言いしれない感情を吐露した。

すると、そんな少女の弱気な発言は想定外だったのか、男は暫し呆気にとられたように彼女を見つめた。それは少女が鋭い視線で答える程度には大仰な反応だった。

「何、オレの見立てじゃ、あのお嬢ちゃん盾とセイバーの剣の相性は抜群に良い。負けるとしたら、盾を支えるお嬢ちゃんがヘマをした場合だろうよ」

ややバツが悪そうに目を逸らした男に今度は少女が瞠目する。

「意外ね、そんなに彼女を買っているなんて」

「まあな、それにあの女のほうも前座としての役目くらいは果たすだろ——つと、些か呑気にしすぎたか、動けるかマスター？」

瞬間、一際大きく大地が揺れ、木々が騒めいた。

「ええ、急ぎましょう」

轟音に掻き消されないように声を張った少女は、真紅の瞳にしつかりと頷き返した。

\*\*\*

「なるほど、貴様らが新手というわけか」

嗜虐的な笑みと共に溢された眩きに、アヴェンジャーは両翼を広げ、マシユは盾を掲げる事で応えた。というよりも、反射的に戦闘態勢を取らされた。と表現したほうが正しいだろう。セイバーの発する威圧感に相対する者すべてに等しく危機感を募らせたのだ。

「面白い。その宝具は面白い。構えるがいい、名も知れぬ娘。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう!!」

次の瞬間、冷ややかな金の瞳で己が領域に踏み込んだ不屈き者を射抜きながら、セイバーは疾駆した。

「ツ!!気を張りなさい!!」

途端、目の色を変え叱咤の声をあげたアヴェンジャーは、マシユの握る盾の先端部を足場に跳躍し、セイバーの迎撃へと動く。語力の強さと盾から伝わる重みに反して抱擁にも似た風が彼女の淡色の髪を乱した。

「はい!!」

その一連の衝撃に鼓舞されたマシユの応答と同時、二騎が衝突する。

「どうした? 娘。前に出てはこないのかっ!!」

「ええ、させません。彼女の前に、まずはわたくしと踊って頂きます」

少女を守るように広げられた金の翼に視界を染めながら、セイバーは苛立たし気に声を荒げ、アヴェンジャーは渦巻く暴風を巧みに操り黒い聖剣を受け止めると、凜とした美声で応じた。

「笑わせる、貴様では私のリードに付き合い切れるとは思えんが?」

「生憎と踊らされるのには慣れていましてよ?」

戯れの如き言の葉の応酬は一瞬、有翼の妖婦の誘うような殺気に、黒騎士は条件反射とばかりに動いた。絶大な魔力放出を武器に空舞う貴人へと迫る。そんな彼女を阻もうと吹き荒れた嵐は、精々が視界の混信を起こす程度。風の壁如きでは騎士王の歩みを止める事は出来るはずもない。故に――

(獲った)

そうと信じて疑わずにセイバーは黒き聖剣を振り下ろす。さあつと刀を鞘から引き抜くような音を捉えたのもその時だった。

「――!!」



匂いたつような肢体を底うように畳まれていた黄金の翼が開かれる。刹那、求めるように伸ばされた両腕を這い滑る紫と、ボールの下に覗いた戦場に不釣り合いな美しい微笑に目を奪われた。

「チツ」

舌打ちと共に縦振りから横薙ぎへと、軌道修正がなされた剣筋の一閃に、鮮血が大地を黒く穢す。返り血で前髪と頬を焼きながら、アヴェンジャーを警戒するように距離をとりに着地したセイバーは、切り裂かれてのたうちまわる二匹の蛇、それも恐らくは毒蛇の残骸へと目を細めた。

(そうか)

抜刀に似たあの音の正体は、大蛇の牙剥く音だったのだと思ひ当たると同時、セイバーの頭の中では何かが可笑しいという警鐘が鳴り響く。それはランクが下がったとはいえ、直感が働いていることの何よりの証左であり、眼前の敵が存外侮り難い存在であるという信じがたい事実でもあった。

「……不可解、いや、不愉快だな」

ふわりと地へと降り立ったアヴェンジャーに胡乱気な金の瞳を向けるセイバー。

絶妙な間合いでの対峙に辺りは不気味なほど静まり返り、その静寂に比例するように緊張が高まっていく気配があった。

「……女。何故、貴様は盾の内から私の首を狙おうとしない」

先に沈黙を破ったのはセイバーだった。彼女は敵の力量と動向を探るつもりで、戦の功を焦るような性質タチでもなければ、自分と対等に討ち合える器量でもないだろう。と侮蔑の視線と共に嘲笑した。

すると、見え透いた挑発に対して、アヴェンジャーは優雅とは程遠い機敏さでペールを剥ぎ取ると、セイバーの視線を真つ向から受け取り――

「寵愛宣誓・怪王睥睨」  
レイズウヱール テイポエウス

ライダー戦でもそうしたように、厳肅に宝具を開帳した。

「ッ!!」

瞬間、セイバーは己が瞳孔の縮む音を聞いた。脊髄に電極を刺されたかのような衝撃と、心の臓が数秒、拍を打つ事を忘れたと感じられるほどの錯覚に襲われた。そして何よりも彼女を蝕んだのは――

「き、さま。何をした!!!!」

喉に鉛を流し込まれるかのような不快感、それでいて胸に広がったのは絶望にも等しい寂寥感だった。迷い子が庇護を求めるかのような強烈な情動、劣情にも似たそれ。

「――ああ、吐き気がする」

視界がぼやける、頬が濡れる感覚だけがやけに明瞭。震えた声と身体は己のものでは

ないかのようで、それは地に刺した黒き聖剣を支えとしなければ、自身を保てそうにな  
いと思わせるに十分なほどだった。

「……至極、単純な話です。生まれた者は産んだ者には逆らえない。か弱いわたくしが  
貴女と戦うには、この一点に縋すがるしかなかった」

痛みさえ感じそうな眼光を、凧のように静謐な瞳で見返して、アヴェンジャーは美麗  
な声を張った。

「驕るな!!騎士王。いや、竜の血をその身に宿す娘よ」

びりびりと鼓膜を震わす声に呼応するかのよう<sup>に</sup>に吹き荒れる嵐。

「この身は破壊の権化たる敵対者達の母なれば、敵として不足はなからう?」

暴風に蹂躪される視界の先で、お前の方こそ、殺せるものなら殺してみるがいい。と  
不敵な笑みが語りかけていた。

\*\*\*

「……ッ、駄目だ。竜巻の魔力で映像が乱れて、こちらからでは詳細が知れない。マシユ、彼女は一体、何をしたんだ!？」

どこか感情的な自然の力の猛威は凄まじく、次の瞬間には発現者の姿は保てなくなつた。辛うじてというようなように声だけに切り替わつた男は、画面の向こう側で人知れず拳をきつく握る。

「……わたしにも詳しい事は分かりませんが、アヴェンジャーさんは宝具を使用したようです」

「魔眼の宝具か!!」

「恐らくは、ただ、どのような効力の魔眼なのかは……くっ、う」

弾かれたような男の追及に、竜巻の余波で苦悶しながらマシユが応答する。

「そうか、ならキミたちも彼女の射程圏内に入るのは止めといた方がいいだろう。彼女の真名が分からない以上、巻き込まれる危険性を十分に考慮すべきだ」

「ですが!!ただ見ているだけと言うのは余りにも……」

嵐の中心部で孤軍奮闘しているアヴェンジャーを思つてだろう少女の発言に、男は痛いところを突かれたというように黙り込んでしまう。助力をしようにも思うようにいかないという歯がゆさは彼も身に染みて理解していたからだ。しかし、それゆえに彼は

冷静であらねばならなかった。現場の彼女達が困難に直面しているのなら、せめて、安全圏に居る自分は理知的に状況を整理し、迅速に判断を下さねばならない。

「……宝具にまで昇華された魔眼を持つ女性の英霊は数が限られる筈だ。だが、彼女達の存在証明を継続しつつ、アヴェンジャーの真名探求にリソースを割く事は可能なのか……」

気付けば懸念が口をついて出ていたらしく、近くで作業していたスタッフからはどうするのだ。と強張った声上がる。途端にじわじわと恐怖の伝染が始まった気配がした。しまったと思ってももう遅い。このままでは不安という見えない脅威がこここで堰を切ったように溢れ出すだろう。本職が医者なだけあって、集団心理の暴走によって引き起こされた悲劇について知らない彼ではない。だからこそ、それは何よりも避けねばならない事態だった。万が一にもこちらが先に潰れるような事があってはならないのだから。

(くそっ、引き金を引いたのはボクじゃないか)

洒落にならない。と自責の念に駆られるも、それで状況が好転する訳もなく、焦る思考は打開策一つ見い出せない。何かを言わなければと口を開いたものの、そこ止まりだった。

「何、その必要性はないよ、ロマニ。ヒントは今しがた彼女自身が言っていたじゃない

か」

啜り泣きに混じって唐突に辺りに響いた女の声は場違いに朗々としたもので、けれど、その不相応さが確かに浄化剤と作用した。

「レオナルド!!いきなり現れないでくれ、心臓に悪い。ただでさえ緊迫の状況なんだから」

「でも、おかげでいくらか緊張は解れただろう?」

「キミな」

レオナルドと呼ばれたモナリザそつくりの絶世の美女は、ロマニの傍らに進み出るとウインクを一つ、彼へと送った。その、私が来たからにはもう大丈夫。とでも言いたげな態度にロマニの口からは安堵と呆れの入り混じる溜め息がこぼれた。

「ちよつと!!うだうだ言う暇があるのなら、さっさと本題を述べて頂戴」

ふと、そんな彼らの耳に、悠長にしていられるような局面ではないのだ。と訴える悲鳴が届く。

「これは失敬、オルガマリー。だが、そう睨むでないよ。なにせ彼女は本人がそう称するだけあって、母親という存在の中ではとんでもない部類の大物だね。扱いには細心の注意を払ったほうが良い」

通信を音声だけに切り替えていると言うのに、眼力で訴えかけたオルガマリーの必死

さは確かに届いたらしく、流石に真面目なトーンで応対した彼女は暗にアヴェンジャーの真名を知っていると述べた。

「そんなに強力な英霊なのですか？」

「いや、彼女自身の戦闘力はたかが知れているだろうね。神話的に見ても彼女の逸話はそう華々しいものじゃあない。ある一点を除いて」

「ある一点？」

神話的という表現に少なからず、皆が驚嘆の反応を見せる中、彼女達の会話は滞りなく進んだ。

「そう、古き女神はとある王に見初められ沢山の子を生じたのさ」

「ちよつと、待つて、今さらつと聞き流せない事を言わなかった？わたしの聞き間違いじゃなければ女神つて……」

「言ったとも」

「神霊の召喚は不可能なはずでしょう!？」

途端にオルガマリーは顔色を変え素つ頓狂な叫び声をあげた。すると、そんな彼女の狼狽すら察しているとはかりに美女は言葉が続ける。

「ああ、すまない。私としたことが言葉が足りなかつた。彼女は元女神だ。分かりやすく言うなら君を殺そうとしたあのライダーと同じ区分だろう」

言われて、その時の記憶を想起したのかオルガマリーは身震いした。対して、マシユはアヴェンジャーが魔物と同格と評された事に衝撃を覚えた。

「……そう言えば、アーチャーもアヴェンジャーさんを堕ちた女神と呼んでいた気がします」

「ほほう、流石は弓兵、目が良いな。恐らく彼はライダーとアヴェンジャーの戦いを何処かで見ていたのだろうね。奇襲する目的だったのだろうが、この嵐を破るのは些かばかり骨が折れると判断したんだろう。それと、今しがた確信したが、どうにも君達は単純な見落とし……いや、隠し事をされていたようだ。それが偶然によるものなのか彼女の意志によるものかの判断は難しいところだがね」

「要領を得ないわね。勿体ぶつていないでハッキリと言いなさいよ」

持ち直したと言うには投げやりな態度でオルガマリーが催促する。その、もうどうにでもなれ。と言うような様相を憐れむように美女は一つ嘆息を溢した。

「やれやれ、キミたちに謎解きを愉しむ余裕はないか。確かに状況が状況だ。白状するとも、だがこれはなんらおかしな話でもない。至極、当然とも言える理だよ」

怪訝そうな表情で押し黙る彼女等に対して、美女は高名な芸術作品のように微笑んだ。

「彼女とメドューサは、どこか風貌が似ているとは思わなかったかい？」



\*\*\*

(なんとか、彼女の中の竜を味方に付ける事には成功しましたが……)

最早、結界にも等しいだろう巨大な竜巻という魔力の檻でセイバーを閉じ込めたアヴェンジャーは、束の間の軽い息を吐く。そんなアヴェンジャーの周囲にも数本の細長い魔力の渦が展開されており、それらは意志を持った生き物の様に大地を削り土埃を舞い上げながら、彼女を守護するように乱立していた。

(やはり、トドメを刺すとすると、母には荷が勝ちすぎている。か)

ピシリと音を立てて視界がひび割れる。思わずと指を目元へとやりながら、アヴェンジャーは自嘲的な微笑みを浮かべた。

(……悔っていたつもりはありませんでしたが、ここまで消耗が激しいとは)

アヴェンジャーの魔眼<sup>宝具</sup>は厳密には彼女個人のものではなく、共通財産の借り物であ

る。その能力は端的に言わば、幻想種に対して従属を強要する。と言った代物であり、幻想種の因子を持った相手には圧倒的なアドバンテージを有するが、その効力は相手の幻想種としての格や、対魔力の有無に大きく左右される為、負担がどれだけ重く己に返って来るか？は、正直なところ使ってみなければ分からない。という不便さがあった。加えて本日二度目の真名解放での使用という事も鑑みれば、セイバーを術中に嵌める事ができたのは僥倖と言えた。但しそれは、これだけの策を弄しても五分の戦いに持つていければ奇跡的というレベルの話であり、アヴェンジャーが圧倒的に劣勢なのは変わりようがない。先のセイバーの攻撃にしても、己の機転と相手の慢心があったからこそ凌げた類の幸運であり、それがなければ、あの時点で詰んでいただろう。互いに出方を窺ったのは間違いないだろうに、結局のところ、己の浅はかさと実力差を、嫌と言うほどに実感させられる事となった。

だが、結果として、その認識を得たのは無駄ではなかった。あくまでもアヴェンジャーの目的は時間稼ぎであり、その点では今の己の働きは及第点だろう。幸いにして元より保有魔力は多いほうである。加えて補填分の魔力による余裕もあった。後はこの状況をいかに長引かせられるかの勝負である。

(……………間に合えば、よいのですが)

推察可能な限りの最悪の状況を危惧しながらも、状況を俯瞰する眼差しに宿る光は力

強  
か  
つ  
た。  
。

## 天地昏冥

外界から隔離された世界の中で、剣を振るう腕は重たかった。

「——ッ!!」

斬りかかった太刀へと返って来る、拒絶の衝撃の重量に神経がやられる。数を重ねるたびに蓄積される、両腕の麻痺の感覚に精神が荒んだ。

「……毒婦が」

唾棄するように呟いて、セイバーは防備を解く。この語に及んで守りの姿勢など一体、何になるだろう。毒が回ったせいとか、敵の宝具の影響かは分からないが、魔力が上手く生成できなくなった今、使える力は全て押しの手へと編纂させる。

「卑王鉄槌、極光は反転する。光を呑め」

腰を低く。呼吸を整え、剣を握り直す。

「約束された——」

風の刃が肌を裂くのも厭わずに、セイバーは駆け抜けた。

「勝利の剣!!」

モルガアアアアアア

\*\*\*

「ええ？」

その驚嘆は言われた事の意味を凶りかねたからであり、同時に心の奥底で引つかかっていたものの正体と相對した衝撃に起因していた。

(二人が似ている?)

そう言われてみれば確かに、彼女達は宝石のような瞳と髪、すらりとした手足に凹凸のハッキリとした身体のラインに至るまで、よく似た「美」を纏っていた。同じ、女である事に引け目を感じるほどに整ったそれらは、恐ろしい戦場においても鮮烈な印象を残している。

(いや、違う)

正しくは、恐ろしく美しいから記憶に残っている。と言ったほうが良い。

尤も、メドューサは美しさゆえに女神の不況を買い、怪物に変えられたという伝承を

持つ女怪なのだから、そういつた感慨を覚えても可笑しくはないだろう。問題は同じ感想をアヴェンジャーにも抱いてしまったその理由にある。

(なぜ?)

マシユの頭の中を数多の情報が駆け巡る。今までは一つ一つの点に過ぎないものだったそれらを結ぶ線は――

『これはなんらおかしな話でもない。至極、当然とも言える理だよ』

天啓の様に脳裏を掠めた言葉と、視線の先で嵐にはためく黄金。

(ああ、そうか)

「……血です。つまり、ダ・ヴィンチ女史は彼女達が血縁関係にある。と仰るのですね」  
「ご明察。およそ真つ当な血縁とは呼べないにしても、彼女達は正しく、血で血を洗う戦いを繰り広げたわけだ。いやはや、血は争えないというのに、殺し合いの舞台上で引き合わされるとは何たる因果か」

確信的な響きのある声に返された。婉曲的で抒情的な言い回しは、確かに稀代の芸術家らしかった。

「それじゃ、アヴェンジャーさんの正体って――」

「今、君の頭の中に浮かんだ人物で、まず間違いないだろう。問題は、どのようにして彼女にもう一つの宝具を使わせるかだ」

「もう一つの宝具、ですか？」

「ああ、マスターが何を思っただけでキャスターの側に残ったのかは分からないが、ライダー戦の時の様に、彼が今回も間に合うという保証はないからね」

つまりは、現状の戦力だけで騎士王を討ち果たさなければならぬ状況に、既になつていない可能性が高いという事なのだろう。無論、そうであったとして今更、覚悟が出来ていないなどと喚くつもりは毛頭ない。ただ――

「ダ・ヴィンチ女史。そのもう一つの宝具でセイバーを斃せるという保証はあるのですか？」

依然として戦いを恐れている事実は否定しようがなかった。だから、嘘でも構わないからマシユは皆を護れるのだと、激励されたかったのだ。

「……うん、まあ、それはどれを使うかにもよるだろうが、兎に角、私の予想が正しいなら彼女のもう一つの宝具は――」

しかし、そこから先は誰にも聞き入れられる事はなく、甲高い悲鳴と共に黒い極光が辺りを蹂躪した。

\*\*\*

その異変に誰よりも早く気付いたのはアヴェンジャーだった。

「いけない!!」

思わずと上ずった悲鳴が漏れるも、一足遅く。

(喰い破られる!!)

魔力の渦の中から生じた膨大な別の魔力は、一瞬の拮抗を見せたのち、竜巻を切り裂き迸る。その剣筋の先に居たのはアヴェンジャーではなく、盾を携えた少女。

「マシユ!!」

と、その名を叫んだのは――

「我が子!!」  
マスタ

群青の魔術師の腕から戦場へと降り立った漆黒の少女。刹那、その右手の甲が淡く発光した。



\*\*\*

アヴェンジャーの腕がセツナを捉えるのと、マシユの盾が間に合ったのはほぼ同時、まさに紙一重の奇跡だった。

「宝具展開しますッ!!」

次の瞬間、黒い極光の重みを一身に受け止めながら、マシユは苦悶の悲鳴をあげる。その奮闘をアヴェンジャーの腕の中から見守りながら、カルデアのマスター、イモリ・セツナは勝利を確信して疑わなかった。但しそれは、他者の働きを信じたからではなく、純粋に己の鑑識眼と判断力（経験則）に自負があったからである。生き死にの介入する場において、虫の知らせは憎い程に心強い。死の淵に立たされれば立たされるほどに介入される呪いは、セツナの意志に反して、彼女を生かしているのだから。

（呪詛返しとは、確かに言い得て妙だ）

冷めた表情で展望を睨んで、少女は豪胆にも感慨に耽る。そうしていないと決定打を前に意識が保てない気がしたから。

「フ、護る力の勝利か。なるほど。穢れなきあの者らしい」

永遠のようにすら感じられた攻防は、盾の乙女へと軍配が上がる。懐かしむように、ともすれば誇らしげに目を細めたセイバーは、潔く敗北を認めたのか、はたまた抵抗するだけの余力を有していなかったのかは知れないが、キャスターの宝具を避けなかつた。

「灼き尽くす炎の檻!!」

咆哮と共にセツナの身体が碎ける。アヴェンジャーの支えがなければ、そのまま膝を折って地に伏していただろう。

（令呪<sup>アレス</sup>だけでは足りないか）

と心の中で毒づきながらも、黒騎士の火葬に確実を求めるのなら、これぐらいの代償は払って然るべきなのだろうと腹の虫の騒ぎを抑えつける。

そうして、死に逝く彼女を、その場にいる誰一人として瞬き一つせずに見送ったのだった。

\*

「——つと、どうやら、オレもここまでみてえだな」

「……逝くのね」

「おう、次があるんなら、そんな時はランサーとして喚んでくれ!!」

焰にまかれて消えたセイバーと同じように、存在を希薄にしながらキャスターは快活に笑う。結局、最期まで相容れない男ではあったが、互いにそれを承知している距離感  
は悪くはなかった。

「……折角の打診だけど、約束はできないわ」

薄い痣の浮かぶ手の甲を擦る。セイバーを斃せと言う嚴命は、死ぬ。と言い放つ事と何が違うだろう？尤も、全ては今更で避けられようのない話ではあったのだが、彼を使  
い潰すのは一度でたくさんだ。

「……ハッ、そう言うだろうとは思ったぜ。ま、イイ女と縁がないのは昔からだ。納得は  
いかねえがしようがねえ。お嬢ちゃんたち、あとは任せたぜ!!」

私からの拒絶の意図を汲んだのか、キャスターは一方的に捲し立てて消え去った。マ  
シユは少しだけ涙ぐんで、アヴェンジャーは少しだけ頭を垂れ、所長は少しだけ毒気を

抜かれたような表情でキャスターの退去を偲んだようだった。

「……セイバー、キャスター、共に消滅を確認しました。わたしたちの勝利、なのでしょうか?」

「ああ、よくやってくれたマシユ、セツナ。そしてアヴェンジャー、貴女の協力に最大限の感謝と敬意を」

「……面をお上げなさい。母は当然のことをしたまでです。過分な評価は受け取れません」

相変わらず、私を懐に収めたままのアヴェンジャーは、彼女にしては厳かな声音でドクターの礼へと答える。その、私を抱く腕が微かに震えている事に、私以外に気付いた者はいないようだった。キャスターの分の負担が減った事で、幾らか調子は楽にはなったのだが、彼女の為に、もう少しこのままでいてあげた方がいいのかもしれない。

「……ともかく、よくやったわ。不明な点は多いですが、ここでミッションは終了とします。まずあの水晶体を回収しましょう。セイバーが異常をきたしていた理由、冬木の街が特異点になっていた原因は、どう見てもアレのようだし」

「はい、至急回収——な!?!」

瞬間、切り換えと立ち直りの早い所長の命に勢いよく応じたマシユは、何処からともなく聞こえてきた拍手に驚愕の表情で固まった。

「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。48人目のマスター適性者。まったく見込みのない子供だからと、善意で見逃してあげたのに、人間というものはどうしてこう、定められた運命からズレたがるんだい?」

「……傲慢ですね。でも貴方のそういう愚かさは嫌いではありませんよ。レフ教授」

あからさまに侮蔑的な態度に私は意識的に眉を顰める。高台からこちらを見下ろす深緑色の特徴的な衣服の男は、思えば最初からいけ好かない奴だった。具体的には鏡を見ているようで反吐が出る。歪んだ正義ほどに救いようのないものもないのだから。

「レフ教授だつて!?!彼がそこにいるのか!?!」

「レフ!!ああ、レフ、レフ、良かった。生きていたのね!!」

途端、驚嘆と歓喜の声上がる。彼のものには疑心が、彼女のものには安心が滲んでいた。そんな両極端な反応を前に、マシユとアヴェンジャーは状況をどのように受け止めるべきか逡巡している様子だった。

「やあオルガ。君も大変だったようだね」

「ええ、そうなのよ。レフ!!予想外の事ばかりで頭がどうにかなりそうだった!!でも、あなたがいれば何とかなるわよね!」

「もちろんだとも。本当に予想外のことばかりで頭にくる。ロマニ、君にはすぐに管制室に来てほしいと言ったのに——」

私達の戸惑いなどお構いなしに、所長は喜色満面といった風に声高に捲し立て、レフはその歓迎をあくまで柔和な表情で受け止めながら、不穏な響きで言葉を並べた。

「君もだよ、オルガ。爆弾は君の足下に設置したのに、まさか生きているなんて」

「え？」

「いや、生きている。というのは違うな。君はもう死んでいる。肉体はとづくにね」

告げられた言葉の意味を頭で理解しきる前に、本能的な部分が現実を悟ったようので、所長の表情は先のものとは打って変わり、不自然に痙攣する。

「ほら。君は生前、レイシフトの適性がなかっただろう？ 肉体があつたままでは転移はできない。ああ、分かりやすく言おう。君は死んだ事ではじめて、あれほど切望した適性を手に入れたのだよ」

自分以外の人間には脳みそがない。とでも思っているのだろう口ぶりで、仔細を説明し、おめでとう。と卑しく目を細めたレフに、所長の喉がヒュツと鳴る。その様を最高の見世物のように愉しみながら、レフは口元を醜く歪めた。

「だが、残念なことだね。カルデアに戻った時点で、君のその意識は消滅する」

「……消え、る？」

「そうだと。だがそれではあまりにも哀れだ。生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて、今のカルデアがどうなっているか。見せてあげよう」

発言と同時に、気障ったらしく指を鳴らしたレフの背後の世界が歪曲した。

「さあ、よく見たまえアニムスファイアの末裔。これが、おまえたちの愚行の末路だ」

シヨ一の開幕を謳うように両手を広げたレフの頭上に、真つ赤に染まったカルデアスが映し出される。自分達の住む惑星を模したそれが、赤色に燃えている光景にはやはり、原初的な恐れを抱かずにはおれない。そして、それはこの場に居る全員が共有した感情だったのだろう。アヴェンジャーの腕には力がこもり、視界の端ではマシユが盾を構え直したようだった。

「——何、よ。これ、ふぎけないで!!わたしの責任じゃない、わたしは失敗なんてしてない、わたしは死んでなんかない!!アンタ、どこの誰なのよ!?私のカルデアスに何をしたのよッ!」

ガチガチと歯を鳴らしながら、半狂乱で絶叫する所長の姿は、まさに悲劇のヒロインといった感じで、場の空気をそれらしく高めている。

「ふむ、では改めて自己紹介をしようか。私はレフ・ライノール・フラウロス。貴様たち人類を処理するために遣わされた、2015年担当者だ」

自らを滅亡を告げる使者である。と高らかに宣言した男は、静まり返る観衆を前に弁舌を振るった。

「聞いているな、ドクター・ロマニ?共に魔道を研究した学友として、君には忠告をして

やろう。未来は消失したのではない。焼却されたのだ。カルデアスの磁場でカルデアは守られているだろうが、外はこの冬木と同じ末路を迎えているだろう」

「……そうでしたか。外部と連絡がとれないのは通信の故障ではなく、そもそも受け取る相手が消え去っていたからなのですね」

すると、存外冷静なドクターの反応が返る。レフはそれをつまらなそうに一瞥して鼻を鳴らし、小賢しい男を排せなかつたことを悔やむ呪詛を吐いてから、演説を再開した。「……ああ、そうとも。おまえたちは進化の行き止まりで衰退するのでも、異種族との交戦の末に滅びるのでもない。自らの無意味さに!!自らの無能さ故に!!我らが王の寵愛を失ったが故に!!何の価値もない紙クズのように!!跡形もなく燃え尽きるのだ!!」

語れば語る程に哄笑へと近づいていく言の葉に、共鳴するように空間が振動する。

「おっと、この特異点もそろそろ限界か。セイバーめ、聖杯を与えられながらこの時代を維持しようなどと、余計な手間を取らせてくれた」

苛立ちを隠そうともせず吐き捨てて、レフは私達を睥睨した。お気に入りの玩具を目の前にした幼子のように、その瞳が弧を描く。

「……では、オルガ。最後に君の望みを叶えてあげよう。さあ、宝物とやらに触れるとい

い」  
発言と同時に、所長の身体が見えない力に引かれ浮かび上がる。その異常さに、誰とも



なしに悲鳴が溢れた。

「ちよ——、なにを言っているの?! いや!! やめて!! だってカルデアスよ!!」

「ああ。ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな。まあ、どちらにせよ。人間が触れば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」

「ひつ——、いや、いや!! 助けて、誰か助けて!! どうして!?! どうしてこんなコトばかりなの!?!」

信頼していた男からの無常なまでの宣告に、女の金切り声がかかります。

「しよ——」

「あの男に近づいてはなりません!!」

「けどッ!!」

思わずと、アヴェンジャーを振り払って駆け出した私は、手首を引いた彼女の制止の力強さに嘯みつくように声を返す。折角、痛い思いをしてまで救った命を目の前で散らされるのには我慢がならない。例え、その行為や思いが仮初に過ぎないものであるとしても、辿る結果に変わりがなかったとしても。

「やだ、やめて、いやいやいやいやいや!! だってまだ何もしていない!! まだ、誰にも褒めてさえもらえなかったのに——!!」

「では、さらばだ。ロマニ、マシユ、そして48人目の適性者」

所長の絶叫が断末魔へと移行し始める。悠然と男が笑い、そして——  
「覚醒なさいっ!!不眠番竜!!」

アヴェンジャーが冷然と唸る。覚悟と苦悩の滲む声音だった。詳細は不明だったが、確かにはつきりとしているのは、今の彼女の言葉には魔力が込められていた。

「な、貴様っ——」

途端、空中で身をよじっていた所長は雷にでも打たれたかの様に硬直し、レフの見えない力を弾く。達観の色をのせた瞳と感情の抜け落ちたようなその表情からは、先程までの焦燥はうかがえない。支えを失った事で緩やかに落下していく——

「マシユっ!!所長をお願い!!」

「はいっ!!」

目に見えて狼狽えたレフの姿に、かえって私は冷静に状況を直視する事が出来た。しかし、そんな私と反比例するかのよう、傍らの淑女の震えは大きくなっていく。

「……くも、よくも!!母の目の前で我が子を手にかけようとしてくれたなっ!!地獄の具現は何も貴様だけに許された特権ではない事を、その命を持って知るがいっ!!」

ガツンツン!!とヒールを折りそうな勢いで踵を鳴らして、アヴェンジャーが牙を剥く。

「吠えたてよ!!己が護りの誉れの全てっ!!」

詠唱に呼応するかのようになり、アヴェンジャーを起点として淡く暗い紫の光が蛇の様に地を奔る。

「なっ——」

やおら、浮かびあがった巨大な魔法陣にレフが目を剥き

「怪妊母胎——」

ここに、彼女の真の力が開帳される。

「獄門番犬!!」

瞬間、地面に浮かんだ紋が陥没し、あるはずのない大穴が開く、奈落と形容して差し支えないだろうその深淵からは、怖気の走る冷気と共に三首の獣が這い出した。地球上に生息している陸上動物など比ではないその巨軀は、銀に光る闇色の毛皮に覆われ、六つの眼はそれぞれが異なる色彩に輝いていた。

「——お喚びですか、母上」

この世ならざる端巖な魔物が顎あぎとを開く、低く深みのある声のアヴェンジャーへと投げかけられ、発言と共に地には紫の毒花が咲き乱れた。

そんな、美麗ながらも恐怖心を煽る幻想的な光景に、言葉を失う私達の前で、神代の母子おやしは再会の喜びも一塩に物騒な言の葉を交わし合う。

「久しいわね、我が愛息。お前を喚び出したのは他でもない、我らが怨敵足り得る男を手

「ずから肅清せんため!!」

「……怨敵、ですか」

ふと、憤りに身を焦がすアヴェンジャー越しに、獣の六色の眼が私達を射すくめた。途端、身体の奥底が泡立つ、アレがここまでの反応を示すのは珍しい。と思考しながら私は自分の口角がつり上がるのを止められなかった。

「……なるほど、事情は分かりました。一族の者を殺戮せんとする輩には、我が誇りにかけて地獄を見せましょう」

数瞬の沈黙の後に、獣は全てを見透かすような瞳を私から逸らした。色とりどりのそれは崖の上の男へと移される。

「——フ、ハハハハハ!!ここにきて、過去、現在、未来を象徴する三首と相対するとはな」  
「……申し訳ありませんが、貴方個人の述懐には何の興味もありません」

鞭の様にしなる尾の一閃が、文字通りに鎌首をもたげてレフへと迫る。尾であると同時に頭でもあるそれは、鋭い息を吐きながら裂くように大口を開いた。

「お覚悟を、愚かなる叛逆者。我が偉大なる母神の命により、貴君を我が主神の民とする」

蛇、否。竜と形容したほうが正しかろうそれが、レフもろともに岸壁を抉る。本体は静かに座したままに、牙も爪も使わずに理不尽なまでにあっさり地形が変えられた。

しかし――

「……面妖な」

「おや？ ハデスの犬に面妖と言われる日が来ようとは、予想だにしていなかったよ」

レフは傷一つ負うことなく、涼しい顔で空中に浮かんでいた。しかも、その姿はよく見れば霞みがかっている。

「――そうか!! 聖杯だ、聖杯を狙って!!」

「素晴らしい助言です。母上!!」

私の叫びに獣が右の首をこちらへと向ける。暖色の瞳が私を讃えるように細められ、同時に息子に呼ばれたアヴェンジャーがすぐ脇を駆け抜ける。それからは母子だからこそその阿吽の呼吸だった。しなる尾の先端を足場に勢いよくアヴェンジャーが飛ぶ。弾丸のようなスピードで瞬く間にレフへと肉薄した。

「――ッ!!」

一瞬で眼前に迫ったアヴェンジャーの気迫に押されるようにレフが息を呑み。

「逃がさぬッ!!」

鋭い怒号と共に伸ばされたアヴェンジャーの腕を紫電が走った。それはレフの手中に光る結晶を飲み込んだ後、獣の尾に喰われて消える。

「チッ」

不快感も露わに舌打ちを一つ、レフはアヴェンジャーをねめつけ、アヴェンジャーの爪先はレフを切り裂いた。

「やったか!？」

「いえ、仕留めきれてはいないでしょう」

ドクターの問いかけに獣が三首を振る。六色の瞳は霧散した男の行方を掴むように、拳を握り続ける母親へと注がれていた。しかし、今の状況はそう悠長にしていられる場面ではない。

「急いで撤退しましょう。空間が安定していないわ!!」

「ええ、全員、私の傍に!!」

地鳴りの激しさに大声を上げた私を獣の尾が絡めとる。すぐさま、失敬。と謝罪の聲がかかったがとんでもない。彼の機転が利かねば、私は今頃、落石の下敷きになっていたところである。

「先輩!!」

「我が子!!」  
マスター

血相を変えたマシユとアヴェンジャーが即座に私の元に急行するくらいには間一髪だったのだ。

「ああ、良かった。ケルベロス。お前も無事ですね」

「無論です」

「マシユ、所長の様子は？」

「氣を失つてはいませんが、大丈夫かと!!」

それから獣の巨軀のもとで私達は速やかに互いの安否を確認し合つた。

「そう、良かった。ドクター!!至急レイシフトを実行してください!!」

「分かつてる、もう実行しているとも!!でもゴメン、そつちの崩壊の方が早いかもだ!!」

その言葉通り、モニター越しの彼は私達ではなく手元を注視しながら、忙しく手を動かしていた。

「とにかく、意識だけは強く持つてくれ!!意味消失さえしなければサルベージは——」

瞬間、途切れた音声と同時に、地の底から突き上げるような轟音がした。凍つた湖面に亀裂が入るように地面が割れ、私達は絶望感と共に暗闇へと投げ出された。

——墜ちる。

反転する世界で、踏みしめるものを失くした身体が傾ぎ、血液さえも行き場を失くした。

「ツ!!母上達だけでもツ!!」

「何をツ!!」

刹那、銀に輝く黒い鼻先が焦燥の声音で私達を掬い上げ、崩れゆく不安定な足場を跳

躍する。次第に小さくなる地をギリギリまで踏みしめて、三度目の着地で遂にその後ろ脚が滑落した。

「クッ!!」

牙を剥き喰った彼は前足で岩にしがみつきのながら、渾身の力をもつて私達を上空へと放る。獣の執念の籠った臂力は凄まじい高度にまで私達を押し上げ、それと引き換えの様に彼のしがみつく岩は砕けた。咆哮を長く轟かせて獣は瓦礫と共に奈落へと呑み込まれる。

「ケルベロスッ!!」

凄惨な光景に呼び声は叫び。しかして彼女は両翼が折れるのも厭わずに、石の雨から私を庇った為に、息子を見殺しにせざるを得なかった。だからだろう。その研ぎ澄まされた刀のような鋭い残響は、私の鼓膜に深く刺さって抜ける事はなかった。

「先輩ッ!!」

すると、感傷に苛まれる私を叱咤するように上がる声があった。回る視界の先で彼女もまた盾を用い懸命に所長を護っている。それでいてその表情には今にも泣き出しそうな儂さがあった。

「……マシユ」

天の欠片すらもが降り注ぎ始めた中で、血に汚れた金色の隙間を縫って、彼女の透き



通った紫水晶が煌めいたのを最後に、私の意識は断絶した。

\*

覚悟をしていないわけではなかった。だからと言って怖くないわけではなかったけれど、自分の生死については元よりゴールが明確だったのもあって、割と達観できているのだ。ただ、それが、誰かの命を負う事と繋がると途端に頑なになってしまう。守れないという事がどれだけ恐ろしい事なのか。もう、分かってしまったから――

\*\*\*

眠りと言うのは本来、心地のよいものであり、目覚めと言うのは元来、不快を伴うものであるはずなのだが、今のマシユは己の覚醒に震えるほどの歓喜と恐怖を覚えていた。

「ご無事ですか?!?皆さん」

靴底がコツンと懐かしい感触と音とを身体に運ぶ、異変が起こる前までは当たり前前に享受できていたそれが、この瞬間には得難い奇跡の様に感じられ、マシユは思わず声を上げていた。

「貴女こそ」

と答える声は、優しく傍らに寄り添っている。態度こそ確かに落ち着いてはいるものの、彼女の瞳もまだ多分に興奮の色を残していた。

「わたしは、盾。ですから」

「……ええ、そうね。貴女とてサーヴァントなのは同じでした。非礼は詫びましょう」

「……………その、実はわたしたちもアヴェンジャーさんにお詫びしなければならぬ事があります」

互いの無事と腕の中に眠る人命を認識しながら、健闘を讃え合う。そんな、二人の空

気に突如として第三者の靴音が割り込んだ。

「やあ、お初にお目にかかる。怪物王妃。私はカルデアに召喚されたキャスター。真名をレオナルド・ダ・ヴィンチ。気軽にダ・ヴィンチちゃんとも呼んでくれるとありがたい」

やおら、飄々とした声音と共に軽やかに姿を現したのは、芸術的な美しさに溢れた美女だった。自身もまたそれをよく理解しているのか、どことなく勝気な自信が透けて見える。

「……なるほど、既に母の真名は看破されている様子。となれば、黙っているわけにはまいませんね」

史実では男性であるはずのダ・ヴィンチは、今や自身の最高傑作と言えよう美女の姿形でアヴェンジャーを見据えていた。その齟齬にアヴェンジャーも気付いていたのかは知れないが、警戒心も露わに身を固めていた自身を宥めるように目を閉じると、深い息を吐いてから唇を震わせた。

「初めまして。天才画家。我がクラスはアヴェンジャー。真名をエキドナと申します。そして——」

「私は、ケルベロス。アヴェ<sup>エ</sup>ン<sup>キ</sup>ド<sup>ト</sup>ナ<sup>ナ</sup>が<sup>ガ</sup>息<sup>息</sup>子<sup>子</sup>の宝具として、ここに参上いたしました」

そう言って、エキドナの嫺やかな言葉を継ぎ頭を垂れたのは、一人の美丈夫だった。

人型への変化はあれど、銀の光沢を持つ黒髪と左右で異なる虹彩を有した瞳の異様さに、魔性が色濃く表れていた。また、よく見ればその手には淡く輝く結晶体が握られている。どうやら、それが彼の命綱となったようだった。

「うんうん、君達親子については、いろいろと疑問は尽きないが。まずは無事の帰還、何よりだ。そして歓迎しよう。ようこそ、人理継続保障機関フィニス・カルデアへ」

すると、モナリザの満足そうな微笑みを起爆剤としたかのように、辺りには少数精鋭による数多の歓声が溢れたのであった。

## 運命の夜裏

To the virgins, to make much of time  
 Gather ye rosebuds while ye may,  
 Old time is swiftly going;  
 And this same flower that smiles to-day,  
 y,  
 Tomorrow will be dying.  
 Robert Herrick

\*\*\*

「おや？ 獣の幼体に出迎えを受けるとは思つてもいかなかった。これは歓迎なのか、はたまた警告なのか。どちらにせよ、あのご老人のことですから、ハッピーエンドをご所望なのでしようね？」

カルデア一行が奔走しているのと時を同じくして、炎にのまれた都市部の一角には、毬の様に軽やかな響きで言の葉を並べる者の姿があつた。

「フオーウ？」

「いえ、申し訳ありません。独り言です。君も大概、振り回されているようですね」

やれやれと、しゃがみ込んで獣の背を撫ぜたその人物の容貌は、目深に被られた純白のフードによつて判然とはしなかつたが、声色の幼さと体躯の小さから、一見すると年端もいかない子供のよう感じる。ただ、それにしては、妙に語り口が老成していった。

「……おっと、既に戦局は動いているようですね。それと、これは困りました」

瞬間、遙か上空を嘶きと共に奔つた眩い軌跡に感嘆の呟きがこぼれる。そして――

「私が喚んだサーヴァントは、いったい、何処に行つてしまったのやら」

「フオーウ？」

憂いを帯びた嘆息に獣の戸惑いが重なつた。

\*\*\*

燃え盛る炎の街を見下ろすように、その洋館は様式美を保っていた。いや、正しくは城と言いついた方が的確かもしれないが、兎も角、その豪邸を目掛け暗い森林を駆ける赤い騎影の姿があった。深紅の外套は木々の間を俊敏に跳び回り、時折、目には見えぬ障害を排除するかのようには、ナイフを投擲しては進路を変更していく、そうして、あつと言う間に城の外観を捉えた。

目標捕捉。と自身を鼓舞するように呟かれた低い声が、顔の下半分を覆う包帯の隙間から漏れ聞こえた。

すぐさま彼は、城壁にほど近い木の枝に上ると、静かに城を俯瞰し観察してから、熟練の早業で複数のナイフを一直線に放った。凄まじい技巧を孕んだ凶器が、飛距離を伸ばしながら、第一刀である凶刃の後押しをする。研鑽され計算づくされた一陣の煌めきはけれど、大詰めというところで少しだけ浮き足立った。

その様子に溜め息によく似た吐息を一つ、何処からか小銃を取り出した男は、手慣れた動作でそれを構えると、深紅のフードと包帯の間で暗い瞳を細めた。刹那、放たれた銃弾は正確無比な軌道を描いてナイフの柄へとめり込み――

「神 秘 轍 断」

無機質な呪文と共に、弾丸によつて加速したナイフの切っ先が、城を覆う透明な膜へと突き刺さる。硬質な高音を伴つて結界が割れるや否や、深紅の外套は城内へと滑り込んでいた。

「……………ハハ」

そうして、降り立つた庭園では、一面の薄紅の薔薇が華やかな香りを振り撒いていた。無論、硝煙の匂いをさせるような男には縁遠い景色である。なのに、何処か郷愁に似た切なさを覚えている自分があった。

「……………僕らしくもない」

理由の判然としない不可解さに苦い述懐がこぼれ、衝動的にここを目指した己を嗤う。そしてハタと気付く、抑止力の命での現界ならば、このような脱線は起きないはずだと。

ただ、仮にそうであるのなら、何処かに自分のマスターにあたる人物がいなければ道理が合わない。だと言うのに、この世界は既に破綻し過ぎている。魔術師にせよ、サ―



ヴァントにせよ。聖杯戦争とは表沙汰にならぬように、密やかに行われる戦闘であらねばならない。それが基本且つ共通認識であろうに、一体、何処の馬鹿が暴走したのかはしれないが、救いようのない奴は何処にでも居るようだった。故にこそ、自分のような者が存在しているわけだが――

なんにせよ、情報が足りない。と踵を返そうとした男の視界に、大岩の如き巨漢が映る。しまった。と思ったものの一足遅く、狂気に濁った双眸は、ジロリと侵入者をねめつけた。

\*\*\*

「一つ、聞いておきたいのですが……、獣の幼体。あなたは単独顕現を有していますよね？」

「フオウ」

ところ変わって、二つの小さな白は、燃える街並みを抜け、郊外を進みながら、淀みない対話を展開していた。

「……ならば直ちに、あなたのあるべき所へ戻りなさい」

「フオーウ？」

やおら、森の入口を探し当てた白装束の矮躯は、柔く小さな手で虚空に触れる。波紋のように空気が波立って、指先が見えない壁へと沈みゆく――

「私は狂乱の英雄の忠節に、一つの区切りを示さねばなりません。でなければ、あまりに彼が救われない。何より、今、かの女怪と彼を相対させたくはないのです。それに折角、喚んだサーヴァントを、こころも簡単に喪うのは寝覚めが悪いと言うもの」

「……フオーウ」

「さようなら、キャスパリーグ。君が君である為にも、汚れは私が引き受けよう」

優しい拒絶と共に、小さな背は境界線の向こうへと吸い込まれる。残された白い獣は高く鳴くと、その場で跳躍し、光と共に姿を消した。

そうして、辺りには濃い闇と静寂だけが返ったのであった。



「……………令呪を以て命じます。両者共に矛を収めなさい」

刹那、戦場に似合わない鈴の音が唱えた言の葉に、鈍色の巨人と深紅の騎影は瞳目と共に静止する。但し、それは強制を受けたからではなく、突然の衝撃に対する反射としての挙動だった。

「……………!!」

途端、息を呑む気配と我に返るような銃声が轟き、闖入者に迫った銃弾は、巨人の鋼の肉体によつて阻まれる。一瞬の硬直からの立ち直りは、両者共に迅速且つ意外性に富んでいた。

「……………可哀想に、本来の主と私の区別もつかなくなっているのですね」

「……………どういう意味だ？君がそのデカブツの主なんじゃないのか？」

銃を構えたままの男の問いに、巨人が威嚇も露わに低く唸る。その巨体に庇われる形となった、白い小さなフードからは、幼い悲嘆の聲がこぼれた。

「……………離れていて下さい。如何に抑止の守護者であろうと、貴方に大英雄の相手は荷が重いでしよう」

「……………まるで、自分ならば務まると言うような口ぶりだな。君は何処のお嬢さんだい？」  
荷が重い。という事実を指摘されたからではなく、抑止の守護者と呼ばれた事に、男は警戒を強めて相手を注視した。

「貴方と同じ、世界の奴隷ですよ」

「……なんだって？」

幼すぎる少女の返答に、男は意外にも鼻白んだが、少女はさして気にも止めず、巨人へ向かつて言霊を紡いだ。

「ヘラクレレス。これより私は貴方の狂気を剥奪します」

歴然とした身長差ゆえに、巨軀を見上げる形となったそのフードが落ちる。

■■■■

瞬間、現れた幼子の面立ちに巨人は虚を突かれたかのようにたじろいだ。

「仁恤じんじゆつを以て殺殺しますます」

少女の色素のない髪が風に舞い、血潮の色をした眼が見開かれる。

ナルキッソス・レスメイ  
「水鏡ナルキッソス・レスメイの愛」

静かな吐息がさざ波のように鼓膜を震わすと同時、辺りは眩い光に包まれた。

「……なるほど、凄まじい癒し手があつたものだ。狂戦士から狂気を除く事で存在意義を奪う。などとは考えもつかない。このような激烈な術をその齡で如何にして身につけたのか……」

「目に見える形がすべてではありません。私は貴方の忠義を利用した卑怯者に過ぎない」

ぬるま湯に浸る微睡みのような、温かな安息を覚える光が収束するや、狂気に濁つていた双眸を、正気に澄んだものへと変えて、パーサーカー、否、大英雄ヘラクレスは感嘆の呟きを漏らした。だのに、そんな彼に讃えられた少女はと言えば、苦汁を飲んだかのように整つた容貌を歪ませている。

「……だとしても礼を言おう。優しい介錯を有難う。小さなレディ」

半ば、粒子となつて霞む巖のような巨軀を、精一杯に縮こませながら、少女へと答えた神代の英雄は、晴れやかな面持ちで風に溶けるように消え去つた。その風に舞つた薔薇の花弁と香りが、少女の尻削ぎの頭に引つかかる。薄紅のそれは彼女の白髪にはよく映えた。しかし――

「あんたは、いったいなんだ？ 狂戦士殺しに特化した英霊など聞いたことがない」

ささやかな寂然のひとつときは数瞬で、銃器を構える微かな音と男の詰問によつて乱さ

れる。それに柔順に向き直る少女の頬を銃弾が一つ掠めた。

「動くな、それと質問に答えろ」

「……丸腰相手に随分な事をなさるのですね」

「よく言う。それと、幼児の姿を取るのなら、もう少し、それらしく振舞ったらどうだ？」  
改めて相対してみれば、少女の見目は想像以上に幼く、外見年齢だけならば、丁度、片手に収まるぐらいだった。ただ、それにしても中身が余りに達観しているようで、薄気味が悪い。尤も、内と外の整合性が取れていたとしても、それはそれで、この狂った世界には能わず、不気味だったであろうが。

「……先も申し上げましたが、私も貴方と同じ代行者です」

「ならば、僕が喚ばれた意味はなんだ？ 狂戦士をどうにかするのが目的ならば、君一人のこと足りたはずだ」

隙の無い指摘と共に、男の暗い双眸が予断なく少女を見据える。けれど、隠そうともしない警戒心と殺気を受けて尚、少女は動じるそぶり一つ見せなかった。

「……困ったなあ、優秀なものもここまで来ると些かやり辛い。でも、そうですね。正直にお話しいたしましょう」

降参だと言うように、少女は苦笑を浮かべて、小さく可憐な唇を開いた。

「……まず、狂戦士は行きがけの駄賃のようなものです。それと、貴方を喚んだのは私で

す

「……何を言っている?」

「ええ、困惑するのも分かりませんが事実です。令呪ならばこちらに」

「そう言うと、少女は前方に片腕を伸ばし、顔に重なるような位置で右手の平を開く。そこには確かに、蝶を思わせる。朱の紋様が浮かんでいた。」

「代行者同士での主従契約だ?!?そんな事があり得るはずが——」

「途端、男が驚愕に顔色を変える。それはフードと包帯でほとんどの表情を隠していながらにして、如実なものだった。」

「ええ、常ならばまずありません。ですが、私は代行者としては、かなり限定的な力しか持ち得ていないので、どうしても協力者が必要なのです」

「……解せないな、仮に君の力が限定的な代物だとしても、問題に対処できるだけのバックアップは抑止力が行っている筈だ」

「それも常ならばそうだったでしょう。ですが状況は余りに混沌としてしまっている。故に私は貴方という保険をかけたのです。状況が混沌としているが故に成功した保険というのも皮肉ではありますが……」

「自嘲の色を乗せた少女の顔つきに、男は逡巡するように押し黙る。沈黙の中で薄紅の花吹雪だけが雄弁だった。」



「……………正直、理解が追いつかないというのが本音ではあるが、取り敢えずは君の目的を聞こう。君は何を阻止するためにこの世界に赴いた」

三度目の花の嵐がやんだころ、男は観念したかのように銃器を下げると、重い口を開いた。対する少女は少しだけ迷いを見せながら答える。

「……………有り体な言い方をしてしまえば、災厄が振り撒かれるのを防ぎたいのです」  
「方法は？」

その淀んだ言い回しに、気付いているのか、いないのか。男は然したる感動を覚えるでもなく、淡々と相槌を打つ、当然を相手にしているかのように。

「……………私には殺さなければならぬ女ひとがいるんです。なんとしても、それこそ私の全てを犠牲にしても……………」

少女の柔和な面立ちが翳る。蠟人形のように生気を失くした顔色と、磨り硝子の様に曇った眼に、男は漸く少女が自分と同類であるという事の実感を得た。

「……………そうか、細かい事は分からないが、明瞭な目標があるのはいい事だ。そうと決まれば、とつとつとその標的を仕留めに行こう。それで君の役目も僕の拘束も解かれるというのなら万々歳じゃないか」

「それが出来ていれば、私は貴方を喚んではいませんよ」

突き放すような男の言動に、呆れの交じる毅然とした声が返る。

「目的に変わりはありません。ただ、彼女の代わりを務める者も居ないんです。相も変わらず釈然としない展開に、男の眉間の皺が深くなる。」

「今の彼女はこの世界に起こった異変を探り、解明する事の出来る唯一の探索者です。故に、我々は彼女が世界を救うまでは、彼女に助力する側でいなくてはなりません」

「つまりは陰から支え、しまいに陰に葬るのが僕等の役目だと?」

「……そうです。きちんと殺す為にも生かすのです」

「難儀な仕事だ」

辟易とした男の声音に、少女は切実な声色で告げる。

「これも同業者のよしみということ、協力してください」

「……元より拒否権はないんだろう?」

棘を含んだ肯定の言葉に、少女は親睦を深める為か手を差し出すも、男は軽蔑するよな一瞥をくれただけで、彼女の脇をすり抜けた。無視される形となった少女は、行き場を失くした己の手の平に浮かぶ紋様を見つめて、もの憂うように肩を竦めてから、男の後に続く。そうして数歩、並び歩いた紅白は、言葉少なに何事かを交わし合うと、示し合わせたかのように姿を消した。

「……………フリー、フォーウ」

そうして、人知れず誕生した。世界を巡るもう一つの主従のあらましを、唯一と見届けていた白き獣は、城の屋根の上で意味深な鳴き声をこぼしたのであった。

## 幕間

## 眠り姫

夢の中で、自分が夢を見ていると気付く事がある。今回もその類である事は、まず、間違いなかった。

「我らは何か御身の怒りに触れましたでしょうか？」

しわがれた声が神殿の高い天井に反響する、私は真白い柱の陰からそれを見ていた。

「何のことですか？」

隠者のような老人に相對するは美しい女だった。無垢な白さを纏ったその見目は、余りに崇高で、直視するのも憚られる。私と死線をくぐったアヴェンジャーの、在りし日の穢れなき姿は、想像以上に神々しかった。

「……恐れながら、女神様の神殿内部に……その……淀みが」

超常の存在からの問いに、老人は畏敬の念も露わに口籠る。

「女神の庇護を求めて参つた者を匿っているだけです。その事で、何かお前たちに不利益でも？」

「い、いえ、滅相もございません。そのような事は断じて……」

脅迫じみた詰問に、老人は慌てて被りを振るも、言葉に反して、その表情には不安が色濃く表れていた。

「ならば、これ以上の詮索はしない事です。女神わたくしの怒りに触れたくないのであれば」「ハッ」

冷淡な声音と鋭い視線に、深く傳いた老人の口からは割れた声が漏れる。と同時に、女神は衣擦れ一つさせずに、老人へと背を向けた。言外に話は終わりだと告げて、神殿の最奥へと歩を進めた彼女ではあつたが――

「恐れながら!!」

低頭したままに大声を張った老人にその歩みが阻まれた。途端、彼には冷ややかな視線が注がれる。その瞳には、話の次第によつては無事では済まぬぞ。と言うような猟奇的な輝きが含まれているようにも見えた。

「わたしの孫娘は……」

老人の意を決した問いかけに、彼女は、なぜ、そんな事を聞くのか理解が出来ない。とても言いたげに柳眉を顰めて淡々と言い捨てた。

「無事に帰るでしよう」

そのまま踵を返した女神を拝するように、老人が深く目を瞑る。今度ばかりは邪魔は入らなかつた。



音として認識できない怪物の声に、私は衝動的に柱を背に蹲る。恐怖にここまで気が狂いそうになったのは初めてだった。

「めっ……女神、様……っ……!!」

そうして、縮こまる私の鼓膜に、いくつかの地を這うような若い女の声が、息も絶え絶えと言うように響く、恐らくは女神に仕える巫女達のものだろう。

「皆、無事ですね？」

「女神様、申し訳——」

「無事ならばそれで良いのです。各々、休養なさい。ですが、ここで見聞きしたことは他言無用です。よいですね？」

救いへの感謝と、不覚についての謝罪に潤む主張を、女神は即座に棄却した。途端、女神からの恩赦を受けた、腰の抜けた巫女達は、身体を引き摺るようにして、私の居る柱のすぐ脇を通り抜ける。否、何名かは仲間の手によって真実、引き摺られていた。なかには眼球が上転し、泡を拭いている者まである。そうして、艶やかな大理石の上には、赤い線と鉄錆の匂いだけが残された。

「……さて、それでは貴方の怪我の程度を診ましょう」

恐怖に駆られた喧騒が遠のいた折、シンとした静寂にまろやかな美声が反響する。神殿の主の一声で、場は一瞬にして、清められたかのようにだった。すると、そんな空気に





そんな、彼の心の内を察してか、女神は幼子へと語りかけるように言の葉を紡ぎ——  
「ふふ、信じられないと言う表情かおですね」

滑らかな手で彼を捉えると同時、淡く儂げに微笑んだ。

——視界が揺らぐ。

目を開けると知らない天井が広がっていた。無理やりの覚醒ではないからか、眠気はない。緩慢な瞬きと共に、私は呆然と上体を起こして、立てた両膝に額を付けて深く呼吸する。何かを見た気がするのに、それが何であったのかを思い出せない。べたつく寝汗も相まつて不快感が激しかった。

「…………お目覚めのようですね。ご気分はいかがでしょう？」

そんな中、鼓膜に響いた落ち着いた声音街撃に、弾かれるように顔を上げれば、そこには見知らぬ男の姿があった。ただ、額の中心で分けられた前髪には既視感が湧く、室内光

の明かりに銀を反射する黒髪も。ああ、でも、極め付きは白皙の面に光るその双眸だろう。左右で異なる色彩は単純な二色ではなく、右から左、或は左から右へと、虹の様にグラデーションしている。纏う衣服はドクターが着ているものと似た濃紺の長衣で、装飾の少ないシンプルな作りが、かえって洗練されて見えた。

「……………貴方、ケルベロス？」

「はい。私は上手く人になれていませんでしようか？」

まだ、どこか本調子ではない頭を回して問いかければ、長身の美丈夫は肯定と共に微かに首を傾げた。

「それは、多分、大丈夫だと思うけど」

「……………そうですか。いや、ダ・ヴィンチ氏には、絵画のモデル題材になつて欲しい。と迫られたのですが、その他の職員方は、まだ私が恐ろしいのか、遠巻きにこちらを眺めるばかりでして、よもや、私のこの姿には、何か致命的な欠陥でもあるのかとばかり、何せ人型など、はじめての経験なもので——」

お恥ずかしい限りです。と滑らかな低音が苦笑する。寧ろ、ムカつくくらいに顔が良いせいで、皆、気圧されているだけだと思ふのだが、この分だと言つても伝わらないだろうから、黙っておく事にした。

すると、虹の瞳で私を射抜いたケルベロスは、改まったように寝台の傍らに傳くと、厳

かな声音で宣誓する。

「……………常ならば、冥府の神の従僕たるこの身ではありませんが、今生は我が母神を倣いで、貴女様にお仕え致します」

そうして、呆気にとられる私をよそに、彼は流麗な所作で私の手を掬うと、その甲へと額を寄せた。辛うじて口づけの形とならなかつたのは、内包した毒を考慮しての事だつたのだろうが、それでも、私を貴人として扱い、献身を表した彼の姿に背筋がゾワつく。現代日本を生きてきた小娘にそういうのはちよつと重い。付け加えるのなら、白馬の王子様とかに憧れる乙女な嗜好は、私にはなかつた。

が、そんな事など知る由もないケルベロスは、サツパリとした面持ちで顔を上げる。瞬間、視線が絡み、微笑みかけられた。おい、よせ。早速、忠犬全開でキラキラすんな。お前は自分の顔面が宝具である事に自覚を持って。

と、彼の魔性に翻弄され、早くも前言撤回を決めた私ではあつたが、それ以上に気にかかつていた事に思考が廻つた。

「マシユ達は？」

「あの場に居た者は皆、無事ですすよ」

美貌の微笑みに、私の口からは反射的な溜め息が漏れる。

「……………そう、良かった。本当に」

思わずと顔を覆つて寝台へと身体を沈ませれば、安心したせいとか、どつと倦怠感に襲われる。ついさつきまで寝ていたはずなのに、この疲労はなかなか手強いようだった。

(……ああ、生きてる)

不快感ほどにそれを実感できるものもない。複雑ではあつたがそれが事実である。

「……我が君、宜しければ貴女が目を覚ました事を母に伝えても?」

「構わないけれど、彼女は何処に?」

ふと、慮るように投げかけられた控えめな問いかけに、私は肯定したうえで質問を返した。あれだけ私に執着を見せていたアヴェンジャーではなく、ケルベロスが傍らに付いているのは、若干の引つ掛かりを覚えなくもなかった。

「母上ならば、貴女の上司。いえ、その内に宿る。我が弟の元に居ります」

「え?」

ケルベロスの返答に、私は勢いよく身体を起こした。

\*\*\*

「——では、あくまでも、所長の為だったと仰るのですね？」

「ええ」

場所は変わり、カルデアの施設の一室では、机を挟んで向かい合う男と女の姿があった。

「……ですが、そこに所長の意思は汲まれてはいませんか？」

疲れの色濃い表情で、男は眼前のヴェールを見据える。彼に瞳で訴えかけられた女は、被り布の向こう側で整った片眉を跳ね上げた。

「お言葉ですが、あなた方が盾の乙女に為した事と、此度のわたくしの行いに、何の違いがあると言うのです？」

「貴女はツ!!」

「そこまでだ、ロマニ。冷静になれないのなら、今すぐに出て行きたまえ。私の神経まで逆撫でて、手元が狂ったらどうするつもりだい？」

瞬間、思わずと言うように、席を立ち、身を乗り出した男を、端に座った美女がキツ

く窘める。その仲裁に、バツが悪そうに表情を歪めて、彼は今一度、席に座り直した。

「……無論、私だつて憤っているさ。流石は元が女神なだけはある。つてね」

机に片肘を突き、横向きに座る。モナリザを体現した姿のキャスターのサーヴァント。真名をレオナルド・ダ・ヴィンチは、対話する両者ではなく、組んだ膝の上に乗せたタブレットを操作しながら、愚痴を溢す。

「だが、我々には彼女を救う術がなかったのも事実だ」

やおら、長い脚で床を蹴つて椅子を転がした彼、もとい彼女は、後ろ手に拳で不透明な硝子を叩く、途端、振動を合図としたかのように大窓が透き通った。

「……………くそっ!!」

珍しく声を荒げ、拳で卓上を叩いたロマニを一瞥して、ダ・ヴィンチは元女神へと向き直る。

「エキドナ。もう一度、尋ねるが彼女の中に入れたのはなんだ？」

「※※※※です。尤も、あなた方には名としては聞こえないでしょう。人間世界にあの子の真名を記したものは残ってはいないでしょうから」

憂いを帯びた灰紫の瞳が、マジックミラーの向こう側で、解析機に横たわる名もなき子オルガマリーへと注がれる。室外から慌ただしい靴音が響いたのもその時だった。

「お待ちください、我が君。貴女はまだ万全な状態では」

「私を止めたいのなら、足でももぐことね!!」

「そうではなく、移動なされるのなら、私がお運び致しますので——」

「——ああ、もう、そういうところよ!!」

冷静な低い諭告に嘯みつくような悲鳴が返る。その声音はぎやいぎやいと喧しいままに扉を開け放つて、室内へと押し入って来た。

「——ん? どうやら、本命の目が覚めたようだね。よしよし、それでこそ主人公というヤツだ。こうして会うのは初めましてだね、イモリ・セツナ。意識はしっかりしているか——」

「そんな事より、所長の安否は?」

息を切らせたまま、ダ・ヴィンチの言葉を遮った少女。イモリ・セツナは、長い黒髪を振り乱すように室内を見回して、すぐさま、透明な板で仕切られた向こう側の存在に瞠目した。

「んー、君つて寝起きは悪い方かな? 目を覚ましたら絶世の美女がいて驚く気持ちもわかるけれど——」

「御託はいいからちゃんと答えろ。所長の容体は? 彼女の身に一体何が起きている!」

瞬間、硝子一枚で隔たれた世界を睨んだままに発せられた、鋭い剣幕と冷たい気迫に、場がシンと静まり、空気がピンと張りつめる。当初は羽虫の一匹も殺せぬような、大和

撫子の雰囲気醸し出していた少女の化けの皮は剥がれ、剥き出しとなった本性は、こちらを喰い殺さんばかりの威圧感を溢れさせている。それは、この場に居合わせた英霊ですらも目を剥くほどの代物だった。

「……ふう、やれやれ。どうにも君はしつかりしすぎているな。だからこそ、あまり不安を抱えさせたくはなかったのだが」

「そうやって、綺麗事だけを教えられても不満が溜まるだけよ。それに、お前たち魔術師が往々にして外道であることくらいは、私なりに理解しているつもりでいるわ」

「だから、何を言われても大して驚きはしない。と虚無を湛えた自嘲的な視線が、挑発するようにダ・ヴィンチを見据えていた。

「んんー、どうにも手厳しい意見だが、あながち否定も出来ない。事実とは残酷だね」

モナリザの美貌に冷えた鬚がおちるが否や、サツと逸らされた天才の瞳は、未だに拳を震わせたままのロマニへと注がれた。指示（許し）を仰ぐ（請う）ような視線を受けた彼は、瞳の奥で深く頷く。その返答を受けて、美女は少女に向き直ると瑞々しい唇を開いた。

「オルガマリーは一度死んでいる。少なくとも、彼女の遺体（肉体）はこちらで確認が取れているからね」

「ええ、あの狂った世界で、レフの自供を聞いたわ。にわかには信じがたかったけど、所長は魂だけの存在になっていたようね」



「そうとも、だから彼女だけはどうあつても帰つて来られない筈だったんだ。こちらに帰還すれば、その時点で魂は肉体の後を追う運命だった。まあ、どのみち、あの世界で生き地獄を味わわせるような仕打ちも出来なかつたけれどね」

「……そう、じゃあ。状況を精査したところで、本題に踏み込むわね？ 此処に繋がれている彼女は何？」

潔く口を割つたダ・ヴィンチに、少しばかり肩透かしを食らつたような面持ちで、けれど話が早いのは助かるとばかりに、セツナは硝子の向こうに注意を向ける。

「まだ断言は出来ないが、恐らく、彼女の魂をエキドナの宝具がプロテクトしている。というところだろう。ただ、どうにも目覚める気配がなくてね」

「※※※※は……、失礼、息子はかつては眠らぬ竜でした。そうして金羊毛の守護をしていたのです」

「そうか、コルクスの竜!! 彼女の中に入れたのはコルクスの竜なんだ!!」

「はい」

話題にあがつたからか、エキドナが補足するように口を挿み、その内容へロマニが飛びつく。そうして勢いづいた流れの中で、セツナだけが整った顔に厳しい表情を張り付けていた。

「では、オルガマリーが目覚めないのは、彼の伝承に引きずられてなのかい？」

「……………恐らくは」

「……………もしかして、母親の君でも」

「ご明察の通り、魔女にかけられた呪いはとけません。非常に腹立たしく悔しくはありますが、息子の知名度は、此処に居るケルベロスなどとは違って、そう高くはないのです。故に現界を凶れば、自ずと最もよく知られている姿をとらざるを得ない」

ダ・ヴィンチの懸念を先回りしたエキドナの返答に、場には悼むような静けさが満ちる。

「……………ですが、他に手立てはありませんでした。先も申しましたが、母は何よりも我が子を守る事を優先していましたから、そして、それは、あの場に居たサーヴァントの共通認識でもあったでしょう。故に、必然的に防備が手薄になる彼女には、予防線を張っておいたのです。眠ってはいいようが、息子は無能ではありません。守護竜としての本能で、母の呼びかけに応じる気骨までは、何者にも侵されません」

そうして、しみりとした空気に対抗するように言葉を継いだエキドナの主張は、既にセツナの耳には入ってはいなかった。

「——ハッ、黙って聞いていれば、どいつも、こいつも。命を何だと思っているのかしら」  
鼻を鳴らして少女は笑う。上品さの欠片もないその造作は、不思議なほどに彼女によく似合っていた。

「勝手な思惑や独善で、分不相応な力の容れ物にされる側の気持ちがお前らに分かるか？」

振り返る、乱れた黒絹の隙間から覗く黒曜の瞳は、暗く濁つて光を灯さない。みるみると歪むその顔に浮かぶのは、抑えきれない悲憤。

「自我に己以外の意識を抱える恐怖と屈辱が!!お前らに分かるか!」

「我が子」

「ふざけるな!!」

ピシヤリ。と、震えるセツナの肩へと伸ばされたエキドナの手が打ち払われる。凄烈な拒絶を受けた淑女の唇からは、絶望に似た吐息が漏れ、少女は総毛立つように激昂した。

「私は許さない!!許してなどなるものか!!呪つてやる!!私から私を奪つたお前たちを!!必ず全員、縊り殺してやる!!」

虚ろな目を見開き、怒涛の呪詛を並べるその姿は、気の触れた老女の如し。否、現に今の彼女に正気などは残されてはいまい。そうして、知らずのうちに少女の禁忌に触れた者達は、憎悪を孕んだ不吉な言葉の羅列を、聞くに堪えない語調で浴びせかけられ、ある者は顔を歪ませ、ある者は目を逸らし、ある者は口元を覆い、ある者は後退した。その悲痛の滲む反応で、彼女の神経がより逆撫でられる事になるとも気付かずに。

「……………セツナさん」

「まずは、お前からだ!!」

途端、己が名を呼んだ男へと少女は弾かれたように牙を剥く。数瞬、遅れて濃紺の長衣が翻り、美女が杖を振るう。バチリ。と、セツナの鼻先で何かが弾けると同時、痩せた指先がロマニの胸元を掠った。

「——我が子に何をしたッ!?!」

瞬間、今度は淑女がヒステリックな叫びをあげ、美女へと掴みかかる。

「——……………どうやら、強制的に眠らされているようです。母上、彼女を離してやって下さい」

それを息子に窘められたエキドナは、ハツと我に返る。己の手がダ・ヴィンチの腕をキツく締め上げている事に気付くが否や、恥じ入るようにその手を放した。そうして、そんな自分が信じられない。というような面持ちで、謝罪を述べる。ダ・ヴィンチはそれを、少なくとも表面上では、柔和に受け取った様子で、悄然とした面持ちの男へと向き直った。

「無事かい? ロマニ」

「……………」

「ロマニ・アーキマンツ!!」

すると、無反応に早くも焦れた美女は男の頬を掴み、強制的に視線を合わせてその名を呼んだ。

「——あ、うん。平気、だよ」

やおら、しつかりしろ。という叱咤に気付けられ、心神喪失状態から回復した男は、自らを覗き込む美女へと焦点を合わせて応答する。

ならいいんだ。と呆れとも安堵ともつかない嘆息を溢したダ・ヴィンチにつられるようにして、現状を見渡せば、ロマニの瞳には難しい表情をした美青年と淑女の姿が映った。

「……軽い、ですな」

脱力した少女を抱えた魔性が低く唸る。重く静かなその吐息には、褒められた軽さではない。という糾弾が込められているようだった。

## 天才と魔性

忠誠を捧げる。と誓つて早々に、主の不安定さを知る事になろうとは、思いも寄らなかつた。と、ケルペロスは腕の中で音のない寝息を立てる少女を見やる。尤も、冥府の神と、人間の少女とでは、あらゆる面で差を感じるであろう事は想定外の範疇であり、今回の件で、先の己の発言を撤回するような、愚かしい真似をするつもりも毛頭なかつたが――

(この分では、なかなか、厳しいものを視る事になりそうですね)

少女の黒絹の長髪が寝台に広がるのを眺めながら、しみじみと思う。氣を失つたように眠るその寝顔は、決して安らかなものではなかつた。魔されている様子ではないのに、どこか苦しそうであるのが、余計に悲愴ですらある。ただ、そうして彼女を憐れむ事を、彼女自身は許容しないだろう。

やおら、ケルペロスは一度、深く目を瞑ると、被りを振るように、虹の瞳を少女から部屋の扉へと移す。瞬間、閉ざされた扉の向こうからは、控えめなノックと共に遠慮がちな声がかけられた。

「お待ちしていましたよ」

途端、機敏に動いたケルベロスが扉を開け放つ、廊下に立っていたのは、淡い色彩の眼鏡の少女。マシユ・キリエライトだった。

「待つていた？ケルベロスさんは、わたしが来る事をご存知だったのですか？」

「……ええ、まあ。私の本質は獣ですからね。人よりは五感が冴えているのですよ」

聡明な少女のキョトンとした面持ちに、苦笑で答えた美丈夫は、丁寧に彼女を部屋へと招き入れながら、誰も居ない廊下へと目を光らせる。

「……母上も姿を現したらいかがですか？」

「……やはり、お前は目敏いですね」

呆れた声音に空間が揺らぐ、現れた灰色の淑女はバツの悪そうな表情で、息子の慧眼を称えた。

「アヴェンジャーさんも居たのですか」

一足先に部屋へと踏み込んでいたマシユが、驚きに目を見張るのをよそに、ケルベロスは廊下に出ると、後ろ手に扉を閉めた。

「我が子の様子は？」

「今はまた眠りについています。※※※※のほうはよろしいのですか？」

沈んだ表情に少しだけ硬い声音が返る。

「……母は間違えたのでしょうか？」

「それを判断するのは私ではないでしょう」

「……ええ、お前の言う通りね」

明確に責めはしないが、的確に言葉を選んだケルベロスに、エキドナは苦笑を溢す。オルガマリーの魂を還さなかったのは、冥界に籍を置いていた彼に言わせれば、規約違反を問うべき案件ではあったのだ。無論、それは英霊を使い魔とするシステムに關しても言える事であったが。

「……一つ、教えてください」

それを咎めたところで事實は覆らない。ゆえにケルベロスは他の問題へと目を向けた。

「なぜ、姉上ではなく、私と※※※が喚ばれたのですか？」

サーヴァントとなった母親の宝具に過ぎない立場で、気にするべき事でもないのかもしれないが、生誕順に反した召喚には、ある種の感慨を覚えなくてもなかった。居るはずのものが欠けている。という違和感がどうしても拭えなかったのだ。

「……最初に相対した敵がメドユーサとペガサスだったからよ」

「……そう、でしたか」

叔父上。ケルベロスからは大叔父にあたる天馬は、英雄ペレロポルと共に姉を殺した相手でもある。となれば、母親の葛藤は理解に容易い。加えて、生誕にまつわる因果としても、曾



祖母にあたるメドユーサの相手は、ある意味ではエキドナが適任であつた事も頷ける。まあ、尤も、あの姉が喚ばれていたところで、彼女はその事に拘泥するような性格でもなければ、同じ轍を踏むような無能でもなかつただろうが――

(やはり、寂しかったのですね。母上)

恐らくとケルベロスは思考する。自分達が喚ばれたのは、数少ない、殺されなかつた子供であつたからなのだろう。だが、冥界で生きた自分も、生きながらに永眠させられた弟も、母親にしてみれば、失つた子供と大差はなかつたのかもしれない。

「……ねえ、ケルベロス」

瞬間、頬が詰めた手のひらに包まれ、慈愛と悲哀が相克する瞳が揺れる。こうして相對してみると、つくづく憐れな女だと思ふ。魔の血を引きながら、神となりた女。魔に魅入られて、神の座を棄てた女。数多の伝説を産み、そのことごとくを失つた女。冥府で万の死を見てきたケルベロスでも、己が創造主の一人である彼女の一生には思うところがないワケでもなかつた。

「お前は、こんな母を許してくれますか？」

そう言つた彼女は眞実。許されたいのだろうか？もしかしたら、許したいのではないだろうか？ただ――

「……それを決めるのも、私ではないはずですよ」

過去の存在である己の分は弁えなければならぬ。それがケルベロスの指針であり根幹であつた。

「……やあ、家族水入らずのところ悪いけれど、少しいいかな？」

そうして、淀みかけた空気は軽快な声音によつて乱される。淑女と魔性の意識が逸らされた視線の先、回廊の陰から現れた芸術的な美女は、ミステリアスな微笑みで神代の親子へと相對した。

\*\*\*

「碌なもてなしは出来ないだろうけど、まあ座つてくれたまえ」

「お言葉ですが、何処に座れと？」

キャスター、レオナルド・ダ・ヴィンチに連れられて彼、もとい彼女の工房へと足を

踏み入れたエキドナとケルペロスの親子は、雑然とした部屋の様相に絶句と共に立ち尽くす。汚いと言うよりはただ、ただ、紙が多く散らかっている。と言う印象の先立つ室内には、常人には到底理解しえないロジックが敷かれていた。

画家らしく、絵を描いたものも少なくはなかったが、なかには長文の計算式や、何かの設計図と思われるものも多く見受けられる。

「あー、余り気にしないでくれて大丈夫。殆どが気晴らしの習作だからね」

そう言つて、机脇の床に散らばった紙を拾い集めた彼女は、出来た余白に椅子を二脚並べてそこへ両者を手招く、そうして自分は向かい側に場所を設けて腰かけると、よいしょ。つと、卓上の天球儀やエアスクリーンを端に寄せ、いよいよとばかりに美貌の前で手を組んだ。

もし、此処に第三者の姿があつたのならば、その者は目の前の麗しき光景に感嘆の吐息を吐いた事であろう。芸術としての美、神性としての美、魔性としての美という三者三様の違いはあれ、美しいものはおしなべて、一方的に聖化される。それは呪いにも等しく、傍観者の脳裏に刻まれたであろう事は想像に難くない。

「……工房にお招き頂いたという事は、それなりのお話をするつもりである。と受け取つて宜しいですか？」

まず、口火を切つたのは、虹色の双眸を煌めかせる美丈夫であつた。対する美しき才

媛は、あくまでも柔和に微笑む。

「何、こちらに君達をどうこうしようという意志はないさ。ただ、まあ、突っ込んだ話をしなくてはならないだろうから、念の為ね」

自衛もしもの為である。ときつぱりと告げる。その虚飾のない言い分に、ケルベロスは腑に落ちた様子で、あつさりと身を引いた。

「……じゃあ、まずはサーヴァントとその宝具であるところの君達の関係性について、詳しい事を教えてもらえるかい？」

ダ・ヴィンチの質問を受けた親子は、どちらが説明をするべきかと暫し視線で会話する。最終的に深い領きに似たケルベロスの瞬きに、エキドナが唇を震わせた。

「——……そう、ですね。母が子供達のマスターと座を担っている。と、お考えいただければ、最も分かりやすいかと」

「ふむふむ、想定範囲内の答えではあるが、やはり、驚きの仕組みではある。だが、そうなる君の魔力消費は相当のものなんじゃないか？ひいてはマスターの負担も甚大なはずだ。これは、怒らないで聞いて欲しいんだが、彼を一度、還す事は出来ないのかい？」

「……それは愚問というものです。生まれた子供は喪う事はあれ、母胎に還る事はありませんので」

途端、事実を述べたに違いない、端的な答えに空気が軋む。よりもよつて、それを口にしたのが、彼女であった。という、ただ、それだけの理由で。

「……………なるほど、出産誕生に準えた召喚である以上は、確かに道理だ。加えて、君に子殺しが出るはずもない。しつかし、幸か不幸か、これが通常の聖杯戦争でなくて良かったよ。カルデアのバックアップがなければ、マスターは今頃干からびていたに違いない。逆に言わば、この戦いにおいては君の能力ほどに、お誂え向きのものもないのかもしれないけれど、それは同時に、君一人の生死に戦況が掛かっている。と言つても過言じゃなくなる」

決して弱つてはいないけれど、これは困つた。とダ・ヴィンチが嘆息する。だが、流石に万能の天才なだけであつて、切り換えは早い。

「……………そう言えば、此処に来る前に、君達は神妙な顔つきで話し込んでいたけれど、それは我々も含めた今後に影響するものかい？」

「……………いえ、影響と呼べるほどのものは分かりませんが、どうやら、我々が母に喚ばれる事に順番の縛りはないようです」

「と、い、うと？」

「……………私は所謂、長男ではありませんが、第一子ではないのです。なので、姉の存在が見受けられなかった事が、単純に落ち着かなかつたのですよ」

とても個人的且つ、些細な感傷です。と肩を竦めたケルベロスに対し、ダ・ヴィンチは喰い気味に身を乗り出す。

「つまり、誰を喚ぶか。はこちらが恣意的に選択できる。という事なんだね!」

「——え、ええ、恐らくは」

ダ・ヴィンチに詰め寄せられたケルベロスは、助けを求めるように傍らを見やる。息子の困惑の視線を受けたエキドナは、すぐさま助け船を出した。

「だとしても、我が子らの召喚にはリスクが伴う事は貴女もご承知のはず、何より、戦場に子供を招きたいと思う母親が何処におりましょう。これ以上はもう——」

「なら、私もこの際だからハッキリと言わせてもらうが、君が自分の子供達を宝具武器に昇華している事実は変わらないんだ。君がその事をどれだけ忌避しているとしても、それがサーヴァントとしての、エキドナのすべてじゃないか？」

「——それはッ!!」

瞬間、ケルベロスが焦ったような声を上げ、空気が凍りつく。一瞬の静寂の後。ガタッ!!と大仰な音を立てながらエキドナは席を立った。ダ・ヴィンチの言い分は的確であったがゆえに、彼女の逆鱗に触れたのである。

母上。と己を呼ぶ声に、どうにか怒りを噛み砕いた様子のエキドナは、熱に潤んだ瞳を震わせながら、失礼いたします。と美しい声を張って踵を返した。これ以上、同じ空

間に居る事すらも耐えきれない。と言わんばかりに刺々しい靴音を響かせて、工房の扉を威勢よく開け放つが否や、彼女は足早に回廊を歩き去った。

「……………どういいうおつもりですか？」

やおら、視線を扉からダ・ヴィンチへと戻して、ケルベロスは低く問う。エキドナほどではないにしろ、彼もまた、怒りと呆れのないまぜになった表情で、ダ・ヴィンチを見据えていた。

「……………まあ、些かキツイ言い方になった事は認めよう。けど、彼女や君に配慮している時間すら惜しい。というのが正直なところだ。事態が逼迫している以上は、使えるものはそれが何であろうと、使うのが筋じゃないかい？無論、私を含めてね」

「……………では、思惑通りに仕<sup>わ</sup>え<sup>た</sup>る道具を残した貴女の真意について、お聞きするとうしましう」

ふと、降参だと言うように、机に肘をつき頭を抱えたケルベロスとは対照的に、ダ・ヴィンチの美貌は華やぐ。

「うんうん、話が早くて助かるよ。彼の事を君のお母さんの前で言うのは流石に憚れてね。どっちにしろ、地雷である事に代わりはないかもしれないが、理性的に対処出来そうな方に賭けさせて貰ったのさ。計算通り、彼女が立ち去ってくれて良かったよ」

特に悪びれるでもなく策を語った美女に、流石に深い息を吐いたケルベロスは、次か

らは穩便に頼みます。という意味合いの愚痴を溢してから、答えを返した。

「……………そう、ですね。一番の懸念事項は、場合によっては、私は彼の道具になっているやもしれない。という事でしょうか」

「……………ああ、そうか。君は十二番目の功業だったね」

「ええ、屈辱ではありませんが、厳然たる事実です」

ダ・ヴィンチの指摘に、美貌を厳しく歪めたケルペロスの表情には、やはり、人型を取ろうとも誤魔化しきれない、魔獣としての風格が感じられた。

「やはり、憎いかい？」

「……………狡猾いお人だ。そういった聞き方をされてしまえば、はい。と答える他ありませんよ。ですが、最早、清算は済んでいる事でもあると思っっています。被害者感情で見れば仇でも、客観的に見れば、あの男も神に翻弄された哀れな者ですから。まあ、多分に蔑視を含んだ見解ですがね」

「だとしても、冷静なものだね」

「ははは、それはどうでしょう？口では、なんとも言えますからね。実際に目の前にしたら、どうなるかは知れませんかよ？」

そう言つて笑んだケルペロスではあったが、その虹に浮かんだ光は今までになく、鋭く冷えたものであった。



「んん、恐ろしい話だ」

「まったくです」

魔性の仄暗い殺気を受けて、思わずと両腕を擦ったダ・ヴィンチは、表情には出さな  
いまでも、確かに恐怖を覚えてはいた。そして、そんな彼女の心の内は、ケルベロスも  
見抜いていた。

「……なので、結論と致しましては、戦力として彼を欲する事はおすすりできません。私  
個人としましては、敵に回すよりは、味方に置きたい男ではありますが、組織内に紛争  
の種を抱える事になるのは必至でしょうから」

そうして、静かに椅子を引き、立ち上がったケルベロスは、暗に、これ以上の問答を  
拒んでいるようでもあった。

「最後に一ついいかい？」

「……ええ」

「君の眼は千里眼か何かかな？」

その言葉に、束の間、時が止まる。蒼く光る聡明な眼差しに、反映された虹の彩りは  
動じない。

「……さあ？どうでしょう。元々、素質には恵まれていたようですが、私のこれは、母の  
様に先天的なものでもなければ、完成されたものでもありません。ただ、冥府の神に仕

えるようになり、数多の死に相對するようになった事で、多少、肥えてしまった部分はあるのかもしれませんが」

「具体的には？」

抽象的な言いざまに、ダ・ヴィンチが食い下がる。ここに至って、ケルベロスは視線を逡巡させて思案する。

「……そうですね。母の霊体化は私には無意味でした。ですが、それは我々の間に繋がりがああるからこそその現象なのかもしれないので、なんとも。ただ、冥界に連なる者であった私は、死者であるサーヴァント相手には、何かしらの優位性を持てる可能性はあるかと。とは言え、実戦運用がまだなので、確証もなければ、詳細も不明です」

煮え切らない返答で申し訳ない。と苦笑したケルベロスにダ・ヴィンチは緩く首を振る。

「いいや、現状ではそれだけでも十分に有益な情報だ。見識は多ければ多いほどに、選択の余地が広がるからね。ゆえにこそ、もう、お互いに取り繕うのはよそうじゃないか」

「はて？ なんのことでしよう」

「……単刀直入に聞くが。君は彼女の何を視た？」

瑞々しい唇から紡がれる声は低く、凧の様に穏やかだったが、どこか有無を言わせぬ力強さがあつた。

「何も」

「嘘だね」

その答えを予測していたとばかりに、美女は即答する。

「敵対者ならばともかく、我が君に関するその手の質問には答えません。それはつまり、何も視ていない事と同義でしょう」

対する魔性も、どこまでも涼しい表情を崩さない。

「へえ、早くも義に篤いんだね」

「自らの預かり知らぬところで、秘密を盗み見られて良い顔をする人など居ませんよ」  
「違いますか?と問い掛ける様な視線に、ダ・ヴィンチは始めて苦悶する。

「……確かに、それは君の言う通りかもしれないね。だが、大事を前にして尊重出来る個人の問題など、たかが知れているものだよ」

「貴女の言い分にも一理はあるでしょう。ですが、彼女が何者であれ、彼女に世界を合わせる事に違いはないのでしょうか?ならば、すべては彼女が選択をする事です」

「……………君から見て、彼女は世界を救える器だと思おうか?」

「……………そう、ですね。五分、かと」

その答えはダ・ヴィンチの虚を突くには十分だったのだろう。しかし、深い色をした瞳の瞳目に込められた驚きが、前向きなものであったのか、後ろ向きのものであったの

かの判断はつけがたかった。

「淑やかな彼女は、守るべきものを護り通そうとするでしょうが、荒くれた彼女は、自らの領分を害そうとするものを攻め滅ぼそうとするでしょう。どちらにせよ、徹底的で容赦はない。きつと、彼女の救い方とはそういう、冷静でありながら、苛烈なものです」  
「……………なるほど、君が私に言えるのはそれだけかい？」

「有意義な話し合いとなつたのであれば、私としても喜ばしく思います。では、失礼」  
今度こそ、話は終わりだ。とばかりに、丁寧椅子を揃えたケルベロスは、追撃の隙を与えぬ、泰然とした微笑みを浮かべ、一礼の後に退室した。

残された美しき才媛は、モナリザの美貌に少しばかり疲れを見せつつ、詰めていた息を吐く。

そうして、やはり、彼らの相手は自分にしか務まらなかつた。と己を褒め、鼓舞しながら、それでも、聞き出し、引き出せなかつた多くの情報へと、忸怩たる思いを滲ませる。

（神話的にはそれなりの失敗談もあるはずなんだが、やはり、パンがあつてこそ。か）  
不敬と隣合わせの称賛を贈る。天才の眼光には、未知に挫けず、挑もうとする。獯猛な輝きが宿っていた。

## 微睡眠の中で……

気が我に返った時ついた時、女は見知らぬ空間に居た。そこは、上下左右はおろか、寒暖の差、明暗の違い。ましてや、時の概念すらも失ったかのように、一面の白い闇に支配されていた。まるで、世界から逸脱してしまっただかの様に、ともすれば、隔絶されているかの如くに、兎角、現実味というものがなかった。

(……………)

と、思わずと口にしたはずの言葉は、音にはならず。この段に至って初めて、女は視覚で捉えた世界以外での違和感を覚える。それは実体を伴わない感覚と浮遊感であった。まさか。と、視界を巡らすものの、どのように足掻いたところで、己の身体を視認する事は出来ず、その異常な不気味さに、瞬時に戦慄した。しかし、震える身体を持たない現状では、己を抱き宥める事も叶わず、行き場を失い渦巻く恐怖に囚われるしかなかった。

加えて、女は己以外の不可視の存在が、この世界で蠕動した事を本能的に察知した。身体感覚と空間が正常であったならば、その羽搏きが髪を乱し、その歩みが地を揺らし、その吐く息が皮膚を撫でていたであろう。ともあれ、圧倒的な重圧が、女に

トドメを刺さんと迫っている現状に変わりはなかった。そして、叫び声一つ上げられぬ女に出来る事はいえ、ただ、それが立ち去るのを祈るぐらいであった。けれど、願いは虚しく、それはどンドン、女との距離を詰めていく。そうして、女が祈りよりも諦観を覚え始めた時――

「――やあ、気が付いたみたいだね。初めまして」

それは、先程までの気配からは考えられぬ程に、喜色の滲む声音で、凡庸な挨拶をしたのであった。

「――……だ、誰。い、いったい。何が」

ピンツと張っていた空気が急に緩んだ事で、女は詰めていた息を震わせる。だからだろうか、彼女は自分が言葉を音に出来ている事実に、気が付いていない様子であった。

「ああ、そうか。ごめん、不安にさせてしまったようだね」

対する何かは、敵じゃないよ。と優しく語り掛ける。依然として姿を捉えられないままの、音だけの邂逅ではあったが、子供とも大人ともつかない、どちらかと言えば低く澄んだ、独特な雰囲気を感じた響きからは、害意は微塵も感じられなかった。それどころか、こうして会えた事が嬉しいとばかりに、一音、一音が、微かに弾んでいるようにさえ受け取れた。

「で、でも、わたし。カルデアスに取り込まれて、死んだんじゃ……」

「うーん。死ぬという定義もいろいろあるだろうから、一概に否定は出来ないのだけれど、きみの魂は、ぼくが守っているよ」

状況を上手く呑み込めていない様子の女が疑問を口にすれば、否定とも肯定ともつかない解答と、魂を守っている。という尊大ですらある言い分が返って来る。ただ、それが余りに柔和で、あっけらかんとしたものであった為に、女は狼狽えた。自身に何が起きたのか、良し悪しの判断もつかなければ、理解する事すらも出来なかつたのである。

「……意味が分からない。って感じだね」

途端、女の当惑に勘付いたように彼？が苦笑するような気配があつた。その笑みに混じる苦味には、明らかな良心の呵責と、何某かに対する憤懣やるかたない思いが滲んでいる。

「ただ、ぼくも。事のあらましのすべてを把握しているわけではないから、きみの満足に値する説明が出来るとは思えないんだな。それでも、良ければ、言える範囲のことは答えるけれど」

どうする？と女を窺う彼の配慮には、どこか怯えの色があった。

「……………いいわ、説明して頂戴」

その雰囲気を感じ取ってか、女は幾分か平静さを取り戻した風に説明を促した。怖いものなど何一つない。と言うような高慢さを浮かべた命令口調は、彼女が身に着けた一種の鎧である事は明白だった。

「……………うん。分かったよ。でも、その前に、良ければきみの名前を教えてほしいな」

「——あなたね!!人に名乗らす前に、自分が名乗るのが礼儀じゃないの!」

「うう、きみは結構、痛いところをつくなあ」

この状況で名を問われるという事に、女は如実に警戒を強めた。名は楔であり枷鎖である。それが何であるか。を規定する物差しである以上は、おいそれと明かせるものではない。真名を知られるという事は、自分の絶対的な部分を相手に掌握される。という事と同義なのだから、魂を守っている。と彼が言うのなら尚更、明かせるわけなどなかつたのである。そして、それは、実情としての彼女が、どれほど弱い女であつたとしても、甘い声だけの相手をすぐさま信用して縋れるほどに、軽率な女ではなかつた。と



いう事の何よりの証左でもあり、先の経験（きんげん）をすぐさま次へと活かせる、彼女の素直な頑なさでもあった。

「…………でも、そうだね。きみが望むのなら名乗ろうか。多分、無駄だろうけれど」

そうして、女に糾弾を受けた彼は、どこか乾いた虚無感を漂わせて、その名を告げた。

「ぼくは、※※※※※」

「…………え、何？もう一度言つて頂戴」

「※※※※※だよ」

繰り返される。その名称は、言うなれば空虚であった。彼の名だけが明確に、ぼっかりと世界から欠落していた。

「……………悪いけど、伝わってこないわ」

やおら、何とも言えない空間に訪れた、何とも言えない静寂を乗り越えながらも、女は勢いを失くしていた。

「…………うん。でもそれは、きみのせいじゃないから、そう、落ち込まないで欲しいな」

「べ、別に落ち込んでなんかかないわよ!!」

しかし、憐憫を向けた相手に労われた事で、女の勝気さには、またしても火が付いたようだった。

「そうかい？じゃあ、ぼくがそう思ったかっただけかな」

ちよつと恥ずかしいや。と空気がほろ苦く綻ぶ。すると、女の気配も鼻白むように揺らめいた。

「でも、得体の知れない奴とこのまま会話を続けるのも、気持ちが悪いだらうから、きみたちの世界における、ぼくの通り名を覚えておくね」

「……通り名？」

「うん。金羊毛の番竜。または、コルクスの竜。そう称される存在がぼくだよ」

「は？」

刹那、今度は衝撃による静寂が辺りを支配する。予想だにしていなかった展開に、彼女の脳は処理不足を起こして、一時的に機能を停止させていた。

「……あれ？もしかして、ピンと来ていない？」

ぼくは兄弟たちの中でも影が薄いからなあ。と空気に自嘲的な諦観が混じる。

「……………いい、や、分かる、けれど」

そう、分からないと言うわけでは断じてなかった。金羊毛の竜、乃至、コルクスの竜と言えば、ギリシャ神話に散見される英雄譚の一つ、イアソンが率いたとされるアルゴナウタイの冒険に出てくる竜である。しかし、それを理解出来たところで、どうして信ずる事が出来ようか？尤も、それは、この状況のすべてに言える事ではあったのである

が――

「……んで、どうして、そんな存在が、わたしの魂を守っているわけ!」

徐々に声量を上げる。女の頓狂な悲鳴に気圧されるように、竜は怪訝そうに呟いた。

「え?なぜって、きみは母さんに会っているだろう?」

「へ?」

「ん?」

東の間、両者の間にズレが生じる。お互いに特定の人物を知っている事を前提とした会話は、その前提とする知識に差があったのである。

「……ああ、そうか。母さんはサーヴァント?になっているんだったね。じゃあ、真名は名乗らなつたわけか」

なるほど。と一人納得する彼に、反比例するかのように女は戦慄く。

「ちよつ、ちよつと待って頂戴!!アヴェンジャーが貴方の母親だというのなら、彼女の真名は——」

「エキドナ。だよ」

女の混乱に竜が一石を投じた事で、波紋はより大きなものへと進化した。具体的に、薄い氷がヒビ割れるように、空気にピシリと衝撃が走ったのである。

「ハアアアアアアアツ!!意味わつかんない!!なんてもんを喚び出してやがるのよ!!あの女!!自分が何をしたか分かってんのかしら!!」

「——ええ!?ちよつと、なんかよく分からないんだけど、兎に角、落ち着いてもらえないかな?それと人の母親をティスるのはやめておくれよ。いやまあ、ぼくも母さんも厳密には人じゃないし、確かに母さんは色々やり過ぎるところがあるけれど!!」

先のものよりも大仰な叫び声は最早、怒号だった。竜は狼狽えつつも、怒りの矛先が自分ではない事に安堵しながら、女を宥めようとした。しかし——  
「落ち着けるわけがないでしょう!?!」

女の激情と言うのは、往々にして御し難いものである。その例に漏れず、彼女のそれは、お手本の如くヒステリックだった。

「それに、あなたもあなたよ。どうせ、わたしの事なんて、面倒なものを押し付けられた。としか思つてないくせに!!」

瞬間、怨嗟と言うには、余りに卑屈な悲鳴を浴びせかけられた竜が、息を呑む気配がした。時を同じくして、女も自身の取り乱し方に、恥辱を覚えたかのように押し黙る。  
「——……きみは、そんな風に絶望したのかい?」

対する竜は自身に噛みついた女へ、憤る事をしなかった。寧ろ彼女の事を思つて胸を痛めたかのように、呆然と言葉を紡いだのだ。あからさまに同情的なそれは、女の神経をより逆撫でるには、充分に傲慢な優しさだった。可哀想という感情には、自分でなくて良かった。という驕りが付与されているに等しいのだから。ゆえに、女がすぐさま熱

を取り戻しても、なんら可笑しい事などなかったのだが――

「……………もし、そうだと云つたら？」

そうはならなかった。彼女は余りに正直な竜を前にして、興が削がれてしまったのか、他人事のように投げやりに、自らの心情を吐露したのだった。対する竜は決意を固めるように沈黙した後で答える。

「……………そうだね。きみがぼくを絶望から救つたように、ぼくがきみを絶望から救つてあげたいな」

すると、思いがけない返答に、今度は女が虚を突かれたかのように黙し、竜が不安そうに食い下がる。

「嫌、かな？」

「……………嫌も何も、わたしは貴方を絶望から救つた覚えなんて――」

けれど、女の疑問は形となるより先に、竜のくぐもつた笑い声に掻き消された。いや、もしかしたら泣いていたのかもしれない。それくらい感傷的な声色だった。

「……………竜のクセして情けないとは思うのだけれどね。ぼくの絶望は孤独だった。守護竜としての務めも果たせず、眠り続ける事となつたぼくは、必然的に外界との繋がりが希薄になった。それはもう、生きながらにして死んでいるようなものでね。ほら、きみも眠つた事があるのならば分かるだろう？ 眠っている間に出来る事は、たかが知れ

ているんじゃないかい？まあ、人のそれとぼくのそれが、まったく同質のものかは分からないのだけれど」

そう言つて苦笑した様子の竜に、女はなんと声を掛けたらいいのか分からなかった。竜自身は、なんてことはないように語つてはいるが、話を聞いた限りでは、彼にかけられた呪いは、正しい意味での眠りとは言えない気がしてならなかった。きつと、それは彼の視界を暗転させ、その動きを封じる事は出来ても、意識を刈り取るまでには至らなかったのであらう。そんな状態で孤立せざるを得なかったのだとしたら？とそこまで考えて、女は氷水に浸かつたかの様に肝を冷やした。

「……兎も角、そんなぼくの元に君という存在が現れた。そして、こうして言葉を交わしている。それが、どんな形のものであれ、ぼくは嬉しいし、楽しくて仕方がないんだ。だって、きみを守っている限りは、ぼくはもう独りぼっちじゃないんだから」

「独りぼっち、じゃない？」  
「そうだよ」

その声音のまろやかな響きと真つ直ぐさに、女は居心地の悪さを覚えて、失くした臉の存在を嗅いた。そして、自問する。彼に対してこれ以上、何が言えるのかと。

彼の優しさは甘い痺れ以外の何物でもなく、恐ろしい。圧倒的な包容力の前では、強がれば強がるほどに尚、惨めな気持ちにすらなる。端的に言つて慣れない手合いだつ

た。

(ああ、だけど)

決して、望まなかった状況ではないのかもしれない。と浅はかにも思考する己が居た。

由緒ある家柄の魔術師である彼女には誇りがあつた。力量だつてそう悪いものではないと思つていた。けれど、カルデアを<sup>父の遺産</sup>を背負つて立つには、余りに重要なものを欠いてしまつていた。それゆえに、自分は評価されず、自身を肯定できずにいた。そんな身上で受けるには、彼の言葉は悪魔の囁きじみていた。

「……嫌ね。これ以上弱くなるなんて」

「……でも、きみが強くなつてしまうとぼくが要らなくなつてしまうかもしれない。それは困るな」

ふと、無意識に吐露した心情に、大真面目な答えが返つて来るものだから、女は笑いたくなくなった。

「……わたしに、貴方は分不相応だわ」

彼女にしては珍しく、本心からの言葉が口をついて出る。竜は高位すぎるがゆえに、幼子の様に扱いが難しく感じられた。

「そうかなあ？ 仮にそうだとしても、それはこの際、仕方のない事じゃあないかい？」

「……ハッキリと言うのね」

「うん。だって、ぼくにはきみだけだし、もう決めてしまったもの、きみを守る。って」  
瞬間、女は殴られたかのような衝撃を覚えた。決して、望まれて選ばれた結果でない事は理解していた。それでも、自分は確かに誰かにとつての唯一無二になる事は出来たのだ。

でも、だからと言って、どうすればいいのだろうか？胸に湧き上がったその思いを、そのまま口に出せるほどに、彼女はしなやかな女ではなかった。

「……それで、貴方はいいの？」

逡巡の末、結局、彼女は歓喜よりも不安を口にした。そして、可愛くない己に呆れながらも、そこに変わらない自分らしさを見出したのである。

対する竜は苦悶するように唸って、言葉を選ぶように語り出した。

「……………逆に、聞きたいんだけど。きみはやっぱり、ぼくじゃあ不満かな？正直な事を言えば、ぼくよりもケルベロス兄さんの方が、能力は高いと思うし、何より、ぼくはきみの魂を守れても、きみの人生を保証する事が出来ない。ぼくにかかった呪いは、きみをも蝕んでしまうみたいだから、ぼくらはこれから先、二人ぼつちの世界で生きていかなくちやならない」

きみを怖がらせて、嫌われるかと思うと、言いだせなくて、ごめん。と竜の気配が小



さくなる。それは、風の音の様に頼りない声音だった。

女はそんな竜の言葉に驚きを覚える事はあっても、責める気力は起きなかった。彼女の氣質を考えれば、それは意外なほどに優しい対応ではあったが、仮に彼がどれだけの間抜けだったにせよ。呪いの咎をすべて、呪われたほうに科せるほどに、彼女は非道ではなかったのである。

「…………でも、あなたにはわたしだけなんでしょう?」

やおら、不遜ですらある女の返しに、竜は驚きながらも、慌てたように肯定を返す事となる。

「なら、わたしはあなたでいいわ。あなたのお兄さんがどれだけ優秀かは知らないけれど、乗り換えが上手くいく保証だつてないんじゃないの?」

「…………うーん、まあ、確かに?」

「じゃあ、仕方がないじゃない。こうなった以上は、嫌でも貴方に付き合うしかないでしょう?」

「…………ああ、ごめんね。やっぱりきみには辛い思いを——」

「今の、嫌でも」は仮定の話よ!!」

「そうかい?でも、気を付けるね」

自分の態度に反応して、ころころと忙しく一喜一憂する竜を相手に、女は深い息を

吐く。そこには、ありとあらゆる。様々な感情が籠っているようだった。

「……オルガマリーよ」

「へ？」

「わたしの名前、オルガマリー・アニムスファイアよ」

「……そうか!! オルガマリー・アニムスファイア!! オルガマリー・アニムスファイアがきみの名前なんだね!? なるほど、きみはオルガマリー・アニムスファイアと言うのか!!」

「分かったから、そう何度もフルネームで呼ばないで頂戴。落ち着かないわ」

名を呼ばれる事のない彼が、己の名を恍惚と歎呼している様子には、ささやかな罪悪感を覚えたオルガマリーではあったが、これから先、彼と言う守りに、囚われる事が決定されている事を思えば、お互い様かもしれないなかつた。

「ああ!! ごめん、誰かの名前を呼ぶのなんて久しぶりの事で、とつても嬉しくて!!」

何も無い空間が確かに喜びに沸き、空気は震えてにへらと笑う。姿が見えなくても、いや、見えないからこそ、それらは如実だった。

普通、自分の不幸で誰かが救われているなんて、虫唾の走る話であろうに、威厳もへつたくれもない竜の、鼻にかかったように甘い声を聞いたら、気難しく強情なきらいのあのオルガマリーでも、最早、すべてがどうでもよく思えてしまった。

「……そう、結構なことね」

釣られるようにオルガマリーも笑う、表情を失って尚、彼女の笑顔は微笑みというには引き攣ったものではあつたが、それでもそれは本心からの笑みだった。

## ポストアポカリプスにて……

「ひどい顔だな、医者がそんなんじや、患者は安心できないよ。ロマニ」

室内に足を踏み入れるなり、大仰な身振りで憂いを吐いた美女は、疲れ切った顔の胡乱な視線に溜め息で応戦する。そしてそのまま、ロマニの憔悴の理由を察しているばかりに、彼女は豊満な胸の下で腕を組むと、端的に切り出した。

「あの娘の事を考えていたんだらう？」

すると、万能の天才と名高き者の指摘に音を上げるようにして、ロマニは口を開いた。

「……なあ、レオナルド」

「なんだい？」

「ボクは選択を間違えたんだらうか？」

「おや？ どうしてそう思うのかな？」

辛気臭い空気を倦む気配はそのままに、ダ・ヴィンチはロマニに微笑みかける。

「……■■■■の魔女、■■東の■■妖、名もなき■■と■■の弓兵、そして怪物王妃。イモリ・セツナが召喚した英霊たちは、その殆どが反英雄に区分されるだらう存在だ」

「それで？」

「触媒がなかった以上、彼らは縁によつて喚びだされたわけだろう？ただの少女が召喚した英霊と考えると不気味じゃないかい？」

「……………いいや。別段、おかしくも不思議でもないだろうさ。つまりはそういう事なんだろう」

そんな分かり切つた事で悩むなよ。なにせ、世界一有名な番犬までもが目を光らせている少女だよ？厄ネタに決まっているじゃないか。とダ・ヴィンチは心の中で付け足した。

「そういう事って——」

途端、困惑しきつた反応が返る。如何に人を診る医者でも心までは見透かせないのだろう。ともあれ、そんな事で対話が停滞するのはいただけない。とばかりにダ・ヴィンチは続けた。

「なあ、ロマニ。君はさつき、選択を間違えたのか。って私に聞いたけれど、そもそもからして、その質問は定義がなつてないよ。私達に選択の余地などなかつただろう？その上で彼女にそれを負わせたのは誰だい？」

「それは——」

「断れるものなら、誰だつて断りたいと思うだろう類のお願いを、最も向いていないだろう少女に乞うしかないのが今の私達なんだよ」

医者の肩へと置かれた芸術家の手は、慰めと共に諦観を促していた。

「彼女が悪人だろうが、善人だろうが。それは今、対して重要な事じゃあない。重要なのは彼女が人類史を背負うに足る人間かどうかだ」

「けど——」

「悩んでも今更だよロマニ。賽は投げられた。何よりも、彼女自身がその事を深く理解している。あの会話はそういう話だったじゃないか」

最後に説き伏せる様な助言を残して、芸術家は泰然と踵を返す。言外に話は終わりだと告げられる形になった医者は、信じられないものを見たかの様に啞然と、その後ろ姿が室外に消えるのを眺めていた。

「——……ああ、もうッ!!」

そうして、独り、取り残されたロマニは、卓上に刻まれた真新しい傷跡をなぞりながら、怒りとも嘆きともつかない唸り声と共に椅子の背もたれを軋ませた。

※※※

時は昨夜へと巻き戻る。場所は同じく、カルデア内の診察室。登場人物は二人いた。「気分はどうかな？」

「……そう、ですね。前後の記憶に欠落があるような不快感があつて、少し落ち着かないです」

明るい長髪を一つに括つた青年医師、ロマニと、黒曜の瞳を眇める漆黒の少女、セツナである。

「……そっか。強制的な魔術の行使だったからね。彼も細かな加減は出来なかつたんだろう。でも、安心していい。重篤な後遺症が残る事はないはずだ」

セツナからの答えに暫し、何事かを逡巡した様子で、ロマニは苦笑する。対するセツナはその笑顔を訝しむように眉を顰めた。

「私は一体、何を。どんな粗相を働いたんですか？」

強張つた声音と硬い表情で、怯えたように自らを窺うセツナを前に、ロマニは静かに答えた。

「キミは怒つたんだよ」

「怒つた？」

「ああ、誰よりも苛烈に怒ったんだよ。それこそ、我を忘れてしまうほどに、キミは所長の身に降りかかった悲劇に対して心を痛めていた」

「……信じられません」

「どうして?」

小首を傾げた医師の、認識の甘さをせせら笑うように少女は告げる。

「だって、私と所長はお互いの事を嫌っています」

「……………うん。なんと言うかその、そんな感じはしていたけれども」

キツパリと言い切ったセツナに対してロマニが狼狽える。悪感情を述べるにしては、清々しいまでの彼女の言い分に、気圧されているかのようだった。

「……もう、いいです。分かりました。きつと何を言われても腑に落ちないでしょうから。その代わり——」

そんなロマニの様子をやはり、呆れたように見つめて、セツナは神妙な顔つきで向き直った。

「聞きたい事があります」

「ああ、勿論。何でも聞いてくれて構わないよ。堪えられる範囲ならば答え——」

その言葉を言い終わらないうちに、ヒュンという風切り音と共に、銀色の残像が彼の視界の端を横切った



「え？」

ロマニの視線が、ある一点を見据えて固まる。

机についた手の平の微かに開いた指の間へと突き刺さったそれを見た途端に、表情を怯ませた彼は、弾かれたように少女へと視線を移して瞠目した。

「ええ、勿論。答えられる範囲で答えて貰って構わないのですが、もしかすると、もしかするかもしれないよ？」

漆黒の無表情の笑みと共に、揃っていた刃が鮮烈に煌めく、片刃を軸にクルリと回転したそれは、ロマニの指を挟む形で鋭利な光を湛えた。

これには流石にロマニも息を呑むしかなかった。状況への驚嘆は当然として、荒事到手慣れている雰囲気の少女に戦慄を覚えたからである。けれども、それらの感情は一時で、決して長続きはしなかった。セツナから発せられる空気が迫力に欠けているわけではないが、今一つ、切実さが欠けていたのである。彼女の本気はもつと、急所に刃を据えるように予断がないものだ。迷うことなく首元に手を伸ばしたあの瞬間のように。ゆえに、見境のない激情と冷徹な思惑とでなら、後者の方がまだ駆け引きの余地がある。と分析する事が可能なくらいには、ロマニにも余裕があった。人間、何事も経験から学ぶ生き物である。

「知らない事がそんなに不安かい？」

「……ええ、当然でしょう？情報の鮮度とその正否をもとに下す私の決断に、世界の命運がかかっているのよ？何をどうしたら、その恐怖から目を背けられるというの？」

存外、冷静なロマニの反応には少なからず意外性があったと見え、セツナは感心したように僅かな動揺を見せた。途端、唇から零れ落ちた感情は内容に反して、無感動な響きを有していたが、他人事のようなそれは、矛盾よりも乖離性を感じさせた。

「それは寧ろキミの首を絞めるよ」

「……………」

「知ろうとする事で、恐れないようにしようと努めるキミの考えは、とても理知的で尊いものだ。けれど——」

ふと、視線を微動だにしない少女から刃へと移せば、それは小さく震えているようだった。

「分からないという恐怖を克服した後に来るのはきつと、知ってしまった恐怖だよ」

「そんなこと——」

「分かっているッ!!」

「——ッ」

聞き捨てならない。と言うかのように食い下がったセツナの勢いは、絞り出すようなロマニの拒絶と刃から伝わった微かな感触に上書きされる。

「……あ」

「……キミは、分かってないよ」

目前の少女の感性と同じくらいに研ぎ澄まされた刃の冷たさに、温かいものが流れるのを知覚しながら、ロマニは言い切った。絵面とは裏腹に情勢は今やロマニへと傾いている。

「……そう、一つだけ分かったわ」

やおら、深く沈殿するような静寂を越えて、敗北を認めるように潔く風いだ声音で、少女が言の葉を紡ぎ始める。

「私は分からない恐怖を抱えて、貴方は知ってしまった恐怖に怯えた」

無表情をほんの一瞬、泣き笑いの様に歪めてロマニを見つめるセツナ。余りに儂い、柔らかな眼差しを生み出すその目は、酷く大人びて見えた。

「その一点だけでもう、こんなにも人は分かり合えない」

けれど、瞬きのうちに、視線は白手袋に滲む流血へと注がれていた。世界の縮図と己の罪業を嘆くかのように。

「……セツナさん」

「それでも、いえ、だからこそ。世界は救わねばならない。なぜなら、今こうして私達が争う事ですら、消されてしまった人々からすれば贅沢に他ならないのだから」

そうでしょう？と尋ねるような、虚無を宿しながらも澄んで光る瞳の前に、ロマニは言葉もなく、たじろぐしかなかった。

セツナはロマニの様子を嘲るような吐息を漏らして、微かに血のついた鋏を片手に踵を返す。

「……せいぜい、醜悪な世界を取り戻す事に奔走しましょう。少なくとも、私が生きやすい場所は此処ではないみたいだから」

ごめんなさいね。と哀しげに、されど安堵するように、言い残して、少女は静かに退室した。

結局、彼女が何を知りたかったのかは分からないままに対話は終わってしまった事になる。

「どうだったかな？」

そう言つて、診察室から出てきたセツナを呼び止めたのは、カルデアが誇る英霊召喚成功例にして、天才のレオナルド・ダ・ヴィンチである。彼もとい彼女は、昔からの古い女友達の手を取るように気安く、されど有無を言わさずに、セツナの腕を取ると歩き出した。

「……ん、そうね。意外と手強かつたわ」

「ふふ、そうだろうね。あいつはヘタレで軟弱だけど、根幹はぶれない奴さ」

「ええ、確かに私の認識が甘かつたわ。でも——」

瞬間、ガキンツ!!と金属の打ち合わさる鈍い音が回廊に反響する。

「この方法なら誰もが私の意のままかもしれないわね？」

「……笑えない冗談はよしておくれよ」

「あら、本気よ？」

心外だと言うように目を細めて、分かっているでしょう？とばかりに口角を上げた少女の言わんとしている事を、無論、稀代の天才が読み解けぬはずはない。彼女はダヴィンチが防ぐことを見越したうえで、自らの喉に刃を突き立てようとしたのだ。

「——まったく、本当に笑えないよ」

涼しい顔をしながら、少女は己の命を人質に我欲を押し通そうとした。それは余りに

危険で、とてつもなく残忍な賭けである。

「……それで、私は何処に連行されるの?」

豪胆で傲慢な表情を覗かせた少女は、何事もなかったかのように柔く微笑むと仕切り直すかの様に問いかけた。すると、刃を受け止めた手のひらを見つめ、その美貌にひとときのモナリザらしからぬ陰を浮かべていたダ・ヴィンチも前を向く。

「何、ちよつとした下準備さ」

途端、悪戯っぽいウイंकを受けたセツナが、辟易とした表情を浮かべたのは言うまでもない。

\*\*\*

「……本当にこれで狙い通りのサーヴァントが召喚できるのかしらねえ?」

「フオーウ!!」

明くる朝、依然として昏睡状態の所長と、マシユ、勝手に付いてきた小動物一匹を伴って、カルデアの召喚場へと赴いたセツナは、訝し気に呟いた。

「……やはり、護衛がわたし一人だけというのは不安でしょうか？」

抱えてきた所長を召喚場に逃えられた敷物の上へと横たえながら、マシユが眉を下げた。

「あ、いや。それはあまり心配してないけど……」

『まさかとは思うけど、その目の下のクマ。昨日渡した資料、全部読んだのかい？』

途端、会話に割り込むようにスピーカーから発せられた軽快な声音に、セツナの顔色が頭痛を堪えるかの様に歪んだ。

「残念ながら、全てに目を通せた訳ではありません。ただ、出来る限りの事はしたつもりです」

『そつかく、それは申し訳ない事をした。君の責任感の強さがそれほどのものだと流石の私でも見抜けなかったよ』

テヘペロ と言うような顔文字がついていそうなその声色に、セツナの機嫌が目に見えて悪化する。

「と、ともかく。こちらの準備は万全と言えます」

『こちららも、いつでもOKさ。タイミングはそちらに任せるよ』

「フオウ!!」

場をとりなすように声を張ったマシユに、ダ・ヴィンチが声を弾ませる。セツナは自身の苛立ちを落ち着けるように、肩に乗ったフオウを一撫でしてから召喚陣の前に立った。

「……素に銀と鉄。礎に石と契約の大公——」

深呼吸を一つ、令呪を宿した手を掲げ、暗記した召喚呪文の詠唱を開始する。

「……今のところ、順調のようですね」

ところ変わって、スピーカー側の面々は、それぞれに異なる反応を示していた。

モニターを見つめ端的な眩きを溢すケルベロスと、そんな息子の落ち着いた様子と裏腹に、エキドナは緊張気味に強張った美貌で液晶を食い入るように見ていた。



「うん、順調も順調だね。だから、余り圧を飛ばさないで欲しいなあ。このままじゃ背中に穴が開きそう」

「気持ちに分かるけどね。と、諸々の計器の前に立ち、操作を行っているダ・ヴィンチが苦笑を溢すも、エキドナの反応が返る気配はない。ダ・ヴィンチは、やれやれと言わんばかりに肩を竦める。

「……あはは。いや、それにしても、キミのお母さんはよく承諾してくれたよね」

その様子に苦笑しながら、ロマニがケルベロスに話題を振る。途端、虹の双眸に射抜かれたロマニが、居心地悪そうにたじろいだ。

「ああ、失礼。あまり気分が良いものではないでしょう?」

謝罪と共に、ケルベロスが視線を逸らす、ロマニは、ばつが悪そうに頬を掻いた。

「あ、いや。こちらこそすまない。まだキミ達のような存在と向き合う事に慣れていないくて……」

「慣れる必要はありませんよ。母上はまだしも、我々は正規の英霊ではないのですから、そうでなくとも、本来、邂逅する筈のない存在に慣れ親しむのは、あまり褒められた事ではありません」

「うう、何と言うかカルデアには耳が痛い意見だなあ」

現世と幽世の境界を守護してきた番犬の言葉ともなれば、深く刺さるものがあつた。

「……でも、そうは言いつつも、キミたちは力を貸してくれた。その助力に全力で報いる事が、ボクらに出来る唯一の恩返しだ」

遠くを見る様な目で液晶を見つめながら、ロマニが言う。ケルベロスも物思うような表情で状況を静観しながら、口を開いた。

「……正直なところ、私はこの事態に関して、これといった感慨を持つてているわけではありません。衰退はどんなものにも訪れます。かつて、神々が人間達から追いやられたように、その順番が人間達にも回つて来ただけなのだ。」

それは、神因の側果に立成つてをいた罪獣をの台詞にとしてしてはも淡々とし過ぎていて、ロマニにとつては、かえつてやり辛かった。憎しみが込められていない糾弾ほどに反応に困る代物もない。排除された側がその事を当然の帰結と達観してしまつていては、同じ立場に置かれたい。自分達が足掻く事は無様だと思えなくなつてくる。

「……うん、そうだね。それは確かにそうなのかもしれない。しかも世界の命運を、一人の少女と過去の栄光に賭けるしかないのだから、ボクたちの在り方は、君にはさぞや醜く映るだろう。だけど——」

ただ、ただ、前を向く。

「滅びが避けられないならば。避けられないなりに、その理由を知りたいじゃないか？」  
傍らの獣が虹の双眸を細めたのを気配だけで察しながら、ロマニは捲し立てた。

「勿論、知ったうえで納得できるかは分からないし、納得できたからといって、滅びを許容できるわけでもないだろう。何せ、ここはそういう風にはできていない。何処までも傲慢で愚かしい人類のエゴが作り上げた最期の砦なんだから」

言い切ると同時に、ロマニの肌には痛いほどの緊張が走った。だがそれは錯覚とも思える一瞬の出来事だった。

「……フツ、なるほど。考えてもみれば、神々の潔さも愚かと言えたのかもしれないね。尤も、現段階ではどちらの愚かさのほうがマシであるのかの判断すらつきませんが、ともあれ——」

感心は元より、愉快なものを見た。と言うように吐息を溢して目を伏せたケルベロスは、最後にしっかりとロマニと視線を合わせて告げた。

「貴方の覚悟のほどは、分かった気が致します」

途端、畏怖からではなく、羞恥からロマニが顔を背ける。

「あく、いや、そう言われるとちよつと。大層な事を言つてはみたけれど、結局のところはまだ死にたくないし、殺されたくないって事なんだよ」

「ふむ。やはり、私には理解しがたい事柄なのかもしれないかもしれませんが。存在そのものが死に寄り過ぎている私は、死を恐れる感情というものに乏しい。ただ——」

言いつくろうロマニをよそに、端的に自身を評価したケルベロスは、母親の後ろ姿を

目に留めるや、静かな声色と共に苦笑を溢した。

「これ以上、母上が悲しむことになるのは私も望みません。事態の大きさを考えれば、私  
 があなた方に助力する動機も、なかなかどうして、軽薄と言えるのではないでしょう  
 か？」

時は満ちる――

「汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――!!」

召喚呪文の詠唱が大詰めを迎える。室内に充満していた魔力と光が、大小様々に収束  
 して、弾けた。

「――ッ」

視界を灼く閃光。咄嗟に目元を庇うセツナと眠り続ける所長を庇うように盾を掲げ  
 ながら、マシユ・キリエライトは四本の太い光の柱がそれぞれに形を獲得するさまを見

ていた。

「サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上した」

まず、始めに名乗りを上げたのは、見知った顔の見知らぬ男だった。その赤い外套が翻るのには、反射的に体が強張る。

「ほいほい。呼ばれたからには、それなりに働きますよつと」

そんな緊張感に水を差すようにかかった軽快な声は、緑衣を纏い、顔を隠した青年のものだった。

「あら、随分と可愛らしいマスターなのね」

続く、含みのある声色と共に、笑みを浮かべて中空に漂う女もまた、目深に被った口で美貌の殆どを秘匿している。

「ふふ。うちを召喚してくれて、おおきにありがとう。好きにやるけど——かまへんね？」

極め付けには、熟した果実のように甘くかぐわしい笑みを浮かべる、艶やかな少女。その額から生える一对の角が、彼女の出自の只ならなさを物語っていた。

泡沫の停滞と共に滅びへと向かう世界。半世紀もの長きに渡り喫煙を続けることで大成する緩やかな自殺みために、浮世は少しずつ着実な崩壊の最中にある。いずれ来たる終焉を回避できるか否かは、この場を集った者達の働きに掛かっていた。

時は、2015年。1年の折り返しを過ぎた。7月の終わり。人類の抗戦の幕開けであった。

# 目覚めのキスは切れ味がいい

それは衝突である。

※※※

『ミズ・ダ・ヴィンチ。本気ですか？』

『何がだい？』

急いたようなノックの後、焦りを帯びた表情で、室内に入つて来た美丈夫に、工房の主、レオナルド・ダ・ヴィンチは手元の書類から目を離さないままに答えた。

『コルキスの王女を召喚なさるおつもりだとお聞きしました』

真つ直ぐにダ・ヴィンチの元に進んだ彼は、あくまでも紳士的な強情さで以て書類を取り上げると、虹の瞳で彼女を射抜いた。

『……………取り敢えず、そこに座ってくれたまえよ』

静かだか、確かな抗戦の主張を感じ取ったダ・ヴィンチは、ひとまずと近くの椅子を勧める。指先まで整えられた芸術家の促しに、ケルベロスはダ・ヴィンチから視線を逸らさぬままに従った。

『……………酷な事を言いますが、オルガマリー彼一人の為に、火種を抱え込む余裕が我々にあるとお思いですか?』

『その我々は誰までを指すんだい?』

ダ・ヴィンチがわざとらしく言うのと、呼応するようにケルベロスの瞳孔が開く。

『この状況で、揚げ足を取るような事を言うのは止めて頂きたい!! 私も母上も、貴方方の敵に回りたいわけではないのです』

怒号は最早、悲鳴だった。ダ・ヴィンチの笑みに憐憫が混じる。

『……………君は賢いのに、優しいんだね』

それは、言い得て妙な非難であり、称賛だった。

『……………いいえ。些か、趣が違います』

椅子に深く沈んでケルベロスが低く呟く。



『我々、兄弟はそれぞれに、母に対する負い目がある。ただそれだけの事です』  
 ダ・ヴィンチはわずかに視線を逸らした。

『……前にも言ったけれど、私は、我々は、使えるものは使いたいのです』  
 はつきりとした声音だった。躊躇いのない言葉だった。

ケルベロスは顔を顰める。

『……リスクが大きすぎます。我が弟を触媒にするという事は、アルゴー号を触媒にする事と同義でしょう。望み通りにコルキスの王女を招き、迷惑通りに我が弟の、ひいてはオルガマリー嬢の能力が使えるようになるのか、我らが最大の怨敵を前にカルデアが戦場になるかの賭けです。推奨できるわけがない!!何より、この話は先日、意見をすり合わせたばかりではないですか!?!』

と、幾分か荒い口調と共にケルベロスは眉間を抑えた。そもそもが、コルキスの王女にしたって問題である事には変わりありません。という嘆息を添えて。

『無論、承知の上だよ。それと、この件は既に君のお母さんに許可を貰っている』

『………はい?』

あつけらかんとしたダ・ヴィンチの言葉に、ケルベロスが緩慢に面を上げる。情けない表情になってしまっている美丈夫を、モナリザの笑みが困ったように見つめていた。

『………性質の悪い。それならそうと言って下さればいいものを』

『いやあ、君の剣幕が余りにも真剣なもので、どこで口を挟めばいいものやら……、それに限りなく均整の取れた美しいものの苦惱ヒビには言い知れぬ魅力がある!!』

悪びれているのかいないのか、どちらにせよ。ダ・ヴィンチは快活に言い放った。

『ははは、貴女の娯楽に付き合わされるのは、もう懲り懲りです』

完璧な微笑みでケルベロスが返す。いつも以上に真に迫った笑みである。ダ・ヴィンチはわけもなく息を呑んだ。そう理由もなく。

『……ええ、分かって頂ければ、それでよいのです』

それから少しの猶予を経て、ケルベロスの虹の瞳から笑みが消える。ダ・ヴィンチは静かに胸を撫で下ろした。

『……兎に角、懸念材用に変わりはありません。我が母は我々子供達を害した者を許しはしない。そういった庇護欲と復讐心で今の彼女は形作られている。となれば、覚悟を決めて挑まねばなりませんね?』

だから、それは――

「ミズ・ダ・ヴィンチ、私が先に出ます。出来るだけ時間を稼いでください」

「まーかせて」

共謀である。

「——なッ、これは!？」

驚嘆と共に灰紫が透ける

「済まないね、苦肉の策だ」

ダ・ヴィンチの謝罪。母親の姿が完全に掻き消えたのを見届けて、ケルベロスは駆け出した。

\*\*\*

『うんうん。靈基の確立及び、カルデア式魔力提供による一時的な受肉を確認、拒否反応なし、数値上に於いては召喚者と英霊間での契約は果たされたと言える。ようこそ、いつぞやの英雄達、我々は君達を歓迎する』

誰よりも早くスピーカーから発せられた声が召喚場に響き渡る。先手としてもアシストとしても軽妙だった。

「……初めまして、皆さん。私はイモリ・セツナ。ひよんな事から世界の命運とやらを背負う事になってしまった可哀想な女の子。そして彼女は——」

「マ、マシユ・キリエライトです。先輩のデミ・サーヴァントです」

快活な反響が霧散した段に至って、漆黒と淡い色彩の少女が順番に名乗りを上げる。招かれた者達の反応はそれぞれだった。

「デミ・サーヴァント、ですって？」

まず始めに返った言霊は、空中に漂う女から発せられたものだった。セツナは黒曜の視線と共に微笑みで応じる。しかし——

「へえ……。かいらしい顔して、鬼おにを従えようなんて、まるで五月姫みたいなお人やねえ？」

その鼻を明かすかの様にセツナの眼前で香った言の葉があった。笑みの中には鋭い犬歯が浮かぶ。怖気を感じる間もなく、気付いたらそこに居た少女の存在に、誰もが一瞬の虚を衝かれた。

「フー、フオウツ!!」

途端、甲高い咆哮があがる。

「あれ、ふふ、見かけによらず、肝が据わつてはるんやねえ。ああ、けど——」

いち早く応戦したのはセツナの肩で唸る小さな獣と——

「そっちの綺麗な目えしたイケメンはおつかないわあ」

「お戯れを、極東の大妖。酔狂にはまだ早いでしょう」

いつの間にか室内へと踏み込んでいた。虹色の双眸だった。セツナの背後に控えるように立ち泰然と口角を上げたその姿に、マシユが気付けられたかのように動く。

「いややわあ、そないに睨まへんでも骨抜かへんで?」

マシユの牽制に素直に身を引いた。あどけない少女の姿をした鬼は、盾越しにケルベロスと視線を交わしたまま、可愛らしく小首を傾げる。はんなりとした所作であるのに、油断ならないと思わせるには充分だった。

「……人間に使役されるのは心外かしら?」

ふと、強張った表情でセツナが口を開く、鬼の少女は視線を滑らせると愉快そうに目

を細めた。

「まさか。ここう見えてうち、尽くす鬼やさかいね。なんなら首輪でもしよか？」  
擲揄いの中に値踏みするような気配があった。知らず、セツナの喉が鳴る。

「……必要ならね」

瞬間、鬼の少女の瞳の中に光った何か。相応の怯えはあれど、視線を逸らさないセツナに彼女は一体どのような感情を抱いたのか。

「……へえ、ふふつ、なあるほど。悪ない、悪ないわあ」

奇妙なものを見るように、セツナ達の周囲をぐるりと回りながら声を弾ませた。

「いいや、ええよ。うちはアサシン、真名を酒吞童子言います。改めましてよろしゅうな。初々しい、マスターはん」

『なツ!!酒吞童子だつて!?!イモリさん、キミって子は怪物王妃に続いて、なんてサーヴァントを——つと、すまない、音声か乱れた。邪魔したね』

すると、丁寧な自己紹介に割って入った二種類の無粋な騒音に、酒吞童子は冷淡な微笑を浮かべた。

「……そう言えば、さつきから声だけ聞こえる人らがいはるなあ? 陰陽師の類やろか? なんやら奇矯な声は兎も角、今のはたいそう骨の無い声やけど。……まあ、ええか」

やおら、果実酒の吐息がふわりと空気を緩ませる。同時に、セツナを筆頭にして息を

詰めていた面々の肩から力が抜けた。

「ええ、気にしないで貰えると助かるわ。それにしても五月姫なんて、あんまりね」

「五月姫、ですか？」

「またの名を滝夜叉姫、乃至、滝夜盛姫とも言う。日本の伝説に謳われる妖術使いだ。彼女は蜘蛛丸や、夜叉丸といった妖のものを配下とし、下総国、相馬の城にて朝廷転覆の反乱を起こしたと言われている。有名なところでは、江戸時代の浮世絵師、歌川国芳の作品に描かれた彼女は、巨大ながしやどくろを大宅太郎光圀おおやたろうみつくにらに焚き付けたりもしているが、実際の彼女は妖術師として成敗されてはおらず、尼として落ち延び生涯をまっとうしたとされている。まあ、身内が有名人だと、噂にも大仰な尾ひれがつく。といういい例だろう」

疲れた顔のセツナの呟きに返るマシユの疑問。それをつぶさに解き明かした赤い外套の弓兵は、猛禽めいた鋼色の瞳で状況を俯瞰しているかのようだった。

「……なる、ほど。それにしてもアーチャーさん？は日本の伝承に詳しいのですね？」  
「いや、何。召喚に際して付与される知識の賜物であつて、私個人の能力ではないさ。それと私の真名についてだが、今はまだ答えられない」

マシユからの賛辞をやんわりと躲して、弓兵は言い切った。ケルベロスの眉が跳ねる。

「ほう、我々は信用ならないと？そのような知識を授けられましたか？」

「少なくとも、物騒な気配が濃いと言う印象は拭えないな」

「おや、些か心外ですね。貴殿の憂慮を全て否定するつもりはありませんが、こちらとしては、友好的に話を進めたいと思っておりますので」

そう言つて、ニツコリと微笑む美丈夫は、かえつて胡散臭いと思うのだが、空気を読んだセツナは黙っている事にした。

「フツ、友好的、ね。だからこそだよ。魔性の男」

「と、言いますと？」

精悍な表情をニヒルに歪めて、弓兵は大仰に肩を竦める。ケルベロスは面白いとばかりに目を瞬いた。

「私は、己の真名を認識していない」

「——なんと」

「あはっ」

そう来たか、というようにケルベロスの瞳孔が開き、酒呑童子が思わずと言うような笑い声を上げる。セツナは意見を求めるようにスピーカーへと視線を移した。

『あく、まあ。そういう事もないとは言い切れないのかな？？なんせ状況は不安定だし、一度に四騎も召喚できただけ、大したものだと思うよ？？』



そうして、当然の様に返って来る飄々とした言葉に、いよいよと耐えきれなくなったのか、額を抑えた。

「そういうわけだ。真名が欠落しているという事がどう影響するかは未知数だ。そのような男を君達は信用できるのかね？」

腕を組みセツナを見下ろして男は言った。挑発にしても、親切にしても、中途半端な言動だとセツナは思った。

「……………そうね。一つだけ聞いてもいいかしら？」

「構わないが」

「今の貴方に私達を助ける意志はあるの？」

だから、その視線を真っ向から受け止めたセツナもまた、素直とは言えない答えで返した。

「……………ふむ、中々に狡い問いかけだマスター。君は将来、いい悪女になれるだろう」  
「はあく、光栄だわ」

一瞬の間をおいて、唇の端だけで形作られた笑みから放たれたキザつたらしい肯定に、心底、呆れた。と言うように単調に答えたセツナは、そのまま意識を切り替えるように視線を逸らした。

「それで？そちらのシャイな貴方は、どこのだなたかしら？」

「……いやあ、その赤いの程、深刻な理由はありませんけどねえ？名のある英雄様方と肩を並べるにはちよおつと……、下衆の名しか手持ちがないもんで」

そう軽い口調で言つて、緑衣の男は弱々しく両手を広げて見せる。こちらを逆撫でしないようにと軟派を装うその姿勢に、セツナの口元には笑みすら浮かんだ。

「あら、貴方も名前がないと言うの？まったく、結構なことね」

「ま、ここは一つ、しがたない弓兵の恥じらいつてヤツを汲んじやあくれませんかねえ？」  
皮肉げな科白、その表情は見えなくとも男が笑みを浮かべた事は明らかだった。対して、セツナは笑わない。ただ、嘆息と共に呟いた。

「……ええ、もう、好きにすればいいわ。協力さえして貰えるのなら、私から贅沢を言うつもりもないし」

「そりゃあいい。理想的な関係だ。勿論、マスターには素直に従いますですよ」

調子のいい男はセツナの答えを称えるように、両掌を高らかに打ち鳴らす。パシンと乾いた音が一つ空気を震わせた。セツナは男の言葉を信じるべきか信じないべきか、迷うように瞳を眇める。

「そう？なら、早急に一つだけ、どうかしてもらいたいのだけれど、二人とも弓兵だとかや……いや、いいわ」

赤と緑、二人の弓兵を前に、セツナが嘆く。件の弓兵達は互いを探るように一瞥し

合った。

「……あー、なるほど？んじゃあ、オレの事はハンターとでも呼んでもらえれば」  
沈黙の中での、数瞬の攻防。先んじて声を上げたのは緑のほうだった。

「ハンター？」

その呆気ないまでの解決に、セツナは困惑気味に復唱する。

「そ、オレは所謂、森の狩人ってヤツでして？専門も後方支援なもんで、そこんとこ頼みますわ」

「……まあ、呼び分けが出来るのなら何でもいいわ、貴方もそれでいいかしら？アーチャー」

やる気があるのかなのか、どうにも掴めない緑衣から赤い外套へと同意を求めれば、ツンと澄ました男の顔が洗面へと変わる。

「……そちらの彼が真名を明かさない身勝手さには思うところがあるが、まあいいだろう」

「へいへい、申し訳なくは思ってますよ？これでも」

「フン、どうだかな」

棘を隠そうともせず鼻をならしたアーチャーを、辟易とした態度でおちよくるハンター。一触即発とまではいかないようだが、十分に剣呑な空気である。更に言えば、不

機嫌な人間達の仲裁に入る事はツナの得意とするものではない。故に、彼女が事態の收拾を早々に放棄したのは当然と言えば当然の帰結だった。

「……………さて、ようやく。本題に入れるわ」

それは、常識的な身長差での視線移動ではない。白い喉元を無防備なほどに晒してセツナは天を仰ぐ。

「キャスター、今だけでいいから、少し降りて来て貰えないかしら？ 話があるの」

「……………あら？ 私、貴女に素性を名乗った覚えはなくてよ？」

降つて来る声は艶やかで、その声色には愉悦すら滲んでいる。そうして、正しく下界を見下ろす彼女が、美しくも恐ろしい女性である事は明白だった。暗色の衣で秘されていて尚、その気品には圧倒される。

「……………そうだったわね。私の希望的観測が間違っていたのならごめんなさい。でも、貴女。想像通りなんですもの」

けれど、似たような事は地に立つ少女にも言えた。不遜なくらいに堂々とした態度は返つて清々しいと言えよう。

「……………どこことなく、癩に障る物言いね。つまりは貴女、最初から私を召喚する気でいたつてわけ？」

「ええ、流石ね。ご明察。だから、そろそろ、答え合わせをしましょう？」

そう、セツナには女の出自に心当たりがあった。狙って招いたという自覚はあるという事だ。

「……………良いでしょう、物好きなお嬢さん。私がなんであるのか、その口で明かしてごらんなさい」

それは、淑女然とした促しではあつたが、容赦のなさは隠せてなかつた。セツナは余計な思考を排するように閉口した後で、諄々と語り始める。

「……………貴女の内容はギリシャ神話において謳われる。舞台はギリシャ世界に於ける東の果て、コルキス。貴女はその国の王アイエテスの娘として誕生した。美しき王女としての寵愛を得ると共に、女神ヘカテに師事し、賢き巫女としての研鑽を積んだ貴女の運命は、外界から訪れた一人の英雄と、とある女神のお節介によつて、いとも簡単に狂わされていく。かくして、盲目的な恋に狂つた貴女は多くの非道を行い、その結果として全てを失い報われる事はなかつた。悲劇の王女にして残酷な悪女、裏切りの魔女として名高き女傑、その名をメディア。それが貴女よ」

先のアーチャーの説明がそうであつたように、知識としてのそれをセツナは淡泊に語る。途端、メディアと呼ばれたキャスターのサーヴァントはその幽寂な雰囲気に対して、声を立てて笑つた。

「……………ふふつ、ああ、可笑しい。こんなにも愉快で不愉快な事もそうないわね。賢く

も愚かな娘、貴女、恐れというものを知らないの？」

そうして、嗤うだけ嗤うと満足したのか、彼女はローブを蝶の翅の様に広げると、魔術紋を輝かせた。空気の鋭さが増すとともに、各サーヴァント達は、さりげなくも頑なな気を纏って、展開を読み合う。

「……いいえ、ただ。貴女が魔術師として最高位にある事はもう知っている。だから敬意を表したまでの事よ」

「……そう、気に食わないけれど。先に他のサーヴァントを取り込んだ手腕は評価してあげる。けれど、次に私の機嫌を損ねたら、この限りではないわ。覚悟と用心だけはしておくことね」

神代の魔術師の神髄を目前に、すげなく放たれたセツナの言葉。その機微をどう読み解いたのか、逡巡を経た末に、メディアの興は冷めた様子だった。

「忠告、痛み入るわ。キャスター。貴女とはきつとうまくやっていける。ねえ、そうでしょう？アヴェンジャー」

瞬間、メディアを見据えたままに、セツナは同意を求める。時を同じくして、召喚場の隔壁が開く微かな音が、緊張に静まりかえった召喚場の空気を大袈裟なほど震わせた。

「いくら愛しい我が子からの嘆願であろうとも、母は許せぬものは許せません」

「母上、今しばらく、そのお気持ち秘められていたほうが宜しいかと」

絞り出すような吐息を労わるような声と視線、それを隙と捉えたのか、メデイアは宙を泳ぐようにセツナの傍らにすり寄った。まるで、そうする事が一番の防衛術とでも言うように。

「——魔女め」

エキドナが小さく吐き捨てる。ケルベロスから遅れる事一拍、セツナが振り返り見た世界では、ヴェールに隠しきれぬ怒りが震えていた。

「マスター、彼女は貴女の隠し玉かしら？」

「……そうね。結果としてはそうなってしまったかしら？尤も、彼女は貴女を招く事になった要因の一つなのよ」

「……話が見えないわね。生前の知己、というわけでもなさそうだけど？」

「アヴェンジャーに覚えはなくとも、自分の術式には心当たりがあるのではないかしら？」

すると、セツナの答えに訝し気に辺りを窺ったメデイアは、警戒対象としての認識に加えていなかった異物を捉え、目を見張った。

「——ッ!?これはッ!!でも、まさか、そんな——」

「有り得ない、と?」

息の長い驚嘆に被った推察に、メディアは冷静さを取り戻そうとするかのように、緩くかぶりを振った。

「……少なくとも、有り得て良い事ではないでしょうね」

その口ぶりから察するに、彼女はオルガマリーの身に起きている事を、しっかりと分析できているようだった。

「……アヴェエンジャー、だったかしら？」

「——ええ」

「私の見当違いでなければ、貴女。私を殺したいのではなくて？」

問いかかけは、確認をする内容に対して、無味乾燥とした声音だった。既に死しているからこそその達観か、それとも、彼女なりの惻隠でもあったのかは判然としないが——

「笑止、殺せるものならばとつくに殺しているわ」

「つまり、今は殺せない理由があるわけね」

「……………」

「……はあ、おかげで、貴女達の狙いが読めたわ」

肯定の代わりのように唇を噛んだエキドナを、呆れた表情で見返して言う。

「……いいでしょう。これは取り引きよ。そのかわり——」

「貴女の命の保証をする。アヴェエンジャー、それでこの話は決着よ」



セツナが嚴命する。努めて平坦な口調で、それでも瞳の深さは真実だった。エキドナは嘆くように目を伏せて、泣くように咽喉を震わせ、涙のように言葉を落とす。

「……魔女、我が怨敵の一人よ、万が一にでも失敗した時は、分かっていますね？」  
「それこそ、愚問と言うものよ」

有り得ない事を言うな。とばかりにせせら笑つて、メディアは何処からともなく取り出した、歪な形状の短剣を握る。

「——術理、節理、世の理。その万象、一切を原初に還さん」

そうして、それを横たわるオルガマリーの心の臓辺りを目掛けて振り上げた。  
「破壊すべき全ての符」

短剣の切っ先がオルガマリーへと肉薄する。刹那、接触面から紫電が迸った。

永遠にも似た静寂の果てに——

「……わ、たし、は？」  
彼女は悠久の昏睡からの覚醒を果たした。

## 百獸母胎

目覚めは唐突だった。

「……………わ、たし、は？」

言葉は喘ぎ、瞼は震え、されど、意識は未だ夢現。ぼやけた視界の中では、誰かがこちらを覗き込みながら、必死に名を叫んでいる。

「——母、さん？」

ふと、自分のものではない自分の声が、唇からこぼれた。瞬間、身体に奔った温かくも柔らかい感触を引き金に、急速に五感が戻っていく。

「金羊毛の番竜さん？」

「それとも、オルガマリー所長かしら？」

耳に入ったのは誰かを呼ぶ懐かしくも儚げな声と、自分の名を呼ぶ不敵で不快な声――

ああ、これが生きている証拠だということか。って、ん？

「……………え？わたし、何で、目が覚めて……………って、イモリ、貴女!!自分が何を喚んだのか分かってるの!？」

「ああ、なんて素晴らしい!!流石は我が息子。この反応はオルガマリーそのものです!!よくぞ守り抜きました※※※※。無論、母は信じていましたとも!!」

悲鳴にも等しい文句は称賛と歓喜に上塗りされる。カモミールの抱擁の容赦のなさに、オルガマリーは自身と溶け合った守護竜の包容力が誰譲りであるかを、まざまざと実感させられた。

「やつ、ちよつと!!苦しい!!いい加減に離れて頂戴!!それに彼女はあなたの母親でしよう!!なんでまだ、わたしの中に籠っているのよツ!!」

『……………え、ああ、うん。ちよつと、あまりにも突然の事で、状況が上手く呑み込めてなくてさ、それに正直なところ、今の母さんに声を掛ける勇氣は湧かないなあ』

「はあツ!?あなたは、わたしの守護竜でしょう!？」

『そりゃあ、そうだけれど。ぼくにも心の準備とかが必要な事柄はあるわけで……………』

「それは、わたしだって一緒よツ!!いいから早く表に出てきて、わたしを助けて頂戴!!」喜びに打ち震えて涙を流すアヴェンジャーに抱き付かれながら、喚き散らすオルガマリー。滅茶苦茶と言う言葉は、こういう時の為にこそ存在する単語と言えよう。

「……………あの、先輩。所長はどなたとお話をされているのでしょうか?」

そうして、揃って静観を決め込む観衆の中で、困惑の音をあげたのは、最も無垢な人間だった。

「さあ?でも、口ぶりから察するに、金アヴ羊エン毛ジャーの息子音じゃないかしら?」

「……なるほど、所長は彼とお話が出来るんですね」

気の抜けたようなセツナからの答えに、マシユは珍しく何かを含むように言葉を並べた。途端、失言に気付いたように彼女を見返したセツナが紡がんとした感謝は、タイムングの悪い医者の台詞に掻き消されてしまう。

『アハハ……、なんと言うか混沌としているね?まあ、何はともあれ、おかえり。マリー』

「そして、おはようございます。我が弟よ。互いに母の期待を裏切らぬよう努めましょう」

「……それにしても、興味深い因果ね」

スピーカーの苦笑と虹色の視線に続く魔女の感嘆。次の瞬間に轟いた声音は、一つであるのに二つの意思を宿しているように聞こえた。

『いや、無理。この状況で喜べるかッー!!』

彼らとって、寝覚めの悪い歓迎だったのだろう事は、想像に難くない。

「……いいわ、楽になさい」

気の抜けない召喚劇が、ある程度の収束を見せた折に、メディアはオルガマリーに対して、歯医者者の真似事のような検分を行っていた。

「……………どうも」

解放されたオルガマリーが静かに息を吐く、気位の高い彼女を持つてしても、メディアから滲む、王女として人を跪かせる自然な傲慢さと魔術師としての力量、そして、自身と共にある因縁も加味すれば、借りてきた猫の様になるしかなかったのだろう。

「それにしても、唾液をインクに舌先を筆にして口腔内に魔術式を刻む<sup>挿</sup>。だなんて、流石は妖婦なだけあって、芸達者なこと」

「ええ、おかげさまで。夫に逃げられた経験はございませんわ」

メディアからの嘲弄を冷笑で相殺するエキドナ、表面上の優雅さを保った対話は周りを引かせるには充分だった。

「うわ、上品なのか下品なのか分からねえ」

「内容に関わらず罵り合いなどは醜いものと相場は決まっているだろう」

「まあ、ええやないの。退屈しないで済みそうやし?」

「……ええと、今は所長に対する説明責任を果たす時なのでは?」

露骨に辟易とする男達に、酒の肴を見つけたかのように鬼が嗤う。最後に残った良心だけが、前向きだった。

「要らぬお節介よ、マシユ・キリエライト。今更、経緯を聞かされても、横暴な救済措置をされた事に関わりないし、興味もないわ」

「……まあ、貴女が自棄になる気持ちも分かりますが」

「ええ!!ええ!!それはそうでしょうよ!!あなたも厄介な使命を負ったものね!!」

「……はあく、ねえ、誰か。私に對話の仕方を教えてくれないかしら?どう言えば相手を傷つけずに済むわけ?」

途端、オルガマリーからの八つ当たり、芝居掛かった造作で辺りを見回したセツナに、誰からともなく嘆息が上がる。

「地獄かこころは」

「オタクと解釈が一致すんのは癪だが、同感」

「冥界はそう悪いところではないと思うのですが……」

「なんや、頼りがいのない男衆やねえ。番犬はんはズレたことを言うてはるし」

「はい、はい、君達、愉快なのは結構だがね。こう見えて、我々は忙しい身の上って事を、

忘れてもらっては困るよ。喧嘩がしたいならせめて、これから先の事に目を向けてからにしておくれ」

瞬間、堂々巡りに陥りそうになった事態がより混乱を極める。軽やかな足取りと大仰な身振りで室内に踏み込んだ新手に注がれた視線には、どれも困惑の色が浮かんでいた。

「……まさかとは思うが、スピーカーの片割れは君かね？」

「はい正解♪カルデア技術局特別名譽顧問、レオナルドとは仮の名前。私こそルネサンスに誉れの高い、万能の発明家、レオナルド・ダ・ヴィンチその人さ!!」

「な——」

「はい、気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼ぶように。こんなキレイなお姉さん、そうそういないだろう？」

「レオナルド・ダ・ヴィンチが女ア!?!」

アーチャーを皮切りにメディアの絶句とハンターの頓狂な叫び声が響く。

「ああ、そうだ。甚だおかしい。異常であり倒錯だ。なぜならば本来、レオナルド・ダ・ヴィンチは男性で——」

「既成事実は疑ってかかるべきだぞー。というかそれってそんなに重要？ 実は男だったとか女だったとか、最初に言い出したのは誰なんだろうね、まったく。ああ、それとも



なんだい？弓兵諸君はこの身体に興味でも？」

「いや、それはちよつと。いくらガワが美女でも得体がしれないのはお断りですわ」

「おや、そうかい？それは残念だ」

と、ハンターにフラれたダ・ヴィンチは、全く残念に思つてなさそうな調子で肩を竦めた。

「兎も角、私は美を追求する。発明も芸術もそこは同じ。すべては理想を——美を  
体現するための私であり、私にとつての理想の美とはモナ・リザだ。となれば——  
ほら、こうなるのは当然の帰結でしょう？」

「フオウ……」

その余りの嗜好に、ここまでずっとおとなしかったフオウまでもが、呆れたように鳴き声を溢す始末である。

「——……いや、ボクもいちおう学者のはしくれだが、カレの持論はこれっぽちも理解できなくてね。モナ・リザが好きだからって自分までモナ・リザにするとか、そんなねじ曲がつた変態はカレぐらいさ」

微妙な空気の中、代表して声を上げたのは、くたびれた様子で頭を搔く男だった。

「ふふ、こりやまた、えらい骨の脆そうなお人やねえ」

「ん？ああ、自己紹介が遅れてすまない。ボクはロマニ・アーキマン。一応は此処の医療

部門のトップを任されている。主な仕事は彼女達のケアになるだろうけれど……今は、職員の数が減ったばかりだから、キミ達とも顔を合わせる機会が多いはずだ。どうかお手柔らかに頼むよ」

途端、集まった視線に気圧されながらもロマニが素性を晒す。見るからに頼りなさげなその雰囲気を感じてか、数名の表情に陰りが差した。

「まあ、そんなわけで、私達の紹介はこれで終わり、何か質問は？」

しかし、それもクセの強い天才によって、一瞬のうちに掻き消される。

「ならうちから一つ。変態はんは、マスターのサーヴァントと違うん？」

「ああ、残念ながら私はカルデアに召喚されたサーヴァントだからね。君達のように各時代にはそうそう跳んでいけない。でもイモリ・セツナが正式に私と契約できたのなら話は別だ」

涼やかな鬼の洞察に、モナリザの微笑みがセツナへと向けられる。

「その時は一介のサーヴァントとしてキミの力になる。そうなる運命を楽しみにしているよ、マスター」

「それは光栄な申し出ね。そうならない事を祈るくらいには」

「ふむ、一日に二度もフラれると流石の私も傷付くぞう。ま、今はそんな事よりも気にかかるとある訳だが」

「気にかかる事？」

意味深なその口ぶりに、セツナの眉が跳ねる。

「そうとも、これは君達の様子を別室でモニターしていて分かった事なのだが、オルガマリー乃至、金羊毛の番竜が目覚めてからエキドナの霊基に若干の変化が見られた」

「変化ですか？」

「簡潔に言えば、能力値の上昇を確認した。その数値は微々たるものとは言え、戦力の強化が見込める事は、我々にとって良い兆候と受け取れる。しかし——」

饒舌な説明口調は、次第に歯切れ悪いものへと変調する。

「貴女の心情も察するに余りある。怪物王妃」

ダ・ヴィンチの気遣いに、エキドナは背後からそつとセツナを抱き寄せた。

「……以前、貴女に我が子達の事を尋ねられた際に、遅かれ早かれ、いずれはこうなるのだろうと予見していました」

「避けられない事という覚悟はあったと？」

「……いいえ、それは買い被りというものです。この気持ちはそんな高尚なものでは断じて、強いて言うなれば諦観です」

セツナの黒髪に頬を寄せてエキドナは吐露した。口調は静かだったが、それは気持ちを押し殺しているが故だろう。

「大地母神は元々、命を産み出す事に特化した概念存在です。ですが怪物王妃わたくしが産んだ命は悉くが喪われました」

「だが、母親とは元来、子に生と死の両方を授ける存在だろうか？だからこそ、洋の東西を問わず、原初の母神などは、悪役としても描かれやすい」

「……………自己が曖昧な分、潤沢な知識を蓄えているのですね」

「……………失礼、胡乱な男の戯言と聞き流して頂けるとありがたい」

あからさまな皮肉に、アーチャーが視線を逸らす。先の彼の発言がどのような意図によるものかは判然としないが、どちらにせよエキドナの慰めにはならないようだった。

「……………つまり、産んだ命が多いほどに大地母神としての資質に優れていると言えるわけだ。なら君は子を産めば産むほどに強くなるか？」

そして、容赦を排したダ・ヴィンチの追及は簡潔にして冷徹だった。セツナを抱くエキドナの腕に力が籠る。腹の底に溜まる黒く重たいものを鎮めようとする葛藤が垣間見れた。

「……………限度はありますが、そう、ですね。アヴエンジャーわたくしは、そういう概念存在です」  
はつきりとした返答は、炎のように熱く、氷のように冷たかった。

「……………怪物に堕ちたとは言え、大地母神の権能は衰えず、か」

ダ・ヴィンチの嘆息と共に張りつめていく空気――

「……面白いじゃない」

やおら、居心地の悪い静寂を不敵な声音が切り裂いた。

「我が子？」

虚を突かれたように無防備なエキドナを、見つめ返せる者がただ一人。

「憎しみで世界が救えるのだとしたら、こんなにも可笑しな事はないわ」

痛快よ。とその口角が上がる。それは虚無的なほど無邪気で鮮烈な笑み。

エキドナは、自分の中に失望や困惑よりも力強い情動が芽生えるのを感じた。後ろ向きな庇護欲ではなく、前向きな復讐心であったのかもしれない。ともあれ、彼女の中で戦う意味が確立された瞬間だった。

「どうにも、とんだ跳ねっ返りに召喚されちまったみたいっスねえ」

「あら、お淑やかじゃなくて幻滅させてしまったかしら？」

「……いや？世界を救うってんなら、それくらい的气概はあつていいと思いますよ？」

ハンターの軽口に軽口が返る。同時にそんな彼等に呆れるようにして、空気が緩んだ気配があつた。

「……まあ、これからどうするにせよ。一つ、片付けておきたいケジメがあるわ」

すべての痛み、あらゆる苦しみから子を守ろうとする。優しくも猛々しき女怪の

温悲しみかさに包まれた少女の瞳は暗く、それでいて、努めて冷静に、どこか遠くを見つめていた。

\*

「所長を目覚めさせたいの」

そう切り出した時のアヴェンジャーの表情を覚えている。

愛するものに裏切られたような、それでいて憎むことが出来ずにいるような、複雑な感情を私に向けていた事を、私はきつと忘れる事はないだろう。

「所長。いえ、所長を助けてくれた貴方と話がしたいのだけど……」

それは時間にしてどれほどの遡巡だっただろう。さりげなくアヴェンジャーの腕から逃れた私と対峙した彼女の柳眉が不安そうに歪む。

「彼と？」

「はい」

「……少し待って」

一瞬の躊躇いの後で、所長は深く目を瞑り、それからゆっくりと瞼を上げた。

「……初めまして、私はイモリ・セツナと言います。貴方は、金羊毛の番竜ですか？」

「うん、そうだよ」

姿はそのままに纏う雰囲気を変えた彼女に問えば、返る言葉は所長には似合わぬ、真っ直ぐなもの。

「……所長の恩人、いや、恩童？である貴方の名前を窺っても？」

「え——」

「先輩、それは……」

私の言葉に呼応するように開かれる瞳。続くマシユの控えめな制止を嗜めるように、ケルベロスが首を振った気配があつた。呆氣に取られていた彼の表情が緩む。

「……初めまして、イモリ・セツナ。ぼくは※※※※※と言います。ぼくとオルガマリーを会わせてくれて、ありがとうございます」

それは、これまで聞いたことのないような発音の、不思議な言葉の響きだった。せつかく教えて貰つても、覚えておく事さえ出来なそうだった。それでも、私は思った。彼の名前の意味が、彼女にとって、かけがえのないものになつたらいい。と



## Beware of the dog

「…………それじゃあ、要点を抑えましょう。アヴェンジャーは宝具を使えば使う程に、靈基が強化される。そして、喚ぶ対象はこちらで選択できる。これが強み」

ふっ、とセツナの唇が震えた。憑き物が落ちたかのような雰囲気なのに、晴れやかと言うには相も変わらず、険の立った表情をしている。

「だが、喚ばれた宝具の解除は出来ない。と言うか、しない。この為、宝具を使えば使う程にエキドナの、ひいてはマスターの負担も増える。また、召喚者が倒れば、その時点で召喚された宝具も消えてしまう。これが弱み」

打てば響くように続く声は、困ったように笑うモナリザのもの。

「しかし、幸か不幸か。カルデアのバックアップで、ある程度の魔力消費は補える。加えて、今はセツナさん達が持ち帰ってくれた聖杯が一つ存在している。それを魔力に還元し、尚且つ、今いる二人を基準に考えるのならば、あと二つ分くらいの余剰はありと提言できる。問題は…………」

ロマニの視線が彷徨う。その先を続けるには彼には勇気が足りないのだろう。呆れたようにダ・ヴィンチが言葉を継いだ。

「君たち全員が、これをどう考えるかだ」

玲瓏な問い掛けに、腫物に障るかのような黙考と視線が一点に集中する。そのような状況下で意見を述べる事が出来たのは、彼女の逆鱗に抵触しない者だけだった。

「……私は母上の決断に従うまでです」

「ん、ぼくも母さんの意志を尊重したいとは思うけど、要は、ぼくの力だけじゃ、オルガマリーを護れない。つて事でしよう？それは……その、正直、困る」

毅然とした主張に続いて、悔しさと申し訳なさの滲んだ答えが返る。それでも尚、首を縦に触れずにいるエキドナの介錯に動いたのは、漆黒の少女だった。

「……人類史を救う為の絶対条件として私は死んではならない。そして、アヴェンジャー。貴女は私達を殺させたくはない」

「……ええ、そうよ」

深く頷くその瞳が揺らいだのを少女は見逃さない。

「なら、守つて。私の事もマシユの事も所長の事も、貴女はその為に私の呼びかけに応じたの、そうして貴女は世界を救うのよ」

傲慢な台詞は、エキドナにとりよりも、自身に向けた暗示のようですらあった。それは言い換えれば覚悟だ。他の何を犠牲にしても自分だけは折れない。という類の決意。

「……ええ、勿論、守るわ。当然のこと、だもの」

途切れ、途切れにエキドナが言う。そう、守るべきものを護るためならば、自分が襲われる事など苦ではない。ただ、守るべきものが誰かに奪われるのだけは耐えられないのだ。耐えられなかったのだ。けれど、セツナはそれでは納得しない。

「失<sup>だ</sup>いた<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>っ<sup>て</sup>て、命の誕生を拒むのは、貴女の在り方として矛盾するわ」

「それは——」

エキドナが怯んだように息を呑む。揺らいでしまいそうだった。否、ずっと揺らいでいた。正しいことも、自分の望みも、わからぬほどに。

「母親である事を拒絶する事が貴女の成したい復讐なの？」

「そんなわけないでしょう!!」

鋭い声があがった。ヒステリックなその反射に、セツナが驚く様子はなかった。

「……ねえ、アヴェエンジャー。貴女が為す復讐は貴女だけが為すものではないはずよ」

その言葉に、エキドナは途方にくれた顔で 我が子 と呟いた。縋るように、確かめるように。

全てを拒絶する事も、エキドナには出来たはずだった。同じように、セツナには、それを許さない。と命じるだけの権限があるはずだった。けれど、彼女達は揃ってそうは

しなかつた。

母から産まれ死にゆく命達、なるほど。それは確かに道理だ。だからエキドナは、そのこと自体を否定するつもりはない。だが、一瞬だけ、ほんの僅かに思ってしまったのも事実なのだ。それは余りに愚かで恐ろしい願いだから、決して口には出来ないけれど。

育んだ生命を狩られてしまうのが運命でしかないならば、身の内に封じたままに、共に朽ちてしまえば、どんなにか楽だったろう？

憎しみに狂う事も、身を裂くような悲しさや、取り残される寂しさを、持て余す事もなかつただろうに。と——

「駆り立てよ!!己が衝動の逸るがままに!!」

けれど、それは許されない願いだ。エキドナの嘆きと怒りを、そのような方法で薄める事は罷りならない。だって、それは愛した者を裏切る行為に等しい。亡くさない為に産まない。という守り方を選ぶのは、母としての自分の誇りをも穢す呪い否定だ。だから、どんなに残酷な事であつたとしても、結局はこうする他なかつたのである。

「怪妊母胎——」

詠唱が極限へと至る瞬間、魔力が持つていかれる。それは産みの苦しきそのもの。産み落とされる子の存在の大きさそのものに他ならない。そして、何より——

「迅疾走狗!!」

今、此処に。生まれ来る子の名を、エキドナはずっと前から、知っているのだ。

\*\*\*

「チツ、急に喚び出されたと思つたら、なんだあ？この状況はよ？」

反抗的な声が響く。エキドナによって招かれた双頭の黒狗は、その姿形にこそケルベロスと近似した特徴を有してはいたが、纏う雰囲気は対照的だった。泰然としたケルベロスには、どこか神獣という単語を含ませたくなる高貴さすらあつたのに対し、眼前の黒狗にはそういった洗練さは欠片もない。猛々しく、野卑な印象を受けてしまうのは、その巨軀の線が鋭利に見受けられるからであろうか。細く長い脚と高い体高は、研鑽された競走馬を彷彿とさせると共に、豹のようなしなやかさを秘めているようでもある。周囲への警戒も露わに逆立った漆黒の毛皮は、光に銀を反射するケルベロスのものに反して、光すらも飲み込むように艶がなく暗い。そして何より、血だまりのように赤黒い眼は、決して懐かない野生の獣のそれだった。

「それは今から説明します。だからお前も威圧するのをやめなさい」

「ああん？つて、オイ、冗談だろ。兄貴はなんで、人間の形ナリをしてんだ？」

ふと、あからさまな威嚇を糾弾するように発せられた言葉に、双頭が不機嫌そうに動くも、その攻撃的な勢いは、発言者の姿を見るや、驚きへと変容したようだった。

「歩みムよりですよ。共に戦うのに、本来の姿では彼らの神経をすり減らす事になりますから。後は単純に魔力消費を抑える為です」

「あ？魔力消費ソを抑えるレ為ナら、不慣れな人間の形になる必要はねえだろ？それこそ、無

駄な魔力を割く事になる。本来の姿がヤバいってんなら、形は変えずに、大きさを變えりやあいい。デカくなけりやあ、俺らはただの犬とそう変わらねえよ」

「どこの世界に双頭の犬がいますか」

呆れたように目頭を押さえたケルベロスに、辟易とした呟きが返る。

「人間のフリしてる人外だって、奴らにしてみりや不気味だろうがよ」

「お前は相変わらず、可愛げのない」

「兄貴も相変わらず、クソつまらねえよ」

すると、そんな弟の言葉に堪え切れなくなったのか、ケルベロスは大仰な溜め息を吐いた。

「せめて、その攻撃性は※※※の前では抑えて貰いたいものです」

「んだよ。アイツも居んのか？寝てる奴がなんの役に立つんだか見物だな」

「……オルトロス。それ以上、彼の事を貶めるようなら、私にも考えがありますよ？」

直截的な物言いに、一瞬で、温度を変えた低く静かな忠告が返る。オルトロスは愉しそうに牙を剥いた。

「ハッ、安眠妨害している分際によく吠えやがる。まあ、俺にキレンのは好きにすりゃいい。かわりに、アイツが十全な状態にない事を知ったうえで、戦場に喚んだおふくろを、

一度でも責めたのかだけは聞かせろや」

「いい加減になさい!!」

あからさまな挑発に、ケルベロスが反応するよりも速く上がったのは、鮮烈な叱咤だった。

「……オルトロス。お前の怒りは十分に伝わりました。だから、もう兄弟でいがみ合うのはおやめなさい」

途端、言い聞かせるように仲裁に入った母親を目に留めたオルトロスは、倦むように鼻先に皺を寄せた。

「……はあく、こりやあ、また生きてた頃とは違った厄介さに磨きがかかってやがると見た」

「それは否定しないけど、今の流れはオルトロス兄さんも悪いと思うよ?」

瞬間、侮蔑を隠そうともしない軽口に戻った、親しみの籠った聞き慣れない呆れ声に、血染めの瞳孔が見開かれる。

「……おいおい、嘘だろ? お前、いつから妹になった?」

「……あー、うん。まあ、いろいろあつたんだよ。それと、これはぼくの姿じゃなくて、ぼくの新しい守護対象だよ」

兄の困惑を前に、オルガマリーの守護竜は面倒な説明詳しい解説を避け、端的に述べた。



「ふうん？よく分かんねえけど、相変わらず苦勞の絶えねえ奴だな」

「兄さんほどじゃないさ」

「……ハッ、なんのことだか」

とぼけるように嗤って、感情を整理するかののように、辺りを一瞥したオルトロスは、ダ  
ルそうに切り出した。

「………んで？そろそろ説明とやらを受けてもいい頃合いだと思うんだが？」

「それは私から説明するわ」

「………へえ、なるほど？あんたがおふくろのマスターってヤツか？」

やおら、自身の前へと歩み寄った人間にかけた、飄々とした言葉尻は、愉快そうに笑  
んでいたが、その笑みが好意的なものでない事は明らかだった。

「ええ、そうよ。私はイモリ・セツナ。以後よろしく頼むわ、オルトロス？」

「生憎だが、人間の小娘の個体名を記憶するだけの脳みそも、甲斐性も持っていないくて  
な」

そういうのはお利口な番犬に任せるに限る。と兄を揶揄したオルトロスは、あからさ  
まな嘲笑を浮かべた。しかし――

「あら、奇遇ね。私もそういうのは苦手なの。そういった意味じゃ、私達の相性は悪くな  
いのかもしいけれど」

「は？」

その答えに少女が怯んだ様子はなく、かえって、双頭が虚を突かれたように無様に口を開けた。

「ねえ、貴方。足が速いのでしょうか？」

「それが？」

「私は立場上、死んじゃいけないの。だから、いざという時の逃げ足は速い方がいいと思つて」

「つまり？」

「貴方には私の走狗あしになつて貰いたいの」

少女が微笑み。刹那、時が止まる。

「……ハアアアアツツツ!？」

次の瞬間。轟いた頓狂な驚嘆に、ケルベロスが嘔き出した。

※※※

暫し、発端に立ち返る。

「——それで？ いったい誰を喚ぶんだい？」

結論が出た事に、いち早く反応したのは、やはりダ・ヴィンチだった。今までがそうであったように、事態の転換期に於いては、万能の天才の発言程に子気味良いものもない。

「あー、その事なんだけど。ぼく以外の竜種は、やめといたほうがいいよ。今の状況で喚び出すにはちよつと……格が違い過ぎる」

「——……ふむ、確かに、あまり大物過ぎるのも頂けない。いろんな意味で持て余す事になるだろうからね」

良い、助言だ。とダ・ヴィンチが片目を閉じる。オルガマリーの守護竜は、彼女の顔で苦笑する。

「——……そう言えば、貴方、よく似た弟が居たわよね？」

ふと、考え込むように俯いていたセツナが、何かに気付いたようにケルベロスを仰ぎ見た。少女を見返す魔性の表情にはどこか、いつもとは違う冷ややかさが宿っている。

「——……彼の事ですか。ですが、彼を喚ぶくらいならば、我が姉を喚んだほうがよろし

いかと」

意識して出したかのような平坦な声は、彼には珍しく、微かな苛立ちと仄かな呆れが混ぜ込まれているようだった。何がそんなに不服なのだろう？とセツナは首を傾げる。

「まあ、確かに。姉さんのほうが余計な心配は要らないよね」

途端、兄を慮ったように続いた言葉に、マシユが頷いた。

「なるほど。では、お二人のお姉さまをお招きする。という形でよろしいでしょうか？」  
自然な流れで採決に移った彼女に、表立った賛同や、あからさまな反論を示すサーヴァントはいなかった。が——

「いいえ、彼女は温存しましょう」

彼らのマスターは、ハッキリとした声音で断言した。

「本気でですか!？」

虹の瞳孔を広げてケルベロスが問う。セツナはあっけらかんと答えた。

「ええ、冷たい考えかもしれないけれど。彼が、扱いにくい手合いだと言うのなら、尚更、早いうちに合流乃至、交流しておいたほうがいいでしょう?」

「それは——」

「いいでしょう」

「母上!？」

尚も言い募ろうとしたケルベロスを宥めるように、エキドナが応諾するも、彼の勢いはなかなか収まらなかった。

「アレは人理の手には余ります。私や不眠番竜※※※※、姉上などはまだ、人間彼等との関わり方を理解している。けれど、彼の主人は伯父上だったのですよ!!それに彼は——」

「ケルベロス」

静かな、けれど目には見えぬ強さを宿した声があがった。名指しされた彼女の息子が息を呑む。

「それ以上はお止めなさい」

「——……口が過ぎました」

母親からの厳命に、ケルベロスは唇を結び、アヴェンジャーはそんな息子をひととき見つめ、それから覚悟を決めたように口を開いた。

「——……宝具子産を展開みします。我が子ら以外の人間及び、サーヴァントの退避を願います」

「受託した。その選択に敬意と祝福を」

すぐさま返る。モナリザの微笑みは、何よりの後押しだった。

\*\*\*

「……テメエは、いつまで笑ってやがる。殺すぞ」

静かに事のあらましを聞いていた。もとい、納得できるだけの情報を要求した双頭が、低く吼える。

「ふ、いや、別に、ふふ、笑っては、いませんよ?」

「よし、殺す」

「まあ、まあ、落ち着いて、それにオルトロス兄さんだつて、守護獣だったのに変わりないでしょ?」

今にも飛び出しそうなオルトロスと、一連の流れがツボに入ってしまった様子のあるケルベロス。あわや、一触即発といった両者の間を取りなすように動いた弟の存在に、兄たちの顔には、それぞれの苦渋が浮かぶ。

「……生きてた頃の話だろ。死んでからもそんな鎖に縛られるのは、まっぴらだ」

やおら、呼気を装填するように、深呼吸をしたオルトロスが、感傷的に吐き捨てた。同

時に、ふてぶてしいまでの殺気は鳴りを潜めていたが、その空白を埋めるように、別の激情が渦巻いているようにも見えた。

「ゲーリユオーン伯父さんに負い目があるのは分かるけど……」

「伯父貴は今、関係ないだろうが」

「う、ごめん」

瞬間、噛みつくように返った低い唸りに、オルガマリーの身体が縮こまる。オルトロスは、わざとらしく嘆息した。

「……はあく、何が悲しくて、人間の小娘の子守りをしなきゃなんねえんだ？」  
「そう悪いものでもないと思うけど？」

誰に言うでもなく口をついて出た文句に、人間の女を象った弟が意見する。オルトロスは目を細めた。

「……お前は今の方が生きてて楽しそうだもんな」

「ええと、それはいけないこと？」

狼狽える弟を、兄が嗤う。

「……いや、別に。いいんじゃないやねえの？どつちにしろ、俺の知ったこつちやねえよ」  
それきり、感心を失ったように欠伸を一つ。長い四肢を伸ばしてから、跳躍、後転した。

「……まっつったく以て、気には喰わねえが、喚ばれた以上は、どうしようもねえ。当たり障りのない程度には、接してやるよ」

そう言つて、中空であやふやになつたその身体は、着地する頃には大小、大ききの異なる二頭の、一見した限りでは普通の黒狗に見える姿へと変化していた。

「ええ、お互いに上手い事、利用しあいましようね？」

フオウよりは一回り大きい程度になつた黒狗を抱きあげて、セツナが笑う。その傍らでは、獅子のような大型犬が遠い目をしながら、胡乱気にボヤいていた。

「俺の旨味はいつたい何処にあるんだか」